

Threatened Wildlife of Akita Prefecture

# 秋田県の絶滅の おそれのある 野生生物



秋田県版レッドデータブック 2020 動物II

[哺乳類・昆虫類]



Red Data Book of  
Akita Prefecture 2020  
Animals II



秋田県

◎表紙写真

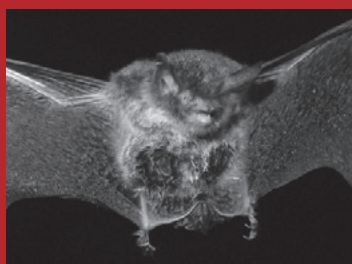
ヤマネ 撮影 亙 悠哉	ノレンコウモリ 撮影 佐々木 誠	ヒメシロチョウ 撮影 田中 政行
ニホンカモシカ 撮影 星崎 和彦		ホソハンミョウ 撮影 佐藤 福男
モモシロコウモリ 撮影 佐々木 誠	アオモンギンセダカモクメ 撮影 秋田県立博物館	ヒメアカネ 撮影 田中 政行



Threatened Wildlife of Akita Prefecture

# 秋田県の絶滅の おそれのある 野生生物

秋田県版レッドデータブック 2020 動物 II  
[哺乳類・昆虫類]



Red Data Book of  
Akita Prefecture 2020  
Animals II







# 改訂版の発行にあたって



秋田県は、海岸から山岳に至るまで変化に富んだ地形・地質を有しており、湿潤な気候の下で豊かな自然環境が形成され、野生生物が数多く分布しています。

私たち県民は、こうした豊かな自然から恩恵を受け、多種多様な生物と共に暮らし北国の風土に独特の伝統と文化を育んできました。

しかし、豊かな自然が残されている本県においても、産業構造の変化、様々な開発行為による土地の改変、過疎化や少子高齢化の進行による生活スタイルの変化等により、身の回りの自然環境や野生動植物への関心が薄らぎ、野生生物の生息・生育環境は大きな影響を受け、多くの種において生存が危ぶまれています。

このため、絶滅のおそれのある野生生物の現状を明らかにし、より多くの人々に理解してもらうため、平成14年3月に「秋田県版レッドデータブック2002動物編・植物編」を発行するなど、生物多様性の確保に向けた取組を進めてまいりました。

しかしながら、野生動植物の生息・生育状況は刻々と変化するため、その評価は定期的に見直すことが求められます。県では「ふるさと秋田元気創造プラン」や「秋田県環境基本計画」において、このレッドデータブックの改訂を重要なプロジェクトとして位置付け、平成21年度から専門家による検討委員会を設置し、平成26年3月に植物編の改訂版として「2014維管束植物」を発行、平成28年3月に動物編の改訂版として「2016動物Ⅰ（鳥類・爬虫類・両生類・淡水魚類・陸産貝類）」を発行しました。

この度、哺乳類と昆虫類の再評価を行い「秋田県版レッドデータブック2020動物Ⅱ」として取りまとめましたので、本書を通じて野生生物への理解を深めていただき、多種多様な生物が共存する自然豊かで潤いのある県土を次世代へ引き継ぐため、様々な場面で幅広く活用していただきたいと考えております。

結びに、本書の発行に当たり御協力いただきました「秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会」の委員の皆様や関係者の皆様、並びに長年にわたり野生生物の調査・研究に取り組んでこられた皆様に対して、心からお礼申し上げます。

令和2年3月

秋田県知事 佐竹敬久





ヤマコウモリ 絶滅危惧IB類

撮影 京谷 和弘 P27



ニホンウサギコウモリ 絶滅危惧IB類

撮影 佐々木 誠 P28



ヒナコウモリ 絶滅危惧IB類

撮影 佐々木 誠 P28



ノレンコウモリ 絶滅危惧IB類

撮影 佐々木 誠 P29



テングコウモリ 絶滅危惧IB類

撮影 佐々木 誠 P30



オコジヨ 絶滅危惧IB類

撮影 飯島 勇人 P31



コキクガシラコウモリ 絶滅危惧II類

撮影 佐々木 誠 P32



ヒメホオヒゲコウモリ 絶滅危惧II類

撮影 佐々木 誠 P33





コテングコウモリ 絶滅危惧II類

撮影 佐々木 誠 P33



ユビナガコウモリ 絶滅危惧II類

撮影 佐々木 誠 P34



キクガシラコウモリ 準絶滅危惧

撮影 佐々木 誠 P35



モモシロコウモリ 準絶滅危惧

撮影 佐々木 誠 P35



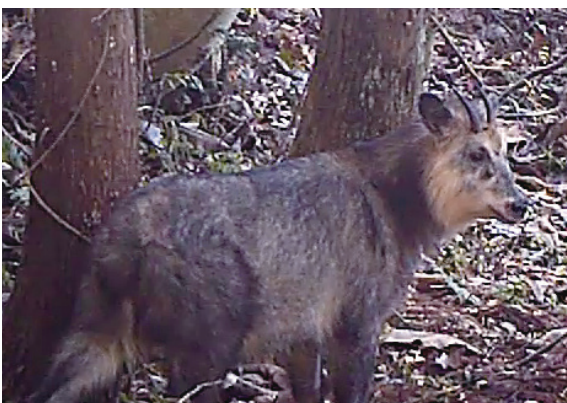
ヤチネズミ 準絶滅危惧

撮影 星崎 和彦 P36



ヤマネ 留意種

撮影 巨 悠哉 P38



ニホンカモシカ 留意種

撮影 星崎 和彦 P38



ニホンザル 継続観測種

撮影 秋田県 P39





ツキノワグマ 継続観測種

撮影 星崎 和彦 P40



ニホンジカ 継続観測種

撮影 飯島 勇人 P41



イノシシ 継続観測種

撮影 堀野 真一 P42



オオキトンボ 絶滅

撮影 秋田県立博物館 P53



チャマダラセセリ 絶滅

撮影 秋田県立博物館 P53



オオウラギンヒョウモン 絶滅

撮影 秋田県立博物館 P53



カバシタムクゲエダシャク 絶滅

撮影 梅津 一史 P54



モートナイトトンボ 絶滅危惧IA類

撮影 田中 政行 P54



ハネビロエゾトンボ 絶滅危惧IA類

撮影 秋田県立博物館 P54



コノシメトンボ 絶滅危惧IA類

撮影 田中 政行 P54



ヒメアカネ 絶滅危惧IA類

撮影 田中 政行 P55





カワラハンミョウ 絶滅危惧IA類

撮影 秋田県立博物館 P55



マークオサムシ 絶滅危惧IA類

撮影 佐藤 福男 P55



クマガイクロアオゴミムシ 絶滅危惧IA類

撮影 秋田県立博物館 P55



テラニシセスジゲンゴロウ 絶滅危惧IA類

撮影 佐藤 福男 P56



ダイコクコガネ 絶滅危惧IA類

撮影 佐藤 福男 P56



ギンスジマダラメイガ 絶滅危惧IA類

撮影 佐々木 明夫 P57



ムナカタミズメイガ 絶滅危惧IA類

撮影 田中 政行 P57



クロシジミ 絶滅危惧IA類

撮影 秋田県立博物館 P57



フタスジチョウ 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P57



ホシミスジ北上山地亜種 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P58



キマダラモドキ 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P58



フタオレウスグロエダシャク 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P58



ハガタアオシャク 絶滅危惧IA類 撮影 田中政行 P58



イチゴナミシャク 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P59



シロヤエナミシャク 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P60



シロマダラカナミシャク 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P60





クワヤマエグリシャチホコ 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P60



チョウカイシロコブガ 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P60



ナナメヒメヨトウ 絶滅危惧IA類 撮影 梅津 一史 P61



アオモンギンセダカモクメ 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P61



クシロモクメヨトウ 絶滅危惧IA類 撮影 田中 政行 P62



キタヨトウ 絶滅危惧IA類 撮影 秋田県立博物館 P62



テンモントガリヨトウ 絶滅危惧IA類 撮影 田中 政行 P62



オオセスジイトンボ 絶滅危惧IB類 撮影 田中 政行 P63





ルライトトンボ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P63



オシロサナエ幼虫 絶滅危惧IB類

撮影 青谷 晃吉 P63



ホンサナエ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P64



マダラナニワトンボ 絶滅危惧IB類

撮影 梅津 一史 P64



カワラゴミムシ 絶滅危惧IB類

撮影 佐藤 福男 P64



ホソハンミョウ 絶滅危惧IB類

撮影 佐藤 福男 P64



ヨツボシカミキリ 絶滅危惧IB類

撮影 佐藤 福男 P65



フタクロテンマダラメイガ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P65



ナイトウツガ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P65



ソトシロスジズメイガ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P65



ウスキシダメイガ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P66



ギンイチモンジセセリ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P66



ヘリグロチャパネセセリ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P66



ギフチョウ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P66



ヒメシロチョウ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P67



ウラゴマダラシジミ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P67





カシワアカシジミ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P67



ヒメシジミ 絶滅危惧IB類 撮影 田中 政行 P67



キタルリモンエダシャク 絶滅危惧IB類 撮影 田中 政行 P68



トギレフエダシャク 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P68



スモモエダシャク 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P68



ヒメシタコバナナミシャク 絶滅危惧IB類 撮影 田中 政行 P68



ギンボシシャチホコ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P69



ウスシロドクガ 絶滅危惧IB類 撮影 田中 政行 P69



スゲドクガ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P69



クシナシホシオビコケガ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P70



マエアカヒトリ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P70



ヨスジカバイロアツバ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P70



シラユキコヤガ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P70



スミレクビグロクチバ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P71



ウンモンキシタバ 絶滅危惧IB類

撮影 秋田県立博物館 P71



シロスジキンウワバ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P71





ダイセンセダカモクメ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P71



ニセタバコガ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P72



セプトモクメヨトウ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P72



アズサキリガ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P72



ムラサキヨトウ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P72



コハイロヨトウ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P73



シロオビヨトウ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P73



キタクロヤガ 絶滅危惧IB類 撮影 秋田県立博物館 P73





ハマヤガ 絶滅危惧IB類

撮影 田中 政行 P73



アオサナエ 絶滅危惧II類

撮影 田中 政行 P74



タガメ 絶滅危惧II類

撮影 田中 政行 P74



アイヌハンミョウ 絶滅危惧II類

撮影 佐藤 福男 P74



アオバネホソクビゴミムシ 絶滅危惧II類

撮影 佐藤 福男 P74



クロナガオサムシ 絶滅危惧II類

撮影 佐藤 福男 P75



ハヤチネヌレチゴミムシ 絶滅危惧II類

撮影 佐藤 福男 P75



チンメルマンセスジゲンゴロウ 絶滅危惧II類

撮影 佐藤 福男 P75



ニセルイスツブゲンゴロウ 絶滅危惧II類 撮影 佐藤 福男 P75



シマゲンゴロウ 絶滅危惧II類 撮影 田中 政行 P76



オオクワガタ 絶滅危惧II類 撮影 中川 佳雅 P76



オオチャイロハナムグリ 絶滅危惧II類 撮影 佐藤 福男 P76



ババホタルトビケラ幼虫 絶滅危惧II類 撮影 青谷 晃吉 P77



クロモンエグリトビケラ幼虫 絶滅危惧II類 撮影 青谷 晃吉 P77



ヒメキテンシロツトガ 絶滅危惧II類 撮影 佐々木 明夫 P77



モリオカツトガ 絶滅危惧II類 撮影 田中 政行 P77





チビウスキオオメイガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P78



ウスマダラミズメイガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P78



ヒメギフチョウ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P78



ハヤシドリシジミ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P78



ヒョウモンチョウ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P79



ヒカゲチョウ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P79



クロスジアオシャク 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P79



ヒメナミガタアオシャク 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P79



ウラテンシロヒメシャク 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P80



ミチノクヒメシャク 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P80



クロシタコバネナミシャク 絶滅危惧II類 撮影 田中 政行 P80



ムツテンナミシャク 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P80



サザナミフユナミシャク 絶滅危惧II類 撮影 梅津 一史 P81



トビスジタガリナミシャク 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P81



ミカボコブガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P82



マガリスジコヤガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P82





ウスチャマエモンコヤガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P82



ヌマベウスキヨトウ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P83



ミヤマショウブヨトウ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P83



ミスジキリガ 絶滅危惧II類 撮影 田中 政行 P83



ムラサキハガタヨトウ 絶滅危惧II類 撮影 田中 政行 P83



アトジロキリガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P84



マエキヤガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P84



オオシラホシヤガ 絶滅危惧II類 撮影 秋田県立博物館 P84





アオハダトンボ 準絶滅危惧 撮影 田中 政行 P84



ムカシトンボ幼虫 準絶滅危惧 撮影 青谷 晃吉 P85



ハッチョウトンボ (オス) 準絶滅危惧 撮影 田中 政行 P85



ハッチョウトンボ (メス) 準絶滅危惧 撮影 田中 政行 P85



カワラバッタ 準絶滅危惧 撮影 田中 政行 P86



シノピアミメカワゲラ幼虫 準絶滅危惧 撮影 青谷 晃吉 P85



オオイチモンジシマゲンゴロウ 準絶滅危惧 撮影 佐藤 福男 P89



マルコガタノゲンゴロウ 準絶滅危惧 撮影 佐藤 福男 P89



エゾゲンゴロウモドキ 準絶滅危惧 撮影 佐藤 福男 P90



オオトラフハナムグリ 準絶滅危惧 撮影 佐藤 福男 P91



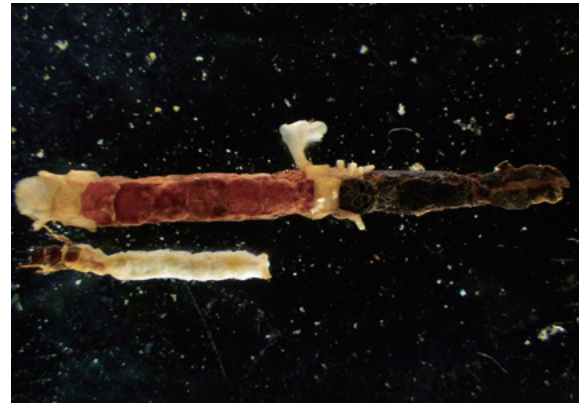
チョウカイアラコガネコメツキ 準絶滅危惧 撮影 佐藤 福男 P91



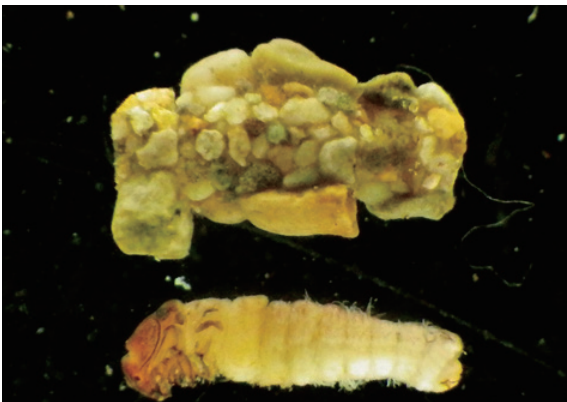
オオヨモギハムシ 準絶滅危惧 撮影 佐藤 福男 P93



チョウカイトガリヤマゾウムシ 準絶滅危惧 撮影 沼田 仁 P94



ハンエンカツツトビケラ幼虫 準絶滅危惧 撮影 青谷 晃吉 P95



フトオヒメニンギョウトビケラ幼虫 準絶滅危惧 撮影 青谷 晃吉 P95



ウスイロコバントビケラ幼虫 準絶滅危惧 撮影 青谷 晃吉 P95





ギンモンセダカモクメ 準絶滅危惧 撮影 秋田県立博物館 P101



ミヤマサナエ 情報不足 撮影 田中 政行 P103



トゲアリ 情報不足 撮影 梅津 一史 P107



ニッポンハナダカバチ 情報不足 撮影 梅津 一史 P108



オオセイボウ 情報不足 撮影 梅津 一史 P108



クロホソバトビケラ幼虫 情報不足 撮影 青谷 晃吉 P110



クロフカバシャク 情報不足 撮影 梅津 一史 P116



サメハダハマキチョッキリ玉川下流域藍色個体群 地域個体群 撮影 佐藤 福男 P129

# 目次

## 改訂版の発行にあたって

### 口絵

秋田県の自然環境 .....	1
----------------	---

秋田県版レッドデータブック2020の概要 .....	5
----------------------------	---

- 1 改訂の目的
- 2 改訂の経緯
- 3 掲載対象
- 4 改訂のための調査
- 5 改訂のための検討体制
- 6 カテゴリー及びカテゴリー定義
  - (1) カテゴリー
  - (2) 秋田県版レッドデータブックカテゴリー定義
  - (3) 主な変更点
- 7 評価結果
  - (1) 掲載種数
  - (2) 評価結果概要
  - (3) 掲載種一覧(分類群、カテゴリー別)

哺乳類・昆虫類 掲載種の解説 .....	19
掲載項目	

哺乳類 .....	21
哺乳類概説	
哺乳類掲載種解説	
哺乳類参考文献	

昆虫類 .....	45
昆虫類概説	
昆虫類掲載種解説	
昆虫類参考文献	

参考資料 .....	142
1 新たに追加した種	
2 2002年版から削除した種	
3 目別カテゴリー一覧	

秋田県の自然公園・自然環境保全地域等一覧 .....	155
----------------------------	-----

執筆者・写真提供者 .....	157
-----------------	-----

索引(五十音順) .....	158
----------------	-----





# 秋田県の自然環境

県内には、海岸地帯から高山帯までの間に、平野部、河川・湖沼地域、扇状地と湧水地帯、山麓帯から山地帯、亜高山帯などの様々な環境が存在する。そこには多種多様な生物が生息・生育し、独自の生態系を形成している。以下、主要な生態系毎に県内の自然環境の概要を述べる。

## 1 森林生態系

森林は県内の生態系の中核をなしている重要な存在であり、県内に生息・生育する多くの動植物もまた、何らかの形で森林生態系にその存在基盤を依存している。現在、森林面積は県土面積の約70%を占めているが、森林面積の50%が針葉樹を中心とした人工林で、その大半はスギ植林地となっている。その他の森林の多くは落葉広葉樹林となっているが、その半分は伐採などによる様々な人為的影響を受けたコナラやミズナラなどの二次林である。

一方、ブナ林をはじめとする自然林の多くは、標高500m以上の山地部にまとまって残存しており、亜高山帯の森林は、標高1,100mから1,200m以上に遺存的に点在している。八幡平、森吉山、秋田駒ヶ岳一帯及び烏海山地域を除いては、いずれも小面積で連続性は少ないが、そのため固有性を保持しているとも言える。さらに、由利地方海岸部には暖地性の常緑広葉樹のタブノキ林などが小面積で残存している。

また、標高の高い土地の森林は、日常生活圏から離れていること、気象条件が厳しいことなどから、比較的自然性の高い生態系が維持されているが、近年の登山ブームによる利用者増や盗掘などによる影響に加え、温暖化などの地球規模による環境問題の影響が懸念されている。

## 2 草地生態系

県内における自然草原としては、高山ハイテや高山風衝草原、亜高山性広葉草原、雪田植生のほか、山地帯に多く見られる雪崩地植生や高茎草本群落、岩壁植生、河川の氾濫原植生、海浜地の砂丘植生や海岸風衝草原、あるいは火山・硫気孔荒原などが代表的である。これら自然草原のうち、砂丘植生と河川の氾濫原植生を除いては連続性を欠いている上、面積も狭小であり、遺存的に点在している。

また、砂丘植生及び河川氾濫原植生は、元来、不安定な立地環境に成立しているとともに、様々な人為的影響を受けやすい状況となっている。

一方、里山地帯には、主にシバ草地やススキ草地など二次草原が点在している。比較的面积の大きい二次草原は、寒風山一帯や一部の牧場及びスキー場等に限定されており、その他は小面積で残存しているに過ぎない。これらは、古くからの放牧・採草、火入れなどの人為的干渉により成立してきたが、近年の牧畜業の衰退や人為的干渉の減少に伴い、その面積を大幅に減少させているほか、二次草原に依存して生息・生育する生物の減少も認められており、その維持・管理方法の確立が課題となっている。



### 3 湿原生態系

県内には、釧路湿原や尾瀬ヶ原のような大規模な湿原は見られないが、低層湿原から高層湿原まで様々な発達段階の湿原が各所に点在している。亜高山帯及び山地帯上部に分布する中間湿原や高層湿原は、八幡平周辺、栗駒山、烏海山などの主に自然公園内に位置しているため、比較的自然度が高く維持されているが、部分的には盗掘・踏み付けなどによる影響が見られる。

一方、低山地帯や低湿地、河川氾濫原、海岸砂丘の後背地などに分布する湿原は、県内各所に点在しているが、開田や土地造成などの人為的影響を受け、既に消失した湿原も多い。さらに、残されている湿原の多くも、様々な開発行為などから直接的又は間接的に影響を受けており、その存続基盤は脆弱な状況にある。

また、八郎潟干拓地の一部に成立したヨシ草原などは、干拓事業により人工的に創り出された湿生地であるが、県内最大の面積を有しており、鳥類などの生息地として重要な位置を占めている。

### 4 河川・湖沼生態系

県内には、雄物川、米代川、子吉川の三大河川のほか、馬場目川、水沢川、白雪川をはじめとした多くの独立中小河川が存在している。これら河川は水生生物の生息場所となっているだけでなく、川沿いの河畔林と一体となって河川環境の維持・保全機能を担うとともに、様々な動植物の移動・分散ルートなどとしても機能している。さらに、河川上流部の渓谷林は、森林生態系との連続性の確保に大きな役割を果たしている。

また、県内に分布する十和田湖、田沢湖、八郎湖の三大湖沼は、近代以降、おのこの生態系に大規模な変化があり、魚類をはじめ生物多様性に甚大な影響があった。現在のこれらの湖沼生態系は、その後に成立した二次的な生態系といえる。さらに、山間部等に位置する湖沼においては、魚類等などの放流の影響を受けているケースが散見される。

一方、平野部に位置する大小さまざまな河跡湖や溜池群の中には、県内の生物相を特徴付ける希少な淡水魚類や水生植物などが残存しているほか、平鹿・仙北地域などの扇状地に多く分布する湧水地帯には、希少なトミヨ属雄物型や水生植物が生息・生育する特異な生態系が形成されており、この生態系は周辺の水田地帯と密接な関係にある。

しかしながら、利水などを目的とした開発、オオクチバスなどといった移入種による在来種の駆逐問題が認められるため、当該地の広域的・一体的保全が課題となっている。

### 5 沿岸域生態系

県内の沿岸には、暖流の対馬海流が北上しているため、緯度のわりには温暖な気候となっており、南方系の生物が由利地域、男鹿半島、岩館海岸などに線状に分布している。県内の海岸線にはサンゴ礁及び干潟は存在しないが、男鹿、八森、象潟の岩礁性海岸の地先には、様々なタイプの藻場が分布し、特にホンダワラ類を主体とするガラモ場は、ハタハタの産卵場として不可欠な存在となっている。

また、男鹿半島西側一帯、北部の岩館海岸や南部の象潟海岸には、自然性の高い岩礁海岸が発達し、ハヤブサなどの猛禽類やウミウなどの繁殖地としても重要な位置を占めている。

一方、岩礁海岸の間には長大な砂浜海岸が弧状に連なり、海岸砂丘植生が線状に分布している。この一帯は道路・港湾整備やクロマツ植林による海岸防風林化などの影響を受け、本来の植生が大幅に減少した。近年ではこれらのクロマツ林も小鳥類の渡りの中継地としての役割を果たしており、またサクラ類を中心に徐々に下層の広葉樹林化が進行しつつある。さらに、松枯れ被害のために一部は外来種であるニセアカシアの林への移行が懸念されている。また、海岸砂丘の後背地には湿地・湖沼群もみられるが、主に江戸時代から昭和20年代にかけての開田や土地造成の影響を受け、天王湿原などの一部を除いて、大幅に面積を減少させるとともに、自然性の低下が危惧されている。

## 6 耕地生態系

県内の耕地面積は、県土の約18%（水田面積は約15%）を占めており、森林に次ぐ面積となっている。これら耕作地の大半は、標高200m以下の低地に分布しており、これより標高の高い耕地の多くは、戦後の開拓によるものである。特に水田地帯は、用排水路などを介して、河川や溜池と繋がった複合的な生態系をなしている。また、大潟村の大規模圃場では冬期、ガン類が大群で越冬し、その規模は宮城県伊豆沼周辺に次いで国内最大級である。特に、全国的に個体数の少ないハクガンが集団で越冬する点で大変貴重である。

しかしながら、県内全体としては、農薬散布や圃場整備により周辺水路や湧水などの改変が進み、かつて普通に生息していたメダカ、カエル、ホタルといった耕地の身近な生物多様性は以前と比べて大きく減少している。さらに、一部の水生植物や淡水魚、昆虫類の中には、絶滅の危惧が指摘される種まで生じている。このため、近年は農業関係の各種事業においても、自然環境に配慮した対策が実施されているが、人為的な影響を日常的に受けている生態系であることに変わりはない。

## 7 都市生態系

県内の主な都市域は、耕地生態系と同様に標高200m以下の平野部に集中しており、低地においては水田地帯やヨシ群落、ハンノキ林などから、丘陵地帯においては畑地及び二次林地帯などから改変されたものと考えられる。県内の都市域における都市公園面積率は低いが、都市近郊丘陵部の二次林や海岸部のクロマツ防風林、河畔林などにより、森林生態系と回廊的または飛石状に連続性が確保されている地域が多い。

近年、都市開発のスピードは減少してきているものの、二次林地帯の宅地化が進行しており、秋田市などでは都市部と森林域との連続性が失われる傾向が認められる。

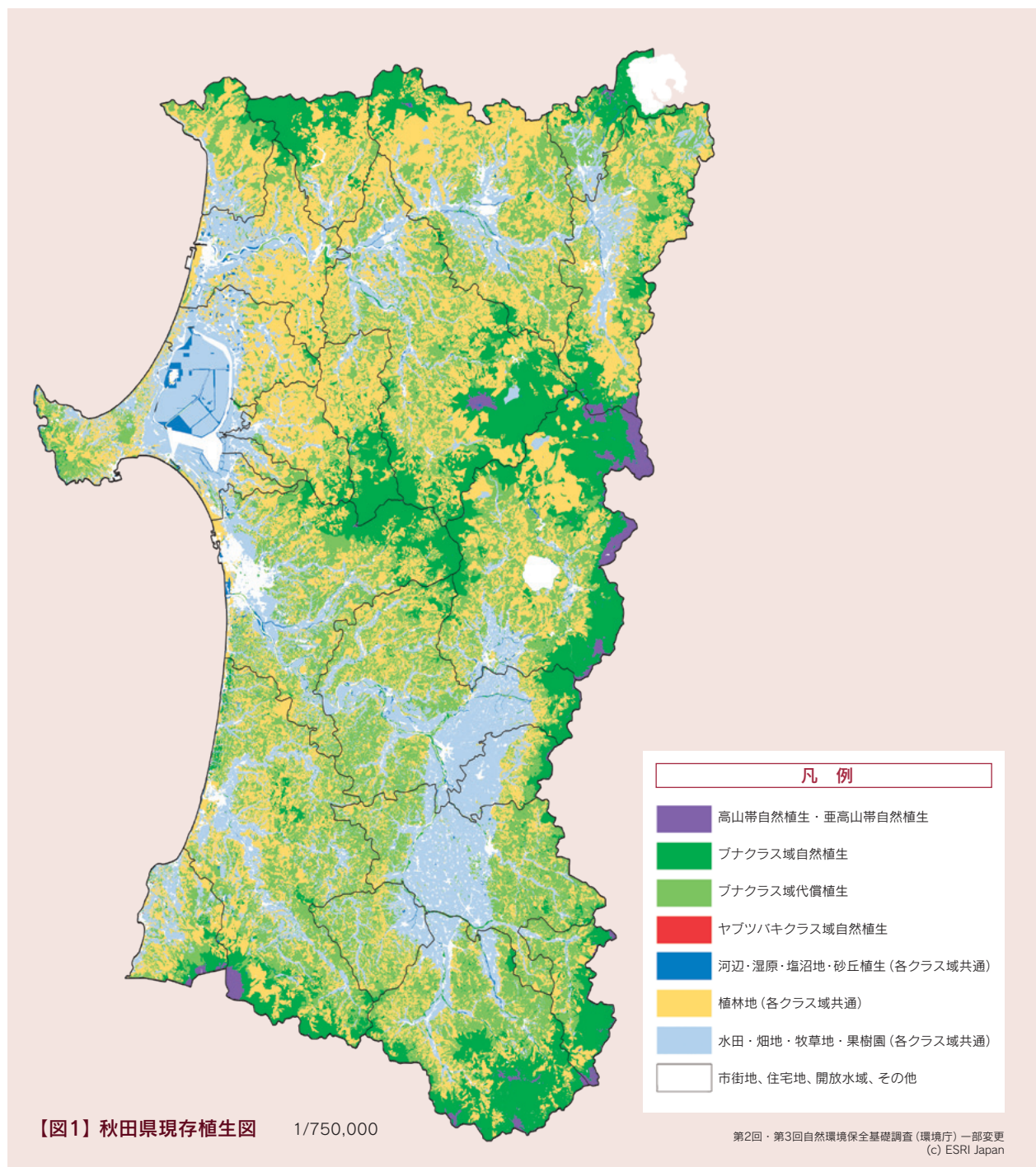
一方で、本県でもチョウゲンボウやムクドリ、ハクセキレイなど市街地中心部の環境を繁殖やねぐらに利用する種も出現してきた。このため、都市公園や街路樹も生態系の一部として認識すべきであり、例えば街路樹の植栽は外来樹種ではなく、郷土産樹種と同種の使用を拡大する、また、河川整備時においては、多自然型工法などの採用により、親水性の確保と水生生物の生息・生育空間の回復に務めるといった対策が、今まで以上に重要となっている。



## 8 秋田県現存植生図

ある場所を覆っている植物体の総称を植生といい、それらの広がりを地図上に表現したものが植生図である。下図1は、環境庁（現環境省、以下同じ）が実施した自然環境保全基礎調査植生調査（1/50,000縮尺）の成果をもとに、植生を8つに区分して、その水平分布を示したものである。

現在、環境省は1/25,000縮尺植生図の整備を進めている。令和2年3月末で、秋田県域の整備率は約69.8%（2次メッシュ数による算出）と全国平均を下回っている。今後の整備の進展が期待される。



# 秋田県版レッドデータブック 2020の概要

## 1 改訂の目的

豊かな自然が残っているとされる本県においても、土地利用の変化に伴って野生生物の生息地は様々な影響を受けており、環境の悪化による生息・生育地の消失や個体数の減少が生じ、中には絶滅の危機に瀕している例も出現している。

また、産業構造や資源利用の変化、社会の過疎化や高齢化に伴い、人間による里地里山への働きかけが減少し、これまで存続してきた生態系が大きく変化してきている。さらに、人為的に他の地域から持ち込まれた生物が在来種の脅威となっている例も見られることから、本県における生物多様性の保全を図るためには、環境の悪化を防ぎ、植生や種を持続的に維持する努力が必要と考えられる。

全国レベルでの野生生物の絶滅の危険性の評価は、国により行われているが、野生生物の生息・生育環境は地域によって異なるため、全国的には絶滅のおそれがないと評価された種であっても都道府県レベルでは絶滅リスクが大きい場合、もしくはその逆の場合がありうることから、全国レベルでの評価が地域の実態に符合しない場合がある。都道府県において種の保全を行うためには、より地域の現況を反映したレッドリスト※1・レッドデータブック※2が必要となり、これまでに全ての都道府県において都道府県版レッドデータブックを発行している。

しかしながら、野生生物の生息・生育環境は常に変化していることから、これらの評価は定期的に見直すことが求められ、既に多くの都道府県で改訂版を発行しているほか、周期的に改訂に向けた作業が進められている。

「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2020－動物II」は、本県における絶滅のおそれのある野生生物について、最新の状況を明らかにすることを目的としており、これらの情報が明らかにされることで、より多くの人々が種や生態系の保全に関心を持ち、自然環境の良好な推移に留意されることが期待される。

また、本書は絶滅の危機にある県内の野生生物の現状を伝えており、教育普及から開発行為に至る広い領域での基礎的情報として共有されることが望まれる。

※1：野生生物について生物学的観点から絶滅の危険性を評価し選定したリスト。

※2：レッドリストに選定された野生生物について、分布、生息・生育環境、生息・生育状況、絶滅の要因、保全対策などをとりまとめて編さんした本。

## 2 改訂の経緯

環境庁は1991年に「日本の絶滅のおそれのある野生生物－脊椎動物編－」及び「同一無脊椎動物編－」を発行した。その後環境省は、国際自然保護連合（IUCN）が採択したレッドリストカテゴリーの考え方を取り入れた新たなカテゴリーに基づく改訂を行った。環境省はこれまでに3回の見直しを行い、2012年と2013年に第4次レッドリストを公表し、2014年にレッドデータブック2014を発行している。その後、生息状況の悪化などによりカテゴリー（ランク）の再検討が必要な種については、時期を定めずに必要に応じて個別に改訂しており、レッドリスト2019が最新となっている。

秋田県では、1999年から2001年に、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類、陸産貝類及び維管束植物について秋田県版レッドリストを順次公表した。一部を見直した後、2002年に「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物2002－秋田県版レッドデータブック－動物編・植物編」（以下「2002年版」という。）を発行した。

また、2008年には、蘚苔類及び地衣類についての秋田県版レッドリストを公表するとともに、2009年に「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物2009－秋田県版レッドデータブック－維管束植物以外編（蘚苔類・地衣類）」を発行したほか、シャジクモ類についての秋田県版レッドリストを公表した。



しかしながら、2002年版を発行してから10年以上が経過し、この間にも野生生物の生息・生育環境などに変化が見られるとともに、新たな知見が蓄積され、2009年から県内の野生生物の専門家で構成された「秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会」を設置し、分類群ごとに順次見直しを進めた。2013年に鳥類、2014年に維管束植物の秋田県版レッドリストを公表、同年「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2014－維管束植物」を発行、2016年に爬虫類、両生類、淡水魚類及び陸産貝類の秋田県版レッドリストを公表、同年「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2016－動物Ⅰ」を発行した。

このたび、哺乳類及び昆虫類の再評価がまとまり「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物－秋田県版レッドデータブック2020－動物Ⅱ」として発行することになった。

### 3 掲載対象

対象とした分類群は、哺乳類と昆虫類である。対象範囲は本県全域に生息するものとしたが、本県が本来の生息地ではないと考えられる偶産種や外来種は対象外とした。

また、対象とした生物の単位は、種及び地域個体群とし、種の単位は種及び亜種とした。

### 4 改訂のための調査

2002年版の発行後に新しく記録された野生生物の生息状況などについて分類群ごとに文献などを確認し、昆虫類については、生息地の現地調査も実施した。

### 5 改訂のための検討体制

2013年に昆虫類、2016年に哺乳類の改定検討委員会を設置し、改訂の進め方、評価対象種の選定、その生息状況の情報収集・整理及び絶滅のおそれの評価などを協議・検討した。

#### 【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（哺乳類）委員】

小松 守	秋田市大森山動物園 園長
佐々木 誠	秋田県立能代高等学校 教頭
島田 卓哉	国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 室長
◎星崎 和彦	秋田県立大学生物資源科学部 教授
(五十音順、敬称略、所属等は2019年5月時点、◎はチーフ)	
小笠原 嵩	秋田大学名誉教授【2017年3月退任】

#### 【秋田県版レッドデータブック改訂検討委員会（昆虫類）委員】

青谷 晃吉	環境省希少野生動植物種保存推進員
梅津 一史	秋田県立博物館 主任学芸主事
◎佐藤 福男	秋田自然史研究会 副会長
田中 政行	株式会社自然科学調査事務所 環境2部 部長
(五十音順、敬称略、所属等は2019年5月時点、◎はチーフ)	
佐々木 明夫	秋田自然史研究会【2017年3月退任】
高橋 雅彌	秋田自然史研究会【2019年7月退任】

## 6 カテゴリー及びカテゴリー定義

### (1) カテゴリー

秋田県版レッドデータブックのカテゴリー及びその定義は、環境省レッドリストカテゴリーと判断基準（2019）に準拠したが、本県の実情を考慮して一部変更している部分もある。

また、ニホンザル、ツキノワグマ、ニホンジカ、イノシシの4種については、秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第3次ニホンザル）（第4次ツキノワグマ）（第1次ニホンジカ）（第1次イノシシ）に基づき、人身被害や農林業被害を防止するため、個体数調整捕獲等による個体数管理（ニホンザル、ツキノワグマ）、狩猟・有害駆除等による積極的な捕獲の推進（ニホンジカ、イノシシ）及びモニタリング調査などにより、継続的に生息動向を把握し、適正に管理していく必要があるため、本県独自のカテゴリーとして「継続観測種（Continuous Monitoring Needed）」を新たに設け付属資料に追加した。

#### 【秋田県版レッドデータブックカテゴリー】

- 絶滅 (EX) : 本県ではすでに絶滅したと考えられる種。
- 野生絶滅 (EW) : 飼育下でのみ存続している種。
- 絶滅危惧
  - IA類 (CR) : ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種。
  - IB類 (EN) : 絶滅危惧IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種。
  - II類 (VU) : 絶滅の危険性が増大している種。
- 準絶滅危惧 (NT) : 存属基盤が脆弱な種。
- 情報不足 (DD) : 評価するだけの情報が不足している種。
- 地域個体群 (LP) : 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高い個体群。

#### (付属資料)

- 留意種 (N) : ①本県では絶滅の危険性はないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種。  
②現在は保護策が講じられていて、差し迫った危険性はないが、それが中止されれば、絶滅危惧II類以上に移行する要素を有する種。  
③過去に個体数や分布が著しく減少した種。  
④他の機関で準絶滅危惧以上の評価を受けている種の中で、本県での生息状況等に留意すべき種。
- 継続観測種 (CM) : 秋田県第二種特定鳥獣管理計画に基づき、人身被害や農林業被害を防止するため、個体数調整捕獲等による個体数管理（サル、ツキノワグマ）、狩猟・有害駆除等による積極的な捕獲の推進（ニホンジカ、イノシシ）及びモニタリング調査などにより、継続的に生息動向を把握し、適正に管理していく必要がある種。 ※哺乳類限定



(2) 秋田県版レッドデータブックカテゴリー定義

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>●<b>絶滅</b> Extinct(EX) 本県ですでに絶滅したと考えられる種(注1、以下同じ)</p>	<p>過去に本県に生息したことが確認されており、飼育下を含め、本県ですでに絶滅したと考えられる種</p>	
<p>●<b>野生絶滅</b> Extinct in the Wild (EW) 飼育下でのみ存続している種</p>	<p>過去に本県に生息したことが確認されており、飼育下では存続しているが、本県において野生ですでに絶滅したと考えられる種</p> <p><b>【確実な情報があるもの】</b> ①信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。 ②信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。</p> <p><b>【情報量が少ないもの】</b> ③過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。</p>	
<p>○<b>絶滅危惧Ⅰ類</b> Critically Endangered+ Endangered (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p>●<b>絶滅危惧</b> T H R E A T E N E D</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p><b>【確実な情報があるもの】</b> ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。</p> <p><b>【情報量が少ないもの】</b> ⑤それほど遠くない過去(30年～50年)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。</p>	<p><b>絶滅危惧ⅠA類</b> Critically Endangered (CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少がみられる場合。 1. 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間(注2、以下同じ)を通じて、90%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、かつ理解されており、かつ明らかに可逆的である。 2. 過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。 3. 今後10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があると予測される。 4. 過去と未来の両方を含む10年間若しくは3世代のどちらか長い期間において80%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</p> <p>B. 出現範囲が100km<sup>2</sup>未満若しくは生息地面積が10km<sup>2</sup>未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ所の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 3年間若しくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、若しくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 a) 個体群構造が次のいずれかに該当 i) 50以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。 ii) 1つの下位個体群中に90%以上の成熟個体が属している。 b) 成熟個体数の極度の減少</p> <p>D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、10年間、若しくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</p>

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
		<p><b>絶滅危惧 I B 類</b> Endangered (EN)</p> <p>絶滅危惧 I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、70%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、かつ理解されており、かつ明らかに可逆的である。</li> <li>過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</li> <li>今後10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。</li> <li>過去と未来の両方を含む10年間若しくは3世代のどちらか長い期間において50%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</li> </ol> <p>B. 出現範囲が500km<sup>2</sup>未満若しくは生息地面積が50km<sup>2</sup>未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。</li> <li>出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。</li> <li>出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</li> </ol> <p>C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>5年間若しくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。</li> <li>成熟個体数の継続的な減少が観察、若しくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> <li>個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> <li>250以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。</li> <li>1つの下位個体群中に95%以上の成熟個体が属している。</li> </ol> </li> <li>成熟個体数の極度の減少</li> </ol> </li> </ol> <p>D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、20年間、若しくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。</p>
<p>○ <b>絶滅危惧 II 類</b> Vulnerable (VU)</p> <p>絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のカテゴリーに移行することが確実に考えられるもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。</li> <li>② 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。</li> <li>③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。</li> <li>④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。</li> </ol>	<p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっており、かつ理解されており、かつ明らかに可逆的である。</li> <li>過去10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があったと推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</li> <li>今後10年間若しくは3世代のどちらか長い期間を通じて、30%以上の減少があると予測される。</li> <li>過去と未来の両方を含む10年間若しくは3世代のどちらか長い期間において30%以上の減少があると推定され、その原因がなくなっていない、理解されていない、あるいは可逆的でない。</li> </ol> <p>B. 出現範囲が2,500km<sup>2</sup>未満若しくは生息地面積が250km<sup>2</sup>未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。</li> <li>2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。</li> <li>3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</li> </ol>



カテゴリ及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>● 絶滅危惧 T H R E A T E N E D</p>		<p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 10年間若しくは3世代のどちらか長い期間内に10%以上の継続的な減少が推定される。</li> <li>2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、若しくは推定・予測され、かつ次のいずれかに該当する。 <ol style="list-style-type: none"> <li>a) 個体群構造が次のいずれかに該当 <ol style="list-style-type: none"> <li>i) 1,000以上の成熟個体を含む下位個体群は存在しない。</li> <li>ii) 1つの下位個体群中にすべての成熟個体が属している。</li> </ol> </li> <li>b) 成熟個体数の極度の減少</li> </ol> </li> </ol> <p>D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p>
<p>● 準絶滅危惧 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位カテゴリに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種</p> <p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a) 個体数が減少している。</li> <li>b) 生息条件が悪化している。</li> <li>c) 過度の捕獲・採取による圧迫を受けている。</li> <li>d) 交雑可能な別種が侵入している。</li> </ol>	
<p>● 情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>次に該当する種</p> <p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリを判定するに足る情報が得られていない種。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。</li> <li>b) 生息地が局限されている。</li> <li>c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。</li> <li>d) 生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。</li> </ol>	
<p>● 地域個体群 Threatened Local Population (LP) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。</li> <li>② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</li> </ol>	

(注1) 種：種及び亜種を示す。

(注2) 過去10年間若しくは3世代：1世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を超えるものは世代数を採用する。

## ■付属資料

カテゴリー及び基本概念	定性的要件	定量的要件
<b>●留意種</b> Noteworthy (N)	次に該当する種  ①本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種。 ②現在は保護策が講じられていて、差し迫った危機はないが、それが中止されれば絶滅危惧II類以上の危険度になる種。 ③過去に個体数・分布が著しく減少した種など。 ④他の機関で準絶滅危惧以上の評価を受けている種で、本県での生息状況等に留意すべき種で、本県での生息状況等に留意すべき種。	
<b>●継続観測種</b> Continuous Monitoring Needed (CM) ※哺乳類限定	次に該当する種  秋田県第二種特定鳥獣管理計画に基づき、人身被害や農林業被害を防止するため、個体数調整捕獲等による個体数管理（サル、ツキノワグマ）、狩猟・有害駆除等による積極的な捕獲の推進（ニホンジカ、イノシシ）及びモニタリング調査などにより、継続的に生息動向を把握し、適正に管理していく必要がある種。	

### (3) 主な変更点

#### ① 環境省レッドリストカテゴリーと判定基準（2019）からの変更点

ア 本県の面積を勘案し、定量的要件のB要件の出現範囲面積と生息地面積を変更した。

カテゴリー		環境省	秋田県
絶滅危惧IB類 (EN)	出現範囲	5,000km <sup>2</sup> 未満	500km <sup>2</sup> 未満
	生息地面積	500km <sup>2</sup> 未満	50km <sup>2</sup> 未満
絶滅危惧II類 (VU)	出現範囲	20,000km <sup>2</sup> 未満	2,500km <sup>2</sup> 未満
	生息地面積	2,000km <sup>2</sup> 未満	250km <sup>2</sup> 未満

イ 環境省では付属資料としている「絶滅のおそれのある地域個体群」をカテゴリーに組み入れ、名称を「地域個体群」とした。

ウ 本県では絶滅の危険性はないが、国際的、国内的に保護を要する種などのカテゴリーとして「留意種」を設け、付属資料とした。

エ 新たなカテゴリーとして、人身被害や農林業被害を防止するため、個体数調整捕獲等による個体数管理（ニホンザル、ツキノワグマ）、狩猟・有害駆除等による積極的な捕獲の推進（ニホンジカ、イノシシ）及びモニタリング調査などにより、継続的に生息動向を把握し、適正に管理していく必要がある種として「継続観測種」を設け、付属資料とした。

#### ② 2016年版レッドデータブックカテゴリーからの変更点

ア 留意種の定性的要件④に「本県での生息状況等に留意すべき種」を追記した。

イ 新たなカテゴリーとして「継続観測種」を設け、付属資料とした。



## 7 評価結果

### (1) 掲載種数

秋田県版レッドデータブック2020には、絶滅5種、絶滅危惧（絶滅危惧IA類、絶滅危惧IB類、絶滅危惧II類）137種、準絶滅危惧77種、情報不足107種、1地域個体群が掲載された。

その他、付属資料として留意種に4種、継続観測種に4種が掲載された。（表1）

【表1】秋田県版レッドデータブック2020掲載種数

カテゴリー		分類群	哺乳類	昆虫類	合計
絶滅	EX		0	5	5
			(1)	(3)	(4)
野生絶滅	EW		0	0	0
			0	0	0
絶滅危惧	絶滅危惧IA類	CR	0	35	35
			0	(30)	(30)
	絶滅危惧IB類	EN	10	44	54
			(8)	(29)	(37)
	絶滅危惧II類	VU	5	43	48
			(12)	(27)	(39)
絶滅危惧 計			15	122	137
			(20)	(86)	(106)
準絶滅危惧	NT		5	72	77
			(2)	(46)	(48)
情報不足	DD		2	105	107
			(2)	(45)	(47)
地域個体群	LP		0	1	1
			0	(1)	(1)
合計			22	305	327
			(25)	(181)	(206)

#### [付属資料]

留意種	N	2	2	4
		(5)	(8)	(13)
継続観測種	CM	4	0	4
		0	0	0

※表中の括弧内の数字は2002年版を示す。

## (2) 評価結果概要

秋田県版レッドデータブック2020に新たに掲載された種は、哺乳類2種、昆虫類142種であった。一方、調査・研究により生息状況などに関する新たな知見が蓄積されたことや、生息環境の改善等により、哺乳類4種、昆虫類24種は絶滅の危険性は低いため除外された。

今回の改訂により、絶滅危惧（絶滅危惧IA類、絶滅危惧IB類、絶滅危惧II類）と評価された種は、2002年版より31種増加し、準絶滅危惧も29種増加した。

さらに、記録が少なく生息状況などが不明のため、絶滅の危険性を判断することができない情報不足が60種増加したため、知見の蓄積が求められるとともに、今後の推移に注意が必要である。

(3) 掲載種一覧(分類群、カテゴリー別)

【哺乳類】	
絶滅危惧IB類 (EN)	
1	ヒメヒミズ
2	ヤマコウモリ
3	ニホンウサギコウモリ
4	ヒナコウモリ
5	カグヤコウモリ
6	ノレンコウモリ
7	クロホオヒゲコウモリ
8	テングコウモリ
9	イイズナ
10	オコジョ
絶滅危惧II類 (VU)	
1	シントウトガリネズミ
2	コキクガシラコウモリ
3	ヒメホオヒゲコウモリ
4	コテングコウモリ
5	ユビナガコウモリ
準絶滅危惧 (NT)	
1	カワネズミ
2	キクガシラコウモリ
3	モモジロコウモリ
4	ヤチネズミ
5	ニホンモモンガ
情報不足 (DD)	
1	ミズラモグラ
2	コヤマコウモリ
留意種 (N)	
1	ヤマネ
2	ニホンカモシカ
継続観測種 (CM)	
1	ニホンザル
2	ツキノワグマ
3	ニホンジカ
4	イノシシ

【昆虫類】	
絶滅 (EX)	
1	カトリヤンマ
2	オオキトンボ
3	チャマダラセセリ
4	オオウラギンヒョウモン
5	カバシタムクゲエダシャク
絶滅危惧IA類 (CR)	
1	モートンイトトンボ
2	ハネピロエゾトンボ
3	コノシメトンボ
4	ヒメアカネ
5	カワラハンミョウ
6	マークオサムシ
7	クマガイクロアオゴミムシ
8	テラニシセスジゲンゴロウ
9	ダイコクコガネ
10	ヤマトエンマコガネ
11	ミチノクケマダラカミキリ
12	ギンスジマダラメイガ
13	ムナカタミズメイガ
14	クロシジミ
15	フタスジチョウ
16	ホシミスジ北上山地亜種
17	キマダラモドキ
18	フタオレウスグロエダシャク
19	ハガタアオシャク
20	コヒメシャク
21	マルバヒメシャク
22	オビベニヒメシャク
23	イチゴナミシャク
24	シロヤエナミシャク
25	シロマダラカバナミシャク
26	クワヤマエグリシャチホコ
27	チョウカイシロコブガ

28	ホクトギンウワバ
29	ナナメヒメヨトウ
30	アオモンギンセダカモクメ
31	シロミミチビヨトウ
32	クシロモクメヨトウ
33	キタヨトウ
34	テンモントガリヨトウ
35	ギンモンアカヨトウ
絶滅危惧IB類 (EN)	
1	カラカネイトトンボ
2	オオセスジイトトンボ
3	ルリイトトンボ
4	オジロサナエ
5	ホンサナエ
6	マダラナニワトンボ
7	カワラゴミムシ
8	ホソハンミョウ
9	ヨツボシカミキリ
10	フタクロテンマダラメイガ
11	ナイトウツトガ
12	ソトシロスジミズメイガ
13	ウスキシダメイガ
14	ギンイチモンジセセリ
15	ヘリグロチャバネセセリ
16	ギフチョウ
17	ヒメシロチョウ
18	ウラゴマダラシジミ
19	カシワアカシジミ(キタアカシジミ)
20	ヒメシジミ
21	キタルリモンエダシャク
22	トギレフユエダシャク
23	スモモエダシャク
24	ヒメシタコバナナミシャク
25	テンスジアオナミシャク
26	ギンボシシャチホコ



- 27 ウスジロドクガ
  - 28 スゲドクガ
  - 29 クシナシホシオビコケガ
  - 30 マエアカヒトリ
  - 31 ヨスジカバイロアツバ
  - 32 シラクキコヤガ
  - 33 スミレクビグロクチバ
  - 34 ウンモンキシタバ
  - 35 シロスジキンウワバ
  - 36 ダイセンセダカモクメ
  - 37 ニセタバコガ
  - 38 セプトモクメヨトウ
  - 39 アズサキリガ
  - 40 ムラサキヨトウ
  - 41 コハイイロヨトウ
  - 42 シロオビヨトウ
  - 43 キタクロヤガ
  - 44 ハマヤガ
- 絶滅危惧 II 類 (VU)**
- 1 アオサナエ
  - 2 タガメ
  - 3 アイヌハンミョウ
  - 4 アオバネホソクビゴミムシ
  - 5 クロナガオサムシ
  - 6 ハヤチネヌレチゴミムシ
  - 7 チンメルマンセスジゲンゴロウ
  - 8 ニセルイスツブゲンゴロウ
  - 9 シマゲンゴロウ
  - 10 オオクワガタ
  - 11 オオチャイロハナムグリ
  - 12 シンテイトビケラ
  - 13 ババホタルトビケラ
  - 14 クロモンエグリトビケラ
  - 15 ヒメキテンシロツツガ
  - 16 モリオカツトガ

- 17 チビウスキオオメイガ
  - 18 ウスマダラミズメイガ
  - 19 ヒメギフチョウ
  - 20 ハヤシミドリシジミ
  - 21 ヒョウモンチョウ(ナミヒョウモン)
  - 22 ヒカゲチョウ(ナミヒカゲ)
  - 23 クロスジアオシャク
  - 24 ヒメナミガタアオシャク
  - 25 ウラテンシロヒメシャク
  - 26 ミチノクヒメシャク
  - 27 クロシタコバナナミシャク
  - 28 ムツテンナミシャク
  - 29 サザナミフユナミシャク
  - 30 トビスジトガリナミシャク
  - 31 フタシロスジカバナミシャク
  - 32 イイジマカバナミシャク
  - 33 フジカバナミシャク
  - 34 ミカボコブガ
  - 35 マガリスジコヤガ
  - 36 ウスチャマエモンコヤガ
  - 37 ヌマベウスキヨトウ
  - 38 ミヤマショウブヨトウ
  - 39 ミスジキリガ
  - 40 ムラサキハガタヨトウ
  - 41 アトジロキリガ
  - 42 マエキヤガ
  - 43 オオシラホシヤガ
- 準絶滅危惧 (NT)**
- 1 アオハダトンボ
  - 2 ムカシトンボ
  - 3 ハツチョウトンボ
  - 4 シノビアミメカワゲラ
  - 5 フライソンアミメカワゲラ
  - 6 ウ斯巴カマキリ
  - 7 ヤマトマダラバツタ

- 8 カワラバツタ
- 9 アカガネオサムシ
- 10 ホソヒメクロオサムシ東北地方西南部亜種
- 11 ホソヒメクロオサムシ奥羽山脈亜種
- 12 シラカミナガチビゴミムシ
- 13 オオトックリゴミムシ
- 14 エチゴトックリゴミムシ
- 15 トウホクナガケシゲンゴロウ
- 16 カノシマチビゲンゴロウ
- 17 ルイスツブゲンゴロウ
- 18 チョウカイクロマメゲンゴロウ
- 19 オオイチモンジシマゲンゴロウ
- 20 クロゲンゴロウ
- 21 マルコガタノゲンゴロウ
- 22 ゲンゴロウ
- 23 エゾゲンゴロウモドキ
- 24 エンマハバビロガムシ
- 25 ヤマトモンシテムシ
- 26 オオトラフハナムグリ
- 27 チョウカイアラコガネコメツキ
- 28 ヘリウスハナカミキリ
- 29 イガブチヒゲハナカミキリ
- 30 コトラカミキリ
- 31 ムモンベニカミキリ
- 32 ヨコヤマヒゲナガカミキリ
- 33 ヒメビロウドカミキリ
- 34 キンイロネクイハムシ
- 35 オオサルハムシ
- 36 オオヨモギハムシ
- 37 ルリドロノキハムシ
- 38 ベニカメノコハムシ
- 39 イカリアオカメノコハムシ
- 40 チョウカイトガリヤマゾウムシ
- 41 オナガカツオゾウムシ
- 42 ヤチトビケラ

43 ハンエンカクツツトビケラ  
44 フトオヒメニンギョウトビケラ  
45 ウスイロコバントビケラ  
46 ハマナストリバ  
47 マダラホソメイガ  
48 ウスキシロオオメイガ  
49 オオゴマシジミ  
50 キブサヒメエダシャク  
51 クロオオモンエダシャク  
52 コアヤシャク  
53 シタバニヒメシャク  
54 キボシヤエナミシャク  
55 エゾヤエナミシャク  
56 フタモンコナミシャク  
57 ムネシロテンカバナミシャク  
58 トビギンボシシャチホコ  
59 シロホソバ  
60 キバラヒトリ  
61 クロスジシロコブガ  
62 ネグロアツバ  
63 ハイマダラコヤガ  
64 キシタアツバ  
65 ウスジロケンモン  
66 ギンモンセダカモクメ  
67 クロビロードヨトウ  
68 ヨコスジヨトウ  
69 オオチャバナヨトウ  
70 キスジウスキヨトウ  
71 シロテンキヨトウ  
72 クモマウスグロヤガ

情報不足 (DD)

1 ホソミオツネントンボ  
2 マダラヤンマ  
3 ヒメサナエ  
4 ミヤマサナエ

5 オオトラフトンボ  
6 ミヤマノギカワゲラ  
7 クマコオロギ  
8 カヤコオロギ  
9 カワラスズ  
10 コロギス  
11 ヒガシキリギリス  
12 クビキリギス  
13 ショウリヨウバツタモドキ  
14 セアカオサムシ  
15 コオナガミズシマシ  
16 アカマダラハナムグリ  
17 カラフトマルトゲムシ  
18 コウヤホソハナカミキリ  
19 ウマノオバチ  
20 エゾアカヤマアリ  
21 トゲアリ  
22 ニッポンハナダカバチ  
23 ヤマトアシナガバチ  
24 オオセイボウ  
25 トワダオオカ  
26 ケブカハラナガハナアブ  
27 ガロアシマトビケラ  
28 イズミンギョウトビケラ  
29 ミサキツノトビケラ  
30 ツダヒゲナガトビケラ  
31 カモヒゲナガトビケラ  
32 ヌマコヒゲナガトビケラ  
33 クロホソバトビケラ  
34 ギンヒゲナガ  
35 ヤホシホソマダラ  
36 ルリハダホソクロバ  
37 ヒメカバイロホソメイガ  
38 クロミヤクホソメイガ  
39 イネコムズメイガ

40 ムモンアカシジミ  
41 オナガシジミ  
42 オオムラサキ  
43 サトキマダラヒカゲ  
44 マンレイカギバ  
45 ウコンカギバ  
46 ヨスジシロカギバ  
47 サカハチトガリバ  
48 キボシミスジトガリバ  
49 クラマトガリバ  
50 ハガタフタオ  
51 カバイロフタオ  
52 ギンツバメ  
53 カバシャク  
54 クロフカバシャク  
55 フタモントガリエダシャク  
56 トビカギバエダシャク  
57 ソトシロモンエダシャク  
58 キバネトビスジエダシャク  
59 クロスジハイイロエダシャク  
60 チャエダシャク  
61 クロモンキリバエダシャク  
62 モンキクロエダシャク  
63 ヨスジキエダシャク  
64 トガリエダシャク  
65 ツツジツマキリエダシャク  
66 フタテンエダシャク  
67 ウコンエダシャク  
68 コガタヒメアオシャク  
69 オオナミガタアオシャク  
70 ヨツメヒメシャク  
71 ウスクロテンヒメシャク  
72 ウスキヒカリヒメシャク  
73 ウスオビコバナミシャク  
74 シラナミナミシャク

- 75 ネアカナカジロナミシャク
- 76 アカモンコナミシャク
- 77 ヤハズナミシャク
- 78 カラスナミシャク
- 79 カメダカバナミシャク
- 80 クロモンカバナミシャク
- 81 クロテンカバナミシャク
- 82 グンマカバナミシャク
- 83 リンゴアオナミシャク
- 84 スカシサン
- 85 スキバホウジャク
- 86 オオヤママイマイ
- 87 ナンキンキノカワガ
- 88 ナミグルマアツバ
- 89 ベニエグリコヤガ
- 90 マガリウスツマアツバ
- 91 カギモンハナオイアツバ
- 92 アカマエアツバ
- 93 カシワアツバ
- 94 プライヤキリバ
- 95 コシロシタバ
- 96 ジョウザンケンモン
- 97 ヒメシロテンアオヨトウ
- 98 チャイロカドモンヨトウ
- 99 クマソオオヨトウ
- 100 モトグロヨトウ
- 101 ウスベニキリガ
- 102 タイリクウスイロヨトウ
- 103 オオカブラヤガ
- 104 マエグロヤガ
- 105 ナカグロヤガ

#### 留意種 (N)

- 1 オオルリハムシ
- 2 ベニヒカゲ

#### 地域個体群 (LP)

- 1 サメハダハマキチョッキリ玉川下流域藍色個体群





**Animals II**



**哺乳類・  
昆虫類**

**掲載種の解説**

**Red Data Book of Akita Prefecture 2020  
Animals II**

## 掲載項目

〔例〕

〇〇目〇〇科 ← (1)	秋田県2020： (4)	PHOTO
〇〇〇〇〇〇 ← (2)	秋田県2002： (5)	
〇〇〇〇〇〇 (※※※※,□□□) ← (3)	環境省2019： (6)	
◆国内外の分布 (7)		
◆県内の分布 (8)		
◆本種の概要 (9)		
◆本種の現状 (10)		
◆生存に対する脅威 (11)		
◆現在の保護対策 (12)		
◆特記事項 (13)		
		(〇〇 〇〇) ← (14)

(1) 目・科和名

(2) 種和名

(3) 種学名

目・科和名、種和名、種学名の引用元

① 哺乳類

Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Fukui D & Saitoh T (eds). 2015. The Wild Mammals of Japan, Second Edition. Mammal Society of Japan.

② 昆虫類

目毎に異なるため、参考文献に記載した。

(4) 秋田県2020

秋田県版レッドデータブック2020年版のカテゴリーを記載した。

(5) 秋田県2002

秋田県版レッドデータブック2002年版のカテゴリーを記載した。(掲載されていない場合は「-」と記載した。)

(6) 環境省2019

環境省レッドリスト2019年版のカテゴリーを記載した。(掲載されていない場合は「該当なし」と記載した。)

(7) 国内外の分布 国内外の分布を記載した。

(8) 県内の分布 県内の分布を記載した。

(9) 本種の概要 形態的特徴や生態等を記載した。

(10) 本種の現状 主に県内での生息状況等を記載した。

(11) 生存に対する脅威 減少、絶滅の要因として推定されるものを記載した。

(12) 現在の保護対策 天然記念物の指定などの保護対策を記載した。(記載すべき事項が無い場合は項目を省略した。)

(13) 特記事項 その他特記すべき事項を記載した。(特記すべき事項が無い場合は項目を省略した。)

(14) 執筆者氏名 執筆者の氏名を記載した。



**Mammals**



# 哺乳類

Red Data Book of Akita Prefecture 2020  
Animals II



## 哺乳類概説

秋田県にはこれまでに少なくとも49種類の陸生哺乳類の生息記録があり（注：正確な種数は種の定義や生息の基準などにより異なる）、これは近隣県と比べてやや少なく、動物相の異なる北海道と南西諸島を除く地域で確認されている種数のおよそ6割弱に相当する。秋田県の哺乳類相の全般的な特徴としては、まず本州・四国に普通に見られる陸生哺乳類の大半は本県に生息していること、種数ベースでは本県における生息種数のほぼ4分の1をコウモリ類が占めること、ツキノワグマ、ニホンカモシカといった大型種が県内のほぼ全域に生息していること、そして本県固有の種や亜種が生息しないこと、を挙げることができよう。

このように書くと、秋田県に生息する哺乳類は、種数は多い方ではないものの、生息環境は概して良好だと思われるかもしれない。しかし実のところは、その6割超に相当する種数の哺乳類がなんらかの絶滅リスクを抱えている現状があり、また後に述べるように、近年、本県の哺乳類をめぐる状況は大きく変化しつつあるため、本県の哺乳類の保全に関しては十分な注意を払う必要がある。

本県において、哺乳類の絶滅危険度の評価が初めて行われたのは1990年代末から2000年代初頭にかけてで、秋田県版レッドリスト2000年版（以下「RL2000年版」という。）として公表された後、2002年に秋田県版レッドデータブック2002動物編（以下「RDB2002年版」という。）が発行された。このときは県内に少なくとも39種の哺乳類が生息（可能性のある種を含む）しているとした上で、RL2000年版で選定された30種について種ごとの記載がなされた。

本書はそれ以降、2度目のレッドデータブックとなる。今回は42種について絶滅危険度を評価し、既に公表された秋田県版レッドリスト2019年版において27種を選定した。対象は海棲哺乳類を除く全て在来の陸生哺乳類とし、現地調査は行わず、環境影響調査等の現地調査に基づく既存文献により絶滅危険度を評価した。この点は前回と同様である。その理由は主に、全ての種で現地調査を行うことはできないこと、特定の種のみ現地調査に基づいた評価を下すと公平性を損ねること、そして何よりも費用の問題によるものである。これらの点に対してまず、ご理解いただきたい。作業に用いた文献は、RDB2002年版の発行以降に行われた調査に基づくものとした。資料収集に努めたものの、現地調査が定期的に繰り返されている事業はごくわずかに過ぎず、最終的には多くを公共事業の環境影響評価調査データに頼ることとなった。本来であれば、哺乳類相やその生息状況を定期的に（そしてなるべく定量的な方法によって）モニタリングする事業があつてこそ、それぞれの種の絶滅危険度が判定できるのであるが、秋田県に限らず我が国では、このような基礎調査を頻繁に行うことに対する理解が得られておらず、生物相調査全般に関する予算措置が甚だ不十分である。これらのことは、人類の生活様式が劇的に変化する中、地球環境の変化とそれに伴って生じる生物相への影響が予想される将来において、哺乳類の生息状況のみならず自然環境全般における変化を素早く、的確に捉えることができなくなる恐れ（変化に気づくのが遅れる恐れ）、そしてそれへの対策を立てる上で必要となる情報の決定的な不足と対策の遅れで取り返しがつかない状況に陥る恐れがあるということを、この場で指摘しておきたい。



さて、本書の編集作業のなかで、RDB2002年版発行時とどんな違いがあったのかという観点で各委員が共通して感じたことがあった。それらは大きく4つにまとめることができる。

(1) まず、既存の調査文献の性質が大きく変化した。これは近年建設が相次いでいる大型風力発電施設の影響が大きく、海岸砂丘や沿岸の丘陵地の環境影響評価調査によってデータの蓄積が見られた。その結果、RDB2002年版に掲載されていたニホンジネズミ、ニホンリス、ムササビ、アカギツネは今回ランク外となり、本書では掲載していない。また、ニホンモモンガ、ヒメホオヒゲコウモリなどで絶滅危険度のランクが下がった。(ただし種のランクを下げる場合は予防的の原則に則り慎重を期して、確実な情報がある場合に限った。)しかしその一方で、内陸地域や奥山での基礎的な調査文献はごく限られた数しかなく、生息状況の変化をRDB2002年版と比較して記載することは、ほとんどの種で難しかった。

(2) コウモリ類については調査蓄積が大きく進んだ。これは、前述した大型風力発電施設の環境影響評価の実施に加えて、2013年(平成25年)から環境影響評価調査においてコウモリ類の調査では捕獲が義務付けられたことによることも大きい。それ以前に主流であったバットディテクターによる調査では種の同定に至らないことが多かったが、捕獲によって、ノレンコウモリの生息が初めて確認された。さらに、これまで情報不足に陥りがちだった生息情報が得られるようになり、例えばテングコウモリやコテングコウモリ、コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリなどは生息実態により忠実な判定がなされたと考えている。

(3) 大型風力発電施設の増加によって、バードストライク・バットストライクの潜在的懸念が大きくなった。現時点で本書にその影響が反映されているわけではないが、今後コウモリ類では風力発電絡みの事故による減少リスク(高い高度で飛翔するヤマコウモリや長距離移動するヒナコウモリ、希少種のニホンウサギコウモリなど)が大きく変化する可能性があり、注視する必要があるだろう。

(4) 一部の種で、生息状況が本県を取り巻く社会情勢の変化を反映するようになった。本県におけるその代表格はツキノワグマであり、ニホンジカとイノシシもそこに含まれるだろう。2016年以降、ツキノワグマの県内での目撃数は800件を優に上回り市街地周辺での目撃も珍しいことではなくなった。生息数の推定値も推定方法の進歩のおかげでRDB2002年版から大幅に上方修正されていることを受け、本書ではツキノワグマの絶滅危険度をランク外とした。しかしながら、直近の10年間(2009~2018年)で合計3266頭が捕獲されているように、その捕獲圧はかつてなく強い。こうした現状のもと本県では管理計画を策定して生息状況をモニタリングし、その結果を本種の管理に活用している。そこで本書では、RDB2002年版にはなかった「継続観測種(CM)」というカテゴリーを新たに設け、やはり管理計画を策定して生息状況をモニタリングしているニホンジカとイノシシもこのカテゴリーに該当する種として扱うことにした。

RDB2002年版においてニホンジカは絶滅種(EX)にランクされ、イノシシは本県における信頼できる生息情報がなく判断が見送られていた。しかしながらニホンジカは2009年以降、イノシシは2012年以降、毎年目撃数が増えていて本県への侵入が明らかに始まっている。この2種は全国的に分布を拡大しているところであり、とくにイノシシについては福島県内での原発事故とその後の立入禁止区域における個体群増殖の影響も否定できない。ツキノワグマの大量出没も、本県における生息環境が改善されたというより、未曾有の人口減少・高齢化の波にさらされている本県では人と野生動物の境界線が両者のせめぎあいの中で我々の生活圏内に入ってきたと解釈すべき事柄であろう。本県の人口減少や集落の衰退の速度は他の地域に類を見ないレベルのものであって将来の人口展望に明るい材料は乏しい。このような社会情勢の中、本県の哺乳類相がどのように変化していくのか、予断を許さない。

本書はレッドデータブックの性格上、外来種は対象としていない。したがって、個体群がすっかり定着した感のあるハクビシンについての欄は設けなかった。アライグマも東北部を除いてその分布域が拡大しているところであり、この文章を書いている最中にも本種のおそらく県内初の確実な生息情報が届いた（2019年9月15日、能代市真壁、赤外線無人カメラによる撮影）。これらの種は現状では本県の在来種の生息状況を脅かすものではないと考えてよいが、在来種を駆逐するケースがあるので、やはり今後の動向を注視する必要がある。

なお本書の標準和名および学名は、Wild Mammals of Japan, 2nd edition (Ohdachi et al., 2015) に準拠した。これは、日本哺乳類学会の定めるレッドリストでも用いられているので、現時点でもっとも汎用性の高い種名であると考えられる。

以上をまとめると、RDB2002年版と比べるとコウモリ類など一部の種群についてデータの蓄積で生息状況がより詳細に把握できるようになり絶滅危険度のランクが下がった一方、社会情勢の急激な変化を受けて様々な要因で絶滅リスクが増大する懸念のある種も存在する。とくに、人口減少や中山間地の衰退は人と哺乳類との関係性を大きく変えてしまう可能性がある。動物たちの将来の生息状況を悪化させてしまうのか、動物たちに私たちが押し切られてしまうのかは、私たちの暮らし方いかんであると言ってよい。そのためにも、多方面の方に本書を参照していただき、また定期的に新しい情報に基づいて見直しが行われることを願っている。

(星崎 和彦)





## トガリネズミ形目モグラ科

## ヒメヒミズ

*Dymecodon pilirostris* True, 1886

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし

- ◆ **国内外の分布** 日本固有種であり、本州、四国、九州の比較的標高の高い地域に分布する。寒冷地では、低標高地域にも分布する傾向がある。
- ◆ **県内の分布** 森吉山、八幡平、鳥海山などから報告されているが、全県的な生息状況は明らかになっていない。
- ◆ **本種の概要** 頭胴長70～84mm、体重8～14.5g程度の国内で最小のモグラである。近縁種のヒミズと形態が類似するが、尾が比較的長く(32～44mm、体長に対する割合43～60%)、尾に生える毛が短い点で異なる。森林、草地に生息し、昆虫やミズなどの小型の土壌性無脊椎動物を採食する。
- ◆ **本種の現状** 標高の高い地域に分布するため、生息域が分断化されていると考えられる。近年の環境影響評価等の調査においても生息情報が非常に少なく、分布域および個体数の減少が懸念されるため、今回の改訂において絶滅危惧IB類へと危険度を1ランクを上げる判断を行った。本種の保全のためには、分布状況を調査し、生息地の保全を行う必要がある。
- ◆ **生存に対する脅威** 天然林の草地化や針葉樹人工林化による生息地の改変が、本種の生存に対する脅威となる。全国的に見ても本種の生息地はそれぞれ孤立しており、遺伝的な分化も進んでいると考えられるので、生息地ごとの保全対策が必要とされる。また、温暖化による生息適地の縮小も懸念される。
- ◆ **現在の保護対策** 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによってある程度は生息地が保全されていると考えられる。

(島田 卓哉)

## 翼手目ヒナコウモリ科

## ヤマコウモリ

*Nyctalus aviator* Thomas, 1911

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧IB類

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ **国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄島に分布するが、近畿地方以西での記録は少ない。国外では、中国や韓国にも分布する。
- ◆ **県内の分布** 2002年、にかほ市(旧象潟町)で伐採した樹洞内に冬眠集団が確認された。2004年には、秋田市街地の神社境内に生息する集団が確認されている。この他、県内各所に分布していることが予想される。
- ◆ **本種の概要** 前腕長60mm前後、体重30～60gで日本産の食虫性コウモリの中で最大種である。体毛は、長くて光沢のある黄色みを帯びた褐色をしている。
- ◆ **本種の現状** ねぐらは市街地から森林まで様々な環境で見つまっているが、その多くは大木の樹洞である。広範囲に生息していることが予想され、高い高度を高速で飛翔するため、風力発電施設の設置によるバットストライク(風車とコウモリの衝突)の可能性が最も高い種である。
- ◆ **生存に対する脅威** 森林伐採による採餌場所の減少や大木の伐採によるねぐらの消失は、本種の生存に大きく影響する。また、県内での風力発電施設の増加に伴う森林伐採及びバットストライクの危険性が生存の脅威となる。風力発電施設の設置、稼働には際しては、十分な生息調査と対策が必要。
- ◆ **現在の保護対策** 山地においては自然公園などの指定によって、ねぐらとなる大木の保全が行われている可能性がある。

(佐々木 誠)

翼手目ヒナコウモリ科

# ニホンウサギコウモリ

*Pecotus sacrimontis* G. M. Allen, 1908

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 日本固有種。北海道、本州、四国に分布するが、西日本では少ない。
- ◆ 県内の分布 大館市長走風穴で繁殖コロニーが確認されている。森吉山や鳥海山、田沢湖周辺の隧道や用水路でも確認されているが、そのほとんどが単独個体であり、県内での確認個体数は少ない。
- ◆ 本種の概要 前腕長40mm前後、体重8g前後の小型種。耳介が長く、その名の通りウサギのような耳が最大の特徴である。
- ◆ 本種の現状 全国的に希少種とされ、環境省レッドデータブックでも絶滅危惧種とされていたが、確認例が増えたため、環境省レッドリスト2019からは除外された。しかし、県内では発見例は少なく、各発見場所での個体数も少ないことから、本県では依然として希少種である。県内では唯一集団が確認されていた大館市長走風穴では個体数が減少している。
- ◆ 生存に対する脅威 発電施設等の工事に伴う森林伐採や老朽化した用水路の改造によって、採餌場所の減少やねぐらの消失が直接の脅威となる。また、洞窟等への人の侵入による攪乱がねぐら放棄の原因となる。
- ◆ 現在の保護対策 長走の風穴は国の天然記念物に指定されているが、高山植物群落がその対象となっており、コウモリが考慮されているわけではない。従って、観光利用のあり方によっては洞窟放棄につながる危険性がある。餌場としての森林は自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。

(佐々木 誠)

翼手目ヒナコウモリ科

# ヒナコウモリ

*Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州に分布している。国外では、シベリア東部、中国東部、台湾にも分布する。
- ◆ 県内の分布 2001年に大仙市(旧大曲市)の橋で1000個体以上の繁殖コロニーが確認されている。県内では、この他の生息場所は確認されていないが、単独の捕獲例が数例あり、繁殖集団が他にも県内にあると予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長48mm前後、体重20g前後の中型種。暗褐色の体毛に白っぽい長毛が混じり霜降り状に見える。メスは夏季に体毛が明るい茶色に変わる。
- ◆ 本種の現状 本県でねぐらが確認されているのは、大仙市の例のみであるが、ねぐらは樹洞や岩の割れ目の他、社寺や学校、新幹線高架橋の隙間などでも確認されており、建造物で数千頭の集団が確認された例もある。本種も長距離を飛行するため、風力発電施設の設置によるバットストライクの可能性が高い種である。
- ◆ 生存に対する脅威 ねぐらや繁殖場所となる建造物の改築改造や森林伐採による生活域の減少及び風力発電施設の増設によるバットストライクの危険性が生存の脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 自然公園などの森林保全が保護に役立っている可能性がある。大仙市では、橋の改築時にコウモリボックスを設置して生息場所の保全が行われた。
- ◆ 特記事項 青森県では、神社に住みついた数千頭のヒナコウモリを保護するため、神社の隣接地に「蝙蝠小舎」を建て、移住に成功している。2000年には、この神社で標識を付けられた個体が約160km離れた秋田市で捕獲されている。

(佐々木 誠)

## 翼手目ヒナコウモリ科

## カグヤコウモリ

*Myotis frater* Allen, 1923

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州の中部以北に分布している。国外では、トルキスタンからシベリア東部、中国南部にも分布する。
- ◆ 県内の分布 白神山地と鳥海山の森林で確認されている。
- ◆ 本種の概要 前腕長38mm前後、体重8g前後の小型種。体毛は褐色又は暗褐色。ヒメホオヒゲコウモリによく似ているが、ヒメホオヒゲコウモリより下腿と前腕が長く、やや大型である。
- ◆ 本種の現状 県内での確認例は少ないが、良好な森林環境が残る本県には広範囲に生息すると考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 典型的な森林性のコウモリであるため、森林伐採による生活空間の減少が脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 良好な森林をすみかとしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。
- ◆ 特記事項 現在は亜種となっているが、新種記載された個体が青森県の竹林で捕獲されたことからカグヤの名が付けられた。

(佐々木 誠)

## 翼手目ヒナコウモリ科

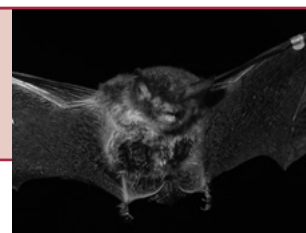
## ノレンコウモリ

*Myotis bombinus* Thomas, 1906

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、口永良部島に分布している。国外では、ヨーロッパからアジア、北アフリカにも分布する。
- ◆ 県内の分布 2006年から鳥海山で確認されている、2009年には鳥海山で1個体が捕獲されているが、県内での確認個体数は少ない。青森県側の白神山地での確認例があることから、秋田県側にも生息していることが予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長40mm前後、体7g前後の小型種。体毛は暗褐色。耳介や耳珠が細長く、尖った耳珠が9mm以上ある。尾膜の後縁の尾端周辺に細毛が列生していることからノレンの名が付く。
- ◆ 本種の現状 系統的に古いタイプのコウモリで、全国的にも希少な種である。県内での確認例は少ないが、良好な森林環境が残る本県には広範囲に生息すると考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 元々は森林性と考えられるが、自然洞窟や隧道、用水路、神社などでも確認例があることから、森林伐採や人口建造物の改造改築による生活空間の減少と消失が生存の脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 良好な森林を生活場所としていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。
- ◆ 特記事項 日本産を日本固有の亜種とする説もある。

(佐々木 誠)



翼手目ヒナコウモリ科

# クロホオホゲコウモリ

*Myotis pruinosus* Yoshiyuki, 1971

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 日本固有種。本州、四国、九州に分布するが、全国的にも希少種である。
- ◆ 県内の分布 鳥海山と森吉山で捕獲記録がある。県内の良好な森林に生息していると予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長31mm前後、体重4g前後の小型種。体毛は黒色で、毛先に灰色か白っぽい差し毛が混ざる。小型種が多いホオヒゲコウモリ属の中でも最小のクラスである。
- ◆ 本種の現状 典型的な森林性のコウモリと考えられるが、確認例が少なく、全国的にも希少種である。県内でも捕獲記録はあるものの、樹洞と思われるねぐらの確認例はない。バットストライクの確認報告もあり、生息状況の調査が急務である。
- ◆ 生存に対する脅威 体のサイズが小さく、移動範囲が比較的狭いとされるため、森林伐採によるねぐらや採餌空間の消失が直接的な脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 良好な自然林に生息するので、自然公園などによって保全されている可能性がある。

(佐々木 誠)

翼手目ヒナコウモリ科

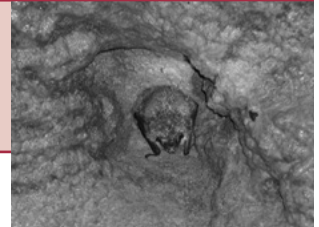
# テングコウモリ

*Murina hilgendorfi* (Peters, 1880)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では、中国北部、ロシア極東部、韓国にも分布する。
- ◆ 県内の分布 白神山地、森吉山、鳥海山で確認されている。大館市長走風穴でも確認例がある。
- ◆ 本種の概要 前腕長43mm前後、体重12g前後で小型種の中ではやや大きい。体毛は灰褐色で、背面に銀又は金色の光沢を持つ差し毛が混ざる。鼻孔が管状に左右に突出していることからテングの名が付く。
- ◆ 本種の現状 全国的には確認例が増えたため、環境省レッドリスト2019からは除外された。しかし、県内での確認例は少なく、繁殖コロニーも見つかっていないため、本県では依然として希少種である。洞窟等のくぼみに単独でいることが多い。
- ◆ 生存に対する脅威 森林内や山間部の洞窟を主な生息場所としているため、森林伐採やダム建設等による洞窟の消失が生存の脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 良好な自然林に生息するので、自然公園などによって保全されている可能性がある。
- ◆ 特記事項 日本産をニホンテングコウモリとして、日本固有種とする見解もある。

(佐々木 誠)

食肉目イタチ科

# イイズナ

*Mustela nivalis* Linnaeus, 1766

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ **国内外の分布** 朝鮮半島、中国などユーラシアおよび北米大陸の周北域に広く分布するが、日本での分布は北海道と東北北部（青森、岩手、秋田、山形）に限定される。
- ◆ **県内の分布** 過去には森吉山などで生息の情報があるが、近年は確実な生息情報は得られていない。
- ◆ **本種の概要** 頭胴長150～200mm、尾長20mm、体重50～100g程度（北海道産の個体の計測値）の国内で最小の食肉類である。性的二型が顕著であり、雄の方が大型である。夏毛は背面褐色、腹面白色だが、冬毛は全体が白色になる。野ネズミ、鳥類、昆虫類などの小動物を捕食する。
- ◆ **本種の現状** 近年の環境影響評価等の調査においても生息情報が存在せず、本県での生息は危機的状況にあると考えられる。本種の保全のためには、高標高域を中心に生息状況を精査し、生息地の保全を行う必要がある。
- ◆ **生存に対する脅威** 標高の高い寒冷な地域に分布するため、本種の生存にとって温暖化による生息適地の縮小が潜在的な脅威となっている。また、山林開発、森林伐採等による生息地の攪乱が個体数の減少につながっている可能性もある。
- ◆ **現在の保護対策** 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。鳥獣保護管理法では、狩猟獣には指定されていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。

（島田 卓哉）

食肉目イタチ科

# オコジヨ

*Mustela erminea* Linnaeus, 1758

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ **国内外の分布** 朝鮮半島、中国などユーラシアおよび北米大陸の周北域に広く分布するが、日本では本州中部以北の山地と北海道に分布する。
- ◆ **県内の分布** 白神山地、八幡平、森吉山、鳥海山等で生息が確認されているが、全県的な生息状況は明らかになっていない。
- ◆ **本種の概要** 本州産の個体は、頭胴長140～198mm、尾長48～67mm、体重100g程度の小型の食肉類である。性的二型が顕著であり、雄の方が大型である。夏毛は背面褐色、腹面白色であり、冬毛は全体が白色になるが、尾の先端部には黒い毛が残る。野ネズミ、鳥類、昆虫類などの小動物を捕食する。
- ◆ **本種の現状** 登山者等の目撃に基づく生息情報は存在するが、環境影響調査等の調査では近年生息情報が得られていない。分布域および個体数の減少が懸念されるため、今回の改訂において絶滅危惧IB類へと危険度を1ランク上げる判断を行った。本種の保全のためには、高標高域を中心に生息状況を精査し、生息地の保全を行う必要がある。
- ◆ **生存に対する脅威** 標高の高い寒冷な地域に分布するため、本種の生存にとって温暖化による生息適地の縮小が潜在的な脅威となっている。また、山林開発、森林伐採等による生息地の攪乱が個体数の減少につながっている可能性もある。
- ◆ **現在の保護対策** 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。鳥獣保護管理法では、狩猟獣には指定されていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。

（島田 卓哉）

哺乳類

昆虫類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## トガリネズミ形目トガリネズミ科

## シントウトガリネズミ

*Sorex shinto* Thomas, 1905

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 日本固有種であり、本州、四国、九州の比較的標高の高い地域に分布する。寒冷地では、低標高地域にも分布する傾向がある。
- ◆ 県内の分布 男鹿半島、森吉山、太平山、田沢湖周辺等で生息の報告があるが、全県的な生息状況は明らかになっていない。
- ◆ 本種の概要 頭胴長52～78mm、尾長40～55mm、体重5g程度の小型哺乳類である。森林、低木林、草地等の落葉層から腐植層で活動し、昆虫やクモなどの土壌性無脊椎動物を採食する。
- ◆ 本種の現状 標高の高い地域に分布するため、生息域が分断化されている可能性がある。近年の環境影響評価等の調査においても生息情報は少なく、分布域および個体数の減少が懸念される。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採や針葉樹人工林化による生息地の改変が、本種の生存に対する脅威となる。また、高標高域が分布の中心のため、温暖化による生息適地の縮小も懸念される。
- ◆ 現在の保護対策 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。

(鳥田 卓哉)

## 翼手目キクガシラコウモリ科

## コキクガシラコウモリ

*Rhinolophus cornutus* Temminck, 1834

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 日本固有種。北海道、本州、四国、九州、沖縄など全国的に分布する。
- ◆ 県内の分布 男鹿半島の海食洞や森吉山ダム周辺の隧道、田沢湖周辺の用水路に生息している。その他、県内の自然洞窟や人口トンネルに広く分布していると予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長40mm前後、体重7g前後の小型種。体毛は薄い褐色。キクガシラコウモリ科の特徴である複雑な鼻葉を持ち、キクガシラコウモリに酷似しているが、体のサイズが明らかに小さい。
- ◆ 本種の現状 洞窟性のコウモリで、出産保育時には大規模なコロニーを形成し、全国的には普通種とされている。本県でも確認箇所が増えているが、大集団での出産保育コロニーの確認はされていない。
- ◆ 生存に対する脅威 生息洞窟内への人の侵入によるねぐらの放棄や老朽化した用水路の改造によるねぐらの消失が脅威となる。また、森林伐採等による採餌場所の減少も生息の脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 用水路の補修・改造の際には、コウモリピットなどを設置することによってねぐらが保全される可能性がある。
- ◆ 特記事項 本県での確認例は、用水路などの人口トンネルをねぐらとしているものが多いため、トンネルの補修や改造には保護対策が重要である。

(佐々木 誠)



## 翼手目ヒナコウモリ科

## ヒメホオヒゲコウモリ

*Myotis ikonnikovi* Ognev, 1912

秋田県2020：絶滅危惧II類  
 秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
 環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州に分布する。国外では極東アジアにも分布する。
- ◆ 県内の分布 典型的な森林性のコウモリで、調査が増えたことで確認例も多くなった。県内の森林環境が良好な場所に広く生息していると予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長34mm前後、体重6g前後の小型種。体毛は黒褐色からこげ茶色。尾膜の血管が尾の付根から踵にかけて、くの字状に走行する。
- ◆ 本種の現状 森林性のコウモリとして、全国的には比較的広範囲で生息が確認されている。本県でも、森林でのコウモリ調査が進むことで確認例が増えると考えられるが、樹洞を主なねぐらとするクロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、カグヤコウモリと同様に、本県では、ねぐらの確認例は無い。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採によるねぐらや採餌空間の消失が直接的な脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 良好な森林をすみかにはしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。
- ◆ 特記事項 生息地域ごとに、エゾホオヒゲコウモリ、フジホオヒゲコウモリ、シナノホオヒゲコウモリ、オゼホオヒゲコウモリに分類する説もある。2002年秋田県版レッドデータブックではフジホオヒゲコウモリとしていた。

(佐々木 誠)

## 翼手目ヒナコウモリ科

## コテングコウモリ

*Murina ussuriensis* Ognev, 1913

秋田県2020：絶滅危惧II類  
 秋田県2002：絶滅危惧種II類  
 環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州の森林に広く分布する。国外では、シベリヤ東部、サハリン、朝鮮半島にも分布する。
- ◆ 県内の分布 調査が増えたことで確認例も多くなった。県内の森林環境が良好な場所に広く生息していると予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長30mm前後、体重5g前後の小型種。体毛は明るい茶色で、背面から腿間膜の上面まで長い毛で覆われている。テングコウモリ同様に鼻孔が管状に左右に突出している。
- ◆ 本種の現状 森林性のコウモリとされているが、樹皮の間や枯葉の中、隧道、自然洞窟など、様々な環境で確認されている。全国的には人里近くでも確認されているが、秋田県での知見は少ない。県内のコウモリ調査が進めば、確認例も増えると考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採によるねぐらや採餌空間の消失が直接的な脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 森林性コウモリであることから、自然公園などによって生息地が保全されている可能性がある。
- ◆ 特記事項 日本産を日本固有種とする説もある。

(佐々木 誠)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## 翼手目ヒナコウモリ科

## ユビナガコウモリ

*Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州に分布するが、北海道での確認記録はない。国外では、アジア大陸にも分布する。
- ◆ 県内の分布 男鹿半島の海食洞、森吉山や鳥海山の自然洞窟、隧道、用水路で確認されており、県内の広い範囲に生息していると予想される。
- ◆ 本種の概要 前腕長47mm前後、体重13g前後の小型種。体毛は黒っぽい焦げ茶色で、短いピロード状。翼は、長距離高速飛翔に適した狭長型である。
- ◆ 本種の現状 海食洞や山間部の自然洞窟の他、比較的広い空間がある隧道や用水路などでも確認されている。男鹿半島門前の個体群は青森県西海岸地帯と往来していることが確かめられている。青森県西目屋村の津軽ダムでは、集団生息場所であった隧道がダム建設で消失したため、コウモリ用の人口洞窟施設を建設し、集団移転を図っている。
- ◆ 生存に対する脅威 生息洞窟への人の侵入による攪乱、生息洞窟の消失や用水路の改造、森林伐採による採餌空間の減少が脅威となる。また、長距離移動型のコウモリであることから、バットストライクの危険性も高いと考えられる。
- ◆ 現在の保護対策 男鹿市のコウモリの繁殖地は男鹿国定公園に含まれ、数千頭の繁殖コロニーを形成する男鹿市門前の蝙蝠（こうもり）窟と孔雀窟は「男鹿のコウモリ生息地」として秋田県指定の天然記念物となっており、ある程度保全されている。森吉山ダムの周辺では使われていない隧道を残すことで、ねぐらの保全となっている。

(佐々木 誠)

## トガリネズミ形目トガリネズミ科

## カワネズミ

*Chimarogale platycephalus* (Temminck, 1842)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 日本固有種であり、本州、九州に広く分布する。
- ◆ 県内の分布 森吉山、八幡平、田沢湖町、鳥海山などから生息情報があるが、全県的な生息状況は明らかになっていない。
- ◆ 本種の概要 頭胴長125～130mm、尾長100mm、体重40～50g程度であり、水中での活動に適応した形態を持つ。山間の溪流付近に生息し、小魚、水生昆虫などの水生動物やクモやミミズなどの土壌性無脊椎動物を捕食する。
- ◆ 本種の現状 全国的には広く分布しているため、本県においても自然度の高い溪流には生息している可能性がある。十分な調査が行われていないが、近年の環境影響評価等の調査において本県内でも新たな生息情報が得られたことから、今回の改訂において準絶滅危惧へと危険度を1ランク下げる判断を行った。
- ◆ 生存に対する脅威 比較的生息適地は広いものの、河川改修やダム建設による生息地の破壊、また農薬などによる水質汚染によって、生息地全体が壊滅的な影響を被る可能性がある。
- ◆ 現在の保護対策 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。

(島田 卓哉)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

翼手目キクガシラコウモリ科

# キクガシラコウモリ

*Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：留意種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州に広く分布する。国外では、ヨーロッパ、北アフリカ、西アジアから中国、朝鮮半島などにも分布する。
- ◆ 県内の分布 男鹿半島、にかほ市の海食洞、森吉山や鳥海山の自然洞窟、隧道、田沢湖や大仙市大曲、由利本荘市矢島の用水路で確認されている。白神山地や大館市でも確認記録があり、県内の広い範囲に生息していると考えられる。
- ◆ 本種の概要 前腕長60mm前後、体重20g前後で、本州産ではヤマコウモリに次ぐ大型種。体毛は焦げ茶色。耳介は大きい、耳珠はない。顔面に複雑な鼻葉を持つ。翼は幅が広い広短型。単独で冬眠する場合は、体を翼で覆うことが多い。
- ◆ 本種の現状 全国的には普通種とされ、比較的広い空間のある洞窟をねぐらとしている。同様のねぐら環境を好むユビナガコウモリと同じ洞窟内でも確認されることが多い。
- ◆ 生存に対する脅威 生息洞窟への人の侵入による攪乱、生息洞窟の消失や用水路の改造、森林伐採による採餌空間の減少が脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 男鹿市のコウモリの繁殖地は男鹿国立公園に含まれ、ユビナガコウモリとともに数百頭のコロニーを形成している男鹿市門前の蝙蝠（こうもり）窟と孔雀窟は「男鹿のコウモリ生息地」として、秋田県の天然記念物に指定されており、ある程度保全されている。森吉山ダムの周辺では使われていない隧道を残すことで、ねぐらの保全となっている。

(佐々木 誠)

翼手目ヒナコウモリ科

# モモジロコウモリ

*Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州まで全国的に分布する。国外では、シベリア東部、サハリン、朝鮮半島にも分布する。
- ◆ 県内の分布 白神山、森吉山、鳥海山の森林内の他、海食洞や県内各地の用水路や橋の下など、県内に広く分布していると考えられる。
- ◆ 本種の概要 前腕長38mm前後、体重8g前後の小型種。体毛は黒褐色。耳介・耳珠とも細長い。側膜が踵又は下腿につき、後足が大きい。
- ◆ 本種の現状 森林内の他、池沼や河川の水面上で採餌することが多く、用水路など水の流れる場所をねぐらとして好む傾向がある。他のコウモリと同じねぐらを利用することが多く、ユビナガコウモリやキクガシラコウモリなどと混生コロニーを形成することもある。
- ◆ 生存に対する脅威 生息洞窟の消失や用水路の改造による生活空間の変化は直接の脅威となる。また、池沼や河川などの水環境の汚染による昆虫類の減少も生存の脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 清冽な流れを保っている溪流が自然公園指定地内に多くあることによって採餌場所が保全されている可能性がある。用水路の修繕・改造の際には、コウモリピットなどを設置することでねぐらの保全となる可能性がある。
- ◆ 特記事項 用水路等の人口トンネルを繁殖や冬眠場所として利用することも多いため、トンネルの補修や改造には保全対策が重要である。

(佐々木 誠)

哺乳類

昆虫類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## 齧歯目ネズミ科

## ヤチネズミ

*Eothenomys andersoni* (Thomas, 1905)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 日本固有種であり、本州の中部・北陸以北と紀伊半島の南部に分布する。
- ◆ 県内の分布 八幡平、太平山、森吉山、鳥海山など比較的標高の高い地域で生息情報が得られているが、全県的な生息情報は明らかになっていない。
- ◆ 本種の概要 頭胴長79～118mm、尾長40～630mm、体重は最大で40g程度の小型哺乳類である。岩場や沢沿いなどの湿った環境を好み、植物を主な餌とする。
- ◆ 本種の現状 本県での報告は比較的標高の高い地域に偏っている。北東北での潜在的な分布域は低地から高山帯におよぶと考えられている。十分な調査は行われていないが、近年の環境影響評価等の調査において本県内でも新たな生息情報が得られたことから、今回の改訂において準絶滅危惧へと危険度を1ランク下げる判断を行った。しかし、岩場などの特定の環境に依存した生活をする本種は、環境変化によって生息状況が急激に悪化する可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採や針葉樹人工林化、また河川改修などによる生息適地の縮小が、本種の生存に対する脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。

(島田 卓哉)

## 齧歯目リス科

## ニホンモモンガ

*Pteromys momonga* Temminck, 1844

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 日本固有種であり、本州、四国、九州に分布する。
- ◆ 県内の分布 八幡平、森吉山、鳥海山、栗駒山、田沢湖町などで生息情報が得られているが、全県的な生息情報は明らかになっていない。
- ◆ 本種の概要 頭胴長140～200mm、尾長100～104mm、体重150～220g程度の樹上性齧歯類である。前足と後足の間に皮膜があり、これを使って木々の間を滑空する。夜行性で、樹木の葉や芽、種子や果実、キノコなどを採食する。
- ◆ 本種の現状 山地帯から亜高山帯の森林に生息する。他県では広葉樹林だけではなくスギ壮齢林にも生息することが報告されていることから、本種の潜在的な分布域は広いと考えられる。十分な調査が行われていないが、近年の環境影響評価等の調査において本県内でも新たな生息情報が得られたことから、今回の改訂において準絶滅危惧へと危険度を1ランク下げる判断を行った。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採や山林開発が本種の生存にとって直接的な脅威となる。特に高木林に依存した生活をする本種は、大規模な森林伐採によって生息状況が急激に悪化する可能性があるため、全県的な生息状況調査を実施し、生息地の保全を図る必要がある。
- ◆ 現在の保護対策 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによってある程度は生息地が保全されていると考えられる。

(島田 卓哉)



## トガリネズミ形目モグラ科

## ミズラモグラ

*Euroscaptor mizura* (Günther, 1880)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 日本固有種であり本州の広島県から青森県に分布するが、生息確認地点は点在しており、個々の生息地は孤立化していると考えられる。
- ◆ 県内の分布 本県では、これまで確実な生息情報は得られていない。
- ◆ 本種の概要 頭胴長77～107mm、尾長20～26mm、体重26.0～35.5g程度の小型のモグラである。低山帯から高山帯までの森林に生息し、ミズや昆虫などの土壌性無脊椎動物を採食する。
- ◆ 本種の現状 青森県、岩手県などの隣県において生息が確認されているため本県でも生息している可能性が高いが、個体数密度が低く生息確認が困難であり、本県での生息状況はまったく判明していない。高山では比較的多く発見されるとの報告もあるため、県境の高山域に生息している可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 高標高域での山林開発や森林伐採が、本種の生存に対する直接的な脅威となる。全国的に見ても本種の生息地はそれぞれ孤立しており、遺伝的な分化も進んでいると考えられるので、生息地ごとの保全対策が必要とされる。また、温暖化による生息適地の縮小も懸念される。
- ◆ 現在の保護対策 本種を保護する制度はなく、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。
- ◆ 特記事項 本種の生息は本県では確認されていないため、今回の改訂においても情報不足として分類した。しかし、今後生息が確認された場合でもその生息地は非常に限られたものになると予測されるので、詳細な調査を実施し危険度を再評価した上で、保全策を講じる必要がある。

(島田 卓哉)

## 翼手目ヒナコウモリ科

## コヤマコウモリ

*Nyctalus furvus* Imaizumi & Yoshiyuki, 1968

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：絶滅危惧IB類

- ◆ 国内外の分布 中国、台湾に分布する種と同種と考えられていたが、染色体数の違いなどから現在は日本固有種とされている。青森県、岩手県、福島県、栃木県、長野県で見つかっている。最近では北海道でも確認されている。
- ◆ 県内の分布 隣県の岩手県と青森県で確認されていることから、本県にも生息している可能性が高い。本県での確認例は文献による1例しかなく、情報不足である。
- ◆ 本種の概要 腕長50mm前後、体重20g前後の中型種。外見はヤマコウモリに似ているが、一回り小さい。体毛には光沢があるが、ヤマコウモリよりも暗い褐色である。
- ◆ 本種の現状 森林性のコウモリと考えられるが、発見例が少なく、詳細は不明である。ヤマコウモリ同様、風力発電施設の設置によるバットストライクの可能性が高い種である。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採による採餌場所の減少や樹洞の消失は、本種の生存に大きく影響する。また、県内での風力発電施設の増加に伴う森林伐採及びバットストライクの危険性が生存の脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 良好な森林を住みかとしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。
- ◆ 特記事項 県内での確認は、森吉山での捕獲記録があるが、ヒナコウモリとの誤同定の可能性がある。

(佐々木 誠)

## 付属資料

## 齧歯目ヤマネ科

## ヤマネ

*Glirulus japonicus* (Schinz, 1845)

秋田県2020：留意種

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 1属1種の日本固有種であり、本州・四国・九州の山地に分布する。
- ◆ 県内の分布 八幡平、森吉山、田沢湖町、太平山、鳥海山等で生息が報告されている。
- ◆ 本種の概要 頭胴長68～84mm、尾長44～54mm、体重は季節的に大きく変化し14～40g程度になる樹上性齧歯類である。成熟した森林を好むが、カラマツ人工林での生息も報告されている。夜間に活動して果実や昆虫、小鳥の卵などを採食する。寒冷期には樹洞や落ち葉の中で冬眠する。
- ◆ 本種の現状 本種の生息確認を行うための手法の開発が進み、本県でも新たな生息地情報が得られ、本県内の生息域が従来考えられていたよりも広範囲にわたることが判明したことから、今回の改訂においては危険度を下げる判断を行った。
- ◆ 生存に対する脅威 樹上生活を行うため、森林伐採や山林開発が本種の生存にとって直接的な脅威となる。
- ◆ 現在の保護対策 文化財保護法により国の天然記念物とされているが、積極的な保護活動は行われていない。自然公園や保安林などによって、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。
- ◆ 特記事項 高木林に依存した生活をする本種は、大規模な森林伐採によって生息状況が急激に悪化する可能性がある。そのため、本種を留意種として取扱い、今後も生息状況を注視する対象とする。

(島田 卓哉)

## 偶蹄目ウシ科

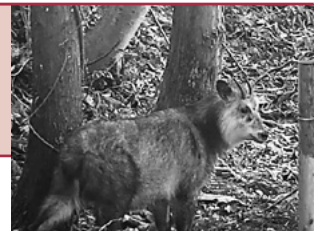
## ニホンカモシカ

*Capricornis crispus* (Temminck, 1836)

秋田県2020：留意種

秋田県2002：留意種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 日本固有種であり、本州、四国、九州で山岳地を中心に分布するが西日本では多くない。本州では紀伊半島の集団は東日本（京都・滋賀以東）の集団とは隔離されているほか、四国と九州の個体群も分布は局所的で断片化している。
- ◆ 県内の分布 沿岸部から内陸の奥山まで、県内に広く生息する。本県では集落の裏山や水田脇、交通量の多い道路の法面など人間の生活域内に出現することも少なくない。
- ◆ 本種の概要 成獣の体重はオス・メスとも35kg前後、肩高70cm強で、メスのほうがやや大きい。初産齢は概ね2～5歳までで（平均4歳）、産子数はほとんどの場合で1である。寿命は20年程度。基本的に単独で行動し、オス・メスそれぞれで排他的な縄張りを持ち、その広さは概ね10～30haである。オスとメスの縄張りはかなり重複することから一夫一妻だと考えられている。落葉広葉樹林内を好み、植物の葉や小枝などを主に採食する。子は2～4歳（平均3歳）で母親の縄張りを出て分散する。
- ◆ 本種の現状 本種はかつて絶滅寸前まで減少したが、国の天然記念物に指定されたことで生息数が回復し、平成27年度の調査では県内には約14000頭が生息していると推定されている。
- ◆ 生存に対する脅威 本種は縄張りを持ち定住性が強いいため、極端な針葉樹人工林化や山林開発が生息地を失わせる脅威となる。ニホンジカと競合する餌が多いことから、群れで行動し採食域の広いニホンジカの侵入が進めば脅威となる可能性もある。
- ◆ 現在の保護対策 文化財保護法により国の特別天然記念物に指定されている。鳥獣保護法の狩猟獣には指定されていない。生息地は既存の森林生態系保護地域保存地区や保安林・自然公園などである程度保全されている。これらを統合して本県ではカモシカ保護地域を設定しているが、ほとんどが高標高地にあり、本来の生息地をどの程度確保できているか不明である。農林産物被害に対しては、秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第3次ニホンカモシカ）に基づき捕獲によらない対策がとられている。
- ◆ 特記事項 本県の秋田県第二種特定鳥獣管理計画の対象種である。将来的にニホンジカやツキノワグマの増加をうけて生息地が失われる可能性もあることから、生息状況を定期的にモニタリングする必要がある。

(星崎 和彦)

霊長目オナガザル科

## ニホンザル

*Macaca fuscata* (Blyth, 1875)

秋田県2020：継続観測種

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ **国内外の分布** 日本固有種であり、屋久島から青森県までの各地に個体群（群れ）が点在している。中部・近畿の個体群が最も大きく、東北地方では小集団化、分断化が著しい。青森県下北半島の個体群は人を除けば世界最北のサル個体群として貴重である。海岸部から標高3000m以上の高山帯にも生息する。
- ◆ **県内の分布** 本県では白神山地のほか、かつては八幡平など県内のほぼ全域に局所個体群が存在していたが、現在では白神山地とその山麓部に比較的大きな集団が存在するだけとなった。このほか、近年、大館市比内町でも新たに個体群が定着した模様である。群れから分散中の単独個体（ハナレザル）は県内各地でしばしば目撃される。
- ◆ **本種の概要** 体重は成熟オスで15kg前後、メスで10kg前後であるが地域の変異が大きい。雑食性で果実・種子・葉・樹皮・昆虫などを採食する。血縁関係にあるメス個体を中心に複数のオス・メスからなる数頭～数十頭の群れをつくる。メスは4～8歳で出産可能となり、秋に交尾し春に1仔を出産する。オスは性成熟する頃には生まれた群れを出て他の群れに入る。一部の個体はその後も群れを転々と移る。
- ◆ **本種の現状** 白神山地の県内に存続している群れの生息地面積は500km<sup>2</sup>で、安定した個体群は1つしかない。県内の個体群サイズは1000頭から1400頭ほどと推定されている。白神山地の個体群では青森県側と合わせても遺伝的変異が乏しいことから、個体群として脆弱である可能性がある。群れが定着している地域では農作物被害を与えている。
- ◆ **生存に対する脅威** 広葉樹林の針葉樹人工林化は生息地としての適性を下げる。
- ◆ **現在の保護対策** 鳥獣保護法の狩猟獣には指定されていない。またワシントン条約（CITES）の付属書IIに掲載されており、保護のために国際的な商取引は制限されている。生息地に関しては既存の森林生態系保護地域や世界自然遺産保存地区などの指定があるが、これらは本県の生息地全体をカバーしておらず、世界における北限付近のサル個体群の保護として十分とはいえない面がある。白神山地周辺で農業被害を与えていることから、「秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第4次ニホンザル）」に基づき、地域個体群の安定的維持に向けた取り組みと捕獲によらない対策がとられている。
- ◆ **特記事項** 本県の秋田県第二種特定鳥獣管理計画の対象種である。青森県下北郡半島の北限のサルに近い個体群であることから、保護と管理のバランスを保つべく、継続的なモニタリングは欠かせない。

(星崎 和彦)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## 食肉目クマ科

## ツキノワグマ

*Ursus thibetanus* G. Cuvier, 1823

秋田県2020：継続観測種

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ **国内外の分布** イランからヒマラヤの南側山麓部を経て東南アジアにかけてと中国東北部からロシア南東部にかけて、また海南島、台湾、朝鮮半島、日本に隔離的に分布し、ブナ科樹木の分布域と概ね一致している。日本国内では本州と四国のブナ林およびナラ林に分布し、九州では絶滅したと考えられている。京都府以東の本州東部個体群は大きく連続しており安定である。一方、中国山地、紀伊半島、四国の個体群は孤立していて絶滅リスクが大きい。
- ◆ **県内の分布** 男鹿半島・大潟村を除く県内のほぼ全域に分布する。八幡平など亜高山帯の上部には多くない。2000年頃までは県中南部ではめったに見かけなかったが、近年これらの地域でも目撃や捕獲が相次いでおり、確実に分布が拡大している。
- ◆ **本種の概要** 成獣は一般には70～120kgとされるが性差・個体差ともに大きく、例えばオスでは250kgに達する個体も見られる。メスはオスよりかなり小さく、平均体重はオスの6割弱しかない。胸部の「月の輪模様」も個体差が大きく、模様がほとんどない個体も少なくない。植物食に偏った雑食性で山菜類、果実・種子・葉・樹皮・ハチ類・アリ類などを採食する。行動は子育て中を除き単独性、しばしば樹上で採食する。秋に蓄えた体脂肪に依存して冬眠する。オスは2～4歳、メスは概ね4歳でそれぞれ性成熟し、夏に交尾する。メスは1～2月に通常2仔を冬眠穴の中で出産し、子は約1年半の間母親とともに行動する。季節ごとの行動圏の広さは20～40km<sup>2</sup>で、数年単位では1個体の利用範囲は200km<sup>2</sup>に及ぶ。寿命は20年程度。
- ◆ **本種の現状** 2002年以降の調査では生息数は1000～1700頭と推定されてきたが、2017年から導入されたカメラトラップ調査により、本県の推定生息数は現在上方修正されつつある（2018年度暫定値3700頭）。本県とその隣県では2006年頃から人里への出没が多く、社会的な問題を引き起こしている。本県の近年の目撃頭数は毎年800件以上に達し、果樹を中心に農業被害がある。本県では近年は毎年400～800頭が有害捕獲され、近年では人身被害もやや多くなっている。以上のことから秋田県では「秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第4次ツキノワグマ）」に基づき、生息地・生息数の調査や狩猟数・駆除数を監視している。生息数としてはかなり安定な状況にあることがわかってきたものの、捕獲圧がかつてないほど強い状況にあり、生息状況のモニタリングが求められることから継続観測種とした。
- ◆ **生存に対する脅威** 針葉樹人工林化がこれ以上進むと秋季の果実食を妨げるおそれが高いが、現状でもっとも大きな脅威は有害捕獲制度による捕獲圧である。森林伐採や農耕地の拡大は生息地の下層植生の衰退を通じて餌不足を招き、本種の里地への出没をさらに増加させる可能性がある。
- ◆ **現在の保護対策** 積極的保護策はない。本種はワシントン条約（CITES）の付属書Iに掲載され、保護のために国際的な商取引が制限されている。生息地は既存の各種保護林や自然公園、保安林などによって、ある程度保全されていると考えられるが、本種の行動域の広さを考慮すると不十分である。
- ◆ **特記事項** 本県の秋田県第二種特定鳥獣管理計画の対象種である。隣県の山地とは同一の個体群を形成している可能性が高いことから、保護管理政策も隣県と連携して進めることが望ましい。毎年、秋田県は生息地・生息数の推定を行い狩猟数・駆除数を監視されていることから、過剰な捕獲についてはある程度の歯止めをかけることが可能である。一方で、狩猟によって生息域と人間の活動領域の重複が避けられるという指摘もあり、保護と狩猟のバランスが重要である。

(星崎 和彦)



## 偶蹄目シカ科

## ニホンジカ

*Cervus nippon* Temminck, 1836

秋田県2020：継続観測種

秋田県2002：絶滅種

環境省2019：該当なし



- ◆ **国内外の分布** 北東アジア(ロシア・ウスリー地方～日本・朝鮮半島・中国)から台湾・ベトナムにかけて広く分布するが、中国、朝鮮半島、台湾、ベトナムでは個体群が分断化の影響で個体数が少なくなっている。国内では北海道から沖縄県の離島まで広く分布する。国内では近年分布の拡大が続いており、現在では国土の40%に分布するに至っている。
- ◆ **県内の分布** 江戸時代には県下各地で生息していたが、狩猟圧などにより各地で絶滅していった。本県では2009年以前の確実な自然分布の記録はなかったが、2009年に仙北市内で死体が発見され、現在では県内全般で目撃されている。目撃記録は県北(白神山地・能代市周辺、鹿角市)と仙北(田沢湖周辺)、横手市周辺および秋田市周辺でやや多い。
- ◆ **本種の概要** オス成獣では体重50～130kg、頭胴長90～190cm、肩高70～130cm、メス成獣では25～80kg、頭胴長90～150cm、肩高60～110cmで、一般にオスのほうが大きい。また地域差が著しく大きく、全国的には北の個体群ほど大きく南の個体群ほど小さい傾向が認められる。食性の幅はかなり広く、北方の個体群は草本(とくに禾本科類)およびササ類を中心とした食性であるが南方では葉や果実の比率が高い。草原のある林縁を好むが様々な環境を利用し、高山帯で採食するなど出現する標高帯も幅広い。雄と雌は通常、別々に群れを形成する。一般には2歳で性成熟する。発情期は秋で、出産期は5月～11月で初夏にピークがある。産子数は通常1で毎年子を産むことができる。群れる性質が時には極端な高密度状態を生み、その結果、分布域・個体数ともに拡大しており、現在の分布域の7割は過去30年程度で獲得したものである。近年は、東日本と北日本の一部地域を除く各地で農林業だけでなく森林植生や土砂流出など生態系に広く被害を与えている。平均寿命は5～6年で、最長でオス14年、メス21年の生存記録がある。行動圏は20～280haと幅広い。夜明け前後が最も活発であるが日中も活動する。
- ◆ **本種の現状** 2009年に死亡個体が発見されたのを皮切りに目撃頭数が増え、2016年度以降は毎年80頭から90頭が目撃されている。
- ◆ **現在の保護対策** 積極的保護策はない。
- ◆ **特記事項** 「秋田県第二種特定鳥獣管理計画(第1次ニホンジカ)」に基づき、個体数の増加及び生息域の拡大を抑制する取り組みを行っている。本県では通常の生息地のほか、将来的には固有種を数多く有する鳥海山や和賀山塊での植生被害も懸念される。生息地は中山間地域の山林や牧野から奥山、高標高の山岳まで幅広く、人間の活動領域と重複するエリアも少なくない。また鳥獣保護法の狩猟獣としても重要である。本種は秋田県に侵入してからさほど年月を経ておらず、侵入状況と被害状況に関する継続的なモニタリングが大変重要である。

(星崎 和彦)

## 偶蹄目イノシシ科

## イノシシ

*Sus scrofa* Linnaeus, 1758

秋田県2020：継続観測種

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ **国内外の分布** ヨーロッパ大陸から中央アジア、北アフリカ、中近東からインド半島を経て東北アジアにかけて天然分布がある。イギリスや東南アジア（スマトラ島、ボルネオ島など）やニューギニア島、オーストラリア、ニュージーランドでは導入個体群が野生化している。国内では東日本以西（福島県・宮城県の一部を含む）で分布が連続しているが、近年、東北地方北部への侵入が確認されている。国内では2亜種が認識され、南西諸島には亜種リュウキュウイノシシが、他の地域には亜種ニホンイノシシが分布する。
- ◆ **県内の分布** 約100年以上前に本県に生息していたとする情報もあったが、これまでは確実な生息情報と言えるものはなかった。ところが2012年2月湯沢市で1頭が狩猟捕獲された。2019年現在、ほぼ全県的に目撃されるようになってきた。
- ◆ **本種の概要** 大きさは性差が著しい。亜種ニホンイノシシでは、メス成獣は生後2年で体重約50kg前後、肩甲骨までの高さ75cm程度に達すると成長が止まるが、オスは年齢とともに成長し続け、体重100kg、頭胴長150cm近くに達する個体もいる。野生ではたいてい5月に出産し産子数の平均値は4.4。妊娠期間は約120日である。平均寿命はオスで14か月、メスで17か月未満と短く、子の生存率が低いことが窺われる。食性は植物食に偏った雑食性で、根や果実、種子などを食べる。生息環境は森林（落葉樹混交林）から農地まで広く、耕作放棄地や放棄水田、竹林などをよく利用し、人間が利用する人為攪乱性の生態系を好む。針葉樹人工林は避けるという報告がある。行動圏の広さについては研究事例が少ないが、100ha前後で季節や餌環境、年齢、個体群密度などにより変化する。幼獣を連れた母個体の行動圏はより狭く20haに満たない。
- ◆ **本種の現状** 2012年の捕獲後、2016年から交通事故等による死亡個体の回収や目撃情報が急増し、その生息地域は県北部まで急速に拡大している。2018年に62地点で102頭が目撃されており、農業被害も確認されている。子連れ個体も観察されるようになったことから、今後個体数の急激な増加が懸念される。
- ◆ **生存に対する脅威** 針葉樹人工林化がこれ以上進むと秋季の果実食を妨げるおそれが高いが、現状でもっとも大きな脅威は有害捕獲制度による捕獲圧である。森林伐採や農耕地の拡大は生息地の下層植生の衰退を通じて餌不足を招き、本種の里地への出没をさらに増加させる可能性がある。
- ◆ **現在の保護対策** 積極的保護策はない。
- ◆ **特記事項** 個体数の増加にともない農業被害および人身被害の増加が懸念されることから、秋田県では「秋田県第二種特定鳥獣管理計画（第1次イノシシ）」に基づき、個体数の増加及び生息域の拡大を抑制する取り組みが始まったところである。生息地は里地近くの山林であると考えられ、人間の活動領域と重複する。また鳥獣保護法の狩猟獣としても重要である。本種は秋田県に侵入してからさほど年月を経ておらず、侵入状況と被害状況に関する継続的なモニタリングが大変重要である。

(星崎 和彦)

## 哺乳類参考文献

- 阿部永(監修). 2005. 日本の哺乳類(改訂版). 東海大学出版会.
- 秋田営林局. 1997. 奥羽山脈北西部森林総合調査報告書. 社団法人日本林業技術協会.
- 秋田瀧上ウインドファーム合同会社. 2017. 秋田瀧上ウインドファーム風力発電事業環境影響評価書.
- 秋田県. 2002. 秋田県環境保全センターD区分場整備事業環境影響評価準備書.
- 秋田県. 2002. 都市計画道路鷹巣高速線・大館南高速線環境影響評価書.
- 秋田県. 2005. 都市計画道路象瀧高速線・仁賀保南高速線環境影響評価書.
- 秋田県. 2006. 平成17年度自然環境保全地域等調査委託業務(秋田市浜田)報告書.
- 秋田県. 2012. 大仙神岡地区工業団地(仮称)整備事業環境影響評価書.
- 秋田県. 2014. 能代市公有水面における産業廃棄物最終処分場建設事業に係る環境影響評価書.
- 秋田県. 2016. ため池等整備事業(用排水)立石堰地区水路トンネル工事コウモリ類調査報告書.
- 秋田県. 2017. 秋田県第二種特定鳥獣管理計画(第4次ニホンザル).
- 電源開発株式会社. 2014. (仮称)由利本荘海岸風力発電事業環境影響評価書.
- 電源開発株式会社. 2016. 新仁賀保風力発電事業(仮称)環境影響評価書.
- エコシステム花岡株式会社. 2017. エコシステム花岡株式会社最終処分場新設事業に係る環境影響評価準備書.
- 八峰風力開発株式会社. 2016. (仮称)八峰風力発電所環境影響評価書.
- 今泉吉典. 1960. 原色日本哺乳類図鑑. 保育社.
- 井上雅央. 2002. 山の畑をサルから守る おもしろ生態とかしこい防ぎ方. 農文協.
- 石田麻里・大沢啓子・大沢夕志・河合久仁子・近藤憲久・佐藤雅彦・佐野明・杉田典正・出羽寛・中本敦・原田正史・  
平川浩文・福井大・船越公威・松村澄子・丸山勝彦・向山満・安井さち子・柳川久・山本輝正・吉倉智子・吉野元.  
2011. コウモリ識別ハンドブック 改訂版. 文一総合出版.
- JR東日本エネルギー開発株式会社. 2017. 由利大内ウインドファーム風力発電事業環境影響評価準備書.
- 株式会社A-WINDO ENERGY. 2016. (仮称)瀧上海岸における風力発電事業環境影響評価.
- 株式会社ユーラスエナジージャパン. 2010. (仮称)由利高原風力発電事業環境影響評価書.
- 株式会社ユーラスエナジーホールディングス. 2014. (仮称)由利高原風力発電事業環境影響評価書.
- 株式会社ユーラスエナジーホールディングス. 2015. (仮称)東由利原風力発電事業環境影響評価書.
- 梶光一・小池伸介(編著). 2015. 野生動物の管理システム クマ・シカ・イノシシとの共存をめざして. 講談社.
- 風の松原自然エネルギー株式会社. 2014. 能代地区における風力発電事業環境影響評価準備書.
- 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所. 2005. 平成16年度雄物川下流及び子吉川両生類・爬虫類・哺乳類調査報告書.
- 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所. 2013. 平成24年度子吉川水辺現地調査(両生類・爬虫類・哺乳類)業務報告書.
- 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所. 2014. 平成25年度雄物川下流両生類・爬虫類・哺乳類調査業務報告書.
- 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所. 2014. 平成25年度雄物川上流水辺現地調査(両生類・爬虫類・哺乳類)調査業務報告書.
- 国土交通省東北地方整備局鳥海ダム工事事務所. 2014. 平成25年度鳥海ダム動植物等調査報告書.
- 国土交通省東北地方整備局鳥海ダム工事事務所. 2015. 鳥海ダム動植物等調査報告書[本編].

- 国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所. 2004. 平成15年度米代川河川環境調査業務 米代川水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類).
- 国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所. 2010. 平成21年度森吉山ダム哺乳類等調査業務報告書.
- 国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所. 2010. 平成20年～21年度米代川環境調査業務報告書(1/3)(両生類・爬虫類・哺乳類調査).
- 国土交通省東北地方整備局玉川ダム管理所. 2004. 平成15年度玉川ダム水辺の国勢調査(両生類・爬虫類・哺乳類)報告書.
- 国土交通省東北地方整備局玉川ダム管理所. 2014. 平成25年度玉川ダム水辺の国勢調査報告書.
- 国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所. 2004. 平成15年度横手北道路環境調査業務報告書.
- 国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所. 2004. 一般国道13号院内道路環境調査報告書.
- 国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所. 2005. 平成16年度雄物川上流両生類・爬虫類・哺乳類調査報告書.
- 小宮輝之. 2010. 日本の哺乳類 増補改訂 フィールドベスト図鑑108-131. 学研教育出版.
- 丸紅株式会社・株式会社関電エネルギーソリューション. 2018. 秋田港火力発電所(仮称)建設計画に係る環境影響評価準備書.
- 三笠暁子・佐野明・安井さち子・水野昌彦(編). 2017. 向山満先生業績集. コウモリの会.
- 三浦慎悟. 1999. 野生動物の生態と農林業被害 共存の論理を求めて. 全国林業改良普及協会.
- 向山満. 2002. 秋田県版レッドデータブック 動物編29-38. 秋田県環境と文化のむら協会.
- 室山泰之. 2003. 里のサルと付き合うには 野生動物の被害管理. 京都大学学術出版会.
- 中山文仁・作山宗樹・武藤幹生・向山満. 2017. 東北のコウモリ 第2号12-14. コウモリの保護を考える会.
- 日本クマネットワーク. 2007. アジアのクマたち. 日本クマネットワーク報告書.
- にかほ市教育委員会. 2009. 天然記念物「烏海山獅子ヶ鼻湿原植物群落及び新山溶岩流末端崖と湧水群」緊急調査報告.
- Ohdachi SD, Ishibashi Y, Iwasa MA, Fukui D & Saitoh T (eds). 2015. The Wild Mammals of Japan, Second Edition. Shoukadoh Book Sellers.
- 大井徹. 2004. 獣たちの森. 東海大学出版会.
- 田口洋美. 2017. クマ問題を考える. ヤマケイ新書.
- 玉木恵里香, 杉山昌典, 門脇正史. 2012. ヤマネ *Glirulus japonicus* 用新型巣箱の考案. 哺乳類科学 52: 15-22.
- 東北農政局田沢二期農業水利事業所. 2013. 田沢二期農業水利事業 第二田沢幹線水路大相沢・杉沢トンネル生息生物保全対策検討業務 哺乳類に関する環境調査資料.
- 東北農政局田沢二期農業水利事業所. 2014. 田沢二期農業水利事業 第二田沢幹線水路トンネル生息生物保全対策検討業務 哺乳類に関する環境調査資料.
- 東北自然エネルギー株式会社. 2016. 木地山・下の岱地域地熱資源開発調査 木地山地区自然環境調査 コウモリ類調査報告書.
- 坪田敏男・山崎晃司. 2011. 日本のクマ ヒグマとツキノワグマの生物学. 東京大学出版会.
- 若美風力開発株式会社. 2017. 若美風力発電事業環境影響評価書.
- 湯本貴和・松田裕之(編). 2006. 世界遺産をシカが喰う シカと森の生態学. 文一総合出版.
- 湯沢地熱株式会社. 2014. 山沢沢地熱発電所(仮称)設置計画環境影響評価書.



Insects



# 昆虫類

Red Data Book of Akita Prefecture 2020  
Animals II



# 昆虫類概説

## 【トンボ目】

トンボ目は不完全変態で、幼虫は“ヤゴ”と呼ばれ、成虫になるまでエラ呼吸をして淡水中で過ごし、他の生物を捕食して成長する。幼虫の生息環境は、河川などの流水域、池沼や湿地などの止水域に大別されるが、掲載した21種のうち、流水域に生息するものが8種、止水域に生息するものが13種と止水生の種が多い。トンボ目には他の水生昆虫のように流水・止水の両方に適応する種や広範囲に生息する種は少なく、それぞれの種によって好適環境が異なり、生息場所が特定の水域環境に限られている。例えば、流水生の種では源流と上流域、中・下流域などと、それぞれの種の生息域は一定の流程に限定される。また、止水生の種の場合も池沼、低湿地の違いのみならず、同じ池沼でも大河川流域の大きな池沼、植物が繁茂する浅い池沼、水田など、生息する止水環境が異なっている。

流水生種は、源流・上流域に生息するムカシトンボ、上・中流域に生息するヒメサナエ、ミヤマサナエ、清流の中流域に生息するアオハダトンボ、アオサナエ、清流の小川や用水路に生息するオジロサナエ、ホンサナエ、湿地の細流に生息するハネビロエゾトンボである。近年の大規模出水の影響を受け、河川の源流・上流域では土砂崩れに伴う土石流や森林倒壊等による土砂の流入、中・下流域では治水目的の工事等で流路・流速が変化することによる砂泥の増加、挺水植物の死滅など、石礫底の礫間や砂泥中を棲み場所とするサナエトンボ類や緩流の植物につかまって生活するカワトンボ類の生息環境の悪化が危惧される。今後、進行するであろう河川の人工化に関連してこれら流水生種の生息に配慮した河川改修方法の改善が望まれる。

止水生種は、大小の池沼に生息する種が8種、湿地・休耕田に生息する種が5種である。池沼生の8種は、水田・畦間に生息するカトリヤンマ、挺水植物が繁茂する浅い池沼に生息するホソミオツネトンボ、コノシメトンボ、ルリイトトンボ、背丈の高い植物が繁茂する深い大きな池沼に生息するオオセスジイトトンボ、オオキトンボ、マダラヤンマ、山地の森林中の池沼に生息するオオトラフトンボである。同規模の池沼に棲む類似した生活型の種群であっても、その中には冷水性の種や富栄養化の沼を好む種など、それぞれの種の好適な環境は異なっていて、複数種が同所的に生息することは少ない。これらの種はかつて里山に普通に見られたが、宅地開発や圃場整備等により埋め立てられたり、池自体は残っていても樹木の伐採など周辺環境が整備されたりして、人の手が加えられることによって生息環境が縮小している。加えて、採集圧も大きく影響し、絶滅種として2種を掲載するに至った。生息する池沼の自然状態をその周辺域も含めて保全することが望まれる。

湿地生の5種は、低湿地や休耕田に生息するモートンイトトンボ、ヒメアカネ、中・高層湿原の湿地に生息するカラカネイトトンボ、その両方に生息するマダラナニワトンボ、ハッチョウトンボである。開発により湿地環境は減少の一途を辿っており、湿地及び周辺環境の保全対策が必要である。また、休耕田についてもヨシ群落の遷移により陸地化すると一気に生息地が消滅するため、耕作休止後、早い段階で休耕田の一部を掘削して水源を保つなどして湿地状態を確保するなどの対策が望まれる。

(青谷 晃吉)

## 【コウチュウ目】

甲虫目は、昆虫類では最大の種類数を占めており、日本でも毎年新種が発見され、毎年種類数が増加している。その結果、日本では現在123科、約13,000種(亜種含む)が記録されている。1984~1986年に出版され全科を網羅的に示した唯一の図鑑「原色日本甲虫図鑑I-IV」(保育社)は約6,000種の甲虫を図示・解説しているが、出版から30年以上経過し、種類数は勿論、学名が変更された種も多いので、最新の学名を使用するようにした。

秋田県で採集される可能性がある種は2,200種ほどあるが、報文等で記録されている種は1,400種余りである。秋田県の1/5程度の面積の神奈川県では、甲虫目だけで4,100種余りが報告されている。これは昆虫愛好家が多く、調査精度が格段に高いためであるが、秋田県でも今後の調査が進むことで倍以上の種が記録されることが想定できる。

また、県内外の甲虫に関する情報も2002年当時より飛躍的に増加しており、これらを勘案してレッドリストの作成を進めてきた。その結果、新たに選定された甲虫類は59種となり、秋田県版レッドデータブック2002年版に比して18種増加した。内訳は、前回から引き継いだ種が34種、今回の見直しで新たに加わった種が25種、削除した種が8種である。

科別では比較的調査が進んでいるゲンゴロウ科(13種)、オサムシ科(11種)、カミキリムシ科(9種)、ハムシ科(7種)コガネムシ科(5種)でこの5科だけで45種になる。調査が進んだ結果、確認地点数が多くなりカテゴリーを変更した種や、逆に全く確認事例が得られず、評価不能となった種もある。

さて、甲虫類は食性と生息環境によって異なる種が分布している。食性で大きく分けると植物食と他の動物を捕食する捕食性となるが、植物食の場合は特定の植物種に依存する場合が多く、その植物の分布に影響される。ハムシ科ではその傾向が強く、今回新たに選定されたイカリアオカメノコハムシはキク科のミズギク、オオサルハムシはガガイモ科のシロバナカモメズル、オオルリハムシはシソ科のシロネ、ヒメシロネを食する。これらは湿地に生えるため、そのような環境以外では生息できない。カミキリムシ科も特定の植物を食べる種が多い。例えばヘリウスハナカミキリはハイノキ科のサワフタギの枯死部を食し、ヒメビロウドカミキリはキク科のオトコヨモギを食する。

捕食性の種ではオサムシ科、ゲンゴロウ科、オサムシ科ハンミョウ亜科が選定されている。これらは生息する環境が重要で、例えばオサムシ科のマークオサムシやクマガイクロアオゴミムシなどは湿地帯以外には生息しない。ゲンゴロウ科やミズスマシ科などは、水域に特有な捕食性甲虫である。特にゲンゴロウ科は環境省レッドリストに多くの種が選定されており秋田県でも13種選定されているが、種によっては環境省より評価が低く、分布していても選定しなかった種もある。この理由として、秋田県は水田かんがい用の溜池が多く、中にはジュンサイを栽培している池もあり、除草剤等の農薬使用を抑えていることで、環境省レッドリストに選定されている種が多産している場合もある。コガネムシ科5種の内ダイコクコガネとヤマトエンマコガネは牛馬の糞に依存しているが、低地の牧場の消失により秋田県では姿が見えなくなった。

(佐藤 福男)



## 【カマキリ目・バツタ目・カメムシ目・ハエ目・ハチ目】

これらの目に属する昆虫については総合的かつ専門的な図鑑が発行されていない分類群が多く、秋田県では専門的な研究者も不在である。そのため、秋田県内におけるこれらの情報は極めて断片的で、分布の状況を論じる域に達していない。

カマキリ目は全ての種が幼虫期から肉食性で、前脚が鎌形であることが特徴である。国内には13種、秋田県には5種が分布するが、文献で記録された種はヒメカマキリとウスバカマキリの2種だけである。ヒメカマキリは比較的最近確認された種で、分布の北上傾向が認められ、以前から県内に生息していたかどうかは不明である。今回取り上げたウスバカマキリは、主に海岸草地に見られるが、内陸部でも河川敷などで見つかることがある。

バツタ目は大きくコオロギ亜目とバツタ亜目に大別され、国内には約450種が分布する。いずれも後脚が発達していることが特徴である。食性は多様であるが、生態不明の種も少なくない。コオロギ亜目にはオスが発音する種が多く、鳴き声により種を判別できるものも多い。秋田県からは76種が知られ、今回は秋田県内の記録がわずかな種、生息環境が砂浜海岸や礫川原など特殊な種（ヤマトマダラバツタ・カワラバツタ）を中心に取り上げた。

カメムシ目は国内から3,500種以上が知られる大きなグループで、口器が針状であることが特徴である。多くの種は陸生であるが水性種も多く、海域に生息する種もある。食性は多様で、トコジラミのように人体吸血性種も含む。本目の秋田県内における生息分布情報は非常に少なく、県内研究者による記録は23種だけである。今回は過去には多くいたという伝聞がありながら近年の確認例が稀なタガメのみを取り上げた。本種は国内最大の水生昆虫である。

ハエ目は国内から7,500種以上が知られる大きなグループで、触角が多くの節からなる長角亜目（カ・ユスリカなど）と数節からなる短角亜目（アブ・ハエなど）に大別される。翅が前翅一対のみであることが特徴である。海域から高山まで生息し、食性は多様である。本目の秋田県内における生息分布情報はほとんど得られておらず、県内研究者による記録は36種だけである。今回は同定が確実に1例しか報告が無いトワダオオカとケブカハラナガハナアブの2種を取り上げるにとどめた。

ハチ目はハバチ類が約800種、有剣ハチ類が約1,500種知られるが、十分に整理されていない寄生蜂類はこれ以上の種が生息する。ハバチ類は単独性で植食性であるが、有剣ハチ類の食性は多様で、単独性から高度な社会性を持つものまで含む。本目の秋田県内における生息分布情報はほとんど得られておらず、県内研究者による記録は28種だけである。今回は環境省のレッドリストに選定されている種のうち県内分布が確実なものを取り上げた。

（田中 政行）

## 【カワゲラ目・トビケラ目】

カワゲラ目はトンボ目と同じ不完全変態である。一部は止水に見られるが、ほとんどが流水中の河床の礫間や堆積する落葉の間などに生息する。幼虫の生息場所は降雨後に急斜面に一時的にできる流れや、巨礫が散在する上流から大河川の下流域まで様々である。今回、掲載した3種は、ダムに落ち込む流量の不安定な沢や源流部の急流支川などに生息するミヤマノギカワゲラ、山地渓流の礫底に生息するシノピアミメカワゲラ、中・下流域の流れの緩やかな平瀬に生息するフライソンアミメカワゲラである。源流域の小支川では、土砂崩れや森林の伐採等により土砂が流入したり、周期的に形成される一時的な流れがなくなったりすることがある。また、大河川の本流においては、近年の大規模出水やそれに伴う治水工事等により流路変更や礫層の減少が起こり、中・下流域で砂泥量が増加したりしている。今後、このような生息環境の悪化が危惧される。清流の指標生物ともいえる掲載種の生息に配慮した河川改修方法の改善が望まれる。

トビケラ目はチョウ目と同じ完全変態でイモムシ型の体形である。これまで本県において発見された種はすべて水生で、河川の源流から下流までの流水、湖沼、ため池、湧水、湿地の水たまり等の止水に生息する。掲載した14種のうち、幼虫が不詳の2種を除き、流水に生息するものが3種、止水や湧水流、ワンド等の緩流部に生息するものが8種、流水・止水の両方に生息するものが1種で、種類によって適応環境が異なり、分布が特定の地域に限定される種が少なくない。

山地渓流からクロモンエグリトビケラが確認されているが、生息場所は局限される。この種は県南の湧水1か所においても幼虫の生息が確認されている。今後、治水工事等に伴う河川改修による生息環境の悪化が懸念される。

止水では、河川氾濫原に残存する谷地湿原の池沼に生息するミサキツノトビケラやミズバショウ群生地の水たまりに生息するヤチトビケラの分布が局限されるほか、山間部や低地の灌漑用ため池に生息するウスイロコバントビケラ、マール湖の湖棚に生息するシンテイトビケラについてもこれまでの確認地点は極めて少ない。ため池では、水生昆虫がオオクチバス等外来魚の食害の影響を受けているという報告もあり、今後、駆逐等の対策が必要である。また、ハンエンカクツツトビケラ、ババホタルトビケラ、フトオヒメニンギョウトビケラ、クロホソバトビケラの幼虫はその多くが湧水から確認されている。これらの種にとっては水温が低く変動が小さいなどの特徴をもつ湧水が好適な環境であり、それに適応した生活様式をもっていると考えられる。2019年における県内の湧水把握件数は285か所と東北で2番目に多い。近年、圃場整備などが急速に進行しており、関連工事等と並行して湧水を保全するための活動も盛んである。しかし、工事完了の数年後には湧水量の減少、一時的な枯渇などにより、湧水の標徴種であるトミヨ属雄物型と同様に、湧水のトビケラもまた、絶滅に瀕している。長期的な視野に立って、湧水を恒久的に保全するため、周辺の水田地帯を含む広域的管理が望まれる。

(青谷 晃吉)

## 【チョウ目】

これまで秋田県内で見出されているチョウ目（チョウ類とガ類）はおよそ2,500種に上る。チョウ類や比較的大型のガ類については標本や採集記録などが蓄積されてきているが、メイガ上科を除く小蛾類については情報がまだ不十分で、今回はその多くを検討の対象とすることができなかった。

チョウ目昆虫のほとんどは幼虫の時期に植物を食べ、限られた種類の植物しか食べないものも多い。このため、生息の可否は植生に大きく左右される。植生は地形や気温によって大きく決定されているが、人為的な影響が加わっていない土地はごく少なく、現存植生は人間の土地利用に強く左右されている。従って、人間の土地管理に変化があると植生に変化が生じ、さらにチョウ目昆虫に影響が現れる。その典型は半自然草原の消失である。かつて耕作地の周辺には牛馬を養うために火入れや刈り取りで維持される草地が少なからず存在したが、農業の機械化と共に維持する必要性が失われ、放置されて遷移の進行により森林化したリスギが植林されるなどして、その多くが消滅した。絶滅とされたチョウ2種をはじめとして、多くの草原性の種が今回もリストに挙げられており、より危険なカテゴリーに変更されたものもある。また、薪炭林も化石燃料が主流になるにつれ放置されて、林床まで光が届かない暗い森が多くなっている。今回リストに挙げられたヒメギフチョウの衰退は、こうした里山の変化だけが原因なのか明らかではないが、関連が考えられる。今日的な変化として、砂丘地を中心とした風力発電所の建設がある。海岸は塩分や強い風波の影響で独特の不安定な植生が見られるが、発電施設の設置と関連する道路の敷設により、植生の破壊や砂の移動の安定化によって外来植物が侵入するなど、もともと狭い植生帯が急速に変貌している。国内で数カ所しか生息地が知られていないハマヤガをはじめとした海岸に特有のガ類は、その影響を強く受けている。さらに、人間の活動域と重なる部分の多い平野部の湿地やその縁辺の溜池などの池沼も、農地化や宅地化で消失したり、水質が悪化するなどで環境変化が著しい。湿地性のガ類が少なからずリストに挙げられているのは、前回のリストと同様であり、メイガ類では追加になっている。

温暖化に伴うチョウ・ガ類の分布の変化は分布北限の北上という形ですでに進行中であるが、温暖化によって衰退している種の有無については今のところ判断できる材料が全くない。

過去に1、2回の採集例しかない種も少なくないが、生息していると言えるのか、ましてや減少しているかの判断は困難である。その扱いによって情報不足カテゴリーを中心にリストの内容が大きく変化せざるを得ない。昆虫の生息情報のほとんどはアマチュアと呼ばれる人々によってもたらされているが、秋田県のような人々の人数は他県にくらべるとかなり少なく高齢化も進んでいる。そのため、今後ますます情報不足で判断できない場合が増加する可能性があり、調査が行われていないため生息情報が得られず絶滅と判断されるケースも生じうる。信頼できるリストのためには、自然史の知識・経験のある人材の増加と情報集積のしくみの構築が望まれる。

(梅津 一史)





トンボ目ヤンマ科

# カトリヤンマ

*Gynacantha japonica* Bartenef, 1909

秋田県2020：絶滅  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道南端、本州、粟島、佐渡島、隠岐、四国、九州、壱岐、対馬、五島列島、沖縄島以北の琉球列島。台湾、朝鮮半島、中国北・中部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、大仙市。1991年に大仙市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 本種の概要 水田あるいは小流の緩流域に生息する。
- ◆ 本種の現状 かつては県内の平地から山間の集落周辺に広く分布し、普通に見られたが、1991年以降確認されていない。本県では絶滅したと考えられる。原因は不明。
- ◆ 生存に対する脅威 圃場整備に伴う工事、U字溝設置等による生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

トンボ目トンボ科

# オオキトンボ

*Sympetrum uniforme* (Selys, 1883)

秋田県2020：絶滅  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州北部、対馬。朝鮮半島、中国東北部から北部。
- ◆ 県内の分布 能代市、潟上市、秋田市。1991年11月秋田市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 本種の概要 背丈の高い挺水植物が繁茂する比較的大きな湖沼に生息する。
- ◆ 本種の現状 1990年代、能代市、秋田市に確実な産地があった。他は単発的な記録があるのみ。1991年に確認されて以降確認されていない。池沼の改修、オオクチバスの移入、採集圧などにより、本県では絶滅したと考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 オオクチバスによる食害、環境の変化による生息地の分断、過度の採集。

(青谷 晃吉)

チョウ目セセリチョウ科

# チャマダラセセリ

*Pyrgus maculatus maculatus* (Bremer et Grey, 1852)

秋田県2020：絶滅  
秋田県2002：絶滅種  
環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北、関東、中部）、四国。朝鮮半島、中国、ミャンマー、モンゴル、ロシア南東部、東シベリア。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市に記録がある。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草はキジムシロ、ミツバツチグリが知られている。丘陵地から山地の明るい草地に生息する。
- ◆ 本種の現状 1960～1970年代に県北内陸部で採集された記録があるが、1971年に北秋田市（旧鷹巣町）で採集された記録以降は、生息の情報はない。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。

(梅津 一史)

チョウ目タテハチョウ科

# オオウラギンヒョウモン

*Fabriciana nerippe* (C. Felder et R. Felder, 1862)

秋田県2020：絶滅  
秋田県2002：絶滅種  
環境省2019：絶滅危惧IA類



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島、中国東北部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、仙北市、にかほ市、湯沢市に記録がある。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草はスミレ。平地から山地の草地に生息する。
- ◆ 本種の現状 1950～1970年代に県内6か所の採集記録があるが、1971年ににかほ市で採集された記録を最後に、生息の情報はない。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

# カバシタムクゲエダシャク

*Sebastosema bubonaria* Warren, 1896

秋田県2020：絶滅  
秋田県2002：絶滅種  
環境省2019：絶滅危惧IA類



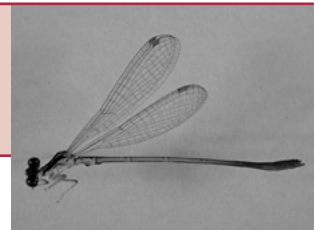
- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県、栃木県、群馬県、埼玉県、東京都、新潟県、山梨県)。韓国。
- ◆ 県内の分布 秋田市に記録がある。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草はツルウメモドキ、コマユミ、ニシキギが知られ、ニシキギ科に固有と考えられている。既知産地の環境は、河川敷、海岸の砂丘地、里山の雑木林。現在国内で生息が確認されている場所は3か所に過ぎない。
- ◆ 本種の現状 県内では、1950年代に秋田市太平山でオス1個体が採集された記録があるのみ。採集地は太平山周辺の里山であるらしい。
- ◆ 生存に対する脅威 里地・里山の環境変化の可能性があるが、本種が必要とする環境条件が特定できず、明らかでない。  
(梅津 一史)

トンボ目イトトンボ科

# モートンイトトンボ

*Mortonagrion selenion* (Ris, 1916)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道南端、本州、飛鳥、粟島、佐渡島、四国、九州。朝鮮半島、中国中部、沿海州地域。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、能代市、秋田市、大仙市、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 生息場所は比較的草丈の低い池沼周辺の低湿地や休耕田などに限られる。
- ◆ 本種の現状 休耕田が再開発されたり、ヨシ湿原に変化したりして大半の生息地が消滅した。2013年に大仙市で確認されて以降未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などに伴う低湿地の埋め立て、乾燥化・陸地化、休耕田の再耕作化などによる生息環境の悪化。  
(青谷 晃吉)

トンボ目エゾトンボ科

# ハネヒロエゾトンボ

*Somatochlora clavata* Oguma, 1913

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：—  
環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 北海道の一部、本州、佐渡島、隠岐、四国、九州、対馬。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 五城目町、秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 小流のある低湿地の流れの部分に生息する。
- ◆ 本種の現状 これまで確認されている場所は3か所のみ。各地共に個体数が極めて少なく絶滅が懸念される。2007年に秋田市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 湿地の水量減少に伴う乾燥化・陸地化などによる生息環境の悪化。  
(青谷 晃吉)

トンボ目トンボ科

# コノシメトンボ

*Sympetrum baccha matutinum* Ris, 1911

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、奥尻島、本州、飛鳥、粟島、佐渡島、隠岐、見島、四国、九州、宍岐、対馬、五島列島、種子島。朝鮮半島、中国東北部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、能代市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 平地の比較的明るい周囲に樹林のある浅い池沼に生息する。
- ◆ 本種の現状 各地の個体群が壊滅的狀態である。原因は不明。1993年ににかほ市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 開発による池沼の埋め立て、植物の遷移に伴う陸地化などによる生息環境の悪化。  
(青谷 晃吉)

トンボ目トンボ科

# ヒメアカネ

*Sympetrum parvulum* (Bartenev, 1912)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道の一部、利尻島、奥尻島、本州、隠岐、四国、九州、対馬、天草諸島、甌島列島、屋久島、種子島。朝鮮半島、中国東北部からウスリーにいたる地域。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、仙北市、大仙市、横手市、湯沢市、東成瀬村など全県下に分布するが局所的。
- ◆ 本種の概要 平地のやや草丈のある挺水植物が繁茂する湿地や休耕田に生息する。過去に県内で生息が確認された箇所はすべて休耕田であり、本来の生息域である低湿地では未確認である。ハッチョウトンボ、オゼイトンボなどと共に見られることが多い。
- ◆ 本種の現状 1993年に大仙市で確認されて以降、未確認。休耕田の消滅により各種個体群は壊滅の状態と考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 休耕田の再耕作化。休耕田放棄などによる乾燥化・陸地化。
- ◆ 現在の保護対策 湯ノ台・小方角沢自然環境保全地域指定昆虫類。 (青谷 晃吉)

コウチュウ目ハンミョウ科

# カワラハンミョウ

*Chaetodera laetescripta* Motschulsky, 1860

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、伊豆大島、四国、九州。朝鮮半島、済州島、中国、サハリン、シベリア東部、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 海岸砂丘地帯および大川河口部などに特異的に産する。県内の海岸砂丘の大半は何らかの人工的な手が加わっていたり、車の乗り入れ等でかく乱されたりしている。そのような場所では本種は見られない。
- ◆ 本種の現状 潟上市天王と秋田市で1983年夏に各メス1個体が採集されているが、どちらも標本はない。秋田市で1992年夏、灯火に飛来したメス1個体(写真)が保存されている。以降は記録が途絶えている。今後新たな産地が発見される可能性は低い。
- ◆ 生存に対する脅威 海岸部や河口部の砂の供給や移動に関係する人工物の増加。 (佐藤 福男)

コウチュウ目オサムシ科

# マークオサムシ

*Carabus maacki aquatilis* Bates, 1883

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 本州(東北地方6県、新潟県)。極東ロシア、朝鮮半島北部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 日本では新潟県を含む東北地方特有种である。低地の湿地が主要生息域である。河川中下流のヨシ原や中山間地帯の小規模な湿地にも生息する。他県では低山地の放棄水田などでも発見されている。
- ◆ 本種の現状 県内では雄物川中流域の2か所で確認されていたが、河川改修等でその後の生息は確認されていない。近年、県北部で新産地が発見されたが、生息域が狭く、個体数も極めて少ないことから危機的状況は変わらない。
- ◆ 生存に対する脅威 河川の大規模改修、湿地の改変。 (佐藤 福男)

コウチュウ目オサムシ科

# クマガイクロアオゴミムシ

*Chlaenius gebleri* Ganglbauer, 1982

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(関東以北)。シベリア。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 低地の湿地帯に限って生息する。
- ◆ 本種の現状 県内では秋田市以外からの記録がない。また、1997年8月に灯火に飛来したメス1個体以後記録がない。
- ◆ 生存に対する脅威 周辺から生活排水の流入で環境が悪化している。
- ◆ 現在の保護対策 産地は県指定天然記念物(湿原植物群落)である。 (佐藤 福男)



コウチュウ目ゲンゴロウ科

テラニシセスジゲンゴロウ

*Copelatus teranishii* Kamiya, 1938

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県、山形県、福島県、岐阜県、愛知県、福井県、三重県、大阪府、兵庫県、広島県)、九州(福岡県、大分県、長崎県対馬)。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 県内では、にかほ市、山形県では酒田市から知られ、鳥海山の南北に分布している。この属は不安定で小規模な水溜まりを好むようである。県内の分布地はこの1か所のみであり北限でもある。
- ◆ 本種の現状 生息場所は自然環境保全地域に指定されており、当面大規模な改変はないが、湧水の枯渇に繋がる森の伐採等で小規模水域が消滅する危険性は指摘できる。
- ◆ 生存に対する脅威 特になし。

(佐藤 福男)

コウチュウ目コガネムシ科

ダイコクコガネ

*Copris ochus* (Motschulsky, 1860)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 日本全土。济州島、朝鮮半島、中国、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 日本では最大の糞虫で放牧地の新鮮な牛糞から発見される。夜行性で灯火にも飛来する。秋田市郊外に牧場があった頃に数例の記録があるが、現在は閉鎖、縮小しており、生息環境そのものがほぼ消滅した。
- ◆ 本種の現状 秋田県版レッドデータブック2002年版は採集例が少ないことで情報不足種としたが、その後も追加の記録はなく、1993年7月に仙北市で灯火に飛来した中型オス1個体(写真)以来記録が途絶えている。秋田市の記録は付近に放牧場があった1980年代の2例であり、現在は牧場そのものが消滅した。
- ◆ 生存に対する脅威 低地での牧場が消滅したことが最大の脅威である。

(佐藤 福男)

コウチュウ目コガネムシ科

ヤマトエンマコガネ

*Onthophagus japonicus* Harold, 1874

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：—

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 日本全土。济州島、朝鮮半島、中国、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 中型の糞虫でその特異な斑紋で他種と見誤ることはない。背の低い草がまばらに生え、裸地を交えた開けた場所にある放牧場が生息環境である。特に馬糞を好むようである。
- ◆ 本種の現状 鹿角市の記録は1941年秋であるが、標本は戦災で焼失している。秋田市では1963年6月に5頭が採集されているが、標本は散逸して現存しない。
- ◆ 生存に対する脅威 低地から中山間での牧場が消滅したことが最大の原因である。

(佐藤 福男)

コウチュウ目カミキリムシ科

ミチノクケマダラカミキリ

*Agapanthia daurica sakaii* Hayashi, 1982

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本亜種は岩手県早池峰山が基産地である。青森県でも一例のみ記録はあるが、現在確実に生息するのは岩手県のみである。本県の記録は岩手県からの流入と考えられる。
- ◆ 県内の分布 鹿角市で飛翔中の1個体(1979年7月)が確認されたが、その後の記録はない。
- ◆ 本種の概要 本種の食草はハンゴンソウのほかアザミ、フキなど、大型のキク科草本の茎葉を食する。元来が寒冷な草原が生息環境であり、岩手県ではそのような環境が広く存在することで産地が多いが、本県では岩手県からの派生的分布のため、定着しにくいと考えられる。
- ◆ 本種の現状 鹿角市にはフタスジジョウの調査も兼ねて何度も調査を行っているが、両種とも確認に至っていない。
- ◆ 生存に対する脅威 道路建設、河川改修。

(佐藤 福男)



チョウ目メイガ科

# ギンスジマダラメイガ

*Selagia argyrella* (Denis & Schiffermüller, 1775)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（青森県、岩手県、秋田県）。朝鮮半島、中国、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 ヨーロッパではキジムシロ属（バラ科）が食草として知られている。北東北3県で各1か所の記録があるだけ。
- ◆ 本種の現状 にかほ市で1990年代にメス1個体が採集されたことがあるだけで、これ以外にはまったく情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。  
(梅津 一史)

チョウ目ツトガ科

# ムナカタミズメイガ

*Prapoxyn ussuriensis* (Rebel, 1910)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：－  
環境省2019：準絶滅危惧



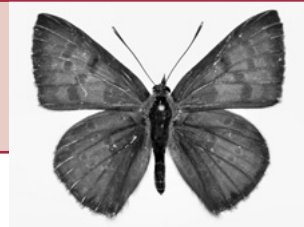
- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（新潟県以北）。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 潟上市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 幼虫は水棲で、食草はイネ科・タヌキモ科が知られている。冷涼な湿地に生息するものと考えられる。
- ◆ 本種の現状 かつて潟上市の湿原で多数の生息が知られていたが、乾燥化が進みその後の情報はない。1990年代にかほ市の湿原で1個体が採集された。
- ◆ 生存に対する脅威 湿原の乾燥化などによる生息地の環境悪化。  
(梅津 一史)

チョウ目シジミチョウ科

# クロシジミ

*Niphanda fusca fusca* (Bremer & Grey, 1852)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国、シベリア。
- ◆ 県内の分布 秋田市、仙北市、大仙市、にかほ市、湯沢市の記録がある。
- ◆ 本種の概要 産地は局地的。幼虫はアブラムシやキジラミの甘露をなめて成長するが、3齢になるとクロオオアリが地下の巣の中に運び込み、えさを与えて養う。草地に樹木が混じるような環境に見られる。
- ◆ 本種の現状 1950～1960年代に記録された場所では絶滅したとみられ、1990年代に記録された仙北市の1か所もその後は見られない。現在確実に生息しているのは、にかほ市の1地域のみ。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地、放牧地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。  
(梅津 一史)

チョウ目タテハチョウ科

# フタスジチョウ

*Neptis rivularis shirozui* M. Okano, 1954

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。サハリン、朝鮮半島、中国北部からヨーロッパ。国内では北海道、岩手県、秋田県、新潟県奥只見、関東北部及び中部地方産地の集団はそれぞれ別亜種とされる。
- ◆ 県内の分布 鹿角市と仙北市から記録されている。
- ◆ 本種の概要 食草はユキヤナギ、シモツケ、マルバシモツケなどシモツケ属（バラ科）。県内ではアイズシモツケを食草としているが、植栽のユキヤナギから越冬幼虫が見つかった例がある。シモツケ属の植物が自生する崖地などに生息する例が多い。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では1960～1980年代に記録があるが、1989年の記録以後は生息情報がない。仙北市では1970年代に一度採集された記録があるのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。かつての生息地には特段の植生の変化などは見られない。  
(梅津 一史)

チョウ目タテハチョウ科

## ホシミスジ北上山地亜種

*Neptis pryeri kitakamiensis* Fukuda, Minotani & Iwano, 2000

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 種としては本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、台湾。北上山地亜種の分布は北上山地から秋田県北東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市から記録がある。秋田市南部と由利地方には別亜種が分布する。
- ◆ 本種の概要 食草はユキヤナギ、シモツケ、コデマリなどシモツケ属（バラ科）。鹿角市では植栽のユキヤナギやシモツケを食草としていた例がある。シモツケ属の植物が自生する崖地だけでなく、ユキヤナギが植栽されている住宅地や園地、耕作地周辺にも生息することがある。
- ◆ 本種の現状 1980年代後半から1990年代初めにかけて、鹿角市と大館市からいくつかの産地が報告されたが、1992年の採集例を最後に、その後の生息情報はない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。かつての生息地には特段の植生の変化などは見られない。（梅津 一史）

チョウ目タテハチョウ科

## キマダラモドキ

*Kirinia fentoni* (Butler, 1877)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道（南西部）、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国東北部、アムール。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市、湯沢市。由利本荘市の情報があるが不確実。
- ◆ 本種の概要 食草はヒゴクサ、ヒカゲスゲなどのカヤツリグサ科、ススキ、カモジグサ、イチゴツナギなどのイネ科。落葉広葉樹林内で見つかることが多いという。
- ◆ 本種の現状 仙北市の1地域で1960～1990年代に生息していたが、その後の生息情報はない。2009年に鹿角市で、2003年に湯沢市で、それぞれ1個体が採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 草地と落葉広葉樹が混交する里地の植生変化や消失による生息に適した環境の減少。（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## フタオレウスグロエダシャク

*Onthophagus japonicus* Harold, 1874

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 全国的に分布するが、産地は限られている。幼虫はリンゴ、ワレモコウ、キイチゴ類（以上バラ科）、スズカケノキ（スズカケノキ科）で飼育されており、広食性とみられる。にかほ市の生息地は半自然草原と湿地が混交する環境。
- ◆ 本種の現状 にかほ市の1地域のみが生息しているとみられる。1990～2000年代には継続的に記録されているが、最近では記録がない。
- ◆ 生存に対する脅威 生息範囲が局限されている。現状では大きな環境変化は見られないが、草地管理が継続されるか危惧される。（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## ハガタアオシャク

*Thalera rubrifimbria* Inoue, 1990

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 男鹿市。
- ◆ 本種の概要 食草は不明。東北地方では宮城県と秋田県の記録があるが、主に関東地方以西に分布。
- ◆ 本種の現状 男鹿半島の1か所で2000年代以降複数の採集例がある。他の産地は知られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。生息地は火入れにより管理されてきた草地であり、管理が継続されるか危惧される。（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## コヒメシャク

*Scopula virgulata albicans* Prout, 1934

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州（岩手県、秋田県、山梨県、静岡県）。朝鮮半島、シベリアからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 男鹿市。
- ◆ 本種の概要 国内では極めてまれな種で散発的な採集記録が知られていたが、いずれも1950年代。2010年に男鹿半島で再発見されるまで50年以上国内の記録はなかった。広い草地に生息するものと見られる。食草は国内では未知だが、ヨーロッパではスノキ属（ツツジ科）の記録があるという。
- ◆ 本種の現状 2010年以降、男鹿市の1か所で複数回見出されており、現在国内における唯一の確実な生息地となっている。
- ◆ 生存に対する脅威 生息地は火入れや刈り取りによって維持されてきた草地で、管理が継続されるか危惧される。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## マルバヒメシャク

*Scopula duplinupta* Inoue, 1982

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（岩手県、秋田県、群馬県、長野県）。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 採集例は非常に少なくまれな種。本州の記録はしばらくなかったが、2000年代以降、秋田県と岩手県で発見されている。食草は未知。
- ◆ 本種の現状 県内では鹿角市の2か所で2000年代以降に採集されているのみ。採集された場所の環境は、放牧地跡で、草丈の高い草地に樹木が侵入しつつある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## オビベニヒメシャク

*Idaea nielsenii* (Hedemann, 1879)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 平地で採集されるがまれな種であるという。食草は未知。
- ◆ 本種の現状 由利本荘市とにかほ市では過去に採集されたことがあるがその後情報が無い。男鹿市では2010年代に1か所で複数回見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## イチゴナミシャク

*Mesoleuca albicillata casta* (Butler, 1878)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北地方、関東から中部地方山地）。サハリン、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 産地は局地的で個体数は少ない。食草は国内では未知だが、ヨーロッパではキイチゴ属（バラ科）で飼育されているという。
- ◆ 本種の現状 県内では仙北市の1か所だけで採集されているのみであるが、同地では繰り返し見出されている。最近10年以上は生息の情報が無い。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM



## チョウ目シャクガ科

## シロヤエナミシャク

*Rheumaptera flavipes flavipes* (Ménétrières, 1858)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（新潟県、福島県以北）。サハリン、朝鮮半島、中国西部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 個体数の少ないまれな種。昼飛性で灯火にはあまり飛来しない。食草としてタニウツギ（スイカズラ科）が知られている。
- ◆ 本種の現状 にかほ市の1地域で1990年代と2000年代に少数が採集されているのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## シロマダラカバナミシャク

*Eupithecia extensaria leuca* Dietze, 1913

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（青森県、岩手県、秋田県、静岡県、岡山県）。ユーラシア。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 産地は局地的で少ない種。主に草地で採集されている。食草は国内では未知だが、ヨーロッパではヨモギ類（キク科）を食べることが知られているという。
- ◆ 本種の現状 秋田市内では1980年代に1か所で2年続けて採集されたことがあるがその後情報がない。にかほ市では1990年代以降に1か所で繰り返し見出されているが、最近10年ほどは生息情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 生息範囲が局限されている。にかほ市の産地は現状では大きな環境変化は見られないが、草地管理が継続されるか危惧される。

(梅津 一史)

## チョウ目シャチホコガ科

## クワヤマエグリシャチホコ

*Ptilodon kuwayamae* (Matsumura, 1919)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。サハリン、朝鮮半島、ロシア南東部（沿海州）。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、成虫は6月初旬と8月に出現するとされているが、秋田県での記録は7月中旬である。山地の草原に生息し、ヤマハギを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では鹿角市における1977年のオス1個体の記録以外知られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息環境（山地草原）の消失。

(田中 政行)

## チョウ目コブガ科

## チョウカイシロコブガ

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 秋田県。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 にかほ市で採集された標本を基に新種として記載された種で、現在まで他の産地は知られていない。幼虫の食草は未知。
- ◆ 本種の現状 にかほ市の1か所で1990年代には毎年のように見出されていたが、最近10年以上再三調査が行われているにもかかわらず情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 生息範囲が極端に限定されている。開発などによる植生の改変。

(梅津 一史)



チョウ目ヤガ科

# ホクトギンウワバ

*Syngrapha interrogationis transbaikalensis* Staudinger, 1892

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道北東部、秋田県。北極を囲む地域。日本と同じ亜種は中央アジアからアジア北東部。
- ◆ 県内の分布 潟上市。
- ◆ 本種の概要 食草としてツルコケモモ、ヒメジャクナゲ、イソツツジ（以上ツツジ科）が知られている。生息地は食草が見られるような湿地に限定される。
- ◆ 本種の現状 潟上市で一度だけ採集されたことがあり、本州唯一の記録となっている。潟上市には本種が生息できそうな湿原があったが、乾燥化して消失しつつある。
- ◆ 生存に対する脅威 湿原の乾燥化など生息地の環境悪化。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

# ナナメヒメヨトウ

*Balsa leodura* (Staudinger, 1887)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北地方～中部地方）。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草としてズミ（バラ科）が知られており、栽培リンゴから幼虫が見出された例もある。東北地方では、岩手県と宮城県でそれぞれいくつかの産地の記録がある。
- ◆ 本種の現状 仙北市で1990年代に1個体の採集例があるのみ。同地ではその後も調査が行われているものの再発見されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発による生息環境の悪化。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

# アオモンギンセダカモクメ

*Cucullia argentea* (Hufnagel, 1766)

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国北部、モンゴル、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はカワラヨモギが知られている。国内では産地は局所的で、海岸草原、河川敷、石灰岩台地などの広い草地に生息する。
- ◆ 本種の現状 1990年代に秋田市の海岸に生息することが明らかになり、その後2000年代までは確認されていたが、最近10年近くは調査されているものの生息情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設などによる植生の変化、ゴミ投棄などによる環境の悪化。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

# シロミチビヨトウ

*Oligia leuconephra* Hampson, 1908

秋田県2020：絶滅危惧IA類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北地方）。サハリン、朝鮮半島、中国、モンゴル、ロシア南東部、シベリア、カザフスタン。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知だが、近縁種群は概ねイネ科食。草地に生息するものと思われるが明らかでない。
- ◆ 本種の現状 1975年に鹿角市の放牧地周辺で1個体採集されたことがあるのみで、同地ではその後も調査が行われているが生息情報はない。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地・放牧地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## クシロモクメヨトウ

*Xylomoia graminea* (Graeser, 1889)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北地方）。サハリン、朝鮮半島、中国、モンゴル、ロシア南東部、シベリア、カザフスタン。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではヨシ（イネ科）が知られている。低湿地で見出されているが、生息地は限られている。
- ◆ 本種の現状 秋田市内で1970年代に1個体が採集された記録があるのみ。その後はまったく情報が無い。記録がある地点周辺はかつては水田が多かったが、その後宅地化が進んだ。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川整備などによる生息環境の改変。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## キタヨトウ

*Hydraecia ultima* Holst, 1965

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（秋田県）。サハリン、中国東北部、ロシア南東部、シベリアからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではギシギシ属（タデ科）。湿地で採集されている。
- ◆ 本種の現状 秋田市と潟上市で1970年代に各1個体が採集されたが、その後まったく採集例がない。産地周辺は宅地化が進み大きく環境が変わった。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川整備などによる生息環境の改変。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## テンモントガリヨトウ

*Sedina buettneri* (Hering, 1858)

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道（東部）、本州（秋田県）。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部、モンゴル、シベリアからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではスゲ属の一種（カヤツリグサ科）を食べるとされる。湿地に生息する。
- ◆ 本種の現状 にかほ市で1992年に1個体が採集された例があるのみで、本州唯一の記録となっている。その後再三調査が行われているが、生息情報はない。産地は半自然草原と湿地が混交する環境だが、湿性の植生には大きな変化は見られない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川整備などによる生息環境の改変。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## ギンモンアカヨトウ

*Plusilla rosalia* Staudinger, 1892

秋田県2020：絶滅危惧IA類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、大潟村。
- ◆ 本種の概要 食草はヤナギタデ（タデ科）が知られている。低湿地や河川敷、火山草原などで採集されているが少ない。
- ◆ 本種の現状 北秋田市で1970年代に1個体が採集されている。また、干拓直後の大潟村で多数が誘蛾灯に捕殺された記録がある。これ以後の生息情報は全くない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川整備による低湿地の環境変化。

（梅津 一史）

トンボ目イトトンボ科

## カラカネイトトンボ

*Nehalennia speciosa* (Charpentier, 1840)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、信越地方以北の本州。ユーラシア大陸の高緯度地域。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 中・高層湿原のミズゴケが見られる湿地に生息する。幼虫は植物が密生する滞水や池塘に見られる。
- ◆ 本種の現状 成虫が確認されているのは2か所のみ。ヨシの繁茂や湿原の乾燥化により生息域が減少している。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などに伴う低湿地の埋め立て、乾燥化・陸地化などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

トンボ目イトトンボ科

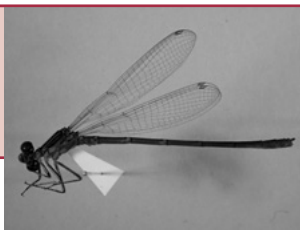
## オオセスジイトトンボ

*Paracercion plagiosum* (Needham, 1930)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 本州の青森県、宮城県、秋田県及び信濃川、利根川水系。中国北、中部、大連。
- ◆ 県内の分布 能代市、三種町、潟上市、秋田市、大仙市、羽後町。
- ◆ 本種の概要 従来、利根川水系や信濃川水系の下流デルタ地域の河跡池沼に生息するとされていたが、東北地方の産地は必ずしも大河とは結び付いていない。本県では米代川や雄物川流域の植生豊かな、やや大きな池沼に生息する。
- ◆ 本種の現状 過去に確認されている湖沼の63%で消滅したと考えられる。オオクチバスの移入や改修工事の影響が考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 オオクチバスなどによる食害、開発による池沼の埋め立てや陸地化による生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

トンボ目イトトンボ科

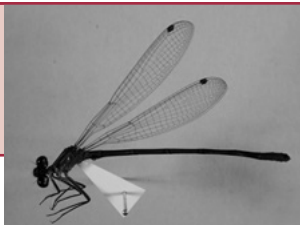
## ルリイトトンボ

*Enallagma circulatum* Selys, 1883

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、国後島、択捉島、岐阜県と福井県境以北の本州。サハリン。
- ◆ 県内の分布 大館市、三種町、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 比較的冷水性の池沼・沼沢に生息する。
- ◆ 本種の現状 過去に6か所から記録があるが、このうち、現在も生存していると考えられる地点は4か所で、いずれもかなり不安定である。仙北市の1か所のみが確実な生息地である。それ以外に記録のある5か所のうち2か所は絶滅したと考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 オオクチバスなどによる食害、水量の減少による水温上昇、開発による池沼の埋め立て、植物の遷移などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

トンボ目サナエトンボ科

## オジロサナエ

*Stylogomphus suzukii* (Oguma, 1926)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



(写真は幼虫)

- ◆ 国内外の分布 本州、隠岐、四国、九州、五島列島、甌島列島。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、大仙市、羽後町、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 小さな流れがある特定の清流に生息する。小河川の中流域、砂泥底を好む。
- ◆ 本種の現状 全県下で採集記録があるが、分布は局限され、生活廃水や用水路の改修のため確認されなくなった場所もある。現在、生存が確認されているのは由利本荘市、大仙市、羽後町のみ。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修、水質汚濁などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)



## トンボ目サナエトンボ科

## ホンサナエ

*Shaogomphus postocularis* (Selys, 1869)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、佐渡島、四国、九州に分布。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 中小河川中流域の緩やかな流れの淵やよどみ、小川や用水路に生息。
- ◆ 本種の現状 かつては全県下に普通に見られた。開発によるダメージが大きい種であるが、現在、秋田市では狭い地域に多産する。
- ◆ 生存に対する脅威 U字溝の設置、河川改修、河川の直線化、通年の流水停止などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

## トンボ目トンボ科

## マダラナニワトンボ

*Sympetrum maculatum* Oguma, 1915

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県、山形県、福島県、新潟県、石川県、長野県、岐阜県、愛知県、三重県、滋賀県、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、広島県)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 五城目町、潟上市、秋田市、由利本荘市、にかほ市、羽後町。
- ◆ 本種の概要 特定の湿原内の樹林に囲まれたミズゴケを伴う浅い池沼に生息する。個体群は小さい。ミズゴケ湿原と密接に関連しているが、羽後町の産地にはミズゴケはない。
- ◆ 本種の現状 かつては本種の北限となる五城目町以南に局所的に分布していた。現在にはにかほ市と羽後町で確認しているが、かつて産地だった場所のうち、少なくとも6か所ではすでに絶滅したと考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 開発による湿原の乾燥化。

(青谷 晃吉)

## コウチュウ目カワラゴミムシ科

## カワラゴミムシ

*Omophron aequalis* Morawitz, 1863

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 日本全土。朝鮮半島、沿海州、中国。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 カワラゴミムシ科に属する唯一の種である。海岸に近く砂質の湿地帯に生息し、灯火に飛来した個体が得られることがある。
- ◆ 本種の現状 1980年代、秋田市の2か所で灯火に飛来した個体が知られていたが、その後は記録が途絶えていたが、近年秋田市郊外で再発見された。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修、砂質の湿地帯などの消滅。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ハンミョウ科

## ホソハンミョウ

*Cylindera gracilis* (Pallas, 1777)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島、中国北部、シベリア。
- ◆ 県内の分布 能代市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 県内では低地から丘陵地のやや乾燥し、裸地の混在した丈の低い草地在り生息環境である。採草地やスキー場がこれに該当するが、どちらも最近では管理が不十分で、全国的に安定した生息地が失われつつある。
- ◆ 本種の現状 県内で知られていた3か所とも草地として管理がなされていたが、最近では管理が粗雑になり、ここ10年程は姿をみていない。
- ◆ 生存に対する脅威 草地の維持管理放棄による荒廃。

(佐藤 福男)



コウチュウ目カミキリムシ科

# ヨツボシカミキリ

*Stenagrinum quadrinotatum* Bates, 1873

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：－  
環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、伊豆諸島（新島）、佐渡島、隠岐、四国、九州、香岐、対馬、屋久島、奄美諸島（奄美大島、徳之島）。朝鮮半島からインドシナ、台湾。
- ◆ 県内の分布 湯沢市で1947年に採れた記録がある。近年では1981年7月に秋田市郊外の灯火に飛来した1個体（写真）が唯一の記録。
- ◆ 本種の概要 1970年代までは平地や里山で普通に見られた種であるが、現在は個体数が激減している種である。全国的にも同様な傾向で、その原因についてはよく分かっていない。
- ◆ 本種の現状 近年の採集が1例のみで現状等を示すことができない。当時と環境が大きく変化したとは思えない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（佐藤 福男）

チョウ目メイガ科

# フタクロテンマダラメイガ

*Selagia spadicella* (Hübner, 1796)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（岩手県、秋田県）。中国、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではニガクサ属（シソ科）、キジムシロ属（バラ科）が知られている。草地に生息する種と思われる。
- ◆ 本種の現状 県内ではにかほ市の1か所のみが産地として知られているが、同地では継続して見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。

（梅津 一史）

チョウ目ツトガ科

# ナイトウツトガ

*Chilo infuscatellus* Snellen, 1890

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（秋田県、新潟県、石川県、富山県）。台湾、朝鮮半島、中国、中央アジアから東南アジア。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、東南アジアではサトウキビ、中国ではトウモロコシなどが知られているという。国内の産地はいずれも海岸砂丘地やその近傍。韓国の生息地も海岸砂丘地であるという。
- ◆ 本種の現状 秋田市の海岸砂丘地で2015年に発見され、その後も同地で見出されている。生息地付近は風力発電施設の建設が進んでいる。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設などによる植生の変化。

（梅津 一史）

チョウ目ツトガ科

# ソトシロスジミズメイガ

*Chilo infuscatellus* Snellen, 1890

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北地方）。中国、ロシア南東部、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 にかほ市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。ヨーロッパの近縁種はスイレン科、ヒルムシロ科などを寄主とするという。幼虫は水棲と思われる、池沼に生息する。
- ◆ 本種の現状 大仙市の溜池で1997年に複数個体が採集されている。また、にかほ市の湿原と草原が混交する環境で2016年に採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や排水事業などによる生息に適した環境の悪化・消失。

（梅津 一史）

チョウ目ツトガ科

ウスキシダメイガ

*Musotima colonialis* (Bremer, 1864)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。台湾、中国、ネパール、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市、横手市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知だが、近縁種の食草は全てシダ植物であるという。
- ◆ 本種の現状 県内の産地は河川敷や湿原など湿性の植生。にかほ市の産地では個体数は少ないものの近年まで継続して見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川整備、排水事業などによる生息に適した環境の悪化・消失。
- ◆ 特記事項 秋田県版レッドデータブック2002年版ではウスキシダメイガの和名で掲載されている。その後分類の見直しによりシダメイガ亜科に移され、和名が改称された。

(梅津 一史)

チョウ目セセリチョウ科

ギンイチモンジセセリ

*Leptalina unicolor* (Bremer & Grey, 1852)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：留意種

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州に分布するが産地はやや局地的。朝鮮半島、中国東北部、中国北部。
- ◆ 県内の分布 ほぼ全県にわたり産地が点在。
- ◆ 本種の概要 食草はススキ、チガヤ、ヨシ、オギなどイネ科植物。広いススキ草原に多いが、山間の狭い草地に生息している例もある。
- ◆ 本種の現状 1990年代からやや減少傾向が見られたが、その後姿が見られなくなった生息地が多くなり、個体数が多かった産地でも大きく減少している。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地・放牧地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。

(梅津 一史)

チョウ目セセリチョウ科

ヘリグロチャバネセセリ

*Thymelicus sylvaticus sylvaticus* (Bremer, 1861)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。東北地方では分布は普遍的でない。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、小坂町、大館市。
- ◆ 本種の概要 食草はクサヨシ、カモジグサ、ヤマカモジグサなどイネ科とテキリスゲなどカヤツリグサ科。明るい草地から樹木と草地が入り交じった環境に生息する。
- ◆ 本種の現状 1950年代末から1980年代末にかけて、県北内陸部の5か所で採集された記録があるが、個体数は少なかった。1990年以降はしばらく情報がなかったが、2000年代以降、小坂町と鹿角市で各1例の生息情報がある。
- ◆ 生存に対する脅威 採草地・放牧地などの半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息地に適した環境の消失。

(梅津 一史)

チョウ目アゲハチョウ科

ギフチョウ

*Luehdorfia japonica* Leech, 1889

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 本州。秋田県は北限。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はカンアオイ属(ウマノスズクサ科)で、県内では一部でコシノカンアオイの例があったが、トウゴクサイシンの場所が多く、オクエゾサイシンを食べているところもある。落葉広葉樹林に生息する。
- ◆ 本種の現状 鳥海山西側山麓では1950年代から生息が知られ、1990年代まで見られたが、スギ植林の成長で食草が消えた所もあり、産地、個体数とも大きく減少した。鳥海山北側山麓では1990年代には一部で多産したこともあったが、その後個体数は減少した。
- ◆ 生存に対する脅威 薪炭林の放置やスギ植林の成長による環境変化。一部地域では採集圧も懸念される。

(梅津 一史)

チョウ目シロチョウ科

# ヒメシロチョウ

*Leptidea amurensis vibilia* (Janson, 1878)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：絶滅危惧IB類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部からアルタイ山脈。日本産は全て名義タイプ亜種とする見解と、北海道・本州中部以北産を別亜種とする見解がある。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、八峰町、能代市、仙北市、大仙市、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 食草はツルフジバカマ、カラスノエンドウ、ピロードクサフジ(以上マメ科)が知られる。草地に生息し、河川堤防や耕作地の土手に見られることが多い。
- ◆ 本種の現状 かつては内陸部の河川堤防などに多くの産地があったが、現在ではその大部分で姿を消した。沿岸部唯一の多産地であった八峰町の生息地も、最近10年以上観察例がない。最近10年ほどの範囲では米代川流域にわずかな産地が知られるのみ。河川堤防では植生の変化は見られないのに姿を消した所も多い。
- ◆ 生存に対する脅威 河川堤防などの草地の管理の変化、採草地跡の放置による植生の変化などによる生息適地の減少。  
(梅津 一史)

チョウ目シジミチョウ科

# ウラゴマダラシジミ

*Artopoetes pryeri pryeri* (Murray, 1873)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、佐渡島、隠岐、四国、九州。東北地方中部から新潟県にかけて分布しない地域がある。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はイボタノキ、ミヤマイボタなどモクセイ科。落葉広葉樹林や林縁で見られる。
- ◆ 本種の現状 1960年以降県北内陸部では多くの産地が知られていたが、宅地や農地の開発で環境が大きく損なわれたところが多く、現在では生息地はかなり限定されている。仙北市で知られていた産地は現在では姿が見られず、開発事業が影響していると思われる。
- ◆ 生存に対する脅威 宅地や農地などの開発事業などによる里地の環境変化。  
(梅津 一史)

チョウ目シジミチョウ科

# カシワアカシジミ

*Japonica onoi onoi* Murayama, 1953

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：絶滅危惧II類



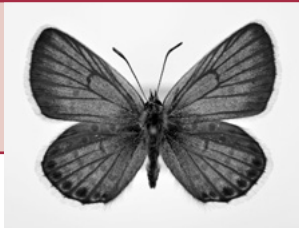
- ◆ 国内外の分布 北海道、東北地方、広島県。広島県の個体群は別亜種。東北地方では北部に分布し、飛び離れて福島県の一部に分布する。ロシア南東部、中国西部。
- ◆ 県内の分布 八峰町、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はカシワ。海岸のカシワ林や山地のカシワを主体とした落葉広葉樹林に生息する。
- ◆ 本種の現状 県内では1993年に初めて発見され、最初の発見地である八峰町の産地では現在でも生息が確認されているが、個体数は多くない。仙北市の産地では、発見当初は比較的多く見られたが、その後開発事業によるカシワ林の減少や植生の変化で大きく減少し、最近10年ほどは生息情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発事業、風力発電施設建設などによる生息適地の減少。  
(梅津 一史)

チョウ目シジミチョウ科

# ヒメシジミ

*Plebejus argus micrargus* (Butler, 1878)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：留意種  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。北海道産は別亜種とされる。サハリン、朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、由利本荘市、仙北市、横手市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草はヨモギ類、アザミ類などのキク科だが、マメ科、タデ科、ユキノシタ科、ヤナギ科、バラ科、カバノキ科、ツツジ科、ブナ科の記録もある。丘陵地から山地の草地に生息し、小規模な草地にも見られる。
- ◆ 本種の現状 本種が秋田県に産することは1979年に初めて明らかになったが、1980～1990年代には内陸部の各所で次々と生息地が見つかった。しかし、2000年代に入ってからその多くで姿を消し、最近の10年ほどの間では東成瀬村の一部のみでの生息情報しかない。
- ◆ 生存に対する脅威 草地の管理の変化による植生の変化。  
(梅津 一史)



チョウ目シャクガ科

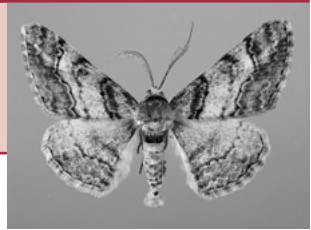
## キタルリモンエダシャク

*Cleora cinctaria superfumata* Inoue, 1972

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道(十勝・釧路地方)、本州(秋田県、長野県)。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 ヨモギ(キク科)とギンギシ(タデ科)で飼育されているという。名義タイプ亜種は広食性で草本も食べるが主な寄主植物は広葉樹であるという。長野県では古い記録のみで追加の報告がない。
- ◆ 本種の現状 産地は1か所だけであるが現在でも安定して見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 生息地が局限されている。半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息に適した環境の消失。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## トギレフユエダシャク

*Protalia concinnata* (Wileman, 1911)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はカバノキ科、ブナ科、クスノキ科、マンサク科、バラ科、アワブキ科の6科12種が報告されており、広食性。
- ◆ 本種の現状 にかほ市の1か所だけで採集されているが、同地では繰り返し見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## スモモエダシャク

*Angerona prunaria turbata* Prout, 1929

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国。朝鮮半島、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、小坂町、北秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はマツ科、ブナ科、カバノキ科、マメ科、ムクロジ科が知られ広食性。
- ◆ 本種の現状 鹿角市の8か所、小坂町、北秋田市、仙北市の各1か所で採集されている。鹿角市以外ではごく散発的にしか見出されていない。鹿角市北部では1970年代にしばしば見出されていたが、その後の情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## ヒメシタコバナネナミシャク

*Trichopteryx microloba* Inoue, 1943

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、八峰町。
- ◆ 本種の概要 食草はイヌブナで飼育された記録がある。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では1970年代に一度だけ多数が採集されたことがあるが、その後の情報がない。八峰町では2000年代に同じ場所で2年にわたり少数が採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



チョウ目シャクガ科

# テンスジアオナミシャク

*Pasiphila debiliata* (Hübner, 1817)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(兵庫県)。ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草としてオオバスノキ(ツツジ科)が記録されている。兵庫県で採集された1個体と北海道で飼育・羽化させた4個体しか知られていないという。
- ◆ 本種の現状 県内では太平山麓の1か所で採集されているのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャチホコガ科

# ギンボシシャチホコ

*Rosama cinnamomea* Leech, 1888

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、男鹿市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、成虫は6月～7月と8月～9月に出現するとされているが、秋田県での記録は8月である。ヌスビトハギを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では1970年代に鹿角市と北秋田市で記録された後、2010年に男鹿市で記録されるまで記録がなかった。その後は確認されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

チョウ目ドクガ科

# ウスジロドクガ

*Calliteara virginea* (Oberthür, 1879)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 本州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、成虫は5～6月に出現する。東北地方や本州中部の草原で得られるが稀な種で、ハギ類を寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では1992年ににかほ市で記録され、同地ではその後も2009年まで記録されている。以後も2019年まで安定して確認されているが、他の産地は知られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息環境(草原)の消失。

(田中 政行)

チョウ目ドクガ科

# スゲドクガ

*Laelia coenosa sangaica* Moore, 1877

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。朝鮮半島からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、5～6月と8～9月に出現する。湿地の蛾として知られ、ヒメガマ、ヨシ、カヤツリグサ科の一部を寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では1974年に由利本荘市で記録され、その後にかほ市に多産することが判明した。にかほ市の産地では以後2017年まで安定して確認されているが、他の産地は知られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息環境(湿地)の消失。

(田中 政行)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

チョウ目ヒトリガ科

## クシナシホシオビコケガ

*Aemene takahashii* Kishida, 2018

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 にかほ市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 従来ホシオビコケガとされていた種から2018年に分離された種である。分離される以前のホシオビコケガとされていた種は年2化で5～6月と7～10月に出現し、地衣類を寄主植物とすると言われていたが、本種は8月に採集されており、寄主植物は不明である。
- ◆ 本種の現状 ごく最近記載された種で、記載に用いられた標本の産地は、秋田県、新潟県、東京都、長野県、岐阜県である。県内での分布状況は明らかにされていない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

チョウ目ヒトリガ科

## マエアカヒトリ

*Aloa lactinea* (Cramer, 1777)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、屋久島、トカラ列島、沖縄島、石垣島、西表島。台湾、中国、フィリピン、マレー半島からインド。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 成虫は5～10月に採集されており、年数回発生すると推定されているが、秋田県での2例は7～8月である。ネギ、ダイズ、トウモロコシ、ミソハギを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では1970年代に秋田市で2例が記録されているのみで、その後は確認されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 圃場整備による農地環境の変化など。

(田中 政行)

チョウ目ヤガ科

## ヨスジカバイロアツバ

*Herminia robiginosa* Staudinger, 1888

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（青森県、秋田県）。朝鮮半島、ロシア東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。沼沢地に生息する。にかほ市の産地は国内の分布南限。
- ◆ 本種の現状 にかほ市の2か所から記録されている。1か所では現在まで継続して生息情報が得られている。
- ◆ 生存に対する脅威 生息地が局限されている。開発などによる池沼の環境改変。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## シラユキコヤガ

*Eulocastra sasakii* Sugi, 1985

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 本州（秋田県、愛知県、岐阜県、福井県）。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 秋田市産の標本に基づいて新種として命名された種。食草は不明。滲出水で涵養される植生高の低い湿地に生息する。
- ◆ 本種の現状 秋田市の産地であった湿地は消滅した。大仙市の産地では現在でも生息が確認されており、隣接地でも見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 特殊なタイプの湿地に依存し、生息地が局限されている。開発などによる生息地の改変。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## スミレクビグロクチバ

*Lygephila nigricostata* (Graeser, 1890)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（中部地方以北）、九州（久住山、阿蘇山）。朝鮮半島、中国、ロシア南東部、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 男鹿市。
- ◆ 本種の概要 食草はクサフジ（マメ科）が知られている。草地に生息する種と思われる。
- ◆ 本種の現状 県内では男鹿市の岩礁海岸に面した草地に見られ、これまでに数か所で見出された情報がある。1990年代に県内で初めて発見された地点は、整地され駐車場になっている。
- ◆ 生存に対する脅威 観光開発などによる生息地の改変。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## ウンモンキシタバ

*Chrysorithrum flavomaculatum* (Bremer, 1861)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はクサフジ（マメ科）が知られている。草地に生息する種と思われる。
- ◆ 本種の現状 秋田市の雄物川河川敷の2か所で採集された記録があるが、最近20年ほどは生息情報が得られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修や堤防の管理の変化による植生の変化。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## シロスジキンウワバ

*Diachrysia zosimi* (Hübner, 1822)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。ヨーロッパにかけてのユーラシア北部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、大仙市、横手市。
- ◆ 本種の概要 食草はホザキシモツケ、ナガボノシロワレモコウ（以上バラ科）が知られている。寒冷な湿地を好むという。
- ◆ 本種の現状 県内では散発的に採集記録がある。産地は里地的環境で、生息に必要な環境条件は推定しがたい。近年も大仙市で散発的に見つかっている。
- ◆ 生存に対する脅威 耕地整理や里地の管理の変化による環境変化。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## ダイセンセダカモクメ

*Cucullia mandshuriae* Oberthür, 1884

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 本州（秋田県、山梨県、静岡県、奈良県、鳥取県、山口県）、九州（福岡県、長崎県）。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はノコンギク、ユウガギク（以上キク科）が知られている。分布はかなり局所的で、大規模な草原が維持されている場所で記録されている。
- ◆ 本種の現状 1980年代に県内では初めてにかほ市の草原で発見され、同地では現在に至るまで安定して生息が確認されている。ほかの産地は知られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 草地の放置による遷移の進行や植林などによる植生の変化。

（梅津 一史）

## チョウ目ヤガ科

## ニセタバコガ

*Heliocheilus fervens* (Butler, 1881)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部、インド北部、パキスタン。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、男鹿市、由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。草地に生息するが、産地は局所的で個体数も少ない。
- ◆ 本種の現状 県内では広い草原などで採集されているが、数年程度で姿を消すなど生息状況は不安定な場合もある。近年は男鹿市で継続的に見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 半自然草原の放置による遷移の進行や植林などによる植生の変化。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## セプトモクメヨトウ

*Auchmis saga* (Butler, 1878)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、三宅島、四国、九州。台湾、朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、男鹿市。
- ◆ 本種の概要 食草としてメギ(メギ科)が知られている。韓国ではヒロハヘビノボラス(メギ科)の記録もある。
- ◆ 本種の現状 1970年代に秋田市で発見されて以後、同地ではその後の記録がなく、他の地域の情報もなかったが、2009年以降、男鹿市で継続的に見出されている。男鹿市の産地はススキ草原の周辺で、食草となっている可能性があるヒロハヘビノボラスが岩礫地に生育している。
- ◆ 生存に対する脅威 草地の放置による遷移の進行や植林などによる植生の変化。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## アズサキリガ

*Pseudopanolis azusa* Sugi, 1968

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：—

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 大仙市。
- ◆ 本種の概要 幼虫はシラビソ、コメツガ、トウヒ、ゴヨウマツ(以上マツ科)で飼育されている。東北地方では秋田県と福島県でごくわずかな産地しか知られていない。
- ◆ 本種の現状 県内では2001年に大仙市で初めて見つかった。この産地ではその後も継続して見出されている。これとは別に奥羽山系でも1か所で採集された記録がある。成虫の出現期が早春で、積雪のために生息地まで行けないことも多いため、十分に調査できていない可能性もある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ムラサキヨトウ

*Lacanobia contigua* (Denis & Schiffermüller, 1775)

秋田県2020：絶滅危惧IB類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道から本州中北部。朝鮮半島、中国、ロシア南東部、シベリア南部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 幼虫は多食性であることがヨーロッパで知られている。
- ◆ 本種の現状 鹿角市から仙北市にかけての奥羽山系で採集された記録がある。1970年代半ば以降は生息情報が得られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

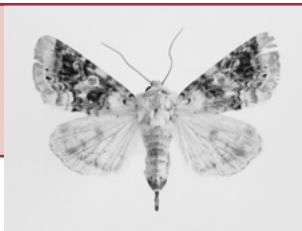


チョウ目ヤガ科

# コハイロヨトウ

*Hadena aberrans* (Eversmann, 1856)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国北部、ロシア南東部、シベリア南部からモンゴル。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草としてフシグロ(ナデシコ科)が知られているという。
- ◆ 本種の現状 県内での採集記録はごく少なく散発的で、比較的近年ではにかほ市の1か所で採集されているのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 草地の放置による遷移の進行や植林などによる植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

# シロオビヨトウ

*Hadena compta* (Denis & Schiffermüller, 1775)

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(東北地方、新潟県及び中部地方山地)。中国、モンゴルからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、潟上市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草としてカワラナデシコ(ナデシコ科)が知られている。本州中部では山地の草原に産するが、北日本では海岸に限られる傾向が強い。
- ◆ 本種の現状 海岸砂丘地や岩礁海岸の草地で採集例があるが、個体数はごく少ない。最近20年近く生息情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設やゴミ投棄などによる生息適地の環境悪化・減少。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

# キタクロヤガ

*Euxoa nigricans ishidae* Matsumura, 1926

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、東北(岩手県、秋田県)。サハリン、ロシア南東部、カムチャツカ半島からシベリア、ヨーロッパまで分布。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパでは各種作物野菜を加害するほかオオバコ科、セリ科が知られているという。国内では草地に生息するものと思われる。
- ◆ 本種の現状 八幡平山麓の2か所で1970年代に採集されており、そのうち1か所では2年にわたり見出されているが、その後40年以上生息情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 半自然草原の放置による遷移の進行や植林などによる植生の変化。
- ◆ 特記事項 秋田県版レッドデータブック2002年版ではクロヤガ *Agrotis nigrata* Matsumura, 1925として掲載されているが、小林(2010)により北海道産が *A. nigricans ishidae* とされて和名も改称され、梅津(2017)により秋田県産も *A. nigricans ishidae* と同定された。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

# ハマヤガ

*Agrotis desertorum hamayaga* Kobayashi, 2009

秋田県2020：絶滅危惧IB類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県、新潟県、石川県)。南ウラルから中央アジアの乾燥地帯、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 能代市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はカワラヨモギが知られている。国内では砂浜海岸数カ所に産地が局限されている。砂浜海岸の不安定帯に生息する。
- ◆ 本種の現状 能代市と秋田市の砂浜海岸で記録されている。秋田市では継続して確認されているが、能代市ではその後記録がない。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設やゴミ投棄などによる生息適地の環境悪化、減少。
- ◆ 特記事項 秋田県版レッドデータブック2002年版では *A. ripae* の学名で掲載されているが、誤同定であることが明らかになり改められた。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

トンボ目サナエトンボ科

アオサナエ

*Nihonogomphus viridis* Oguma, 1926

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 大仙市、横手市。
- ◆ 本種の概要 清流の中流域に生息する。
- ◆ 本種の現状 特定の流水に生息し、分布域は局限される。各地域で再確認されているが個体数は少ない。成虫は2003年に大仙市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修、水質汚濁等生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

カメムシ目コオイムシ科

タガメ

*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、隠岐、淡路島、四国、九州、香取、対馬、奄美大島、沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島。台湾、朝鮮半島、中国、ロシア極東(沿海州)、東洋区。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 超大型の水生カメムシ類で、抽水植物が豊富な止水域や緩流に見られる。メスは水面上の植物の茎などに卵塊を産み、オスは孵化するまでこれを保護する。捕食性で、水中で待ち伏せして小魚やオタマジャクシ、他の水生昆虫などを捕獲する。
- ◆ 本種の現状 現存する標本の採集地は、大仙市の1例以外は全て秋田市である。灯火に飛来した例を除けば、いずれも小規模な溜池で確認されている。これらの溜池の中には管理放棄により消失したものもあり、今後一層の減少が懸念される。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息環境(溜池)の消失。

(田中 政行)

コウチュウ目ハンミョウ科

アイヌハンミョウ

*Cicindela gemmata aino* Lewis, 1891

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、済州島、中国、シベリア東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 仙北市(2000年以降は生息が確認されていない)、その後大仙市で2か所、由利本荘市で1か所生息地が発見されたが、いずれも個体数は極めて少なく安定的な産地とは言えない。
- ◆ 本種の現状 河川上流部から中流部河川数で川原部分に生息する。川からやや離れた泥部や砂部には普通種のニワハンミョウがあり、すみ分けているようだが本種の方が個体数ははるかに少ない。河川改修などによる環境変化には非常に弱い種と思われる。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修。

(佐藤 福男)

コウチュウ目ホソクビゴミムシ科

アオバネホソクビゴミムシ

*Brachinus aeneicostis* Bates, 1883

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、九州。朝鮮半島、シベリア東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 秋田市が唯一の生息地であったが、その後の調査により、雄物川の中・下流域から生息が確認され、低地の止水域に局在する種ではなく、河川敷にも生息していることが明らかになった。
- ◆ 本種の現状 低地の湿地は水質の悪化が激しく、環境の劣化が懸念される。新たに発見された雄物川中流域の河川敷は、大きな改変がなされていない場所である。今後、工事等の改変が想定される場合は留意する必要がある。
- ◆ 生存に対する脅威 水質の悪化、河川改修などによる生息域の改変。

(佐藤 福男)

コウチュウ目オサムシ科

# クロナガオサムシ

*Leptocarabus procerulus* Chaudoir, 1862

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（紀伊半島を除く、九州）。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、小坂町、由利本荘市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 東北の日本海側では希な種で、以前は岩手県に接した鹿角市、東成瀬村の2か所のみ知られていた。その後青森県に接した小坂町でも確認されたが、いずれも隣県からの流入を示唆する小規模な産地である。その後、由利本荘市で孤立した産地が発見され2013年発行の最新の図鑑にも分布図として反映されている。
- ◆ 本種の現状 産地ではいずれも非常に個体数が少ない。近似の別種（コクロナガオサムシ）が同所的に多産しており、生態的にこの種と競合している可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 いずれも小規模な生息域のため、道路・ダムなどの建設が脅威となる可能性は高い。（佐藤 福男）

コウチュウ目ゴミムシ科

# ハヤチネヌレチゴミムシ

*Apatrobis hayachinensis* Nakane, 1968

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（岩手県、秋田県）。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 早池峰山（岩手県）を基産地とするヌレチゴミムシ属の一種である。近似種は本州中部から新潟県、山形県の高山部に数種分布しており、本種はこの属の北限分布種である。
- ◆ 本種の現状 仙北市では台地状の高地一帯に生息する。高地低木草本帯を代表する種である。生息地一帯は国立公園特別保護区に指定されているが、道路の建設以降側溝に落ち込む個体が多く、周辺の個体数に影響を与えている可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 道路脇の側溝（落ち込むと上がれない構造）。（佐藤 福男）

コウチュウ目ゲンゴロウ科

# チンメルマンセスジゲンゴロウ

*Copelatus zimmermanni* Gschwendtner, 1934

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（秋田県、静岡県、山口県）、九州（佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県）、南西諸島（トカラ中之島、口之島、沖永良部島、奄美大島、沖縄県久米島、南大東島）。中国南部。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 極めて特異な分布を示す種である。南西諸島が分布中心地であり、秋田県は極めて飛び離れた産地である。底質が腐植質の沼でドロをかき回して採集される。にかほ市では低地に産地が散在するが、飛んで男鹿市の産地が発見された。
- ◆ 本種の現状 近年になって本州でも新しい産地（静岡県、山口県）が発見されたが、分布の特異性は以前と同様である。県内では由利地方沿岸部と男鹿市に局地的に産するが、産地での個体数は少なくない。
- ◆ 生存に対する脅威 生息環境が人里に近い水域であり、道路開発などによる水域の改変には留意する必要がある。（佐藤 福男）

コウチュウ目ゲンゴロウ科

# ニセルイスツブゲンゴロウ

*Laccophilus lewisoides* Brancucci, 1983

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（宮城県、秋田県、福島県、茨城県、千葉県、鳥取県）。中国、韓国、ロシア（ウスリー）。
- ◆ 県内の分布 潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 中国の天津から記載された種。日本では佐藤福男により1996年秋田県で最初に発見された。その後日本各地で発見されたが、産地は局所的である。
- ◆ 本種の現状 県内では沿岸部の5か所から知られている。しかし、最初の発見地ではその後確認できずにいる。また、他の4か所も開発などで再確認できていない。
- ◆ 生存に対する脅威 オオクチバスが放たれると本種は姿を消すようである。（佐藤 福男）



コウチュウ目ゲンゴロウ科

# シマゲンゴロウ

*Hydaticus bowringii* Clark, 1864

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道(極希)本州、四国、九州、南西諸島(トカラ中之島、宝島)。朝鮮、台湾、中国。
- ◆ 県内の分布 大館市、由利本荘市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 中型種、特徴的な斑紋で他種と間違えることはない。里山的で水環境が良好な所以外では見られなくなった。里山の荒廃が進んでおり、最近姿を見かける機会が非常に少なくなった。灯火に飛来する習性があり、産地が見つかった例もある。
- ◆ 本種の現状 県内では6か所確認されているが、個体数が多かった2か所は1996年以降確認ができていない。
- ◆ 生存に対する脅威 近くに水田がある場合が多いが耕作放棄地が増大し、生息地としての堤などの管理が粗雑になりつつある。  
(佐藤 福男)

コウチュウ目クワガタムシ科

# オオクワガタ

*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse, 1874

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬(中国、朝鮮半島は別亜種)。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 西南暖地では里山の二次林(クヌギ林)を生息地としているが、本県では奥羽山脈添いのブナ、ミズナラ林で主に灯火に飛来した個体が得られている。個体数は極めて少ない。
- ◆ 本種の現状 県内では1970年代から記録があるが、記録地は全て保護の網がかかっていない。幼虫は主にブナの朽木に潜入することから、これを割り出して幼虫、成虫を獲た跡を目撃することが多い。最近では仙北市以外での記録はない。
- ◆ 生存に対する脅威 ブナ林の伐採、朽木の除去、加えて採集のためにブナ朽木を破壊することなどが脅威である。  
(佐藤 福男)

コウチュウ目コガネムシ科

# オオチャイロハナムグリ

*Osmoderma opicum* Lewis, 1887

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、屋久島。朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、能代市、由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 幼虫が樹洞中の腐植土を餌とするため、樹洞のある老齢木が存在する森林環境を必要とする。一定期間経過後に伐採される二次林には生息できない。このような条件が整っている場合は樹種は選ばないようで、ブナ、ミズナラ、トチ、スギ、クロベなどを発生木として確認している。
- ◆ 本種の現状 国立公園などで法的に保護されている地域は問題がないが、樹洞のある木は伐採の対象になりやすく、チップ工場などで本種が生息していた跡のある材を見かける事がある。そのような材の産出した場所は本種の生息地が消滅したことになる。
- ◆ 生存に対する脅威 森林の伐採。  
(佐藤 福男)

トビケラ目シンテイトビケラ科

# シンテイトビケラ

*Dipseudopsis collaris* McLachlan, 1863

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 日本、中国、フィリピン。
- ◆ 県内の分布 男鹿市。
- ◆ 本種の概要 湖や池沼の底の砂泥中に生息する。幼虫は泥底に細長いU字型の巣穴を掘って棲んでいる。
- ◆ 本種の現状 県内では男鹿市のマール湖で幼虫の採集記録がある。幼虫は湖岸から水深約1.5~3mの湖棚にかけて生息している。2014年5月に同じマール湖で採集を試みたが本種幼虫は確認できなかった。このマール湖を含め、それ以降の県内における幼虫及び成虫の採集記録はない。
- ◆ 生存に対する脅威 生活排水などによる水質の悪化。オオクチバスによる食害など。  
(青谷 晃吉)



トビケラ目エグリトビケラ科

# ババホタルトビケラ

*Nothopsyche longicornis* Nakahara, 1914

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：該当なし



(写真は幼虫)

- ◆ 国内外の分布 本州。
- ◆ 県内の分布 仙北市、大仙市、美郷町。
- ◆ 本種の概要 幼虫は主に湧水流に生息し、砂粒でできた円筒型の巣を作り、水底の石面に付く糸状藻類や落葉に付着する珪藻類などを摂食する。年1世代で終齢幼虫は岸際で夏眠し、晩秋に羽化する。
- ◆ 本種の現状 奥羽山脈西部湧水群の比較的湧水量の多い湧泉から幼虫・成虫の採集記録がある。1980年代、高密度で生息していたが、その後湧水の枯渇により絶滅した場所がある。湧水量が豊富で水温の変動が小さいことが生息のための条件になっていると考えられる。
- ◆ 生存に対する脅威 圃場整備に伴う工事等による湧泉の埋没。地下水位の低下などによる湧水量の減少、湧水の枯渇。  
(青谷 晃吉)

トビケラ目エグリトビケラ科

# クロモンエグリトビケラ

*Hydatophylax nigrovittatus* (McLachlan, 1872)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種IA類  
環境省2019：該当なし



(写真は幼虫)

- ◆ 国内外の分布 本州。ロシア、韓国、中国、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 仙北市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 山地溪流及び湧水流に生息する。幼虫は植物片と砂粒で円筒型の巣を作るが、終齢幼虫の巣は砂粒主体で頑丈である。初春に羽化する。
- ◆ 本種の現状 山地溪流の石礫底における幼虫の採集記録があるが、稀に平地の湧水流に生息する個体群もある。1980年代に幼虫・成虫が確認された大仙市の湧水からはその後記録がなく、絶滅したと考えられる。2019年現在、幼虫の生息を確認している湧水は仙北市の1か所のみである。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修。圃場整備等の開発に伴う湧泉の埋没。地下水位低下などによる湧水量の減少、湧水の枯渇。  
(青谷 晃吉)

チョウ目ツトガ科

# ヒメキテンシロツトガ

*Calamotropha fulvifusalis* (Hampson, 1900)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：—  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(東北地方、北陸地方)。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 大館市、三種町、大湯村、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。低湿地に生息する種と考えられる。
- ◆ 本種の現状 県内では1950～1980年代に散発的な採集例があるだけで個体数は少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川整備などによる生息環境の改変。

(梅津 一史)

チョウ目ツトガ科

# モリオカツトガ

*Chrysoteuchia moriokensis* (Okano, 1958)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道(南部)、本州(青森県、岩手県、秋田県)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。冷涼な湿地に生息する種と思われる。
- ◆ 本種の現状 仙北市の産地は開発やスギ植林によって衰退している。近年、鳥海山北側山麓の複数の湿原で採集されているが個体数は少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や植林などによる生息環境の改変。

(梅津 一史)

哺乳類

昆虫類

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

チョウ目ツトガ科

## チビウスキオオメイガ

*Scirpophaga micraurica* Sasaki, 1994

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種IA類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県、石川県)。日本固有種
- ◆ 県内の分布 男鹿市、大潟村、潟上市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 秋田市の海岸で採集された標本を基に新種として記載された種。食草は未知だが、近縁種の食草の知見からは湿地のイネ科やカヤツリグサ科と推測される。
- ◆ 本種の現状 2000年代までは県内3か所だけが生息地として知られていたが、その後砂丘地でいくつかの産地が見つかり、北陸地方では多産した記録が発表されている。本種が見出されている県内の砂丘地の多くでは風力発電所の建設が進んでいる。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設やゴミ投棄などによる生息適地の環境悪化・減少。

(梅津 一史)

チョウ目ツトガ科

## ウスマダラミズメイガ

*Elophila orientalis* (Filipjev, 1934)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(近畿地方以東)。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、能代市、男鹿市、潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はコナギ(ミズアオイ科)などの水生植物。池沼を伴う湿原に生息する。
- ◆ 本種の現状 県内数か所の湿地で採集されているが、潟上市の産地は乾燥化などにより大きく環境が悪化した。能代市、秋田市の産地は大きな環境変化は見られないが、近年の生息情報が得られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる生息環境の悪化、生活排水などによる水質の悪化。

(梅津 一史)

チョウ目アゲハチョウ科

## ヒメギフチョウ

*Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko, 1913

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：留意種

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道・本州(中部以北) 北海道の個体群と本州の個体群は別亜種。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 男鹿半島と沖積平野を除いてほぼ全県に分布。
- ◆ 本種の概要 食草はトウゴクサイシン、オクエゾサイシン(以上ウマノスズクサ科)。落葉広葉樹林に生息する。
- ◆ 本種の現状 かつては生息地が多く個体数も少なくなかったが、最近10数年ほどの間に、かつて多産した場所も含め姿を見なくなった産地が多くなり、特に秋田市周辺ではほとんど見られなくなった。急な変化であるが原因は明らかでない。
- ◆ 生存に対する脅威 薪炭林の放置やスギ植林による落葉広葉樹林の植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目シジミチョウ科

## ハヤシミドリシジミ

*Favonius ultramarinus ultramarinus* (Fixsen, 1887)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。産地は局地的。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 八峰町、男鹿市、由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はカシワに限定される。カシワを主体とした落葉広葉樹林に生息する。
- ◆ 本種の現状 海岸のカシワ林や内陸の火山山麓のカシワ林に見られるが産地は局地的。八峰町では個体数が多いが、ほかの産地では多くない。
- ◆ 生存に対する脅威 薪炭林の放置による落葉広葉樹林の植生の変化。加えて、海岸では風力発電所の建設などによる植生の変化。

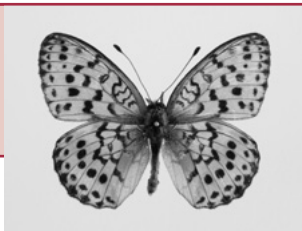
(梅津 一史)

チョウ目タテハチョウ科

# ヒョウモンチョウ

*Brenthis daphne iwatensis* (Okano, 1951)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：準絶滅危惧



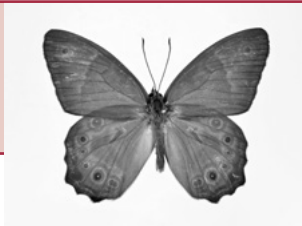
- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北北部、関東北部から中部山地）。朝鮮半島、中国東北部からヨーロッパ。北海道と東北北部の個体群と本州中部の個体群はそれぞれ別亜種とされる。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はナガボノシロワレモコウ（バラ科）。地域によりオニシモツケやシモツケ属（以上バラ科）が食草となっているところもある。草地に生息する。
- ◆ 本種の現状 鹿角市八幡平付近に産することは1950年代から知られており、さらに鹿角市北部でも生息地が見つかったが、これらの場所では1990年頃を最後に生息情報が途絶えている。1990年代に発見された北秋田市の生息地では現在も見られるが、生息範囲の縮小、分断が進む傾向にある。
- ◆ 生存に対する脅威 草地の管理放棄や牧草地化、開発事業などによる、生息に適した環境の縮小・消滅。（梅津 一史）

チョウ目タテハチョウ科

# ヒカゲチョウ

*Lethe sicelis* (Hewitson, [1862])

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：情報不足種  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。東北地方や九州では分布は限られる。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はメダケ、ヤダケ、アズマネザサ、チシマザサなどタケ・ササ類（イネ科）。広葉樹林の林内や林縁の日陰で見られることが多い。
- ◆ 本種の現状 県内の古い記録はクロヒカゲの誤認とされていたが、1998年に仙北市で生息が発見され、さらに鹿角市北部でも発見された。その後鹿角市では生息情報が途絶えている。仙北市では初めに発見された場所で見られなくなったが、周辺で散発的に見つまっている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。森林に人手が入らなくなって林内が暗くなるような植生変化が影響している可能性がある。（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

# クロスジアオシャク

*Geometra valida* Felder & Rogenhofer, 1875

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、湯上市、秋田市、由利本荘市、仙北市、横手市。
- ◆ 本種の概要 食草はクリ、クヌギ、アラカシ、コナラ（以上ブナ科）。東北地方でも記録があるが、主に関東地方以西の平地から山地にごく普通であるという。
- ◆ 本種の現状 1980年頃まで各地で採集されていたが、その後情報がなく、最近横手市で採集された。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

# ヒメナミガタアオシャク

*Jodis placida* Inoue, 1986

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 青森県、岩手県、宮城県、秋田県。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 仙北市で採集された標本を基に新種として命名記載された種。隣県においても発見されている。県内の産地はハンノキ林や近くにハンノキがある場所。
- ◆ 本種の現状 最初に採集された産地ではその後の生息情報がないが、それ以外に仙北市では3か所の産地が見つかった。近年の採集例もあり、継続して生息しているものとみられる。
- ◆ 生存に対する脅威 開発による生息地の植生破壊や環境の悪化。（梅津 一史）



チョウ目シャクガ科

## ウラテンシロヒメシャク

*Scopula subpunctaria* (Herrich-Schäffer, 1847)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではシナガワハギ属（マメ科）などの草本が記録されているという。草原での昼間の叩き網でも効率的に採集されるという。
- ◆ 本種の現状 1970年代に鹿角市北部の3か所と由利本荘市の1か所で採集されている。鹿角市では最近1か所で再発見されたが、由利本荘市の産地についてはその後情報がない。
- ◆ 生存に対する脅威 半自然草原の放置による遷移進行や植林などによる生息に適した環境の消失。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## ミチノクヒメシャク

*Scopula michinoku* Sato, 1994

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 岩手県、宮城県、秋田県。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。岩手県では産地が多く、宮城県でも5か所の記録がある。
- ◆ 本種の現状 鹿角市北部の1地域と八幡平山麓で採集されているが、採集例は少ない。近年の採集例はある。
- ◆ 生存に対する脅威 耕地化などによる植生の改変。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## クロシタコバナネナミシャク

*Trichopteryx misera* (Butler, 1879)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、佐渡。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、八峰町、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はカシワ、コナラ、アベマキ（以上ブナ科）が知られる。産地は比較的局地的。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では1970年代に採集された記録があるが、その後の情報がない。八峰町や仙北市では2000年代以降に見出されており、仙北市では複数箇所では採集されているほか、八峰町では多産したことがあったという。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

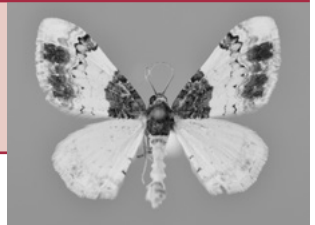
## ムツテンナミシャク

*Catarhoe yokohamae* (Butler, 1881)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（東北地方、中部山地）。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。局地的で非常に少ない。
- ◆ 本種の現状 県内では鹿角市の2地域で採集されており、2000年代の採集例もあることから継続して生息しているとみられる。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



チョウ目シャクガ科

## サザナミフユナミシャク

*Operophtera japonaria* (Leech, 1891)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州（東北地方、関東地方、中部地方）、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はクヌギ、コナラ（以上ブナ科）。東北地方では秋田県と岩手県で採集されている。秋田県のオス個体は関東地方などと異なり前翅の地色が淡色になる。
- ◆ 本種の現状 2000年代以降に仙北市の1地域だけで見出されている。生息地はコナラなどの落葉広葉樹二次林。個体数は多くない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## トビスジトガリナミシャク

*Zola terranea* (Butler, 1879)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、潟上市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はセンニンソウ（キンポウゲ科）が知られる。各地で平地から低山地に産するという。
- ◆ 本種の現状 採集例はさきわめて散発的で県内では1970～1980年代の3例があるのみ。採集された場所の環境はさまざまで特定の環境との結びつきは不明。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## フタシロスジカバナミシャク

*Mesoptila melanolpha* (Swinhoe, 1895)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州（茨城県、和歌山県、兵庫県）、四国、九州、屋久島、沖縄島。台湾、インド北部、スダンランド。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草はタマザキツツラフジ、ハスノハカズラ（以上ツツラフジ科）が知られる。本州では産地が限られ少ないという。
- ◆ 本種の現状 2つの採集例があるだけで非常に少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## イジマカバナミシャク

*Eupithecia thalictrata iijimai* Inoue, 1963

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（岩手県、秋田県）。ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではカラマツソウ属（キンポウゲ科）に固有であるという。北海道では各地に産し比較的多いという。
- ◆ 本種の現状 県内では2つの採集例があるだけで非常に少ない。鹿角市では同時に複数個体が採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

チョウ目シャクガ科

フジカバナミシヤク

*Eupithecia groenblomi* Urbahn, 1969

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（岩手県、秋田県、長野県、静岡県）。ロシア南東部、ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではアキノキリンソウ（キク科）が知られているという。北海道には比較的広く分布しているが、本州では産地は限定され亜高山帯で採集されるがきわめてまれであるという。
- ◆ 本種の現状 八幡平の中腹と山頂部で採集されているが、ごく少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目コブガ科

ミカボコブガ

*"Meganola" mikabo* (Inoue, 1970)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道（南西部）、本州（青森県、秋田県、群馬県、長野県）、九州（大分県）。朝鮮半島、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 八峰町。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草はカシワ（ブナ科）だけが知られる。
- ◆ 本種の現状 県内では八峰町の4か所だけで記録があり、カシワ林のある場所に限られている。2か所では最近も見出されており、継続して生息しているとみられる。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる生息環境の悪化。砂丘地のカシワ林においては風力発電施設の建設。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

マガリスジコヤガ

*Protodeltote wiscottii* (Staudinger, 1888)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種IB類

環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知だが、同属の種はイネ科を食べる。沼沢地で採集されるが少ない。
- ◆ 本種の現状 秋田市とにかほ市の池沼や湿原、河川敷などの低湿地6か所で採集されており、近年まで生息が認められており、新たな産地も見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる生息環境の悪化、生活排水などによる水質の悪化。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

ウスチャマエモンコヤガ

*Chorsia costimacula* (Oberthür, 1880)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。朝鮮半島、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草はリンゴ、ズミ（以上バラ科）が知られている。
- ◆ 本種の現状 県内では6か所で採集されており、いずれも湿性の植生がある環境。一部産地は環境が変わり近年の生息情報がなくなっているが、安定して見出されている産地もある。
- ◆ 生存に対する脅威 湿性の植生やその周辺の開発などによる生息適地の減少・消失。

（梅津 一史）

チョウ目ヤガ科

## ヌマベウスキヨトウ

*Chilodes pacificus* Sugi, 1982

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：絶滅危惧II類



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、湯上市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。ヨシ湿原などの低湿地に生息する。
- ◆ 本種の現状 県内では10か所の採集記録があり、その多くは秋田市やその周辺の低湿地で、特に秋田市北部の溜池などの池沼には生息地が多い。近年の生息情報が無い場所もあるが、半数以上の産地で近年の生息情報が得られている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる生息環境の悪化、生活排水などによる水質の悪化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## ミヤマショウブヨトウ

*Amphipoea burrowsi* (Chapman, 1912)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(東北地方、関東地方・中部地方の山地)。サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、カムチャツカ半島。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はノハナショウブ、ハナショウブが知られる。少ない種で、関東や中部では1000m以上の山地に生息する。
- ◆ 本種の現状 にかほ市の1地域のみで見出されている。この場所では個体数も少なく、安定して生息が確認されている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる生息環境の悪化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## ミスジキリガ

*Jodia sericea* (Butler, 1878)

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：絶滅危惧種II類  
環境省2019：準絶滅危惧



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州に分布するがやや局所的。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、八峰町。
- ◆ 本種の概要 食草はクヌギ、アラカシ、カシワが知られている。灯火にはあまり飛来せず、糖蜜採集で得られている。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では1970年代の記録が1例あるだけで、その後の生息情報は無い。八峰町では海岸沿いのカシワ林で採集されており、近年はむしろ個体数が増加しているとみられる。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設などによるカシワ林の減少。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## ムラサキハガタヨトウ

*Brepharita amica ussuriensis* Sheljuzhko, 1919

秋田県2020：絶滅危惧II類  
秋田県2002：—  
環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(東北地方、中部地方)。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、男鹿市、仙北市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 食草は、国内ではヨモギ(キク科)の記録があり、ヨーロッパではトリカブト類(キンポウゲ科)やウミズザクラ類(バラ科)が主な寄主植物でキク科、セリ科、マメ科などを食べるという。
- ◆ 本種の現状 1960~1970年代に鹿角市、仙北市、湯沢市から各1例の記録があるが、その後生息情報は途絶えていた。男鹿市では最近になって生息地が発見され、その後安定して見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明であるが、里地・里山の管理の変化による環境変化が影響している可能性がある。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## アトジロキリガ

*Dioszeghyana mirabilis* (Sugi, 1955)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州に分布するが局地的。朝鮮半島、ロシア南東部。ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、男鹿市、秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 カシワ(ブナ科)、サクラ類(バラ科)で飼育できるという。
- ◆ 本種の現状 県内での採集例はきわめて散発的で、継続して見出されている産地もない。2000年以降では男鹿市と秋田市で採集例が出ている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

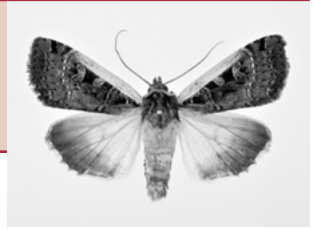
## マエキヤガ

*Xestia stupenda* (Butler, 1878)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道(南部)、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、男鹿市、潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は、ダイズ(マメ科)、ハクサイ、ダイコン(以上アブラナ科)、フキ、ハルジオン(以上キク科)、ウド(ウコギ科)、イタド(タデ科)が知られている。
- ◆ 本種の現状 1970年頃に八幡平の数か所や北秋田市で採集された記録があるが、その後は情報が無い。1980年代には秋田市や潟上市で、2000年代には秋田市や男鹿市で見出されている。男鹿市では継続的に採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## オオシラホシヤガ

*Eurois occulta* (Linnaeus, 1758)

秋田県2020：絶滅危惧II類

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし



- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(中部地方以北)、佐渡。本州ではまれ。ユーラシア、アメリカ大陸に分布する全北区の分布。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 ヨーロッパではヤチヤナギ(ヤマモモ科)につき、バラ科、ツツジ科、サクラソウ科でも飼育できるという。ヨーロッパでは寒地の森林帯の湿地に生息する移動性の高い種として知られている。
- ◆ 本種の現状 八幡平や秋田駒ヶ岳の高所で散発的に採集されたことがあり、秋田駒ヶ岳では同時に複数個体が採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## トンボ目カワトンボ科

## アオハダトンボ

*Calopteryx japonica* Selys, 1869

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。朝鮮半島から中国東北部をへてアムール川沿いの中央シベリアにいたる地域。
- ◆ 県内の分布 横手市。
- ◆ 本種の概要 河川の中流域に生息する。清流に分布するが、産地は局限される。
- ◆ 本種の現状 河川改修で一部の生息地が失われた。3河川で確認されているが、個体群の分布域は狭い。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修などによる生息地の減少。

(青谷 晃吉)



トンボ目ムカシトンボ科

# ムカシトンボ

*Epiophlebia superstes* (Selys, 1889)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、隠岐諸島の島後、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 上小阿仁村、八峰町、秋田市、由利本荘市、仙北市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 蘚類などが付着した良好な河床の山地溪流最上流部に生息する。成虫は2010年に仙北市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 本種の現状 全県下に見られるが、個体数は少ない。砂防ダムの建設等で本来の溪流の環境が失われている地域ある。
- ◆ 生存に対する脅威 森林の伐採、砂防ダム建設による河川荒廃。

(青谷 晃吉)

トンボ目トンボ科

# ハッチョウトンボ

*Nannophya pygmaea* Rambur, 1842

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ベトナム、タイ、ミャンマー、マレーシア、ネパール、台湾、フィリピン、スンダ列島、パプアニューギニア、オーストラリア。
- ◆ 県内の分布 大館市、北秋田市、秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市、横手市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 低地から標高1000mの山地まで草丈の短い、日当たりのよい低湿地に生息する。自然の湿原のほか、条件がよければ各地の休耕田にも多産するが、高標高地には分布しない。環境の変化に敏感な種である。
- ◆ 本種の現状 全県下に分布するが、湿地が開発や乾燥化で失われると絶滅するほか、休耕田は再開発で失われることが多い。
- ◆ 生存に対する脅威 湿地の開発による乾燥化・陸地化。
- ◆ 現在の保護対策 湯ノ台・小方角沢自然環境保全地域指定昆虫類。

(青谷 晃吉)

カワゲラ目アミメカワゲラ科

# シノビアミメカワゲラ

*Megaperlodes niger* Yokoyama, Isobe & Yamamoto, 1990

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：情報不足種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、仙北市、大仙市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 山地溪流の流れが緩やかな石礫底に生息する。初春に羽化する。
- ◆ 本種の現状 河川上流域に分布するが、源流部ではなく、それよりやや下流で幼虫の採集記録がある。県内に占める分布域は比較的広いが、ほとんどの産地で個体数が少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 砂防工事などに伴う土砂供給の遮断、河道の単純化及び流路変更などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

カワゲラ目アミメカワゲラ科

# フライソニアミメカワゲラ

*Perlodes frisonanus* Kohno, 1943

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：—  
環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州。
- ◆ 県内の分布 能代市、秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 河川中・下流域の流れが緩やかな石礫底に生息する。雪解けと同時に羽化する。
- ◆ 本種の現状 雄物川や米代川、子吉川の中・下流域で幼虫の採集記録がある。分布域は比較的広いがほとんどの産地で個体数が少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 大規模出水に伴う治水工事や河川改修等に伴う砂泥の増加などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## カマキリ目カマキリ科

## ウスバカマキリ

*Mantis religiosa sinica* Bazyluk, 1960

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：情報不足

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、南西諸島。朝鮮半島、中国、ロシア南東部（沿海地方）。
- ◆ 県内の分布 八峰町、秋田市、由利本荘市、大仙市、横手市。
- ◆ 本種の概要 河川敷や原野、茅場のような適度に管理された草原に生息するが、本土では生息地は限られている。成虫は9～11月にかけて見られ、地表近くで見つかることが多いが灯火にも飛来する。卵のうは石や枯れ木などの下に産付される。
- ◆ 本種の現状 県内では、成虫は8月中旬～10月下旬に記録あるいは確認されている。内陸部にも少数の記録があるが、海岸部に生息地が多い。河川河口域の草地のほか、砂浜草地にも生息する。
- ◆ 生存に対する脅威 護岸工事、風力発電施設建設などによる生息環境（草地）の変化。

(田中 政行)

## バッタ目バッタ科

## ヤマトマダラバッタ

*Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島南部。
- ◆ 県内の分布 八峰町、能代市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 主に自然度の高い海岸の砂地に生息し、稀に内陸部の大きな川原の砂地に生息する。年1化で、成虫は8～10月に見られる。
- ◆ 本種の現状 八峰町から秋田市にかけての砂浜海岸で記録されており、個体数は少なくない。早くに風力発電施設が建設された雄物川河口においても、2015年までは確認されている。
- ◆ 生存に対する脅威 護岸工事、風力発電施設建設などによる生息環境（海浜草地）の変化。

(田中 政行)

## バッタ目バッタ科

## カワラバッタ

*Eusphingonotus japonicus* (Saussure, 1888)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、隠岐、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 大仙市、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 氾濫原を残す河川中流域の礫質の川原に生息するが、稀に川原から離れた採石場などで見つかることもある。活発に良く飛翔し、幼虫、成虫とも動物食の傾向がある。年1化で、成虫は7～9月に出現する。
- ◆ 本種の現状 雄物川の大仙市より上流及び玉川、皆瀬川の礫質の寄り州や中州に生息する。大仙市の玉川では2015年時点、横手市の皆瀬川では2018年時点でも生息が確認されている。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修による生息環境（礫質の川原や中州）の消失。

(田中 政行)

## コウチュウ目オサムシ科

## アカガネオサムシ

*Carabus granulatus telluris* Lewis, 1882

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 本州亜種としての分布域は本州中～北東部、太平洋側では神奈川県以東、日本海側は新潟県以東、北海道には別亜種が産する。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 大河川の河川敷や沼などの湿地帯に生息する。本県では主に雄物川中流域に分布しており、洪水等で下流まで運ばれたと考えられる個体が秋田市でも確認されている。
- ◆ 本種の現状 現在雄物川中流部で洪水防止のため大規模な改修が行われており、本種の生息域がかなり改変された。しかし、下流の河川敷ではまだ生息が確認されている。米代川や子吉川など他の河川からは知られていない。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修による生息地の改変。

(佐藤 福男)

**コウチュウ目オサムシ科**

**ホソヒメクロオサムシ東北地方南西部亜種**

*Carabus harmandi adatarasanus* Ishikawa, 1966

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本県には2亜種を産する。本亜種は安達太良山（福島県）を基産地とする。本県には鳥海山北麓まで分布するが子吉川を越えて分布していない。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 次亜種と共に冷涼で湿潤な環境を好む。鳥海山では1200mより上で確認されたことがなく、むしろより標高が低く、遅くまで雪が残る北斜面の谷筋など地形的に冷涼な場所で確認されることが多い。個体数は少ない。
- ◆ 本種の現状 標高の低い場所でも上記の条件を満たせば分布している可能性は高い。しかし、保護の網がかかっていない場合もあり、伐採等で乾燥が進むと姿を消す可能性は高い。
- ◆ 生存に対する脅威 森林の伐採による乾燥、地表面温度の上昇。 (佐藤 福男)

**コウチュウ目オサムシ科**

**ホソヒメクロオサムシ奥羽山脈亜種**

*Carabus harmandi yudanus* Nakane, 1977

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 日本から12亜種が記載されている。本県には2亜種を産する。本亜種は鷲合森（岩手県西和賀町、旧湯田町）を基産地とし、奥羽山脈に添って分布する。本亜種の北限は青森県田子町である。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、秋田市、仙北市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 県内における産地は、鹿角市、北秋田市、秋田市、仙北市、東成瀬村である。秋田市の産地は標高200mであるが雪崩が堆積し、6月まで雪が残る場所であった。
- ◆ 本種の現状 本県における分布域は前亜種より地域的にかなり広く、標高の幅も大きい。一部国立、国定公園に含まれる産地もあるが、低標高地の産地は前亜種同様なので伐採等で生息環境が変わり、消滅する可能性は高い。
- ◆ 生存に対する脅威 森林の伐採による乾燥、地表面温度の上昇。 (佐藤 福男)

**コウチュウ目オサムシ科**

**シラカミナガチビゴミムシ**

*Trechiana albidivalis* S.Ueno, 1994

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：情報不足種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本種は白神山地の特有種である。近似の別種は岩木山（青森県）、八幡平（秋田県）などに分布する。
- ◆ 県内の分布 八峰町、藤里町。
- ◆ 本種の概要 谷の源頭部の地下浅層部に生息する関係で体色は全体褐色、後翅は退化しており、目も退化傾向である。そのため移動能力は低く、分化により地域毎に特有種を形成している。秋田県では世界自然遺産指定前（1984年）に藤里町で採集された個体が、1994年の新種記載時にパラタイプとされている。
- ◆ 本種の現状 白神山地は世界自然遺産に指定され、主要生息地は核心部に含まれるために人為的環境改変はない。しかし、近年保護地域以外でも本種が確認された。これらの個体群は伐採等による改変で生存に対する脅威が生ずる可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 世界自然遺産指定区域以外では森林伐採による環境変化により生存への脅威がある。 (佐藤 福男)

**コウチュウ目ゴミムシ科**

**オオトックリゴミムシ**

*Oodes vicarius* Bates, 1873

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：—  
環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 笠原（1985）以降に採集された種である。やや南方系の種で溜池等の水辺に生息地を持つ低湿地性の大型ゴミムシ種である。外形はエチゴトックリゴミムシと非常に似ており、種の同定には注意が必要である。
- ◆ 本種の現状 県内では2例とも秋田市周辺の溜池で確認されている。水田の用水として利用されているが、近年溜池の管理が不十分な状況も散見されることから、今後注視していく必要がある。
- ◆ 生存に対する脅威 溜池の管理不足による生息域の減少。 (佐藤 福男)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## コウチュウ目ゴミムシ科

## エチゴトックリゴミムシ

*Oodes echigonus* Habu & Baba, 1960

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州(青森県、宮城県、秋田県、栃木県、茨城県、千葉県、東京都、兵庫県)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 本県ではオオトックリゴミムシと同じような環境で見られるが、確認例は本種の方が多い。溜池等の周囲で水位低下により土が露出したような場所を好むようである。本県は溜池の数は多いが発見される場所は非常に限られている。
- ◆ 本種の現状 1980年代に秋田市で4例、7個体の記録がある。また、近くの溜池でも1個体確認されている。その後、秋田市大滝山貯水池、にかほ市冬師でも確認されている。
- ◆ 生存に対する脅威 溜池の管理不足による生息域の減少。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ゲンゴロウ科

## トウホクナガケシゲンゴロウ

*Hydroporus tokui* M.Satō, 1985

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道(渡島半島)、東北地方(6県)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 宮城県泉ヶ岳が原産地で東北地方6県と北海道の南部に分布する。この属では珍しく、明瞭な斑紋を有することから他種と混同することはない。長年の探索にもかかわらず県内ではまだ1か所しか生息地が見つかっていない。
- ◆ 本種の現状 玉川上流の小規模な水域1か所のみで確認されている。この水域は湧水で涵養されており、木々に囲まれて日射もないことから常に冷涼に保たれている。ここではエゾゲンゴロウモドキ、チョウカイクロマメゲンゴロウも確認されている貴重な場所である。
- ◆ 生存に対する脅威 生息地に接して作業道路が建設され、法面から土砂の流入が懸念される。水域周辺の伐採は本種生存に対して致命的になる可能性が高い。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ゲンゴロウ科

## カノシマチビゲンゴロウ

*Oreodytes kanoi* (Kamiya, 1938)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州中部、東北地方(岩手県、秋田県、福島県)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 福島県の産地は尾瀬に接する場所である。岩手県は八幡平の頂上付近でのみ確認されており、東北では秋田県が分布の中心地である。本県産個体は斑紋が別種エゾカノシマゲンゴロウに似た個体が多く、福島県産とは印象が異なる。また、温泉水の流入で白濁した流れにもみられることもあり、本種の特異的な生態と言える。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では2か所で温泉の影響のある水流で確認された。2か所とも国立公園内にあるので大幅な改変はない。しかし、仙北市の産地は、酸性中和施設ができてから急速に個体数を減じているようである。
- ◆ 生存に対する脅威 仙北市の場合、酸性水中和による影響が本種にどのような形で表れているのか不明。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ゲンゴロウ科

## ルイスツブゲンゴロウ

*Laccophilus lewisius* Sharp, 1873

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。中国。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、潟上市、五城目町、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 低地の水域、主に溜池に局地的に産する。溜池が散在しても産する池は限られる傾向がある。県内の分布は沿岸部に限られ、内陸部では確認されていない。
- ◆ 本種の現状 分布主体が低地の溜池であることから、溜池の管理が疎かになると姿を消すようである。また、オオクチバスの放流により姿を消した池が秋田市周辺に2か所ある。内陸部に分布していないのは単なる調査不足かもしれない。
- ◆ 生存に対する脅威 溜池の管理不足、オオクチバスの放流。

(佐藤 福男)



コウチュウ目ゲンゴロウ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：該当なし
<b>チョウカイクロマメゲンゴロウ</b>	
<i>Platambus ikedai</i> (Nilsson,1996)	

- ◆ 国内外の分布 北海道(道南)、岩手県、秋田県、山形県、福島県、石川県。日本固有種。
  - ◆ 県内の分布 にかほ市、由利本荘市、仙北市。
  - ◆ 本種の概要 本種は1993年鳥海山900m(山形県)で採集され、*Agabus sp.*として発表された。1996年にNilssonが*Agabus ikedai*として新種記載し、属の変更を経て現学名に至っている。鳥海山周辺のみ産するとされていたが、近似種との区別点が明らかにされた後は各地で発見され、北日本に広く産することが判明した。
  - ◆ 本種の現状 本種の生息環境は山道脇の日が射さない水溜まりのような不安定な場所で確認されることが多い。
  - ◆ 生存に対する脅威 山道の改変、周辺の伐採などで容易に姿を消す可能性は高い。
- (佐藤 福男)

コウチュウ目ゲンゴロウ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：絶滅危惧IB類
<b>オオイチモンジシマゲンゴロウ</b>	
<i>Hydaticus pacificus conspersus</i> Regimbart,1899	

- ◆ 国内外の分布 本州(宮城県、秋田県、山形県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、福井県、京都府)、別亜種が南西諸島(沖縄本島、西表島)。基亜種は東南アジアに広く分布。
  - ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
  - ◆ 本種の概要 にかほ市は以前から知られた産地で個体数は少ないが安定した産地である。最近になって由利本荘市でも確認された。現在この地点が日本における北限の産地である。
  - ◆ 本種の現状 分布が特異的で個体数も少ない。また、生息域の大部分が人里に近く比較的浅い水域を好むことから人為的な改変を受けやすい。秋田県は本種の北限分布地であり、ゲンゴロウ類としては、大型で美麗種であることから採集圧を受けやすい。
  - ◆ 生存に対する脅威 過度の採集圧。
- (佐藤 福男)

コウチュウ目ゲンゴロウ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：準絶滅危惧
<b>クロゲンゴロウ</b>	
<i>Cybister brevis</i> Aube,1838	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。中国、朝鮮半島。
  - ◆ 県内の分布 北秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市。
  - ◆ 本種の概要 全身黒色の大型種である。青森県まで記録があるが、本県は北限に近い。生息水域は多様で、河川敷の水溜まりや水田土水路、山間部の小さな池などでも採集される。
  - ◆ 本種の現状 1990年代は県沿岸南部で数例の記録しかない種であったが、近年分布を拡大しているようである。しかし、県内ではまだ稀種で産地も局所的である。環境適応性の幅も他種より広いようなので、今後の動向を注視する必要がある。
  - ◆ 生存に対する脅威 特になし。
- (佐藤 福男)

コウチュウ目ゲンゴロウ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：絶滅危惧IA類
<b>マルコガタノゲンゴロウ</b>	
<i>Cybister lewisianus</i> Sharp,1873	

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。中国、北朝鮮、インドシナ半島。
  - ◆ 県内の分布 大館市、三種町、男鹿市、秋田市、にかほ市、大仙市。
  - ◆ 本種の概要 低地～丘陵地の水草の多いやや大きな水域に産する。ゲンゴロウと共にみる事が多いが本種の方が個体数は少ない。同属中でも動作は緩慢で発見しても物陰にすぐ隠れるような機敏さもない。灯火にも飛来し、それによって産地が確認された例もある。
  - ◆ 本種の現状 本県は全国的な本種の多産地で、好適環境が多く残されている証でもある。そのため以前は採集者が頻りに訪れ、ネット上で秋田県産として販売されていた程である。本種が「種の保存法」に指定されたことで採集圧からは解放されたが将来に向けた生息環境の維持、保全が求められている。
  - ◆ 生存に対する脅威 オオクチバス放流で消滅した産地があり、今後も最大の脅威になると思われる。
  - ◆ 現在の保護対策 2011年に種の保存法に追加指定され、採集、売買、飼育が禁止された。
- (佐藤 福男)

## コウチュウ目ゲンゴロウ科

## ゲンゴロウ

*Cybister japonicus* Sharp, 1873

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、台湾、中国、シベリア。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、八峰町、三種町、男鹿市、大潟村、秋田市、由利本荘市、にかほ市、仙北市、大仙市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 本種をレッドリストに選定していない県は秋田県を含めて3県しかなかった。秋田県では条件さえ整えば水田でも発生しており、県南部では過去に食用にしていた程である。しかし、水田の大規模化に伴う用排水の合理化により、一部の溜池を除き急速に姿を消しつつある。
- ◆ 本種の現状 現在まで11市町村（8市、2町、1村）の27か所から記録がある。この内6か所で生息が確認できなかった。再調査の精度もあり、直ちに絶滅とは言えないが、生息数、生息地点とも減少している。隣接した畑で殺虫剤散布後に水面に浮上した衰弱個体を何度も見かけたこともある。
- ◆ 生存に対する脅威 水路の改変、隣接した畑からの殺虫剤のドリフト。（佐藤 福男）

## コウチュウ目ゲンゴロウ科

## エゾゲンゴロウモドキ

*Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev, 1953

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：留意種

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（福島県を除く東北5県）。極東付近（原亜種はシベリア～ヨーロッパ）。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、小坂町、秋田市、由利本荘市、にかほ市、仙北市、美郷町。
- ◆ 本種の概要 以前にキタゲンゴロウモドキとされていた大型種。東北地方には広く分布しており、主として山間部にある水温が低く比較的水質のよい池沼に産する。メスは上翅前半に深い立溝を有するが、山形と本県から溝を欠くメス個体が報告されている。
- ◆ 本種の現状 秋田県版レッドデータブック2002年版は留意種であったが、その後知見が集まり、評価水準の見直しを行った。分布の中心が1000m未満のブナ帯に散在する水温が低い小規模な池沼である。法的な保護の網がかかっていない産地が多く、伐採等で水域と共に消滅した産地もある。
- ◆ 生存に対する脅威 森林の伐採。（佐藤 福男）

## コウチュウ目ガムシ科

## エンマハバビロガムシ

*Sphaeridium scarabaeoides* (Linnaeus, 1758)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州北部（青森県、岩手県、宮城県、秋田県）。シベリア、ヨーロッパ、北アメリカ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 陸生のガムシで新鮮な牛馬の糞に集まる習性がある。本県では山間部の牧場で記録されていた。最近の牧場は糞に集まる虫を少なくする処理をしているとの情報もあり、本種の生存にも影響を与えている可能性がある。
- ◆ 本種の現状 秋田県版レッドデータブック2002年版では2市2か所から記録があった。同地に調査に訪れたが、再確認はできなかった。特に環境が変わった訳でもないので評価は前回と同様とした。
- ◆ 生存に対する脅威 山間部放牧地の管理方法の変更。（佐藤 福男）

## コウチュウ目シテムシ科

## ヤマトモンシテムシ

*Nicrophorus japonicus* Harold, 1877

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島、台湾、中国、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市、横手市。
- ◆ 本種の概要 モンシテムシ類では大型、主に平地の河川敷や草場が生息地である。個体数はどこでも少なくなっているようで、多くの県でレッドリストに選定されている。
- ◆ 本種の現状 上記3市で各1か所、計3か所で各1個体の記録しかない。環境は畑地（秋田市）、大仙市（牧草地）、横手市（河川敷）であり、本種の典型的な生息環境である。この内秋田市の産地は住宅地となり消滅した。
- ◆ 生存に対する脅威 開発、改変などによる環境の激変。（佐藤 福男）

<b>コウチュウ目コガネムシ科</b>	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：該当なし
<b>オオトラフハナムグリ</b>	
<i>Paratrichius doenitzi</i> (Harold, 1879)	

- ◆ 国内外の分布 本州(東北～東海)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 オスの模様が美しい種類で他に似た種はいない。メスは全体に黒色で、前翅に小さな黄白色の紋がある。山地性に花に集まり、飛翔能力が非常に高く、ハエのようによく飛び回る。本種の北限は岩手県雫石町で、本県は日本海側の北限となる。
- ◆ 本種の現状 本種は成田(2018)によって秋田県から初めて記録された。まだ花で採集されたことはなく、炭焼き窯跡が残るブナ林の地表を飛翔中の個体が得られている。個体数は極めて少ないようである。
- ◆ 生存に対する脅威 幼虫が林床の朽木を食べることから、生息域の森林の皆伐は本種の生存に壊滅的な打撃を与える。  
(佐藤 福男)

<b>コウチュウ目コメツキムシ科</b>	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：該当なし
<b>チョウカイアラコガネコメツキ</b>	
<i>Selatosomus gloriosus chokaianus</i> Ôhira & Yasuda 2007	

- ◆ 国内外の分布 本州(鳥海山、月山)、北海道には原名亜種を含めて4亜種を産する。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 本亜種は由利本荘市鳥海山秋田県側で採集されたオス1個体をホロタイプとして記載された。山形県月山山頂部にも産し、本州ではこの2か所以外に産地はない。東北の高山性昆虫を代表する種である。
- ◆ 本種の現状 本種の県内における産地は鳥海山のみである。鳥海山の秋田県側は1700mまでで、それ以上は山形県に属する。そのため、秋田県側における生息域は非常に狭い。今後温暖化等でさらに秋田県における生息域が狭まる可能性は高い。
- ◆ 生存に対する脅威 温暖化、採集圧。  
(佐藤 福男)

<b>コウチュウ目カミキリムシ科</b>	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：該当なし
<b>ヘリウスハナカミキリ</b>	
<i>Pyrrhona laeticolor laeticolor</i> Bates, 1884	

- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県にかほ市以南)、四国、九州、下甕島。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 一属一種の日本固有種である。従来山形県小国町が本種の北限であったが100km以上北の秋田県にかほ市で2009年発見された。低木のサワフタギを食樹とし、他の昆虫があまり活動しない、朝方や夕方、曇天時に活動する習性がある。
- ◆ 本種の現状 県内における生息地はにかほ市の2か所のみで、ブナ・ミズナラ林中のサワフタギの太めの枯れ木で発生しており、発生面積は狭く、個体数も少ない。本来は暖地性であるが、本県や山形県の発生地は積雪量の多い山地である点で特異である。
- ◆ 生存に対する脅威 保護の網がかかっていない場所である。伐採によってサワフタギと共に産地が消滅する可能性は高い。  
(佐藤 福男)

<b>コウチュウ目カミキリムシ科</b>	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：該当なし
<b>イガブチヒゲハナカミキリ</b>	
<i>Stictoleptura igai</i> (Tamanuki, 1942)	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、上小阿仁村、秋田市。
- ◆ 本種の概要 本種は針葉樹を食樹としている。青森県ではヒバ、山形県ではキタゴヨウから採集されている。他にトウヒ、サワラ、アスナロ、ヒノキアスナロ等が知られている。
- ◆ 本種の現状 県内では現在まで3市村で各1個体しか採集されていない希種である。いずれもノリウツギの花で得られており、本県では針葉樹との関連はまだ明らかになっていない。
- ◆ 生存に対する脅威 用材としての針葉樹は有用性が高いので皆伐により産地が消滅する可能性は高い。  
(佐藤 福男)



## コウチュウ目カミキリムシ科

## コトラカミキリ

*Plagionotus pulcher* (Blessig, 1879)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（関東～近畿では太平洋側には分布しない）。極東ロシア。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市、仙北市、大仙市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 春先から晩春にかけて出現する。主に里山の二次林を伐採した薪に集まる習性がある。以前は局地的な稀種で、他県でも個体数が減少しているとされていたが本県では近年個体が増えているように思われる。一時的な現象かもしれない。
- ◆ 本種の現状 1980年代までは仙北市の一部から知られていた希少種であった。しかし、2000年代には仙北市以外でも採集されるようになった。調査が継続してなされてきた秋田市では2008年に初めて本種が確認された。今後の経過を注意する必要がある。
- ◆ 生存に対する脅威 二次林の伐採と杉などへの変更。 (佐藤 福男)

## コウチュウ目カミキリムシ科

## ムモンベニカミキリ

*Amarysius sanguinipennis* (Blessig, 1872)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。朝鮮半島、済州島、中国北東部、シベリア。
- ◆ 県内の分布 秋田市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 以前は非常に希少な種であったが九州で生態が解明されてからある程度各地で採集されている。その他の地域では依然稀な種である。知られている食樹はブナ科、ニレ科、バラ科、カエデ科など多岐にわたる。湯沢市では岩山の山腹で矮小化したミズナラ葉上に飛来した複数個体が確認されている。
- ◆ 本種の現状 県内では2か所でしか記録がない。いずれも岩山の頂上で春先、晴天無風の日に頂上部に飛来した個体が確認されており、秋田市の記録（1954年5月）、湯沢市の記録（1995年5月）が共に最後でそれ以降は両地とも確認されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 上記2例の環境はやや特殊であることで、生息環境改変の可能性は低い。 (佐藤 福男)

## コウチュウ目カミキリムシ科

## ヨコヤマヒゲナガカミキリ

*Dolichoprosopus yokoyamai* (Gressitt, 1937)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、男鹿市、秋田市、仙北市、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 成虫は7月下旬頃からブナ生木地上部付近から脱出し、そのまま樹冠に移動するようである。稀に灯火に飛来する個体や交尾・産卵のため地上付近まで降りて来た個体以外は採集される機会は殆どない。ブナ生木以外は食さないが、ある程度以上の大径木に限られる。
- ◆ 本種の現状 8市から確認されている。県内のブナ帯に広く産するようであるが、脱出孔のあるブナは非常に少ない。条件的には大径木で下草が少なく、やや孤立した林分が好まれる。ブナ林中心部ではむしろ少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 ブナ林の伐採、特に周辺部のブナで老齢木は伐採される可能性が高い。 (佐藤 福男)

## コウチュウ目カミキリムシ科

## ヒメビロウドカミキリ

*calolepta degener* (Bates, 1873)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、九州、対馬。台湾、朝鮮、中国。
- ◆ 県内の分布 八峰町。
- ◆ 本種の概要 本種は低地草原を生息地とし全国的に分布するがどこでも個体数は少ない。青森県レッドデータブック2010年版ではCランクで深浦町岩崎での記録や秋田県境に近い深浦町大間越での採集例などもあり、本県での発見が期待されていた。
- ◆ 本種の現状 本種は河合(2013)によって青森県に近い八峰町で生息が初めて確認された。食草は県内に広く分布するオトコヨモギで幼虫は根部を食害する。その後、県内の同様な環境を捜したが、ここ以外での発見に至っていない。
- ◆ 生存に対する脅威 唯一の生息地は住宅地にも近く、護岸工事などで消滅する可能性が高い。 (佐藤 福男)



コウチュウ目ハムシ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：準絶滅危惧
<b>キンイロネクイハムシ</b>	
<i>Donacia japana</i> Chûjô & Goecke, 1956	

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、八峰町、秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草はミクリ類である。幼虫は根を、成虫は葉を食害する。上翅に赤色の縦条斑があり、この特徴で他種と見間違ふ事はない。小規模な溜池や流れの緩い水路等で見いだされる。食草の関係で分布は限定され、個体数も少ない。
- ◆ 本種の現状 県内における初記録は1959年に由利本荘市で日浦 勇氏がサグスゲから採集した1個体である。これを含めて県内10か所から確認されている。生息条件はミクリ類の存在が大きく、この食草を含めた保護・保全が重要である。
- ◆ 生存に対する脅威 水路改変(三面コンクリート水路)による食草の消滅。 (佐藤 福男)

コウチュウ目ハムシ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：該当なし
<b>オオサルハムシ</b>	
<i>Chrysochus chinensis</i> Baly, 1859	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、シベリア、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 秋田市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 本種は大型のサルハムシで日本では1属1種である。記録は全国的にも少なく、希種に属する。東北地方における分布も局所的で個体数も多くない。また、成虫の成虫の生活史も食草以外に不明な点が多い。
- ◆ 本種の現状 県内では1986年、秋田市の溜池で発見された。食草はキョウチクトウ科のシロバナカメヅルである。食草自体はやや湿った場所に普通に産するが、本種は長らくこの場所以外では見る事がなかった。2019年、33年ぶりに県内2番目の産地が湯沢市から発見された。
- ◆ 生存に対する脅威 生活史が不明であり脅威は断定できないが、生息地は30年以上環境が安定しているので現状維持が大事。 (佐藤 福男)

コウチュウ目ハムシ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：該当なし
<b>オオヨモギハムシ</b>	
<i>Chrysolina angusticollis</i> (Motschulsky, 1860)	

- ◆ 国内外の分布 北海道、利尻島、本州(青森県、岩手県、秋田県)。中国、シベリア。
- ◆ 県内の分布 八峰町、藤里町、仙北市。
- ◆ 本種の概要 北海道では変異の幅が大きい本州では小さい。北東北三県に産し青森県と秋田県は白神山地が主要分布地である。岩手県では早池峰山で確認されている。
- ◆ 本種の現状 秋田県は本種の南限分布地である。世界遺産として保護されている白神山地周辺から得られている。仙北市の産地は奥羽山脈の稜線部である。少数の個体が採集されたが形態が岩手県(早池峰山)のと似ている点で興味深い個体群である。
- ◆ 生存に対する脅威 八峰町の保護地区外の個体群は道路工事などで生息域が破壊される可能性がある。 (佐藤 福男)

コウチュウ目ハムシ科	秋田県2020：準絶滅危惧 秋田県2002：－ 環境省2019：該当なし
<b>ルリドロノキハムシ</b>	
<i>Chrysolina cuprea</i> Fabricius, 1775	

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(秋田県)。ロシア、ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 食樹はドロノキである。北海道ではレッドリスト改訂版(2019年)で準絶滅種とされている。青森県下北半島で1998年に1例のみ記録があるが、その後再確認されていない。現時点では秋田県が本州で唯一の産地である。
- ◆ 本種の現状 仙北市のみから知られている。発生数は年による振れが大きく全く姿を見出せない年もある。食樹そのものも洪水により河道が変化するような不安定な場所にあり、河川改修等で容易に姿を消す可能性は高い。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修による環境変化。 (佐藤 福男)

## コウチュウ目ハムシ科

## ベニカメノコハムシ

*Cassida murraea* Linnaeus, 1767

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(東北6県)。モンゴル、シベリア、ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 東北地方に分布に限られる。以前は奥羽山脈に添った高地であったが、その後鳥海山の東側でも発見された。生息環境は主に食草のミズギクが生える湿地帯である。
- ◆ 本種の現状 鹿角市の生息場所は2か所であるが、1か所は数m<sup>2</sup>と狭く、道路脇のため存続が危うい。仙北市の場合は牧場の中や温泉地近くの湿地等でどれも安定した産地と言えない。新たに発見された産地は公共事業のため消滅する可能性が高い。
- ◆ 生存に対する脅威 ミズギクの生育が脅かされる湿地の乾燥化を伴う工事。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ハムシ科

## イカリアオカメノコハムシ

*Cassida ferruginea* Goeze, 1777

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 青森県、岩手県、秋田県。ヨーロッパ中部、中央アジア、シベリア、中国陝西省。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 日本では青森県(八戸市、階上町)で初めて発見された。その後岩手県、秋田県で発見されている。食草はミズギクで葉を食べる。ベニカメノコハムシと同所的に発生するが産地では両種が微妙に棲み分けているようである。
- ◆ 本種の現状 ミズギクが生ずる湿地に生息する。仙北市ではベニカメノコハムシと同所的に産するが由利本荘市では本種のみ発見されている。個体数も少ない。体色が緑色なので葉と同化して発見しにくい。
- ◆ 生存に対する脅威 ミズギクの生育が脅かされる湿地の乾燥化を伴う工事。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ゾウムシ科

## チョウカイトガリヤマゾウムシ

*Acanthalophus matobai* Morimoto, 2015

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、東北地方(秋田県、山形県)、日本固有種。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 特異な形態をした種で森本らにより4新種を含むトガリヤマゾウムシ属が2015年に新設された。鳥海山で採集された個体にはチョウカイトガリヤマゾウムシと命名、記載され、他の3種は早池峰山(岩手県)、栗駒山(宮城県)、天元台(山形県)で採集され、それぞれ新種として命名、記載されている。
- ◆ 本種の現状 タイプ標本は鳥海山秋田県側で2006年に確認された。猿倉口でも得られており、鳥海山の1000m付近に分布帯を形成する。食草も明らかになっており、飼育により生態の一部も解明された。
- ◆ 生存に対する脅威 道路脇の食草から採集されており、道路改修などで道路脇の食草の刈り取りは生存にとって脅威となる。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ゾウムシ科

## オナガカツオゾウムシ

*Lixus moiwanus* Kono, 1928

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。中国、朝鮮。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 沼や湿地に生えるドクゼリを食草とする。ドクゼリは県内で稀でないが、本種の生息する場所は限られてる。由利本荘市の産地は公共事業により消滅する可能性がある。また、ドクゼリは有毒の大型草本なので駆除対象になりやすく、稀になりつつある。
- ◆ 本種の現状 県内内陸部2か所のみ記録である。調査によって新たな産地が発見されるはずであるが、ドクゼリがあっても産しない事が多く、非常に局地的な分布を示す。
- ◆ 生存に対する脅威 ドクゼリの駆除による生息地の消滅。

(佐藤 福男)

トビケラ目トビケラ科

# ヤチトビケラ

*Oligostomis wigginsii* Nishimoto & Kawase, 2005

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州。
- ◆ 県内の分布 にかほ市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 幼虫は森の中の水たまりなどに生息しているといわれている。
- ◆ 本種の現状 ハンノキ林でミズバショウが群生する湿原のスゲ類優占エリア及び放棄水田脇の排水路において成虫の採集記録があるが、県内における幼虫の採集記録はない。分布が局所的である。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

トビケラ目カクツトビケラ科

# ハンエンカクツトビケラ

*Lepidostoma semicirculare* (Ito, 1994)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州の北部から中部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、仙北市、大仙市、美郷町、羽後町、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 幼虫は湧水に生息し、四角に切った葉片でやや長い四角柱状の筒巣を作る。落葉食。
- ◆ 本種の現状 奥羽山脈西部の湧水群数か所から幼虫と成虫の採集記録がある。成虫は湧水のほか石礫底河川の河岸からも採集記録がある。
- ◆ 生存に対する脅威 圃場整備に伴う工事等による湧泉の埋没。地下水位の低下などによる湧水量の減少、湧水の枯渇。

(青谷 晃吉)

トビケラ目ニンギョウトビケラ科

# フトオヒメニンギョウトビケラ

*Goera dilatata* Nozaki & Tanida, 2006

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州中部以北。
- ◆ 県内の分布 仙北市、大仙市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 幼虫は山地溪流と湧水流の両方に生息する。砂粒で円筒型の筒巣を作り、その両翼に大きめの石を付けている。底の石面に付着する藻類などを剥ぎ取るようにして食べる仲間（スクレーパーと呼ばれる）の1種である。
- ◆ 本種の現状 成虫の採集記録がある湧水で幼虫の生息を確認しているが、2019年現在、幼虫の採集記録のある湧水はこの1か所のみである。
- ◆ 生存に対する脅威 圃場整備に伴う工事等による湧泉の埋没。地下水位の低下などによる湧水量の減少、湧水の枯渇。

(青谷 晃吉)

トビケラ目アシエダトビケラ科

# ウスイロコバントビケラ

*Anisocentropus pallidus* (Martynov, 1935)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。ロシア極東大陸部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市、にかほ市、仙北市、大仙市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 幼虫は湖沼や湿原など止水域の落ち葉だまりに生息し、落葉を丸く切り抜いて大小2枚上下に貼り合せた巣をつくる。
- ◆ 本種の現状 平地の灌漑用ため池数か所から幼虫の採集記録がある。河川のワンドを含めた止水環境に分布しているが、成虫・幼虫共に採集記録が少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 溜池等の埋め立て。オオクチバスやウシガエルなどによる食害。

(青谷 晃吉)

チョウ目トリバガ科

# ハマナストリバ

*Cnaemidophorus rhododactyla* (Denis & Schiffermüller, 1775)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、千島列島、本州（東北地方）。朝鮮半島南部、ロシア、インド、中央アジア、小アジア、ヨーロッパ、北アフリカ、北アメリカ。
- ◆ 県内の分布 八峰町、能代市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、成虫は6～8月に出現する。日本ではハマナスを寄主植物とするが、ヨーロッパではバラ属各種が寄主植物として知られる。昼間も活発に飛翔し、夜間は灯火に飛来する。
- ◆ 本種の現状 従来、国内では北海道のみから知られていた種であり、本州では本県のみから知られる。八峰町から秋田市の海岸部に生息し、雄物川南岸の砂浜（秋田市新屋町）が分布南限となる。生息地では個体数は多い。
- ◆ 生存に対する脅威 護岸工事、風力発電施設建設などによる生息環境（海浜草地）の変化。 (田中 政行)

チョウ目メイガ科

# マダラホソメイガ

*Maliarpha borealis* Sasaki, 2012

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道（南部）、本州（青森県、秋田県、新潟県、富山県）。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。海岸砂丘地で採集されている。以前から採集されていたが、2012年に新種として命名された。
- ◆ 本種の現状 県内5か所で採集されている。秋田市の砂浜海岸に産地が多く、継続して見出されており、個体数も少なくない。産地では風力発電施設の建設が進んでいるところがある。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設などの開発や砂浜の後退などによる生息適地の減少。 (梅津 一史)

チョウ目メイガ科

# ウスキシロオオメイガ

*Scirpophaga gotoi* Lewvanich, 1981

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州（宮城県、秋田県、新潟県、滋賀県、京都府）。中国。
- ◆ 県内の分布 大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。低湿地で採集される。
- ◆ 本種の現状 県内では大仙市の雄物川の氾濫原3か所で採集されている。いずれも2000年代以降に見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修などによる生息適地の減少。 (梅津 一史)

チョウ目シジミチョウ科

# オオゴマシジミ

*Phengaris arionides takamukai* (Matsumura, 1919)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：留意種  
環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道（中・南部）、本州（東北地方、関東地方北部、中部地方）。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、チベット。
- ◆ 県内の分布 藤里町、秋田市、由利本荘市、仙北市、横手市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 カメバヒキオコシ、クロバナヒキオコシ（以上シソ科）の花穂に産卵し幼虫はこれを食べるが、4齢幼虫はシワクシケアリの巢中に運び込まれ、アリの幼虫を食べる。森林帯の急峻な渓谷に生息する。
- ◆ 本種の現状 県内では8か所の記録があるが、最近10年以上は調査が行われていない。藤里町の白神山地コアエリア内では多産した記録がある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。 (梅津 一史)



チョウ目シャクガ科

# キブサヒメエダシャク

*Ligdia ciliaria* Leech, 1897

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 以前は仙北市の1か所の採集例しかなかったが、その後鹿角市の1か所、秋田市の1か所、仙北市の1か所の産地が新たに見つかった。秋田市の産地では複数回にわたって採集されており、鹿角市の産地でも同時に複数回採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

# クロオオモンエダシャク

*Microcalicha fumosaria fumosaria* (Leech, 1891)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。台湾、朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はマサキ、コマユミ、ツリバナ、ツルマサキ(以上ニシキギ科)が知られ、ニシキギ属に固有。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では1970年代に1か所で1個体の採集記録があるのみ。仙北市では1990年代以降に2か所の採集例があり、そのうち1か所では複数回採集されている。秋田市では2000年代に1例があるのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 産地がごく限られている。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

# コアヤシャク

*Pingasa pseudoterpnaria pseudoterpnaria* (Guenée, 1857)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬、屋久島。朝鮮半島、中国北部、ミャンマー、インド。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はハギ類(マメ科)。低山地から山地に産するが比較的少ないという。
- ◆ 本種の現状 男鹿市の1か所、潟上市の1か所、秋田市の2か所で採集されているのみ。男鹿市の1か所では複数回採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 里山的環境の放置や管理の変化による植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

# シタベニヒメシャク

*Idaea roseomarginaria* (Inoue, 1958)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：絶滅危惧種IB類  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。かなりまれな種で記録が少ないという。
- ◆ 本種の現状 仙北市の2か所で採集されているのみであるが、うち1か所では多くの個体が採集されている。東北地方ではほかに福島県の記録があるのみで、秋田県の産地は北限となる。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目シャクガ科

## キボシヤエナミシャク

*Rheumaptera neocervinalis* Inoue, 1982

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草はメギ(メギ科)。
- ◆ 本種の現状 県内では男鹿市の1か所、秋田市の1か所、由利本荘市の2か所の採集例があり、沿岸部の一部に限られている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## エゾヤエナミシャク

*Philereme corrugata* (Butler, 1884)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、男鹿市。
- ◆ 本種の概要 食草はキビノクロウメドキ(クロウメドキ科)が知られる。局地的で非常にまれであるという。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では八幡平の高所で一度の採集例があるが、食草となる植物がある環境ではなく、そこに生息するものではないかもしれない。男鹿市では複数の場所で採集されている。分布を規制する要因は不明。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## フタモンコナミシャク

*Venusia megaspilata* (Warren, 1895)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、八峰町、秋田市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 2000年頃までは仙北市、大仙市の各1産地が知られているのみで局地的な種とみられていたが、鹿角市、八峰町、秋田市でも見出され、仙北市で2か所、大仙市で1か所の採集例が追加され、本種の分布状況については見直しが必要。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ムネシロテンカバナミシャク

*Eupithecia maenamiella* Inoue, 1980

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(青森県、岩手県、秋田県、愛知県、三重県、島根県)。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。非常に局地的で少ないという。
- ◆ 本種の現状 これまで7か所で見出された例があるが、継続的に調査されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャチホコガ科

# トビギンボシシャチホコ

*Rosama ornata* (Oberthür, 1884)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：準絶滅危惧種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。台湾、朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、にかほ市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、成虫は5月と7～8月頃に出現し、蛹越冬である。ヤマハギを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 1960年代に湯沢市で2例が記録された後長らく記録がなかったが、2003年以降4か所で記録または確認された。いずれの生息地も個体数は少ないが、男鹿市の産地では多産する。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息環境（草原）の消失。

(田中 政行)

チョウ目ヒトリガ科

# シロホソバ

*Eilema degenerella* (Walker, 1863)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 能代市、男鹿市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、成虫は5～8月に出現する。地衣類を寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内での生息地は、能代市からにかほ市の沿岸部に点在する。いずれの生息地でも個体数は少なく、近年では男鹿市で記録されているのみである。
- ◆ 生存に対する脅威 開発に伴う整地や伐採による生息環境の変化。

(田中 政行)

チョウ目ヒトリガ科

# キバラヒトリ

*Epatolmis caesarea japonica* (Walker, 1865)

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。朝鮮半島からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、秋田市、由利本荘市、にかほ市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、成虫は4月下旬～6月に出現する。国内ではヤナギ類、オオバコ、クガイソウ、タンポポ類を寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 1990年代までは県内各地から記録があり、少ないものではないとされていたが、2000年代の記録を欠き、2010年代に男鹿市とにかほ市で再確認された。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

チョウ目ヒトリガ科

# クロスジシロコブガ

*Nola taeniata* Snellen, 1874

秋田県2020：準絶滅危惧  
秋田県2002：絶滅危惧II類  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬、屋久島、南西諸島。台湾、朝鮮半島、中国、マレーシア、ミャンマー、インド、オーストラリア。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、男鹿市、湯上市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草は国内では未知だが、東南アジアでヒデリコ(カヤツリグサ科)が知られている。
- ◆ 本種の現状 県内では主に沿岸部で見出されているが、湿地、砂丘地、丘陵地などで特定の環境との結びつきは明らかではない。10か所の産地が知られているが、一部では複数回にわたって見出されており、最近も得られている。
- ◆ 生存に対する脅威 砂丘地や湿地などの開発による環境の悪化。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ネグロアツバ

*Sinarella punctalis* (Herz, 1905)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：絶滅危惧種II類

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。朝鮮半島、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は蘚類の生葉。
- ◆ 本種の現状 秋田市から大仙市の雄物川河川敷やその近傍、大仙市から仙北市の玉川流域で採集されている。河川敷の湿地に生息するものと思われる。河川水辺の国勢調査事業などによって、2000年代以降に産地が追加された。
- ◆ 生存に対する脅威 河川整備などによる植生の変化。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ハイマダラコヤガ

*Eublemma miasma* (Hampson, 1891)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(岩手県、秋田県、愛知県、三重県、大阪府、広島県など)。インド～オーストラリア地域に広く分布。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、由利本荘市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 県内では沿岸部の低地が主な生息地と見られ、河川敷から砂丘地の草地的な環境に結びついていると考えられる。秋田市の海岸部などでは繰り返し見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発事業、風力発電施設建設などによる生息適地の減少。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## キシタアツバ

*Hypena claripennis* (Butler, 1878)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 八峰町、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はヤブマオ(イラクサ科)が知られる。人里的な環境に生息するが少ない。
- ◆ 本種の現状 秋田市やにかほ市で2000年頃までに7か所の産地が知られていた。その後、八峰町でも採集されており、これまでに知られる産地は10か所。採集例は散発的。
- ◆ 生存に対する脅威 里地・里山の管理の変化による環境変化。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ウスジロケンモン

*Acronicta lutea* (Bremer & Grey, 1852)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(青森県、岩手県、秋田県、長野県)。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部、モンゴル、シベリア。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市、にかほ市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 食草はワレモコウ(バラ科)が知られる。
- ◆ 本種の現状 県内では5か所での採集記録があるが、近年の記録は少ない。にかほ市では最近見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明であるが、里地的環境に生息する種である可能性があり、里地・里山の管理の変化による環境変化が脅威となる可能性がある。

(梅津 一史)



チョウ目ヤガ科

## ギンモンセダカモクメ

*Cucullia jankowskii* Oberthür, 1884

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州に分布するが、局所的。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 大湯村、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はヨモギ、オオヨモギ(以上キク科)が知られる。産出は局所的で、火山草原、河川敷で見出される。
- ◆ 本種の現状 県内では8か所で採集されているが、散発的で、同時に複数個体が得られることは少ない。秋田市の海岸やにかほ市の草原では繰り返し見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 半自然草原の放棄や植林などによる植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## クロビロードヨトウ

*idemia bremeri* (Erschoff, 1867)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、モンゴル、トランスバイカル地方。
- ◆ 県内の分布 大館市、北秋田市、男鹿市、秋田市、にかほ市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。草原で採集される。
- ◆ 本種の現状 県内では9か所の採集記録がある。1960～1970年代には里地・里山で採集された例があるが、最近は広い草地で採集されており、男鹿市やにかほ市の広いスキ草原ではしばしば採集される。
- ◆ 生存に対する脅威 半自然草原の放棄や植林などによる植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## ヨコスジヨトウ

*Mesoligia furuncula* (Denis & Schiffermüller, 1775)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(青森県、秋田県、福島県)。サハリン、ロシア南東部、中国、中東からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 八峰町、男鹿市、湯上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はハマニンニク、カモガヤ、シバムギ、ハママギ(以上イネ科)が知られる。福島県では内陸で採集された記録があるが、北海道と青森県、秋田県では海岸でのみ採集されている。
- ◆ 本種の現状 県内では7か所で採集されており、砂浜海岸、岩礁海岸によらず海岸で見出されている。秋田市の海岸では現在までしばしば見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 風力発電施設の建設などによる植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## オオチャバネヨトウ

*Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、八峰町、大湯村、湯上市、秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草はガマ(ガマ科)。湿地に生息し、産地は比較的局地的。
- ◆ 本種の現状 県内では16か所で採集されており、山間部の記録もあるが、沿岸部の砂丘後背湿地や河川敷、溜池などのヨシ湿原で見出されることが多い。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川改修などによる湿性植生の改変。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

チョウ目ヤガ科

## キスジウスキヨトウ

*Capsula sparganii* (Esper, 1790)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、モンゴル、シベリアからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、北秋田市、上小阿仁村、大潟村、五城目町、湯上市、秋田市、由利本荘市、にかほ市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はガマ(ガマ科)、ミクリ(ミクリ科)。湿地に生息する。
- ◆ 本種の現状 県内での採集記録は20か所ほどにもなるが、近年は比較的採集例が少ない。古い記録の中には近縁種のガマヨトウとの混同の可能性もあるものもあり、詳しい検討が必要。溜池や河川敷、後背湿地などのヨシ湿原のほか、山間地でも記録されている。
- ◆ 生存に対する脅威 開発や河川改修などによる湿性植生の改変。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## シロテンキヨトウ

*Mythimna conigera* (Denis & Schiffermüller, 1775)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(中部地方以北の山地)。朝鮮半島、中国、ロシア、モンゴル、コーカサス地方、トルコ、ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草はカモガヤ、ヨシ、ホッサガヤ、スズメノカタビラ(以上イネ科)、チャノキ(ツバキ科)の記録がある。北海道では平地にも産するが、本州では山地の草地に生息する。
- ◆ 本種の現状 1980年代まで鹿角市北部の広い草地や八幡平山麓など7か所で採集された記録があるが、多いものではなかった。近年になって、八幡平の山頂部や中腹のスキー場などで多産することが明らかになった。
- ◆ 生存に対する脅威 半自然草原の放棄や植林などによる植生の変化。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## クモマウスグロヤガ

*Euxoa ochrogaster rossica* (Staudinger, 1881)

秋田県2020：準絶滅危惧

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(中部地方以北の山岳)、佐渡。朝鮮半島、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はフジハタザオ(アブラナ科)が記録されている。ヨーロッパではオオバコ属(オオバコ科)で飼育されているという。高山の岩礫地に生息する。成虫は移動性があり、幼虫の生育地より高所や低所で見られることがある。
- ◆ 本種の現状 県内では秋田駒ヶ岳の山頂部やその中腹のみで見出されていたが、2000年代になって八幡平の山頂部にも生息することが明らかになった。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

トンボ目アオイトトンボ科

## ホソミオツネントンボ

*Indolestes peregrinus* (Ris, 1916)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、五島列島、甕島列島、種子島、奄美大島、西表島。朝鮮半島、中国中部。
- ◆ 県内の分布 大館市、八峰町、大潟村、秋田市、由利本荘市、にかほ市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 挺水植物が繁茂する池沼などに生息する。
- ◆ 本種の現状 全県下に分布するが、局所的で個体群の分布域は狭い。2016年に大館市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 オオクチバスなどによる食害、開発による池沼の埋め立て、植物の遷移などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

トンボ目ヤンマ科	秋田県2020：情報不足 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：準絶滅危惧
<b>マダラヤンマ</b>	
<i>Aeshna mixta soneharai</i> Asahina, 1988	

- ◆ 国内外の分布 北海道、北陸・信越地方以北の本州に分布。日本列島亜種。
- ◆ 県内の分布 大館市、能代市、三種町、男鹿市、潟上市、秋田市、横手市。
- ◆ 本種の概要 平地の大小の湖沼に生息する。
- ◆ 本種の現状 全県下に広く分布するが、一部の湖沼では道路拡張工事により埋め立てられて以降確認されていない。2016年以降確認されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 オオクチバスなどによる食害、開発に伴う湖沼の埋め立てなどによる生息場所の縮小。(青谷 晃吉)

トンボ目サナエトンボ科	秋田県2020：情報不足 秋田県2002：絶滅危惧種IA類 環境省2019：該当なし
<b>ヒメサナエ</b>	
<i>Sinogomphus flavolimbatus</i> (Oguma, 1926)	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 大館市、北秋田市、秋田市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 山地溪流や河川の上流域に生息する。滝つぼに成熟雄が縄張りを形成する。
- ◆ 本種の現状 全県下に分布すると考えられるが、各産地共に個体数は極めて少ない。成虫は2001年に大仙市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 森林の伐採による流水量の変動、濁水・鉄砲水等に伴う河川破壊などによる生息環境の悪化。(青谷 晃吉)

トンボ目サナエトンボ科	秋田県2020：情報不足 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：該当なし
<b>ミヤマサナエ</b>	
<i>Anisogomphus maacki</i> (Selys, 1872)	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島から中国北・東北部、アムール、イルクーツク。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、由利本荘市、大仙市、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 河川上流域から中流域の比較的流れの緩やかな砂泥底や礫底に生息する。
- ◆ 本種の現状 全県下に分布するが、いずれの地域でも個体数は少ない。成虫は1999年に横手市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修などによる生息環境の悪化。(青谷 晃吉)

トンボ目エゾトンボ科	秋田県2020：情報不足 秋田県2002：準絶滅危惧種 環境省2019：該当なし
<b>オオトラフトンボ</b>	
<i>Epitheca bimaculata</i> (Charpentier, 1825)	

- ◆ 国内外の分布 北海道、甲信越地方以北の本州。サハリン、中国北東部からシベリア東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市、横手市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 山間から平地にかけての大小の湖沼に生息する。
- ◆ 本種の現状 全県下に分布する。一部の低地池沼で個体群が維持されているが、各産地共に個体数が極めて少ない。成虫は2018年に秋田市で確認されて以降、未確認。
- ◆ 生存に対する脅威 開発による池沼の埋め立てなど。(青谷 晃吉)

カワゲラ目ヒロムネカワゲラ科

# ミヤマノギカワゲラ

*Yoraperla uenoi* (Kohno, 1946)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州の高冷地。
- ◆ 県内の分布 仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 山地溪流の源流域に分布する。急斜面を流れる細流の落ち込みなど、飛沫帯周辺の礫上に生息する。
- ◆ 本種の現状 河川源流部に流入する急流支川及びダムサイトのダムに落ち込む流量の不安定な沢や滝、降雨後に急斜面に一時的にできる流れ、流量が変化しやすい細流などで幼虫の採集記録があるが少ない。県内における分布は局限され、成虫の採集記録はない。
- ◆ 生存に対する脅威 土砂崩れや森林伐採などによる土砂の流入、道路脇の法面工事や山道の補強工事などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

バッタ目コオロギ科

# クマコオロギ

*Mitius minor* (Shiraki, 1913)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬、種子島。朝鮮半島南部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市。
- ◆ 本種の概要 やや湿った草地に生息し、秋に成虫が出現する。
- ◆ 本種の現状 県内では1例しか記録がなく、詳細は不明である。2003年にヒメカマキリやカナタタキといった直翅系昆虫が県南沿岸部で記録され、その後分布の北上が報告されていることから、本種についても注意が必要である。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

バッタ目マツムシ科

# カヤコオロギ

*Euscyrthus japonicus* Shiraki, 1930

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島南部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 明るいチガヤなどのイネ科草原に生息し、群生する傾向がある。夏から秋に成虫が出現し、成虫、幼虫とも灯火に集まる。
- ◆ 本種の現状 大仙市とにかほ市で灯火採集により得られた2例の記録があるのみである。8月に幼虫、成虫共に見られる。にかほ市の生息地ではその後も調査が行われているが、本種は確認されていない。大仙市の生息地では、その後調査が行われていない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息環境(草原)の消失。

(田中 政行)

バッタ目ヒバリモドキ科

# カワラスズ

*Dianemobius furumagiensis* (Ohmachi & Furukawa, 1929)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。台湾、朝鮮半島南部、中国北部。
- ◆ 県内の分布 湯沢市。
- ◆ 本種の概要 礫が積み重なった場所に生息し、河川中流域の川原や、鉄道の線路敷石などに見られる。秋に成虫が出現する。
- ◆ 本種の現状 湯沢市の雄物川河川敷で得られた1例が知られるのみである。生息環境はカワラバッタと同様であるが、カワラバッタのように目立たないため見落とされている可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修による生息環境(礫質の川原や中州)の消失。

(田中 政行)



## バッタ目コロギス科

## コロギス

*Prosopogryllacris japonica* (Matsumura & Shiraki, 1908)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島南部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 広葉樹林内に生息する。幼虫で越冬し、成虫は夏に出現し、灯火にも集まる。
- ◆ 本種の現状 県内では3例が知られるのみである。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## バッタ目キリギリス科

## ヒガシキリギリス

*Gampsocleis mikado* Burr, 1899

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(西限は岡山県)、伊豆大島、淡路島。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 八峰町、能代市、横手市。
- ◆ 本種の概要 成虫期は7～9月であるが、山地帯では8～10月になる。寒冷地のものは卵で2年以上越冬する率が増加し、4年卵もあるという。
- ◆ 本種の現状 かつては県内に広く分布したというが、当時の記録はない。現在知られる産地は5か所で、自然草原から畑地までの草地環境に見られる。
- ◆ 生存に対する脅威 海浜の護岸や風力発電施設建設、河川改修、管理放棄などによる生息環境の悪化や消失。

(田中 政行)

## バッタ目キリギリス科

## クビキリギリス

*Euconocephalus varius* (Walker, 1869)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、隠岐、四国、九州、対馬、壱岐、五島列島、南西諸島。台湾、中国。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 水田の土手、草地、堤防などの比較的広い草原に生息する。成虫で越冬し、春の繁殖期には高いところで鳴き声が聞こえることが多い。羽化は10月頃。
- ◆ 本種の現状 秋田市の海浜草地と公園緑地から各1例の記録があるのみである。
- ◆ 生存に対する脅威 海浜の護岸や風力発電施設建設、河川改修、管理放棄などによる生息環境の悪化や消失。

(田中 政行)

## バッタ目バッタ科

## ショウリョウバッタモドキ

*Gonista bicolor* (de Haan, 1842)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、淡路島、四国、九州、伊豆諸島、壱岐、対馬、五島列島、平戸島、南西諸島。台湾、朝鮮半島南部、中国、東南アジア。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、にかほ市、横手市。
- ◆ 本種の概要 チガヤなどのイネ科草原に群生する。年1化で、成虫は8～11月に多い。成虫は灯火に飛来する。
- ◆ 本種の現状 現在知られている生息地は男鹿市、横手市、にかほ市に各1か所である。にかほ市の生息地では、近年も確認されている。男鹿市の生息地では2013年以降未確認、横手市の生息地では2011年に確認されて以降、調査が行われていない。いずれの生息地も人為的に維持管理されている草地である。
- ◆ 生存に対する脅威 管理放棄による生息環境(草地)の悪化や消失。

(田中 政行)

## コウチュウ目オサムシ科

## セアカオサムシ

*Hemicarabus tuberculatus* Dejean & Boisduval, 1829

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。シベリア、アムール地方、ロシア沿海地方、サハリン、中国東北部、朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、八峰町、藤里町、能代市、秋田市、由利本荘市、大仙市、仙北市、横手市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 草原的環境や荒地、河川敷など非森林的環境で確認される。一般に個体数は少ないがブナ林を伐採しスキー場などに改変すると一時的に多数確認されることがある。改変前の生息状況などは全く不明である。
- ◆ 本種の現状 県内での生息環境は様々であるが、高山帯と安定したブナ林中では確認されたことがない。改変された場所で一時的に確認されることがあっても、その後は姿が見えなくなることが多い。
- ◆ 生存に対する脅威 特になし。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ミズスマシ科

## コオナガミズスマシ

*Orectochilus punctipennis* Sharp, 1884

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。極東ロシア。
- ◆ 県内の分布 横手市。
- ◆ 本種の概要 ミズスマシ科の中で同定が容易な種である。比較的大きな河川の岸辺付近を早いスピードで泳ぎ回ることが知られている。
- ◆ 本種の現状 横手市の雄物川中流部で確認された。現在はこの1か所のみであるが、同様な環境を調査することで確認数が増えると思われるが生息情報が不足している。
- ◆ 生存に対する脅威 1か所のみ記録なので詳しい所は不明である。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目コガネムシ科

## アカマダラハナムグリ

*Anthrachophora rusticola* Burmeister, 1842

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：情報不足

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、屋久島。朝鮮半島、中国、ロシア東部、ベトナム。
- ◆ 県内の分布 能代市、秋田市、大仙市、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 赤地に黒斑点を散らした形態で他種とは一見して区別できる。従来は偶然にしか採集されない稀種であったが近年猛きん類の巣に寄生する特異な生態が判明したことで注目され、その後は各地から報告があるが依然として採集個体数が少ない珍品である。
- ◆ 本種の現状 県内における最初の記録は1947年5月湯沢市で1個体が採集されている。その後5か所で採集されているが、全て市街地であり、近年猛きん類の巣から幼虫が見つっている。
- ◆ 生存に対する脅威 幼虫が見つかった鳥類はオオタカ、フクロウ、ハシボソガラスなどがある。営巣地の環境破壊が脅威となる。

(佐藤 福男)

## コウチュウ目マルトゲムシ科

## カラフトマルトゲムシ

*Byrrhus geminatus* LeConte, 1854

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(八幡平、栗駒山、苗場山)。サハリン、ヨーロッパ、北アメリカ。
- ◆ 県内の分布 仙北市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 寒冷な環境を代表する種であり、北海道では広く分布するが本州では高山帯及びその周辺に限られる。秋田県(八幡平、栗駒山)、新潟県(苗場山)で知られている。コケ類を食するが詳しい生態はよくわかっていない。高山帯に道路を作ると側溝に落下した個体が採集されることがある。
- ◆ 本種の現状 保護地域として開発等ができない場所であるが、高山帯を通る道路脇の側溝で死がいで発見されたこともあり、そのような場所での側溝を伴う道路建設は、本種に限らず地上歩行性昆虫に多大な影響を与える場合がある。
- ◆ 生存に対する脅威 高山帯での側溝を伴う新たな道路建設。

(佐藤 福男)

コウチュウ目カミキリムシ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： 情報不足種 環境省2019： 該当なし
<b>コウヤホソハナカミキリ</b>	
<i>Strangalia koyaensis</i> Matsushita, 1933.	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国。日本固有種。
  - ◆ 県内の分布 上小阿仁村。
  - ◆ 本種の概要 高野山（和歌山県）で採集された個体で命名された。関西では普通種であるが、東北地方では分布しない県が多く、青森県、秋田県、福島県から知られている。青森県では安定した産地がある。スギ、ヒノキ、アスナロを食樹とする。
  - ◆ 本種の現状 上小阿仁村で1982年8月、ノリウツギに飛来したオス1個体が知られているのみである。当初偶産と思われていたが、その後青森県でも確認された。秋田県ではその後もこれ以外を確認されていない。
  - ◆ 生存に対する脅威 不明。
- （佐藤 福男）

ハチ目コマユバチ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 準絶滅危惧
<b>ウマノオバチ</b>	
<i>Euurobracon yokahamae</i> (Dalla Torre, 1898)	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。台湾、朝鮮半島、中国、ラオス、タイ、インド。
  - ◆ 県内の分布 秋田市、横手市。
  - ◆ 本種の概要 従来シロスジカミキリの幼虫に寄生するとされてきたが、加賀ら(2018)によりミヤマカミキリの蛹に寄生することが明らかにされた。神奈川県での観察によれば、成虫の出現期間は4月下旬～5月下旬であるが、秋田県での標本データは5月上旬～6月下旬である。成虫は、クリ園や畑地周辺の雑木林で見られることが多い。
  - ◆ 本種の現状 県内では本種について記録された報告はないが、秋田県立博物館収蔵標本4点と成田弘氏の標本1点が現存する。秋田県立博物館収蔵標本は、いずれも同館周辺で採集されたものである。全国的にはハチ類への関心の高まりと、放棄されたクリ園の増加により確認例が増えたといえるが、本県ではそのような状況にはない。
  - ◆ 生存に対する脅威 不明。
- （田中 政行）

ハチ目アリ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 絶滅危惧II類
<b>エゾアカヤマアリ</b>	
<i>Formica yessensis</i> Wheeler, 1913	

- ◆ 国内外の分布 北海道（南西部）、本州（中部以北）と周辺島嶼。シベリア、中国、朝鮮半島、台湾。
  - ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、仙北市。
  - ◆ 本種の概要 草地やカラマツ林などの比較的明るいところに営巣し、枯れ葉や落ち葉で高い塚をつくる。8月に結婚飛行を行う。
  - ◆ 本種の現状 男鹿市と秋田市については標本が現存するほか、国土交通省による河川水辺の国勢調査で、雄物川下流部と玉川ダムの複数箇所複数年にわたり記録されている。
  - ◆ 生存に対する脅威 冷涼な気候を好むため、温暖化が影響する可能性がある。
- （田中 政行）

ハチ目アリ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 絶滅危惧II類
<b>トゲアリ</b>	
<i>Polyrhachis lamellidens</i> Smith, 1874	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州と屋久島以北の島嶼。台湾、朝鮮半島、中国。
  - ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、大仙市、横手市。
  - ◆ 本種の概要 一次的社会寄生を行い、寄主としてはクロオオアリとムネアカオオアリが記録されている。立木のうろの中、特に根際付近の空洞に営巣することが多い。本州では8月下旬～11月に有翅個体の飛び出しが見られる。
  - ◆ 本種の現状 確認された生息地は、林道脇、森林公園内の遊歩道やキャンプ場、農業用溜池の切り土法面などで、いずれも林縁ではあるが人為的に改変されている場所が多い。安定している生息地もあるが、コロニー規模が小さい生息地では確認できなくなったところもある。
  - ◆ 生存に対する脅威 森林伐採による生息環境の減少。
- （田中 政行）

## ハチ目ギングチバチ科

## ニッポンハナダカバチ

*Bembix niponica* Smith, 1873

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、伊豆諸島、四国、九州、屋久島。朝鮮半島、台湾、中国、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 主に砂浜や河川の砂地に営巣し、ハエやアブの成虫を狩る。最初の獲物に産卵し、その後は幼虫の成長に合わせて随時給餌する。秋田県での成虫の確認は7～8月である。
- ◆ 本種の現状 男鹿市と大仙市の記録は飛翔中の成虫が採集されたものであるが、秋田市では巣穴を掘っている個体が観察されており、集団営巣も確認されている。沿岸部での記録が多いが、内陸部でも記録がある。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修、沿岸部の開発による営巣環境（砂地）の減少あるいは消失。

(田中 政行)

## ハチ目スズメバチ科

## ヤマトアシナガバチ

*Polistes japonicus* de Saussure, 1858

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：情報不足

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬、大隅諸島。朝鮮、台湾、中国、ベトナム。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 草木の枝や家屋の軒下、石垣等に小さい巣を作り、働きバチ数は通常20個体以下、総育房数は50～200程度である。県内では今のところ秋田市北部のみから見出されている。
- ◆ 本種の現状 近年になって秋田市北部地域の4か所で採集された。主に農村地帯の人家周辺で見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## ハチ目セイボウ科

## オオセイボウ

*Stilbum cyanurum* (Förster, 1771)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：情報不足

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬、琉球列島。朝鮮半島、台湾、東南アジア、ニューギニア、オーストラリア、ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 八峰町、秋田市。
- ◆ 本種の概要 本州では平地から低山地にかけて見られる。寄主の範囲は幅広く、スズバチに多く寄生するが、トクリバチ類やアメリカカジガバチへの寄生例がある。
- ◆ 本種の現状 沿岸部の離れた2か所で各1例の記録があるのみである。主な寄主であるスズバチは壁や石の表面などに泥で巣を作り、ジャクガ科の幼虫を狩る蜂で、県内に広く分布する。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## ハエ目カ科

## トワダオオカ

*Toxorhynchites towadensis towadensis* (Matsumura, 1916)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 小坂町、大仙市。
- ◆ 本種の概要 樹洞などから発生し、幼虫は共食いの習性があるため通常は一つの樹洞に1個体しかいない。成虫は雄雌とも花蜜などを食餌とし、しばしば太い木の幹の直前で上下に反復飛翔している。秋田県での成虫採集時期は7月と8月である。越冬態は幼虫である。
- ◆ 本種の現状 県北部と県中央部の山地域で各オス1個体しか記録がない。
- ◆ 生存に対する脅威 森林伐採による生息環境（樹林）の悪化。

(田中 政行)



ハエ目ハナアブ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 該当なし
<b>ケブカハラナガハナアブ</b>	
<i>Brachypalpus nipponicus</i> Shiraki, 1952	

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(秋田県、新潟県、長野県)。韓国、ロシア。
  - ◆ 県内の分布 横手市。
  - ◆ 本種の概要 成虫は4~6月に得られている。北海道の採集地は標高約800m、新潟県の採集地は標高903mであるのに対し、秋田県の採集地は標高60mとかなり低地である。秋田県の標本は、周辺の山からの移動個体と推測されている。
  - ◆ 本種の現状 山地からの移動個体と推定されるオス1個体しか採集されていない。
  - ◆ 生存に対する脅威 不明。
- (田中 政行)

トビケラ目シマトビケラ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 該当なし
<b>ガロアシマトビケラ</b>	
<i>Cheumatopsyche galloisi</i> (Matsumura, 1931)	

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。
  - ◆ 県内の分布 八峰町、にかほ市、大仙市、湯沢市。
  - ◆ 本種の概要 幼虫・蛹は平地河川の石礫底に生息する。幼虫の生活型は“造網型”と呼ばれ、水中を流れてくる有機物を餌とする、いわゆる濾過摂食者(コレクターと呼ばれている)の一種である。
  - ◆ 本種の現状 大小河川の流域で成虫の採集記録があるが、局所的である。
  - ◆ 生存に対する脅威 大規模出水に伴う治水工事や河川改修等による砂泥の増加などの生息環境の悪化。
- (青谷 晃吉)

トビケラ目ニンギョウトビケラ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 該当なし
<b>イズミンギョウトビケラ</b>	
<i>Goera lepidoptera</i> Schmid, 1965	

- ◆ 国内外の分布 本州中部以北。
  - ◆ 県内の分布 北秋田市、にかほ市、仙北市。
  - ◆ 本種の概要 幼虫は湧水流に生息する。砂粒で円筒型の筒巣を作り、その両翼に大きめの石を付ける。底の石面に付着する藻類などを剥ぎ取るようにして食べる仲間(スクレーパーと呼ばれている)の1種である。
  - ◆ 本種の現状 県内山間部5か所で成虫の採集記録がある。幼虫は近縁種のキョウトニンギョウトビケラ*Goera kyotonis* Tsuda, 1942と区別できないため生息を確認できていない。
  - ◆ 生存に対する脅威 圃場整備に伴う工事等による湧泉の埋没。地下水位の低下などによる湧水量の減少、湧水の枯渇。
- (青谷 晃吉)

トビケラ目ヒゲナガトビケラ科	秋田県2020： 情報不足 秋田県2002： - 環境省2019： 該当なし
<b>ミサキツトビケラ</b>	
<i>Triplectides misakianus</i> (Matsumura, 1931)	

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。
  - ◆ 県内の分布 八峰町。
  - ◆ 本種の概要 幼虫は河川氾濫原に残存する谷地湿原の池沼等に生息し、小枝、ガマや水生植物の茎を主材とした円筒型の筒巣をつくるが、詳しいことは分かっていない。
  - ◆ 本種の現状 2018、2019両年に八峰町の海岸部にある放置されたため池周辺で成虫の採集記録がある。飛翔能力からみて周辺に幼虫が定着していることが確実視される。
  - ◆ 生存に対する脅威 放置された溜池等の陸地化や整備などに伴う埋め立て。
- (青谷 晃吉)

## トビケラ目ヒゲナガトビケラ科

## ツダヒゲナガトビケラ

*Athripsodes tsudai* (Akagi, 1960)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、九州。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 幼虫は河川に生息し、砂粒からなる軽く湾曲した円錐型の筒巣を持つ。
- ◆ 本種の現状 幼虫・成虫共に採集記録は各1か所にとどまる。幼虫は同科の他属と区別でき、かつ日本産は1属1種であるため、種まで同定できる。2019年、由利本荘市で幼虫が確認された。
- ◆ 生存に対する脅威 河川改修などによる生息環境の悪化。

(青谷 晃吉)

## トビケラ目ヒゲナガトビケラ科

## カモヒゲナガトビケラ

*Ceraclaea kamonis* (Tsuda, 1942)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。
- ◆ 県内の分布 にかほ市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 幼虫については属レベルの分類しかできないため、生息場所や生態については不明。
- ◆ 本種の現状 成虫の採集記録は1か所にとどまる。幼虫は種レベルの同定が困難であるため、生息を確認していない。属の和名はタデヒゲナガトビケラ。
- ◆ 生存に対する脅威 水域環境の悪化。

(青谷 晃吉)

## トビケラ目ヒゲナガトビケラ科

## ヌマコヒゲナガトビケラ

*Adicella paludicola* Ito & Kuhara, 2013

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 幼虫は河川緩流部に生息し、細かい砂粒からなる軽く湾曲した円錐型の筒巣をもっている。幼虫では属レベルの分類しかできないため、生息場所や生態については不明。
- ◆ 本種の現状 成虫の採集記録は1か所にとどまる。幼虫は種レベルの同定は困難であるため、生息を確認できていない。属の和名はコヒゲナガトビケラ。
- ◆ 生存に対する脅威 水域環境の悪化。

(青谷 晃吉)

## トビケラ目ホソバトビケラ科

## クロホソバトビケラ

*Molanna nervosa* Ulmer, 1927

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、仙北市、大仙市、美郷町、横手市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 幼虫は主に湧水流に生息し、一部河川の緩流部にもみられる。幼虫は砂粒で頭部背面前方及び側方に張り出した楕型の筒巣をつくり、身をカモフラージュしている。砂底を注意深く観察しないと発見できないことが多い。
- ◆ 本種の現状 幼虫と成虫が散発的に採集されているが、幼虫の採集記録は河川よりも湧水の方が多い。近縁種のホソバトビケラは湖沼など各地の止水環境で普通に見られるが、本種の生息場所は局所的である。
- ◆ 生存に対する脅威 圃場整備に伴う工事等による湧泉の埋没、地下水位の低下などによる湧水量の減少、湧水の枯渇。

(青谷 晃吉)

チョウ目ヒゲナガ科

# ギンヒゲナガ

*Nemophora askoldella* (Millière, 1879)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。台湾、朝鮮半島南部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 成虫は7～8月に出現し、寄主植物は未知である。稀に灯火に飛来するが、日中にススキ草原でスウィーピングを行うと採集され、日没時にススキの葉先や低木の枝先など突出した場所で雄の集団飛翔が観察されている。
- ◆ 本種の現状 男鹿市とにかほ市の各1か所で採集されており、にかほ市の産地では継続して記録あるいは観察されている。いずれの産地も広大なススキ草原を有することから、ススキ草原に依存している種と推定される。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息地（ススキ草原）の減少あるいは消失。

(田中 政行)

チョウ目マダラガ科

# ヤホシホソマダラ

*Balataea octomaculata* (Bremer, 1861)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島南部、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 能代市、男鹿市、潟上市、秋田市、横手市。
- ◆ 本種の概要 年1～2化で、成虫は6月と8月に出現するとされるが、秋田県では7～9月に採集されている。生息地は明るい草地で、ササ、タケ、ヌマガヤを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では5か所で採集または観察されているが、特定の植生に依存してはいない。生息地のうち2か所は海岸部クロマツ林内である。記録は散発的で、複数個体が得られたのは1例のみである(交尾中)。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

チョウ目マダラガ科

# ルリハダホソクロバ

*Rhagades pruni esmeralda* (Butler, 1877)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、九州、対馬、五島列島。朝鮮半島からヨーロッパまで。
- ◆ 県内の分布 能代市、男鹿市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、成虫は本州低地や九州では6月、本州中部の山地では7～8月に出現するとされるが、秋田県では5月と7～8月に採集されている。火山性草原、河川敷など明るい草原に生息し、ズミを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では5か所で採集されており、継続して採集された産地はない。採集個体数はいずれも1個体で、記録は極めて散発的である。
- ◆ 生存に対する脅威 開発あるいは管理放棄による生息地（草地）の減少あるいは消失。

(田中 政行)

チョウ目メイガ科

# ヒメカバイロホソメイガ

*Rhinaphe minor* Sasaki, 2012

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州（秋田県、茨城県）。国外からは未知。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、横手市。
- ◆ 本種の概要 2012年に新種として記載された種で、食草など生活史は不明。情報はごく少ない。県内の産地は海岸砂丘地や平地の人里環境。
- ◆ 本種の現状 秋田市の2か所、男鹿市と横手市の各1か所で見出されているのみで、個体数が少ないものであるようだが、最近に認識された種で情報が少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目メイガ科

## クロミヤクホソメイガ

*Toshitamia komatsui* Sasaki, 2012

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道(南部)、本州(岩手県、秋田県、岐阜県)。国外からは未知。
- ◆ 県内の分布 大仙市。
- ◆ 本種の概要 これまで知られている産地は、いずれも滲出水によって涵養される湿原で、こうしたタイプの湿原に生息が限定されるものであるかもしれない。
- ◆ 本種の現状 県内では大仙市の1か所で採集された記録があるのみ。個体数が少ないものであるようだが、最近に認識された種で情報が少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 開発などによる植生の改変。

(梅津 一史)

## チョウ目ツトガ科

## イネコミズメイガ

*Paraponyx vittalis* (Bremer, 1864)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、大館市、大湯村、湯上市。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草として、イネ(イネ科)、ハゴロモモ(ジュンサイ科)、センニンモ、エビモ(以上ヒルムシロ科)が知られる。かつてはイネの害虫とされていたが近年はまれな種となっているという。
- ◆ 本種の現状 県内では1980年以前の記録があるのみで、最近では知見がない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シジミチョウ科

## ムモンアカシジミ

*Shirozua jonasi jonasi* (Janson, 1877)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(東北地方、関東地方北部、中部地方)。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、三種町、秋田市、にかほ市、仙北市、横手市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 カシワ、コナラ、ミズナラ、クヌギ、アベマキ、クリ(以上ブナ科)などに産卵し、幼虫はこれらの植物につくアブラムシやカイガラムシを食べる。ブナ科以外の植物への産卵も見られる。産地は局地的。
- ◆ 本種の現状 県内各地に記録があるが局所的。消長が激しく継続的に生息が確認された箇所は、横手市の1か所のみでごく少ない。生息の現況を把握しがたく調査も不十分。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シジミチョウ科

## オナガシジミ

*Araragi enthea entea* (Janson, 1877)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、佐渡島、隠岐、四国、九州。台湾、朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 大館市、能代市、仙北市、横手市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草はオニグルミ、ヒメグルミ(クルミ科)。サワグルミの例もあるという。
- ◆ 本種の現状 県内では主に内陸に分布するが、産地は普遍的でない。秋田駒ヶ岳山麓に多産地があったが、その後の生息情報がない。調査が不十分で現況を把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



## チョウ目タテハチョウ科

## オオムラサキ

*Sasakia charonda charonda* (Hewitson, [1863])

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：留意種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、佐渡。北海道ではきわめて局地的。朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、能代市、五城目町、秋田市、由利本荘市、仙北市、横手市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草はエノキ、エゾエノキ(ニレ科)。
- ◆ 本種の現状 県内各地に分布すると思われるが、著名な種の割には近年の生息情報があまり多くなかった。一方、2019年には由利本荘市で、これまで生息が知られていなかった場所で発見されるなど、新知見も出ている。全県的な現況については調査不足。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目タテハチョウ科

## サトキマダラヒカゲ

*Neope goschkevitschii* (Ménétrières, 1857)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、三種町、秋田市、由利本荘市、にかほ市、横手市。
- ◆ 本種の概要 食草は各種のササ・タケ類(イネ科)。
- ◆ 本種の現状 県内の記録はきわめて散発的。近縁種のヤマキマダラヒカゲと識別しにくいいためか、生息情報がきわめて少なく現況を把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目カギバガ科

## マンレイカギバ

*Microblepsis manleyi manleyi* (Leech, 1898)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。中国に別亜種が分布する。
- ◆ 県内の分布 八峰町、能代市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、関東地方では成虫は5～6月と7～8月に出現する。カマツカを寄主植物とし蛹で越冬する。
- ◆ 本種の現状 県内6か所で記録または確認されている。産地は局所的で個体数は少ないが、八峰町の産地では6～8月に継続して記録されている。寄主植物のカマツカは県内に広く分布する。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## チョウ目カギバガ科

## ウコンカギバ

*Tridrepana crocea* (Leech, 1889)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 八峰町。
- ◆ 本種の概要 年3化で、成虫は6月、7月下旬～8月上旬、9月中旬～10月に出現する。アカガシ、クヌギ、アラカシ、シラカシ、コナラ、アベマキを寄主植物とし、幼虫で越冬する。
- ◆ 本種の現状 八峰町で10月にオス1個体が記録されているのみである。宮城県では広く記録があるが、岩手県では岩泉町と盛岡市に1960年代の記録があるだけで、本県には定着していない可能性もある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目カギバガ科

## ヨスジシロカギバ

*Ditrigona quinquelineata* (Leech, 1898)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。中国西部。
- ◆ 県内の分布 湯沢市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、関東地方周辺では5～6月と7～8月に出現する。ヤマボウシ、ミズキを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 現存する標本は湯沢市の2個体のみである。他に大仙市から1個体が採集されているというが、標本は失われている。県内では6～7月に山地で採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## チョウ目カギバガ科

## サカハチトガリバ

*Kurama mirabilis* (Butler, 1879)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 五城目町、秋田市、由利本荘市、仙北市、横手市。
- ◆ 本種の概要 年1化で平地から丘陵地に見られ、関東地方では成虫は平地では4月、山地では5月に出現する。アカガシ、クヌギ、ミズナラ、カシワを寄主植物とし、蛹で越冬する。
- ◆ 本種の現状 県内6か所、平地から山地まで記録されているが、産地は局所的で総じて個体数は少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## チョウ目カギバガ科

## キボシミスジトガリバ

*Achlya longipennis longipennis* Inoue, 1972

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、関東地方周辺では成虫は4月下旬～5月下旬に出現する。寄主植物は未知。
- ◆ 本種の現状 八幡平で6月に記録されているのみである。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。
- ◆ 現在の保護対策 採集地は十和田八幡平国立公園の特別保護地区である。

(田中 政行)

## チョウ目カギバガ科

## クラマトガリバ

*Sugitaniella kuramana* Matsumura, 1933

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 八峰町、上小阿仁村、仙北市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、成虫は3月下旬～4月に出現する。クマシデを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内3か所で記録または確認されている。産地は局所的で個体数は少ない。秋田県植物分布図第2版にはクマシデは掲載されておらず、クマシデ属 *Carpinus* ではサワシバとアカシデが広く分布する。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

チョウ目ツバメガ科

# ハガタフタオ

*Dysaethria flavistriga* (Warren, 1901)

秋田県2020： 情報不足  
秋田県2002： 情報不足種  
環境省2019： 該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、屋久島、種子島、トカラ列島、奄美大島、徳之島、沖縄島、八重山諸島。台湾、中国南西部、北東ヒマラヤ。
- ◆ 県内の分布 秋田市、大仙市、横手市。
- ◆ 本種の概要 多化性と推測されているが、詳細は不明である。本県では7～8月に採集されている。ユズリハ、ヒメユズリハを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内4か所で記録または確認されている。産地は局所的で個体数は少ない。秋田県植物分布図第2版にはユズリハは1か所のみ。ヒメユズリハは掲載されておらず、ユズリハ科ではエゾユズリハが広く分布する。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。 (田中 政行)

チョウ目ツバメガ科

# カバイロフタオ

*Oroplema oyamana* (Matsumura, 1931)

秋田県2020： 情報不足  
秋田県2002： -  
環境省2019： 該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、屋久島。台湾、北西ヒマラヤ、マレー半島、ボルネオ島、ルソン島。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 年2化以上と推測されている。本県では8月と10月に採集されている。ヒメユズリハを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内3か所で記録または確認されている。山地に局所的に産し、個体数は少ない。秋田県植物分布図第2版にはヒメユズリハは掲載されておらず、ユズリハ科ではエゾユズリハが広く分布する。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。 (田中 政行)

チョウ目ツバメガ科

# ギンツバメ

*Acropteryx iphiata* (Guenée, 1857)

秋田県2020： 情報不足  
秋田県2002： 絶滅危惧種II類  
環境省2019： 該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。韓国、中国。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、成虫は5～7月と9～10月に出現するが、寒冷地では年1化の可能性がある。成虫は灯火に飛来することは少なく、屋間に葉の表面に止まっていることが多い。ガガイモ、オオカモメヅル、コカモメヅル、トキワカモメヅル、ナンゴクカモメヅルを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 秋田市平野部の5か所から記録または確認されている。5～9月に採集されており、個体数は少ない。寄主植物は、県内にはガガイモとオオカモメヅルが分布しており、いずれも分布範囲は広い。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。 (田中 政行)

チョウ目シャクガ科

# カバシャク

*Archiearis parthenias elegans* (Inoue, 1955)

秋田県2020： 情報不足  
秋田県2002： -  
環境省2019： 該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(東北地方から関東地方・中部地方の山地)。ユーラシア大陸の冷温帯。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、仙北市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草はシラカンバ(カバノキ科)が知られる。春に出現し、日中活動する。
- ◆ 本種の現状 八幡平、森吉山、栗駒山の山腹で採集されているほか、仙北市では標高400mほどの所で見出された例がある。八幡平では複数回採集されている。これらの産地にシラカンバはなく、ダケカンバやウダイカンバが食草となっていると思われる。高所では残雪が残る時期に出現するため調査不足である。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。 (梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目シャクガ科

## クロフカバシャク

*Archiearis notha okanoi* (Inoue, 1958)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 本州(青森県、岩手県、秋田県、長野県)。ロシア南東部からヨーロッパ、北アフリカ。
- ◆ 県内の分布 八峰町。
- ◆ 本種の概要 食草として、野外でイタリアポプラの記録があり、ヤマナラシ、セイヨウハコヤナギ(以上ヤナギ科)で飼育されているという。
- ◆ 本種の現状 県内では2017年に初めて八峰町で1個体が採集され、これ以外の記録はない。同地では他に数個体が目撃されているほか、秋田市でも本種と思われる目撃情報がある。
- ◆ 生存に対する脅威 放置による遷移の進行による里山の比較的開けた植生の変化。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## フタモントガリエダシャク

*Nadagara prosigna* Prout, 1930

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。少ない種であるという。
- ◆ 本種の現状 秋田市で2007年に採集された1個体が県内唯一の記録。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## トビカギバエダシャク

*Luxiaria amasa amasa* (Butler, 1878)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、伊豆大島、四国、九州、対馬、屋久島、トカラ列島、奄美大島、西表島。台湾、マレーシア、インドネシアなど東南アジア。
- ◆ 県内の分布 東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。北海道では2例、東北地方の記録はなかった。
- ◆ 本種の現状 東成瀬村で2007年に1個体が採集されているのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ソトシロモンエダシャク

*Cleora venustaria* (Leech, 1891)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(宮城県、福井県以南)、四国、九州。朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 北秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 1971年に北秋田市の山間地で1個体が採集されているのみ。東北地方では宮城県での1例があるのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



## チョウ目シャクガ科

## キバネトビスジエダシャク

*Myrioblyphara cilicornaria cilicornaria* (Püngeler, 1903)

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：情報不足種  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は野外では未知だが、ミズナラ(ブナ科)で飼育されているという。
- ◆ 本種の現状 丘陵地や山間地のあまり標高の高くない所で散発的に少数の採集例がある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## クロスジハイイロエダシャク

*Hirasa paupera* (Butler, 1881)

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：－  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国東北部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、にかほ市、大仙市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 食草として、コナラ(ブナ科)、タニウツギ(スイカズラ科)、ヒサカキ(サカキ科)などでも飼育可能でおそらく広食性だという。
- ◆ 本種の現状 鹿角市2か所、秋田市1か所、にかほ市2か所、大仙市1か所、湯沢市3か所で採集されているが、秋田市と湯沢市は1970年代以前の採集例しかない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## チャエダシャク

*Megabiston plumosaria* (Leech, 1891)

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：－  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(岩手県以南、秋田県)、伊豆大島、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市、横手市。
- ◆ 本種の概要 広食性で各種の広葉樹を食べるといふ。各地に普通であるという。
- ◆ 本種の現状 県内では4か所で採集例があり、1か所では多数が採集されたことがあるという。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## クロモンキリバエダシャク

*Psyra bluethgeni* (Püngeler, 1903)

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：－  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市、大仙市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 広食性で草本を含む多くの植物が記録されているという。低山地に普通に産するという。
- ◆ 本種の現状 県内では仙北市以南の山間地5か所の採集例があるのみ。図鑑等の記述と異なり、県内ではごく散発的にしか見出されていない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## モンキクロエダシャク

*Proteostrenia pica* Wileman, 1911

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道(南部)、本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市、大仙市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。比較的標高の高い山地に在るがあまり多くないという。
- ◆ 本種の現状 奥羽山系4か所の採集例があるが少なく、2000年代以降の採集例がない。標高は200～400mほどの所でも採集されており、高標高地に限らない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ヨスジキエダシャク

*Cotta incongruaria* (Walker, 1860)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(日本海側は秋田県まで)、四国、九州、対馬。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。暖地には普通に見られる種であるという。
- ◆ 本種の現状 男鹿市では1か所で2000年に一度採集されたことがあるのみ。その後にかほ市の1か所では複数回採集されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## トガリエダシャク

*Xyloscia subpersata* (Felder & Rogenhofer, 1875)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は、アケビ、ミツバアケビ(以上アケビ科)が知られる。
- ◆ 本種の現状 鹿角市2か所、北秋田市2か所、仙北市1か所で採集されており、仙北市の産地では複数回採集されている。採集されている場所はいずれも山間の広葉樹林内であるが、採集例が限定されている理由は明らかでない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ツツジツマキリエダシャク

*Endropiodes circumflexa* Inoue, 1976

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 八峰町、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草はヤマツツジ(ツツジ科)が知られる。同属のツマキリエダシャクやモミジツマキリエダシャクより暖かい地域に生息し、個体数は多くないという。
- ◆ 本種の現状 県内では2例の採集例があるのみで、状況は把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## フタテンエダシャク

*Seleniopsis evanescens* (Butler, 1881)

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：絶滅危惧種II類  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草はイチイ(イチイ科)が知られる。
- ◆ 本種の現状 八幡平の高所や栗駒山麓で採集されているほか、田沢湖畔にも採集例がある。採集された個体数はごく少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ウコンエダシャク

*Corymica pryeri* (Butler, 1878)

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：－  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、伊豆諸島、四国、九州、対馬、屋久島、奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島。台湾、朝鮮半島、中国からマレーシア、インドネシアからニューギニア島まで。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草は、ダンコウバイ、シロダモ、タブノキ(以上クスノキ科)が知られ、同科に固有とみられる。各地に普通だが北海道や本州東北部では産地が限られる。
- ◆ 本種の現状 県内では由利本荘市で1例の採集例があるのみ。偶産の可能性も含め県内での状況は明らかでない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## コガタヒメアオシャク

*Jodis orientalis* Wehrli, 1923

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：－  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、三宅島、四国、九州、奄美大島。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 広食性で各種の広葉樹を食べるといふ。
- ◆ 本種の現状 男鹿市1か所、秋田市2か所、仙北市1か所の採集例がある。秋田市の1か所では複数回採集されている。図鑑等では各地に普通と記述されているが、県内では少ないらしい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## オオナミガタアオシャク

*Jodis dentifascia* Warren, 1897

秋田県2020：情報不足  
 秋田県2002：－  
 環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草はカラマツ(マツ科)が知られる。
- ◆ 本種の現状 県内では5か所の採集例があるが、散発的で状況は把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

チョウ目シャクガ科

## ヨツメヒメシャク

*Cylophora albipunctata griseolata* (Staudinger, 1897)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。サハリン、朝鮮半島、シベリアからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、国外ではカバノキ科の記録があるという。
- ◆ 本種の現状 鹿角市で採集された1個体のみが知られる。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## ウスクロテンヒメシャク

*Idaeia salutaria* (Christoph, 1881)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 県内では2か所で各1回の採集例があるのみ。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## ウスキヒカリヒメシャク

*Idaeia nitidata* (Herrich-Schäffer, 1861)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、九州、対馬。朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、ヨーロッパ南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、潟上市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。まれな種であるという。
- ◆ 本種の現状 潟上市では1か所で1970年代～1980年に複数回採集されているが、鹿角市と秋田市は各1か所で1回ずつの採集例のみ。生息環境や分布状況などは把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## ウスオビコバナナミシャク

*Trichopteryx incerta* Yazaki, 1978

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 鹿角市では1970年代に1回の採集記録があるのみ。秋田市では1970年代、2000年代に合わせて4か所で採集されている。採集例は少ないがその原因は不明。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



## チョウ目シャクガ科

## シラナミナミシャク

*Glaucorhoe unduliferaria unduliferaria* (Motschulsky, 1861)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 1970年代に1個体採集された記録があるのみで、県内の生息状況などは不明。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ネアカナカジロナミシャク

*Paradysstroma corussria* (Oberthür, 1880)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、由利本荘市、仙北市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。本州では東北地方、関東地方、中部地方の山地の亜高山帯で得られるが比較的少ないという。
- ◆ 本種の現状 仙北市では3か所の採集例があるが、それ以外の市村ではそれぞれ1例のみ。奥深い山間地で採集された例が多い。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## アカモンコナミシャク

*Paipoctenidia phoenicosoma semilata* Prout, 1939

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、伊豆大島、四国、九州。台湾、中国、インド北部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草としてクワ類の花(クワ科)が知られる。本州では主に関東地方以西に分布するという。
- ◆ 本種の現状 仙北市で3か所、鹿角市と大仙市で各1か所の採集例があるのみで、個体数は少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## ヤハズナミシャク

*Gagiyodes sangittata albiflua* (Prout, 1939)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、ヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は国内では未知だが、ヨーロッパではカラマツソウ属(キンポウゲ科)の実を食べるという。
- ◆ 本種の現状 鹿角市で2か所、北秋田市、仙北市で各1か所の採集例があるのみ。採集例は非常に散発的で、個体数は少ない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目シャクガ科

## カラスナミシャク

*Eupithecia caliginea* Butler, 1878

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（岩手県、宮城県、秋田県、福島県、山梨県、静岡県）。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 仙北市、湯沢市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。局地的で個体数はきわめて少ないという。
- ◆ 本種の現状 県内では3か所で採集された例があるだけで、個体数はきわめて少なく、県内における現状は把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## カメダカバナミシャク

*Eupithecia detritata* Staudinger, 1897

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（新潟県、埼玉県、長野県）。ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。北海道では広く分布するが、本州ではごく少数の記録しかない。
- ◆ 本種の現状 県内では2例の採集例があるのみで、県内における現状は把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## クロモンカバナミシャク

*Eupithecia consortaria* Leech, 1897

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。中国西部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。関東地方では山地で8～9月に採集されるが少ないという。
- ◆ 本種の現状 県内では1個体が採集されているのみで、詳細は不明。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目シャクガ科

## クロテンカバナミシャク

*Eupithecia emanata* Dietze, 1908

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草はカラマツ（マツ科）が知られる。分布は広く各地で多産するという。
- ◆ 本種の現状 鹿角市や仙北市で1970～1980年代に11か所で採集されている。2000年代以降の採集例はあまりない。現状は明らかでない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目シャクガ科

## グンマカバナミシャク

*Eupithecia ebriosa* Vojnits, 1979

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州（秋田県、山形県、群馬県、新潟県）。中国。
- ◆ 県内の分布 秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。群馬県で採集された完模式標本のほかに、山形県、新潟県で局所的に採集されているという。
- ◆ 本種の現状 秋田市の山間部で1個体が採集された例があるのみで、現状は把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目シャクガ科

## リンゴアオナミシャク

*Pasiphila rectangulata* (Linnaeus, 1758)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、三宅島、四国、九州、対馬。ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、秋田市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 食草はリンゴ、ナシ、エゾノウワミズザクラ（以上バラ科）の主に花が知られる。
- ◆ 本種の現状 県内では3例の採集例があるのみで、現状は不明。ごく近似の別種が混同されている可能性もあり、精査が必要。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（梅津 一史）

チョウ目カイコガ科

## スカシサン

*Prismosticta hyalinata* (Butler, 1885)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 秋田市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 年1化で、7～8月に採集されているが、5月に採集された記録もあるので、一部では2化しているかもしれない。山地で採集されるがあまり多くない。灯火に飛来するが、昼も観察される。サワフタギ、タンナサワフタギを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 県内では3か所で採集または確認されており、継続して採集された産地はない。採集個体はいずれもメス1個体で、記録は極めて散発的である。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（田中 政行）

チョウ目スズメガ科

## スキバホウジャク

*Hemaris radians* (Walker, 1856)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：絶滅危惧II類

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬、沖縄島、石垣島、西表島。朝鮮半島、中国北部、シベリア、モンゴル。
- ◆ 県内の分布 湯沢市。
- ◆ 本種の概要 年2化で、成虫は5～9月に出現する。昼行性で、近年は減少しているようである。オミナエシ、オトコエシ、スイカズラ、アカネを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 1980年代に湯沢市で1例の記録があるのみである。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

（田中 政行）

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目ドクガ科

## オオヤママイマイ

*Lymantria lucescens* (Butler, 1881)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：－

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。朝鮮半島。
- ◆ 県内の分布 八峰町。
- ◆ 本種の概要 年1化で、成虫は8～9月に出現する。クヌギを寄主植物とする。
- ◆ 本種の現状 1970年代に八峰町で1例の記録があるのみである。秋田県植物分布図第2版では八峰町にクヌギの分布は知られていないので、他に寄主植物がある可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(田中 政行)

## チョウ目コブガ科

## ナンキンキノカワガ

*Gadirtha impingens impingens* Walker, 1858

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。インド～オーストラリア地域に広く分布。
- ◆ 県内の分布 由利本荘市、にかほ市。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草はナンキンハゼ、シラキ(以上トウダイグサ科)が知られる。
- ◆ 本種の現状 由利地方沿岸部の丘陵地4か所で採集されているが、個体数は少ない。幼虫の食草であるシラキは由利地方沿岸部にわずかに生育が知られている。分布の北限域にあることから記録が少ないのかもしれない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ナミグルマアツバ

*Anatatha lignea* (Butler, 1879)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。日本固有種。
- ◆ 県内の分布 秋田市、にかほ市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。温暖な地方に産するが少ない。
- ◆ 本種の現状 これまでに数例の採集例があるが、きわめて散発的で、採集された地点の環境もさまざまでのような環境に生息するものなのか特定できない。秋田県は記録されている範囲の北限域で、偶産種である可能性もある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ベニエグリコヤガ

*Holocryptis nymphula* (Rebel, 1909)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。朝鮮半島、ロシア南東部。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 採集例はきわめて散発的。山間地から沿岸までさまざまな環境で採集されており、生息環境を特定し難い。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



チョウ目ヤガ科

## マガリウスツマアツバ

*Bomolocha mandarina* (Leech, 1900)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：情報不足種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州。中国。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、湯沢市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 県内の採集例は3例のみと思われる。採集された地点の環境は、里山の落葉広葉樹二次林。食草が未知であるなど生態に関する知見が乏しく、産出を限定する要因があるのかもわからない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## カギモンハナオイアツバ

*Cidaripura signata* (Butler, 1879)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、屋久島。朝鮮半島、中国。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、北秋田市、能代市、秋田市、にかほ市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。明るい雑木林の林縁や河川敷などの草地で発生しているが少ないという。
- ◆ 本種の現状 採集されたことのある地点は10か所以上あるが、同じ場所で繰り返し採集されることがなく、生息状況を把握しにくい。山間地、丘陵地、湿原、河川敷などさまざまな環境で採集されており、特定の環境との結びつきも明らかでない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## アカマエアツバ

*Simplicia rectalis* (Eversmann, 1842)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：情報不足種  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部からヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 潟上市、秋田市、横手市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。北海道では各地で採集されるが、本州では関東地方と東海地方の平地で採集されているという。河川敷や沼沢地のガとの見方もある。
- ◆ 本種の現状 最近30年ほど情報がなく、現状は不明。これまでの採集例は人里的環境。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

チョウ目ヤガ科

## カシワアツバ

*Pechipogo strigilata* (Linnaeus, 1851)

秋田県2020：情報不足  
秋田県2002：－  
環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(秋田県、本州中部山地)。サハリン、朝鮮半島から中国、ロシアからヨーロッパ。
- ◆ 県内の分布 鹿角市。
- ◆ 本種の概要 食草は広葉樹の枯葉で、与えれば生葉も食べる。
- ◆ 本種の現状 鹿角市で1977年に1個体採集された記録が東北地方唯一の記録。それ以外の情報は全くない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## プライヤキリバ

*Goniocraspidum pryeri* (Leech, 1889)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、四国、九州、対馬。台湾。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、仙北市、横手市。
- ◆ 本種の概要 食草は、ウラジロガシ、アラカシ、コナラ、クヌギ、カシワ、アベマキ（以上ブナ科）が知られる。6月に出現した成虫は洞窟など地下の暗黒空間に入り越夏休眠し、ほとんどそのまま成虫越冬するという。越夏越冬には安定した温湿度環境が必要で、分布制限要因になるという。
- ◆ 本種の現状 ささまざまな環境で散発的に採集されており、生息環境は特定しがたい。越夏休眠するという生態のためにライトトラップによる調査で見出されにくいために記録が少ないのかもしれない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## コシロシタバ

*Catocala actaea* Felder & Rogenhofer, 1874

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草はクヌギ(ブナ科)など。
- ◆ 本種の現状 大仙市で1975年に1個体が採集された記録があるのみ。その後同地での調査もなく、全く情報が無い。横手盆地には植栽のクヌギが見られるが、県内に本種が定着していたのかどうかも疑わしい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ジョウザンケンモン

*Acronicta jozana* (Matsumura, 1926)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（青森県、宮城県、秋田県、新潟県、長野県、岐阜県）。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。
- ◆ 本種の現状 1974年に北秋田市の山間部で1個体が採集された記録があるのみ。同地ではその後も調査が行われているが、全く情報が無い。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ヒメシロテンアオヨトウ

*Trachea melanospila* Koller, 1844

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、九州。サハリン、朝鮮半島、中国、ロシア南東部、ネパール、インド、パキスタン。
- ◆ 県内の分布 鹿角市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 ソバ(タデ科)から幼虫が確認されている。本州では高山帯を含む比較的高標高地で確認される。
- ◆ 本種の現状 十和田湖周辺の山地、八幡平、秋田駒ヶ岳で採集された記録があり、特に八幡平の山頂部では同時に多数が見出されている。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## チャイロカドモンヨトウ

*Apamesa sodalis* (Butler, 1878)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州、伊豆諸島御蔵島、四国、九州、対馬、屋久島、沖縄島、石垣島。台湾、朝鮮半島、中国、ネパール、インド、フィリピン、ボルネオ島。
- ◆ 県内の分布 男鹿市、秋田市、由利本荘市、にかほ市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草はクサヨシ、カラスムギ、カモジグサ、アシボソ（以上イネ科）など草本類。成虫は5～6月に羽化後、洞窟内で越冬し、8～9月に出現するという。
- ◆ 本種の現状 県内では少数の散発的な採集例があるが、特定の環境との結びつきは見出せない。秋田県は本種が記録された範囲の北限付近にあり、偶産の疑いもある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## クマソオオヨトウ

*Kumasia kumaso* (Sugi, 1963)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州（岩手県、宮城県、秋田県、新潟県、長野県、福井県、石川県、静岡県、岡山県）、伊豆諸島、四国、九州（福岡県、大分県、熊本県）。中国。
- ◆ 県内の分布 秋田市、由利本荘市。
- ◆ 本種の概要 食草はハチク、マダケ、ヤダケ、ホテイチク（以上イネ科）。産地は局地的。
- ◆ 本種の現状 秋田市から由利本荘市岩城にかけての沿岸部で4か所の採集例があり、そのうち1か所では同一年に複数回採集されている。秋田県は分布域の北限になることから、偶産の疑いもあるが、近年採集例が増えており、定着している可能性がある。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## モトグロヨトウ

*Xanthograptia basinigra* Sugi, 1982

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（秋田県、新潟県、石川県、群馬県、長野県、岐阜県）。朝鮮半島、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、秋田市、由利本荘市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 食草は未知。個体数は少ない。
- ◆ 本種の現状 県内ではさきわめて散発的に採集例があるだけで、同一箇所でも複数回採集されたこともない。生息状況は把握しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。
- ◆ 特記事項 秋田県版レッドデータブック2002年版では、モトグロコヤガの和名で掲載。分類の見直しに伴い改称された。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ウスベニキリガ

*Orthosia cedermarki* (Bryk, 1949)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：-

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州。朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 潟上市、秋田市、由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 クリ、ソメイヨシノで飼育されているという。採集される個体数は少ない。
- ◆ 本種の現状 散発的な採集例しかないが、沿岸部の記録が多く、丘陵地に生息するものらしい。産地を限定するような要因は不明。由利本荘市では同時に複数採集されている場所がある。個体数が少ない種であり、近年の採集例が減っているわけではない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM

## チョウ目ヤガ科

## タイリクウスイロヨトウ

*Anarta trifolii* (Hufnagel, 1766)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州。中国、ロシア、インド、イラン、ヨーロッパ、北アフリカ、カナダ、アメリカ、チリ。
- ◆ 県内の分布 大館市、男鹿市、秋田市、由利本荘市、仙北市。
- ◆ 本種の概要 食草としてタマネギ(ネギ科)、ミチヤナギ(タデ科)、イワナズナ(アブラナ科)などが知られており、草本類を広く食べるという。国内では産出は局地的。
- ◆ 本種の現状 山間地から海岸までさまざまな環境で散発的に採集されており、生息環境は特定しがたい。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## オオカブラヤガ

*Agrotis tokionis* Butler, 1881

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州、四国、九州、対馬。サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ロシア南東部、アムール地方、トランスバイカルからシベリア西部まで。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、潟上市。
- ◆ 本種の概要 食草はハクサイ(アブラナ科)、ネギ(ネギ科)が知られる。平地の蔬菜畑に多いという。
- ◆ 本種の現状 北秋田市では1972年に1個体が採集されたのみ。潟上市では1970年代と1980年代に2か所で採集されており、複数年にわたって見出されている。秋季に成虫が出現する種であり、むしろ耕作地に生息する傾向があることから、調査不足であるかもしれない。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## マエグロヤガ

*Agrotis scotacra* (Filipjev, 1927)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 本州(秋田県)。朝鮮半島北部、中国東北部、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 潟上市。
- ◆ 本種の概要 1979年に潟上市で採集されたオス1個体が国内で唯一の記録。偶産種であるかもしれないという。
- ◆ 本種の現状 上記記録以外に一切情報なし。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)

## チョウ目ヤガ科

## ナカグロヤガ

*Xestia undosa* (Leech, 1889)

秋田県2020：情報不足

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州(中部地方以北)、四国(剣山)。千島、朝鮮半島、中国、ロシア南東部。
- ◆ 県内の分布 にかほ市、東成瀬村。
- ◆ 本種の概要 食草はコヌカグサ(イネ科)が知られる。
- ◆ 本種の現状 これまでに2か所で各1例の採集例があるのみ。秋田県は全国的な分布範囲の中にあり、遠方からの飛来種ではないと考えられるが、定着しているかどうかは不明。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。

(梅津 一史)



## コウチュウ目オトシブミ科

## サメハダハマキチョッキリ玉川下流域藍色個体群

*Byctiscus rugosus* (Gebler, 1830)

秋田県2020：地域個体群

秋田県2002：情報不足種

環境省2019：該当なし

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州（北部）。極東ロシア、朝鮮、モンゴル、カザフスタン。
- ◆ 県内の分布 仙北市。
- ◆ 本種の概要 サメハダハマキチョッキリはドロノキに依存し、通常緑色の金属光沢を帯びる。しかし、雄物川支流の玉川下流域では極稀にしか出現しない青紫色の個体が高率で出現する。このような個体群は現在この地域以外では知られていない。
- ◆ 本種の現状 この個体群は玉川下流域の比較的狭い範囲に分布する。上流部には通常個体しか産しない。青紫色個体の割合は約40%と非常に高い。この地域だけ高率で出現する理由は不明であるが、特異な地域個体群として注目される。
- ◆ 生存に対する脅威 ドロノキの伐採

(佐藤 福男)

## コウチュウ目ハムシ科

## オオルリハムシ

*Chrysolina virgata* (Motschulsky, 1860)

秋田県2020：留意種

秋田県2002：-

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 本州（佐渡島を含む）、四国、九州（大分県）。朝鮮半島、中国北部、シベリア東部。
- ◆ 県内の分布 北秋田市、男鹿市、五城目町、秋田市、由利本荘市、にかほ市、仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 日本のハムシ科では最大種、秋田県産個体は青～青緑の金属光沢を帯びてよく目立つ。本県で確認された食草は湿地帯に多いシロネ、ヒメシロネ、コシロネのシロネ属3種である。食草の分布は広いが産地は局所的で、個体数も多くない。
- ◆ 本種の現状 大型で美麗、動きは鈍く、食草の上部に静止していることが多く生息の確認は容易である。主に低地から低山帯の湿地で発見されるが、湿地に隣接した放棄水田等で見かけることもある。都市部や沿岸部の生息地では開発により消滅した産地もある。
- ◆ 生存に対する脅威 沿岸部で産地が複数個所消滅しており、開発等では留意する必要がある。

(佐藤 福男)

## チョウ目タテハチョウ科

## ベニヒカゲ

*Erebia neriene nipponica* Janson, 1877

秋田県2020：留意種

秋田県2002：準絶滅危惧種

環境省2019：準絶滅危惧

- ◆ 国内外の分布 北海道、本州の山岳。千島列島、サハリン、朝鮮半島、中国東北部、モンゴル、ロシア（アルタイ、サヤンからアムール川下流域まで）。
- ◆ 県内の分布 仙北市、大仙市。
- ◆ 本種の概要 幼虫の食草としてカヤツリグサ科やイネ科が知られている。本州では山岳に分布が限られ、東北地方では早池峰山系、和賀山地、焼石山系、鳥海山、月山、朝日連峰、飯豊連峰から知られるが、鳥海山や焼石山系では秋田県の行政区域内に生息地がない。
- ◆ 本種の現状 県内の生息地はおよそ標高1000m以上の風衝草原で、個体数は多い。
- ◆ 生存に対する脅威 不明。
- ◆ 現在の保護対策 生息地は県立自然公園の特別地域内にあり、ベニヒカゲは秋田県立自然公園条例施行規則により採取を制限する種に指定されている。

(梅津 一史)

EX

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

CM



## 昆虫類参考文献

### 【トンボ目】

- 林紀男・尾崎保夫. 2011. ヨシ原に設置したヨシ植栽水質浄化施設の水生動物相. 秋田自然史研究 59: 1-4.
- 石田昇三・石田勝義. 2018. トンボ目(蜻蛉目). 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 151-270. 東海大学出版会.
- 海原要. 2003. 本荘市・由利郡の昆虫. 秋田自然史研究 46: 4-5.
- 工藤淳一. 2012. ホンサナエを秋田市雄和で採集. 秋田自然史研究 61: 28.
- 松山忠. 1974. トンボの採集報告. 秋田自然史研究 2: 4.
- 松山忠. 1975. トンボの知見 '74. 秋田自然史研究 3: 19.
- 松山忠. 1992. ムカシヤンマについて. 秋田自然史研究 28: 5.
- 成田弘. 1992. 栗駒山西部山麓で採集されたトンボ類. 秋田自然史研究 28: 6-10.
- 成田弘. 1994. 栗駒山西部山麓で採集された7種の昆虫. 秋田自然史研究 30: 38-39.
- 大日向貞英. 2009. 羽後町の自然. 私家版.
- 小田嶋順治. 2000. 続・横手のトンボ. 秋田自然史研究 40: 44-46.
- 小田嶋順治・猿橋晃. 1999. 横手のトンボ. 秋田自然史研究 38: 19-21.
- 佐々木明夫. 2005. VII. 協和町の陸上昆虫類. 協和町動植物調査編集委員会(編), 協和町動植物調査報告書: 160-285. 協和町教育委員会.
- 佐藤福男. 1989. カオジロトンボ大谷地(八幡平)に産す. 秋田自然史研究 24: 24.
- 佐藤福男. 1990. ホソミオツネトンボ秋田県に産す. 秋田自然史研究 26: 22.
- 杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司. 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑 1-917. 北海道大学図書刊行会.
- 高橋雅彌. 1979. 秋田県の蜻蛉(II). 秋田自然史研究 11: 16-17.
- 高橋雅彌. 1992. 秋田県の蜻蛉III. 秋田自然史研究 28: 11-24.
- 高橋雅彌. 1992. マダラニワトンボの再発見. 秋田自然史研究 28: 24.
- 高橋雅彌. 1993. 秋田県の蜻蛉IV. 秋田自然史研究 29: 9-16.
- 高橋雅彌. 1994. 佐々木明夫氏採集のトンボ類. 秋田自然史研究 30: 7.
- 高橋雅彌. 1994. 秋田県の蜻蛉V. 秋田自然史研究 30: 1-6.
- 高橋雅彌. 1995. 秋田県の蜻蛉VI. 秋田自然史研究 31: 21-25.
- 高橋雅彌. 1999. 秋田県の蜻蛉VII. 秋田自然史研究 38: 5-10.
- 高橋雅彌. 2002. 秋田県の蜻蛉VIII. 秋田自然史研究 45: 18.
- 高橋雅彌. 2010. 秋田県の蜻蛉IX. 秋田自然史研究 57: 20-22.
- 高橋雅彌. 2011. スナアカネはエゾアカネの誤同定. 秋田自然史研究 59: 36.
- 高橋雅彌. 2014. 秋田県の蜻蛉X. 秋田自然史研究 65: 32-33.
- 田中政行. 2003. 秋田県初記録のタイリクアキアカネ. 秋田自然史研究 46: 19.
- 田中政行. 2005. 2003年度第1回観察会で観察した昆虫. 秋田自然史研究 49: 11.
- 田中政行. 2010. 冬師でライトトラップに飛来したコバネアオイトトンボ. 秋田自然史研究 57: 29.

- 田中政行. 2012. トンボ2種の確認記録. 秋田自然史研究 62: 14.
- 田中政行. 2015. 皆瀬川でアオハダトンボを確認. 67: 58.
- 田中政行. 2019. 横手川におけるアオハダトンボの追加記録. 75: 43.
- 田中政行・佐藤勝. 2003. コシボソヤンマの新産地. 秋田自然史研究 46: 20.

## 【カワゲラ目】

- 青谷晃吉. 2005. VIII. 協和町の底生動物. 協和町動植物調査編集委員会(編), 協和町動植物調査報告書: 286-317. 協和町教育委員会.
- 青谷晃吉. 2018. 酸性河川(秋田県玉川水系渋黒川)における底生動物群集組成の季節変動と特性. 陸水生物学報 33: 35-47.
- 清水高男・稲田和久・内田臣一. 2018. カワゲラ目. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 271-324. 東海大学出版会.
- 東北緑化環境保全株式会社. 2013. 第2章 底生動物調査. 平成24年度米代川水辺現地調査(植物・底生動物)業務報告書 84pp.
- 津田松苗・赤木郁恵. 1962. 毛翅目. 津田松苗(編), 水生昆虫学: 112-148. 北隆館.
- 横山宣雄・磯辺ゆう・山本茂. 1990. アミメカワゲラ科の新属新種シノピアミメカワゲラ(*Megaperlodes niger*)の山形県における分布. 第55回大会日本陸水学会講演要旨集. 175pp. 日本陸水学会.

## 【カマキリ目・バツタ目】

- 町田龍一郎(監修), 日本直翅類学会(編). 2016. 日本産直翅類標準図鑑. 学研プラス.
- 日本直翅類学会(編). 2006. バツタ・コオロギ・キリギリス大図鑑. 北海道大学出版会.
- 田中政行. 2004. 西仙北町でカヤコオロギを採集. 秋田自然史研究 47: 32.
- 田中政行. 2010. 冬師の直翅目2種の記録. 秋田自然史研究 57: 29.
- 田中政行. 2014. 湯沢市旧雄勝町でコロギスを採集. 秋田自然史研究 65: 46.
- 田中政行. 2016. クビキリギリス秋田県2例目の記録. 秋田自然史研究 69: 32.
- 田中政行. 2018. ウスバカマキリの記録. 秋田自然史研究 74: 11.
- 田中政行・梅津一史. 2007. 「バツタ・コオロギ・キリギリス大図鑑」の県別分布表にない秋田県産直翅目. 秋田自然史研究 51: 41-47.

## 【カメムシ目】

- 林正美・宮本正一. 2018. 半翅目. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 329-427. 東海大学出版部.
- 三田村俊正・平澤桂・吉井重幸. 2017. タガメ・ミズムシ・アメンボ ハンドブック. 文一総合出版.
- 日本昆虫目録編集委員会(編). 2016. 日本昆虫目録 第4巻 準新翅類. 日本昆虫学会.



## 【ハエ目】

- 市毛勝義. 2008. *Brachypalpus nipponicus* ケブカハラナガハナアブの記録. はなあぶ 27:6-9.
- 市田忠夫. 2002. 青森県と秋田県のトワダオオカ5新産地. *Celastrina* 37:76-78.
- 日本昆虫目録編集委員会(編). 2014. 日本昆虫目録 第8巻 双翅目 第1部 長角亜目—短角亜目無額囊節. 日本昆虫学会.
- 日本昆虫目録編集委員会(編). 2014. 日本昆虫目録 第8巻 双翅目 第2部 短角亜目額囊節. 日本昆虫学会.
- 田中和夫. 2018. カ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版:1021-1269. 東海大学出版部.
- 田中政行. 2012. トワダオオカを大仙市協和で採集. 秋田自然史研究 61:28.

## 【ハチ目】

- 加賀玲子・川島逸郎・刈部治紀. 2018. ウマノオバチの生活史, 特にその寄主について. 神奈川県立博物館研究報告 47:59-66.
- 前藤薫. 2008. コマユバチ科. 平嶋義宏・森本桂(監修), 新訂原色昆虫大圖鑑 第III巻. 北隆館.
- 佐々木明夫. 2005. 協和町の陸生昆虫類. 協和町動植物調査報告書. 協和町.
- 田中政行. 2017. トゲアリの追加記録. 秋田自然史研究 71:23.
- 田中政行・高橋大作. 1998. 秋田県未記録のトゲアリを採集. 秋田自然史研究 36:22.
- 寺山守・久保田敏・江口克之. 2014. 日本産アリ類図鑑. 朝倉書店.
- 寺山守・須田博久(編・著). 2016. 日本産有剣ハチ類図鑑. 東海大学出版部.
- 梅津一史. 2014a. オオセイボウを秋田県八峰町で採集. 秋田自然史研究 65:45.
- 梅津一史. 2014b. オオセイボウの秋田市での採集例. 秋田自然史研究 66:24.
- 梅津一史. 2015. 秋田市とその周辺におけるニッポンハナダカバチの記録. 秋田自然史研究 68:21-22.
- 吉田浩史. 2006. 大阪府のハバチ・キバチ類. 西日本ハチ研究会.

## 【トビケラ目】

- 青谷晃吉. 1988. 秋田県中仙町に生息する止水生のトビケラについて. 兵庫陸水生物 30:9-12.
- 青谷晃吉. 2005. VIII. 協和町の底生動物. 協和町動植物調査編集委員会(編), 協和町動植物調査報告書:286-317. 協和町教育委員会.
- 青谷晃吉. 2018. 酸性河川(秋田県玉川水系渋黒川)における底生動物群集組成の季節変動と特性. 陸水生物学報 33:35-47.
- 青谷晃吉. 2018. 秋田県の湧水に棲む生き物たち2—トビケラ目—. 秋田自然史研究 74:4-7.
- 青谷晃吉・野崎隆夫. 2001. 秋田県雄物川扇状地の湧水流におけるババホタルトビケラの生活史. 陸水学雑誌 62:23-39.
- 秋田県大仙市立西仙北西中学校総合的な学習の時間生物調査班. 2008. オオクチバス駆除後の動物相の変化について. 第51回日本学生科学賞作品集:86-88. 読売新聞東京本社事業開発部.

- 井上晴夫・西村隆. 1989. 男鹿半島の二の目淵における湖沼生態系について. 秋田大学教育学部研究紀要(自然科学) 40: 15-39.
- Ito, T. 1994. Description of Four New Species of Lepidostomatid Caddisflies (Trichoptera) from Honshu, Central Japan. Jpn.J.Ent. 62: 79-92.
- 伊藤富子. 2018. カクツツトビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 598-612. 東海大学出版会.
- 伊藤富子. 2018. ホソバトビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 657-660. 東海大学出版会.
- Ito, T., Hayashi, Y. & Shimura, N.. 2012. The genus *Anisocentropus* McLachlan (Trichoptera, Calamoceratidae) in Japan. Zootaxa 3157: 1-17.
- Ito, T., Kuhara, N. & Katsuma, N.. 2013. The genus *Adicella* McLachlan (Trichoptera, Leptoceridae) in Japan. Zootaxa 3635: 27-39.
- 環境省(2019): 湧水把握件数 <https://www.env.go.jp/water/yusui/result/sub4-/.html> (2019年4月5日更新、2019年12月5日閲覧)
- Katsuma, N. & Kuranishi, R. B.. 2016. Redescription of *Triplectides misakianus* (Matsumura, 1931) (Trichoptera, Leptoceridae) in Japan with notes on its habitat. Zoosymposia 10: 234-242.
- 野崎隆夫. 2018. エグリトビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 613-627. 東海大学出版会.
- 野崎隆夫. 2018. トビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 585-589. 東海大学出版会.
- 野崎隆夫. 2018. ニンギョウトビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 637-642. 東海大学出版会.
- Nozaki, T. & Tanida, K. 2006. The genus *Goera* Stephens (Trichoptera: Goeridae) in Japan. Zootaxa 1339: 1-29.
- 田中政行. 2010. 玉川ダム周辺で確認したトビケラ類成虫. 秋田自然史研究 58: 16-19.
- 田中政行. 2011. にかほ市冬師のトビケラ類・補遺. 秋田自然史研究 60: 25.
- 田中政行. 2012. 秋田県のトビケラ目分布資料. 秋田自然史研究 62: 10-14.
- 田中政行. 2013. 刺巻湿原で確認されたヤチトビケラについて. 秋田自然史研究 64: 21-24.
- 田中政行. 2014. 秋田県のトビケラ目分布資料 3. 秋田自然史研究 65: 36-41.
- 田中政行. 2016. 秋田県のトビケラ目分布資料 6. 秋田自然史研究 69: 21-26.
- 田中政行. 2016. ヤチトビケラ秋田県2例目の記録. 秋田自然史研究 70: 6.
- 田中政行. 2017. 秋田県のトビケラ目分布資料 8. 秋田自然史研究 71: 25-28.
- 田中政行. 2017. 秋田県のトビケラ目分布資料 9. 秋田自然史研究 72: 1-7.
- 田中政行. 2018. 秋田県のトビケラ分布資料 11. 秋田自然史研究 74: 8-11.
- 谷田一三. 2018. シンテイトビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 553-556. 東海大学出版会.
- 谷田一三. 2018. シマトビケラ科. 川合禎次・谷田一三(編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 567-583. 東海大学出版会.

- 谷田一三. 2018. ヒゲナガトビケラ科. 川合禎次・谷田一三 (編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 643-656. 東海大学出版会.
- 谷田一三・伊藤富子. 2018. アシエダトビケラ科. 川合禎次・谷田一三 (編), 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 第二版: 661-664. 東海大学出版会.
- 津田松苗・赤木郁恵. 1962. 毛翅目. 津田松苗 (編), 水生昆虫学: 112-148. 北隆館.

## 【コウチュウ目】

- 青森県. 2010. 青森県レッドデータブック (2010年改訂版).
- 相本篤志. 2018. 山口県におけるチンメルマンセスジゲンゴロウの初記録. SAYABANE N.S. 29: 27-28.
- 秋田県. 2002. 秋田県の絶滅のおそれのある野生生物 動物編.
- 芦田久. 2007. ハンミョウ類の分類. 昆虫と自然 42(8): 5-8.
- 秋田県大仙市立西仙北西中学校総合的な学習の時間生物調査班. 2008. オオクチバス駆除後の動物相の変化について. 第51回日本学生科学賞作品集: 86-88. 読売新聞東京本社事業開発部.
- 芳賀馨. 2003. 芳賀純氏によって1947年に秋田県湯沢市で採集された甲虫. InsectTOHOKU 5: 11-15.
- 萩野秀一・遅沢恭二. 2016. 秋田県のマークオサムシ探索記. 月刊むし 539: 42-44.
- 林匡夫・森本桂・木元新作. 1984. 原色日本甲虫図鑑 (IV). 保育社.
- 平野均一郎. 2010. ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウを由利本荘市 (旧矢島町) で採集. 秋田自然史研究 58: 15.
- 平野均一郎・梅津一史. 2009. 秋田県にかほ市でヘリウスハナカミキリを採集. 月刊むし 466: 17.
- 平野俊秀. 1990. 秋田県田沢湖町のオオクワガタ. 月刊むし 238: 25.
- 池田都志也. 1994. 山形県鳥海山におけるクロマメゲンゴロウ種群3種の採集記録. 月刊むし 279: 38.
- 井村有希・水沢清行. 2013. 日本産オサムシ図説. 昆虫文献六本脚.
- 石田正明. 1968. 甲虫とりある記(4) <糞中編>. 昆虫と自然 3(11): 3-6.
- 石田正明. 1968. 甲虫とりある記(3). 昆虫と自然 4(9): 16-19.
- 石川良輔. 1991. オサムシを分ける錠と鍵. 八坂書房.
- 笠原須磨生. 1985. 秋田県のゴミムシ類. 秋田自然史研究会.
- 河合秀樹. 2014. 秋田市におけるイガブチヒゲハナカミキリの記録. 秋田自然史研究 65: 48.
- 河合秀樹. 2014. ヒメビロウドカミキリの秋田県における記録. 月刊むし 518: 43.
- 川井信矢・堀繁久・河原正和・稲垣政志. 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群. 昆虫文献六本脚.
- 木元新作・日浦勇. 1964. 大阪市立自然科学博物館に所蔵されるハムシ類標本 (第三報). 大阪市立自然史博物館研究報告 17: 5-18.
- 記野直人・長谷川洋. 1992. マルコガタノゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース 97: 5.
- 記野直人・長谷川洋. 2001. 日本産クロマメゲンゴロウ類の分布. 甲虫ニュース 134: 21-25.
- 近野凌. 2019. オオサルハムシ湯沢市からの記録. 秋田自然史研究 76: 19.
- 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之. 1985. 原色日本甲虫図鑑 (III). 保育社.
- 丸屋良博. 1992. 秋田県北部におけるマルコガタノゲンゴロウの記録. 月刊むし 262: 7.
- 丸屋良博. 1993. 秋田県北部におけるオオクワガタの記録. 月刊むし 272: 37.
- 丸屋良博・樋口誠. 1994. 秋田県におけるシマゲンゴロウの記録. 月刊むし 275: 35.

- 丸屋良博・樋口誠. 1995. 秋田県北部におけるエゾゲンゴロウモドキの記録. 月刊むし 293: 37-38.
- 丸屋良博・樋口誠. 1996. 秋田県におけるカミキリ4種の採集例. 月刊むし 299: 33.
- 三田村敏正・平澤桂・吉井重幸. 2017. ゲンゴロウ・ガムシ・ミズスマシ ハンドブック. 文一総合出版.
- 森正人. 2011. 兵庫県のトックリゴミムシ類. きべりはむし 34(1): 9-11.
- 森正人・北川昭. 2002. 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版.
- 森井隆文. 2018. チンメルマンセスジゲンゴロウの奄美大島からの記録. SAYABANE N.S. 29: 5.
- 森本桂・中村剛之・官能健次. 2015. 日本の昆虫4 ソウムシ科クチブトソウムシ亜科(2). 権歌書房.
- 那波晴巳・望月淳・伊藤雅和. 1994. 秋田県のおオクワガタについて. 月刊むし 280: 24-25.
- 永幡嘉之. 2004. 山形県周辺におけるネクイハムシ類の採集記録. 出羽のむし 1: 79-82.
- 中根猛彦. 1968. 早池峰山および宮古付近に産する若干の甲虫類について. 国立科学博物館報告 1: 104-108.
- 成田正弘. 2017. 秋田県におけるソウムシ類の記録(II). 秋田自然史研究 71: 14-15.
- 成田正弘. 2017. 寒風山の甲虫について(1). 秋田自然史研究 72: 6-14.
- 成田正弘. 2018. 秋田県におけるオオトラフコガネの採集記録. 秋田自然史研究 73: 24.
- 成田正弘. 2019. ヘリウスハナカミキリ上の山牧場に産す. 秋田自然史研究 76: 17.
- 西沢登志樹. 1980. 秋田県陣場のカミキリムシ. *Celastrina* 5: 14-16.
- 沼田仁. 1992. 秋田県におけるヨコヤマヒゲナガカミキリの生態. 秋田自然史研究 28: 46-47.
- 沼田仁. 1998. 秋田県におけるクマガイクロアオゴミムシの採集例. 月刊むし 323: 38.
- 沼田仁. 2008. 秋田県でエゾゲンゴロウモドキ型を採集. 月刊むし 454: 34.
- 沼田仁. 2016. チョウカイトガリヤマソウムシの飼育観察から得られた知見. 月刊むし 548: 13-21.
- 沼田仁. 2018. 早春にムラサキハムシを採集. 秋田自然史研究 73: 25.
- 岡睦夫. 1993. タガメ・ゲンゴロウ秋田の消息. 生物秋田 35: 10-11.
- 大場裕一・大平仁夫・尾崎俊寛. 2014. 山形県月山産アラコガネコメツキの若干の生態とその遺伝子解析結果. 月刊むし 523: 40-43.
- 大林延夫・佐藤正孝・小島圭三. 2007. 日本産カミキリムシ検索図説. 東海大学出版会.
- 大平仁夫・尾崎俊寛. 2013. 山形県月山でアラコガネコメツキの幼虫を採集. 月刊むし 514: 16.
- 大平仁夫・保田信記. 2007. 日本産アラコガネコメツキについて. 層雲峡ビジターセンター研究報告 27: 1-16.
- 尾崎俊寛・佐藤福男・沼田仁・加納彦一. 2006. 秋田県のコメツキ. 秋田自然史研究会.
- 齋藤諭. 2012. 日本産ヨモギハムシ図鑑. 月刊むし 491: 10-26
- 酒井香・藤岡昌介. 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群I. 昆虫文献六本脚.
- 櫻井俊一. 1992. 烏海山麓のセスジゲンゴロウ3種の記録. 月刊むし 262: 20-21.
- 佐藤福男. 1987. 秋田県およびその周辺におけるホソヒメクロオサムシとヒメクロオサムシの分布について. 甲虫ニュース 57: 5-6.
- 佐藤福男. 1987. 秋田県におけるマークオサムシとアカガネオサムシの記録. 月刊むし 199: 42-43.
- 佐藤福男. 1995. 秋田県のシテムシ類. 秋田自然史研究 31: 31-32.
- 佐藤福男. 1995. 秋田県でムモンベニカミキリを多数採集. 月刊むし 295: 34.
- 佐藤福男. 1996. 秋田県で採集したツブゲンゴロウ属の日本未記録種. 月刊むし 307: 22-23.
- 佐藤福男. 1996. 秋田県のベニカメノコハムシ分布と生態. 秋田自然史研究 32: 20-22.
- 佐藤福男. 1999. アカマダラコガネを秋田県で春季に採集. 月刊むし 346: 4-5.
- 佐藤福男. 2000. 秋田県のオサムシ類. 秋田自然史研究 40: 4-13.



- 佐藤福男. 2002. 秋田県のハムシ追加種(II). 秋田自然史研究 44: 11-14.
- 佐藤福男. 2004. 秋田県男鹿半島でチンメルマンセスジゲンゴロウを採集. 月刊むし 406: 8.
- 佐藤福男. 2006. アオバネホソクビゴミムシを23年ぶりに採集. 秋田自然史研究 50: 10.
- 佐藤福男. 2008. ホソハンミョウ秋田市内で採集. 秋田自然史研究 54: 25.
- 佐藤福男. 2010. 由利本荘市猿倉でオオチャイロハナムグリ. 秋田自然史研究 57: 32.
- 佐藤福男. 2012. オオヨモギハムシ秋田県に産す. 秋田自然史研究 41: 4.
- 佐藤福男. 2015. 秋田県のダイコクコガネはどこにいった. 秋田自然史研究 68: 27.
- 佐藤福男. 2015. 秋田県で得られたサメハダチョッキリの青色個体. 月刊むし 538: 9-10.
- 佐藤福男. 2016. 秋田県のアイヌハンミョウ. 秋田自然史研究 69: 30.
- 佐藤福男. 2017. 秋田県に産するネクイハムシ亜科は11種. 秋田自然史研究 71: 16-19.
- 佐藤福男. 2017. イカリアオカメノコハムシ秋田県での記録. 月刊むし 562: 8-9.
- 佐藤福男. 2018. オオトラフハナムグリ秋田県における採集記録. 月刊むし 574: 22
- 佐藤福男. 2019. シラガミナガチビゴミムシ世界遺産地域外にも産す. 秋田自然史研究 75: 37.
- 佐藤福男. 2019. ヤマトエンマコガネはどこに行った. 秋田自然史研究 75: 38.
- 佐藤福男. 2019. コシロネを食すオオルリハムシ. 秋田自然史研究 76: 20.
- 佐藤福男・加納彦一. 1984. 秋田県のカミキリムシ(上). 月刊むし161: 13-20.
- 佐藤福男・沼田仁. 1995. 秋田県初記録のゲンゴロウ5種. 月刊むし 293: 38-39.
- 佐藤福男・沼田仁. 1996. 秋田県のゲンゴロウ類. 秋田自然史研究 33: 5-9.
- 佐藤隆志. 2016. 東北地方亜高山帯に産するトガリヤマゾウムシ属に関する知見. 月刊むし 548: 9-12.
- 高橋誠. 1994. チンメルマンセスジゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース 105: 5-6.
- 高橋誠・茅橋輝昭. 2005. チョウカイクロマメゲンゴロウ岩手県に分布. 月刊むし 412: 49.
- Takizawa, T. & T. Nakane. 1997. Byrrhus Linne and Cytilus Erichson from Japan and its adjacent areas. Bull. Natn. Sci. Mus., SerA(zool.) 3(1): 55-65.
- 田比良嘉晃・北野忠. 2000. 静岡県韮山町でチンメルマンセスジゲンゴロウを採集. 月刊むし 357: 44-45.
- 田中政行. 2001. 渋黒沢のゲンゴロウ類. 秋田自然史研究 43: 4.
- 上野俊一. 1994. New Oculate *Trechiana* Mainly from Non-volcanic Mountains of Northern Honshu, Northeast Japan. ELYTRA 22(1): 23-44.
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝. 1985. 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社.
- 梅津一史・成田正弘. 2019. 秋田県のチョッキリゾウムシ科. 秋田市自然史研究 75: 1-10
- 横山裕正. 1981. ケマダラカミキリの秋田県鹿角市の記録. 月刊むし 121: 33.

## 【チョウ目】

- 土井信夫. 2005. 岩手県の大蛾類 付蝶類リスト. 私家版.
- 枝恵太郎. 2011. ナナメヒメヨトウ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 294-295. 学研教育出版.
- 枝恵太郎・四方圭一郎. 2011. キリガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 323-367. 学研教育出版.
- 枝恵太郎・柳田慶浩. 2011. ケンモンヤガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 295-303. 学研教育出版.
- 遠藤弘志・笠井初志・田中正弘・尾藤成人・藤原麒一郎・水野利彦・宮崎弘規・宮野昭彦. 2014. チョウ目(蛾類).

- 岐阜県昆虫分布研究会(編), 岐阜県昆虫目録 II. 岐阜県昆虫分布研究会.
- 藤原陸夫. 2000. 秋田県植物分布図 第2版. 秋田県環境と文化のむら協会.
- 八郎瀧新農村建設事業団. 1973. 昭和47年病害虫発生予察報告書.
- 八郎瀧新農村建設事業団. 1974. 昭和48年病害虫発生予察報告書.
- 八郎瀧新農村建設事業団. 1976. 病気・害虫発生予察年報.
- 広渡俊哉. 2013. ヒゲナガガ科. 広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 3. 学研教育出版.
- Inoue, H.. 1986. Descriptions and records of some Japanese Geometridae (VI). *Tinea* 12(7): 45-71.
- 井上寛. 2000. カラスナミシャクとフジカバナミシャクのオスについて 付, 1982年以降の学名の変更と追加された日本産 *Eupithecia* 種群のリスト. 誘蛾燈 160: 49-53.
- 亀田満・山内智. 2004. 青森県屏風山周辺の蛾類(III). 青森自然誌研究 9: 53-60.
- 亀田満・山内智. 2016. 青森県下北半島の蛾類(II). 青森自然史研究 21: 55-64.
- 金子岳夫. 2011. ヒメシャク亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 1: 224-247. 学研教育出版.
- 金子岳夫. 2014. 日本産コヒメシャクの分類学的取り扱いと50年ぶりの秋田からの発見. 誘蛾燈 215: 15-17.
- 金子岳夫. 2018. 日本産クロスジシロヒメシャク及びマルバヒメシャクについての知見. 誘蛾燈 232: 70-72.
- 岸田泰則. 2011. ドクガ科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2. 学研教育出版.
- 岸田泰則. 2011. ヒトリガ科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2. 学研教育出版.
- 岸田泰則. 2011. ムラサキアツバ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 191-195. 学研教育出版.
- 岸田泰則. 2011. ベニコヤガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 199-207. 学研教育出版.
- 岸田泰則. 2011. アツバ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 207-214. 学研教育出版.
- 岸田泰則. 2011. スジコヤガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 282-288. 学研教育出版.
- 岸田泰則. 2018. 日本のホシオビコケガについて—含む1新種の記載—. 蛾類通信 285: 233-236.
- 岸田泰則・柳田慶浩・清野昭夫. 2011. エグリバ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 236-238. 学研教育出版.
- 岸田泰則・柳田慶浩・清野昭夫・石塚勝己. 2011. シタバガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 244-264. 学研教育出版.
- 小林秀紀. 2010. クロヤガ *Euxoa nigrata* Matsumura, 1925 と北海道のキタクロヤガ(新称) *Euxoa nigricans ishidae* Matsumura, 1926 について. *Tinea* 21(3): 113-118.
- 小林秀紀. 2011. シャチホコガ科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2. 学研教育出版.
- 小林秀紀. 2011. キンウワバ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 268-281. 学研教育出版.
- 小林秀紀. 2011. モンヤガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 385-400. 学研教育出版.
- 小林秀紀(編). 2016. 日本の冬夜蛾. むし社.
- 工藤広悦. 1981. 秋田県米代川流域の沼および沼沢地の蛾(II). 誘蛾燈 83: 13-17.
- 宮野昭彦・笠井初志・遠藤弘志. 2019. 岐阜県における *Aemene* 属2種の分布について. 誘蛾燈 235: 3-5.
- 中島秀雄. 2011. アオシャク亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 1: 205-224. 学研教育出版.
- 中島秀雄・小林秀紀. 2017. 日本の冬尺蛾. むし社.
- 中島秀雄・矢崎克己. 2011. ナミシャク亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 1: 248-316. 学研教育出版.
- 中塩一夫. 2004. 宮城県北部で採集された注目すべき蛾類. *インセクトマップオブ宮城* 20: 51-53.
- 成田弘. 1994. 栗駒山西部山麓で採集された7種の昆虫. 秋田自然史研究 30: 28-29.
- 成田正弘. 2000. 秋田の蝶. 秋田自然史研究会.
- 小田島順治. 2001. 横手市付近の蝶類 追記8. 秋田自然史研究 42: 18-20.

- 岡野磨嵯郎・朝霧康雄. 1960. 秋田県北部の蛾類. 秋田県立花輪高等学校八幡平分校.
- 大倉慎. 2000. クラマトガリバを八森町で採集. 秋田自然史研究 41: 24.
- 大倉慎. 2006. 秋田県八森町北部の蛾類(5). 秋田自然史研究 50: 55-58.
- 大倉慎. 1997. キタルリモンエダシャク秋田県冬師に産す. 誘蛾燈 147: 29.
- 大倉慎. 2007. 秋田県八森町北部の蛾類(8). 秋田自然史研究 51: 48-55.
- 大和田守. 2011. クルマアツバ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 221-235. 学研教育出版.
- 斎藤勝雄. 2003. 宮城県南部で採集した注目すべき蛾類(前). インセクトマップオブ宮城 19: 41-55.
- 斎藤修司. 2015. 福島県における蛾類の記録(文献記録をまとめた暫定目録). InsecTOHOKU 特別号 2: 1-114.
- 佐々木明夫. 1980. 大瀧草原特別鳥獣保護区の蛾類. 秋田自然史研究 13: 1-5.
- 佐々木明夫. 1983. 秋田県のメイガ分布資料(1). 秋田自然史研究 17: 10-13.
- 佐々木明夫. 1984. 秋田県のメイガ分布資料(2). 秋田自然史研究 18: 1-5.
- 佐々木明夫. 1989. 秋田県で得られた分布上注目すべきシャクガ(1). 誘蛾燈 118: 145-148.
- Sasaki, A.. 1994. A new species of genus *Scirpophaga* (Pyrilidae, Schoenobinae) from Japan. Japan Heterocerists' J. 177: 20-21.
- 佐々木明夫. 1996. フタクロテンマダラメイガを秋田県冬師で採集. 誘蛾燈 143: 3.
- 佐々木明夫. 2000. 新潟県阿賀野川下流域から発見された日本未記録のツトガ. 誘蛾燈 159: 1-4.
- 佐々木明夫. 2000. ヤホシホソマダラ秋田県に産す. 秋田自然史研究 41: 9.
- 佐々木明夫. 2001. 秋田県のメイガ分布資料(19). 秋田自然史研究 42: 4-6.
- 佐々木明夫. 2001. ルリハダホソクロバ上の山牧場に産す. 秋田自然史研究 42: 24.
- 佐々木明夫. 2002. ギンイチモンジセセリ(夏型)を能代市で採集. 秋田自然史研究 45: 3.
- 佐々木明夫. 2005. 協和町の陸生昆虫類. 協和町動植物調査報告書. 秋田県協和町教育委員会.
- 佐々木明夫. 2005. 春の仙岩トンネル付近で得た蛾若干. 秋田自然史研究 49: 19.
- 佐々木明夫. 2006. ナイトウツトガその後の記録. 誘蛾燈 186: 129-130.
- 佐々木明夫. 2009. ミチノクヒメシャクの採集例. 秋田自然史研究 56: 24.
- 佐々木明夫. 2012. 日本産ホソメイガ族の検討と14新種の記載. Tinea 22(1): 75-96.
- 佐々木明夫. 2013. ホソメイガ族. 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑4. 368-373. 学研教育出版.
- 佐々木明夫. 2013. ツトガ亜科. 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑4. 374-391. 学研教育出版.
- 佐々木明夫・土井信夫. 1996. ギンスジマダラメイガの追加産地. 誘蛾燈 143: 8.
- 佐々木明夫・大倉慎. 1986. 秋田県未記録のヤガ. 秋田自然史研究 20: 16.
- 佐々木明夫・大倉慎. 1989. 珍しいヤガ2種の記録. 秋田自然史研究 25: 23.
- 佐々木明夫・大倉慎. 1995. 秋田県未記録のヤガ(3). 誘蛾燈 140: 94.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1973. 秋田県の蛾〔Ⅰ〕. 秋田自然史研究会.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1977. 「秋田県の蛾〔Ⅰ〕」にその後追加された種について(第4報). 秋田自然史研究 9: 14-18.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1973. 秋田県の蛾〔Ⅰ〕. 秋田自然史研究会.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1975. 「秋田県の蛾〔Ⅰ〕」にその後追加された種について(第2報). 秋田自然史研究 5: 1-10.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1976. 「秋田県の蛾〔Ⅰ〕」にその後追加された種について(第3報). 秋田自然史研究 7: 6-11.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1977. 「秋田県の蛾〔Ⅰ〕」にその後追加された種について(第4報). 秋田自然史研究 9: 14-18.
- 佐々木明夫・高橋雅彌. 1983. 秋田県未記録のヤガについて. 秋田自然史研究 16: 4-6.

- 佐々木明夫・高橋雅彌・田中政行・梅津一史. 1994. 秋田県の蛾〔Ⅱ〕. 秋田自然史研究会.
- 佐々木明夫・田中政行. 2003. ウスキシロオオメイガの追加記録. 誘蛾燈 171:14.
- 佐々木明夫・梅津一史. 1996. ウスキズメイガを本州から再確認. 誘蛾燈 145:70.
- 佐々木明夫・梅津一史・大倉慎. 2004. チビウスキオオメイガの追加記録. 秋田自然史研究 47:24.
- 佐藤力夫. 2011. エダシヤク亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 1:132-200. 学研教育出版.
- 佐藤猛. 1976. 秋田県未記録のヤガ 2種. 秋田自然史研究 7:16.
- 四方圭一郎. 2011. セダカモクメ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2:305-307. 学研教育出版.
- 四方圭一郎・青木由親・工藤誠也. 2016. 長野県で発見されたクロフカバシヤク(シヤクガ科, カバシヤク亜科). 蛾類通信 280:121-124.
- 白水隆. 2006. 日本産蝶類標準図鑑. 学習研究社.
- Sone J.-C., Lee Y.-B., Shin Y.-H.. 2009. Lepidoptera collected from Sindu coastal sand-dune areas in the Chungnam Province, South Korea. Japan Heterocerists' J. 251:8-12.
- 杉繁郎. 1982. ヤガ科. 井上寛ほか, 日本産蛾類大図鑑 1:669-913, 2:344-405, pls.164-223, 229, 355-380.
- 高橋雅彌. 1977. 鹿角市北半の鱗翅類 第1報. 秋田県立博物館研究報告 2:34-65.
- 高橋雅彌. 1981. 鹿角市北半の鱗翅類 第2報. 秋田県立博物館研究報告 6:37-58.
- 高橋雅彌. 1982. 昆虫類. 真木溪谷自然環境調査報告書. 129-151. 秋田県.
- 高橋雅彌. 1984. ホクトギンウワバを秋田県で採集. 蛾類通信 127:29.
- 高橋雅彌. 1987. 秋田県の各植生における蛾類 1 天王町海岸クロマツ林の蛾類. 秋田自然史研究 25:14-22.
- 高橋雅彌. 1993. 秋田県の各種植生における蛾類 2 寒風山ススキ高茎草原. 秋田自然史研究 29:17-35.
- 高橋雅彌. 2014. ヨスジシロカギバを確認. 秋田自然史研究 65:33.
- 高橋雅彌・田中政行・梅津一史・大倉慎. 2011. 秋田県未記録種を含む分布上興味ある蛾類の記録2. 秋田自然史研究 59:21-30.
- 高橋雅彌・梅津一史. 2001. 秋田県未記録を含む分布上興味ある蛾類の記録. 誘蛾燈 164:49-52.
- 高橋雅彌・梅津一史. 2011. 八幡平見返峠～畚岳間の稜線で採集した蛾類. 秋田県立博物館研究報告 36:39-60.
- 高橋輝幸. 2000. 横手の蛾類. 横手市生物分布調査報告書. 118-161. 横手市.
- 田中政行. 1999. 須川高原の蛾類. 秋田自然史研究 39:15-19.
- 田中政行. 2000. 秋田県未記録のカバイロフタオを採集. 秋田自然史研究 40:47.
- 田中政行. 2002. 秋田県におけるネグロアツバの分布. 秋田自然史研究 44:17-18.
- 田中政行. 2002. ヒメナミガタアオシヤクの新産地. 秋田自然史研究 44:18.
- 田中政行. 2007. 能代市でチョウセントリバを採集. 誘蛾燈 190:131.
- 田中政行. 2009. 秋田県にかほ市冬師の注目すべき蛾類. 誘蛾燈 195:27-28.
- 田中政行. 2014. 風の松原で採集した記録の少ないマダラガ科2種. 秋田自然史研究 66:20.
- 田中政行. 2017. ヒメナミガタアオシヤクを青森県から採集. 誘蛾燈 230:116.
- 田中政行・大倉慎. 2015. 秋田県初記録のツツガ2種. 秋田自然史研究 68:16.
- 田中政行・大倉慎. 2016. モリオカツツガの最近の記録. 秋田自然史研究 69:31.
- 田中政行・梅津一史. 1996. 秋田県における記録の少ないヤガについて. 秋田自然史研究 32:9-15.
- 田中政行・梅津一史・又井庸生. 1980. 秋田市平和公園の興味ある蛾類. 秋田自然史研究 12:17-19.
- 田中政行・梅津一史・又井庸生. 1980. 秋田市天徳寺山のヤガ. 誘蛾燈 80:70-89.
- 田中政行・梅津一史・大倉慎. 1992. 秋田県未記録のヤガ. 誘蛾燈 130:99-101.



- 富沢章. 2015. 石川県産蛾類の追加記録VII. 誘蛾燈 222: 153-159.
- 梅津一史. 1994. 八幡平でカバシヤクを採集. 秋田自然史研究 30: 40.
- 梅津一史. 1995. ヒメナミガタアオシヤクの第2の産地. 秋田自然史研究 31: 28.
- 梅津一史. 2000. 秋田県田沢湖町玉川戸瀬の蛾類. 秋田県立博物館研究報告. 25: 9-36.
- 梅津一史. 2004. 雄物川河口付近の砂浜で採集した蛾類. 秋田自然史研究 48: 14-21.
- 梅津一史. 2006. 秋田県男鹿半島戸賀の蛾類. 秋田県立博物館研究報告 31: 29-44.
- 梅津一史. 2010. 鹿角市八幡平で採集されたキマダラモドキ. 秋田県立博物館研究報告 35: 35.
- 梅津一史. 2015. ヘリグロチャバナセセリを八幡平山麓で採集. 秋田自然史研究 67: 59.
- 梅津一史. 2015. 男鹿市宮沢海岸で採集した蛾類. 秋田県立博物館研究報告 40: 9-24.
- 梅津一史. 2017. 東北地方のキタクロヤガ *Euxoa nigricans ishidae* Matsumura, 1926について. 蛾類通信 283: 213-215.
- 梅津一史. 2017. クロフカバシヤクを秋田県で採集. 誘蛾燈 230: 101.
- 梅津一史・田中政行. 1994. 秋田県仁賀保町冬師のヤガ. 秋田県立博物館研究報告 19: 15-34.
- 梅津一史・田中政行. 1998. 秋田県仁賀保町冬師の蛾類(2). 秋田県立博物館研究報告. 23: 7-22.
- 渡辺徳. 1972. 八幡平地域の昆虫相. 十和田八幡平国立公園後生掛地区地熱発電所計画に伴う学術調査報告書.
- 山中浩. 2013. マダラメイガ族. 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 4: 335-368. 学研教育出版.
- 柳田則明・斎藤勝雄・蛾類目録編集委員会(編). 2009. 宮城県蛾類目録. 宮城昆虫地理研究会.
- 吉松慎一. 2011. タバコガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 312-313. 学研教育出版.
- 吉松慎一. 2011. ヨトウガ亜科. 岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 2: 368-384. 学研教育出版.
- 吉安裕. 2013. ミズメイガ亜科. 那須義次・広渡俊哉・岸田泰則(編), 日本産蛾類標準図鑑 4: 400-408. 学研教育出版.

# 参考資料

## 1 新たに追加した種

### <哺乳類>

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2020
1	ノレンコウモリ	<i>Myotis bombinus</i> Thomas, 1906	C R
2	イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus, 1758	C M

### <昆虫類>

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2020
1	ハネビロエゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma, 1913	C R
2	ヤマトエンマコガネ	<i>Onthophagus japonicus</i> Harold, 1874	C R
3	ムナカタミズメイガ	<i>Prapoynx ussuriensis</i> (Rebel, 1910)	C R
4	ハガタアオシャク	<i>Thalera rubifimbria</i> Inoue, 1990	C R
5	コヒメシャク	<i>Scopula virgulata albicans</i> Prout, 1934	C R
6	マルバヒメシャク	<i>Scopula duplinupta</i> Inoue, 1982	C R
7	オビベニヒメシャク	<i>Idaea nielsoni</i> (Hedemann, 1879)	C R
8	シロヤエナミシャク	<i>Rheumaptera flavipes flavipes</i> (Ménétrières, 1858)	C R
9	カラカネイトトンボ	<i>Nehalennia speciosa</i> (Charpentier, 1840)	E N
10	ルリイトトンボ	<i>Enallagma circulatum</i> Selys, 1883	E N
11	ヨツボシカミキリ	<i>Stenygrium quadrinotatum</i> Bates, 1873	E N
12	ナイトウツトガ	<i>Chilo infuscatellus</i> Snellen, 1890	E N
13	ウラゴマダラシジミ	<i>Artopoetes pryeri pryeri</i> (Murray, 1873)	E N
14	トギレフユエダシャク	<i>Protalia concinnata</i> (Wileman, 1911)	E N
15	テンスジアオナミシャク	<i>Pasiphila debiliata</i> (Hübner, 1817)	E N
16	クシナシホシオビコケガ	<i>Aemene takahashii</i> Kishida, 2018	E N
17	アズサキリガ	<i>Pseudopanolis azusa</i> Sugi, 1968	E N
18	シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringii</i> Clark, 1864	V U
19	シンテイトビケラ	<i>Dipseudopsis collaris</i> McLachlan, 1863	V U
20	ヒメキテンシロツトガ	<i>Calamotropha fulvifusalis</i> (Hampson, 1900)	V U
21	クロスジアオシャク	<i>Geometra valida</i> Felder & Rogenhofer, 1875	V U
22	ウラテンシロヒメシャク	<i>Scopula subpunctaria</i> (Herrich-Schäffer, 1847)	V U
23	クロシタコバナナミシャク	<i>Trichopteryx misera</i> (Butler, 1879)	V U
24	ムツテンナミシャク	<i>Catarhoe yokohamae</i> (Butler, 1881)	V U
25	サザナミフユナミシャク	<i>Operophtera japonaria</i> (Leech, 1891)	V U
26	トビスジトガリナミシャク	<i>Zola terranea terranea</i> (Butler, 1879)	V U
27	フタシロスジカバナミシャク	<i>Mesoptila melanolopha</i> (Swinhoe, 1895)	V U
28	イイジマカバナミシャク	<i>Eupithecia thalictрата ijimai</i> Inoue, 1963	V U
29	フジカバナミシャク	<i>Eupithecia groenblomi</i> Urbahn, 1969	V U
30	ムラサキハガタヨトウ	<i>Brepharita amica ussuriensis</i> Sheljuzhko, 1919	V U
31	マエキヤガ	<i>Xestia stupenda</i> (Butler, 1878)	V U
32	オオシラホシヤガ	<i>Eurois occulta</i> (Linnaeus, 1758)	V U
33	フライソニアミメカワゲラ	<i>Perlodes frisonanus</i> Kohno, 1943	N T
34	ウスバカマキリ	<i>Mantis religiosa</i> (Linnaeus, 1758)	N T
35	ヤマトマダラバツタ	<i>Epacromius japonicus</i> (Shiraki, 1910)	N T
36	カワラバツタ	<i>Eusphingonotus japonicus</i> (Saussure, 1888)	N T
37	オオトックリゴミムシ	<i>Oodes vicarius</i> Bates, 1873	N T

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2020
38	エチゴトックリゴミムシ	<i>Oodes echigonus</i> Habu & Baba, 1960	N T
39	ルイスツブゲンゴロウ	<i>Laccophilus lewisius</i> Sharp, 1873	N T
40	チョウカイクロマメゲンゴロウ	<i>Platambus ikedai</i> (Nilsson, 1996)	N T
41	クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aube, 1838	N T
42	ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i> Sharp, 1873	N T
43	ヤマトモンシテムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold, 1877	N T
44	オオトラフハナムグリ	<i>Paratrichius doenitzi</i> (Harold, 1879)	N T
45	チョウカイアラコガネコメツキ	<i>Selatosomus gloriosus chokaianus</i> Ôhira & Yasuda, 2007	N T
46	ヘリウスハナカミキリ	<i>Pyrrhona laeticolor</i> Bates, 1884	N T
47	コトラカミキリ	<i>Plagionotus pulcher</i> (Blessig, 1879)	N T
48	ヒメビロウドカミキリ	<i>Acalolepta degener</i> (Bates, 1873)	N T
49	キンイロネクイハムシ	<i>Donacia japana</i> Chujo & Goecke, 1956	N T
50	オオサルハムシ	<i>Chrysochus chinensis</i> Baly, 1859	N T
51	ルリドロノキハムシ	<i>Chrysomela cuprea</i> Fabricius, 1775	N T
52	イカリアオカメノコハムシ	<i>Cassida ferruginea</i> Goeze, 1777	N T
53	チョウカイトガリヤマゾウムシ	<i>Acanthalophus matobai</i> Morimoto, 2015	N T
54	オナガカツオゾウムシ	<i>Lixus moiwanus</i> Kôno, 1928	N T
55	ヤチトビケラ	<i>Oligostomis wigginsi</i> Nishimoto & Kawase, 2005	N T
56	フトオヒメニンギョウトビケラ	<i>Goera dilatata</i> Nozaki & Tanida, 2006	N T
57	ウスイロコバントビケラ	<i>Anisocentropus pallidus</i> (Martynov, 1935)	N T
58	ハマナストリバ	<i>Cnaemidophorus rhododactyla</i> (Denis & Schiffermüller, 1775)	N T
59	マダラホソメイガ	<i>Muliarpha borealis</i> Sasaki, 2012	N T
60	ウスキシロオオメイガ	<i>Scirpophaga gotoi</i> Lewvanich, 1981	N T
61	クロオオモンエダシャク	<i>Microcalicha fumosaria fumosalia</i> (Leech, 1891)	N T
62	コアヤシャク	<i>Pingasa pseudoterpnaria pseudoterpnaria</i> (Guenée, 1857)	N T
63	キボシヤエナミシャク	<i>Rheumaptera neocervinalis</i> Inoue, 1982	N T
64	エゾヤエナミシャク	<i>Philereme corrugata</i> (Butler, 1884)	N T
65	ムネシロテンカバナミシャク	<i>Eupithecia maenamiella</i> Inoue, 1980	N T
66	シロホソバ	<i>Eilema degenerella</i> (Walker, 1863)	N T
67	キバラヒトリ	<i>Epatolmis caesarea</i> (Goeze, 1781)	N T
68	ハイマダラコヤガ	<i>Eublemma miasma</i> (Hampson, 1891)	N T
69	キシタアツバ	<i>Hypena claripennis</i> (Butler, 1878)	N T
70	ギンモンセダカモクメ	<i>Cucullia jankowskii</i> Oberthür, 1884	N T
71	ミヤマノギカワゲラ	<i>Yoraperla uenoi</i> (Kohno, 1946)	DD
72	クマコオロギ	<i>Mitius minor</i> (Shiraki, 1913)	DD
73	カヤコオロギ	<i>Euscyrtes japonicus</i> Shiraki, 1930	DD
74	カワラスズ	<i>Dianemobius furumagiensis</i> (Ohmachi & Furukawa, 1929)	DD
75	コロギス	<i>Prosopogryllacris japonica</i> (Matsumura & Shiraki, 1908)	DD
76	ヒガシキリギリス	<i>Gampsocleis mikado</i> Burr, 1899	DD
77	クビキリギリス	<i>Euconocephalus varius</i> (Walker, 1869)	DD
78	ショウリョウバッタモドキ	<i>Gonista bicolor</i> (de Haan, 1842)	DD
79	セアカオサムシ	<i>Hemicarabus tuberculatus</i> Dejean & Boisduval, 1829	DD
80	コオナガミズスマシ	<i>Orectochilus punctipennis</i> Sharp, 1884	DD
81	アカマダラハナムグリ	<i>Anthrachophora rusticola</i> Burmeister, 1842	DD
82	ウマノオバチ	<i>Euurobracon yokahamae</i> (Dalla Torre, 1898)	DD
83	エゾアカヤマアリ	<i>Formica yessensis</i> Wheeler, 1913	DD

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2020
84	トゲアリ	<i>Polyrhachis lamellidens</i> Smith, 1874	DD
85	ニッポンハナダカバチ	<i>Bembix niponica</i> Smith, 1873	DD
86	ヤマトアシナガバチ	<i>Polistes japonicus</i> de Saussure, 1858	DD
87	オオセイボウ	<i>Stilbum cyanurum</i> (Förster, 1771)	DD
88	トワダオオカ	<i>Toxorhynchites towadensis towadensis</i> (Matsumura, 1916)	DD
89	ケブカハラナガハナアブ	<i>Brachypalpus nipponicus</i> Shiraki, 1952	DD
90	ガロアシマトビケラ	<i>Cheumatopsyche galloisi</i> (Matsumura, 1931)	DD
91	イズミノンギョウトビケラ	<i>Goera lepidoptera</i> Schmid, 1965	DD
92	ミサキツノトビケラ	<i>Triplectides misakianus</i> (Matsumura, 1931)	DD
93	ツダヒゲナガトビケラ	<i>Athripsodes tsudai</i> (Akagi, 1960)	DD
94	カモヒゲナガトビケラ	<i>Ceraclea kamonis</i> (Tsuda, 1942)	DD
95	ヌマコヒゲナガトビケラ	<i>Adicella paludicola</i> Ito & Kuhara, 2013	DD
96	クロホソバトビケラ	<i>Molanna nervosa</i> Ulmer, 1927	DD
97	ギンヒゲナガ	<i>Nemophora askoldella</i> (Millière, 1879)	DD
98	ヒメカバイロホソメイガ	<i>Rhinaphe minor</i> Sasaki, 2012	DD
99	クロミヤクホソメイガ	<i>Toshitamia komatsui</i> Sasaki, 2012	DD
100	イネコミズメイガ	<i>Parapoynx vitalis</i> (Bremer, 1864)	DD
101	ムモンアカシジミ	<i>Shirozua jonasi jonasi</i> (Janson, 1877)	DD
102	オナガシジミ	<i>Araragi enthea entea</i> (Janson, 1877)	DD
103	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i> (Ménétrières, 1857)	DD
104	ウコンカギバ	<i>Tridrepana crocea</i> (Leech, 1889)	DD
105	ヨスジシロカギバ	<i>Ditrigona quinquelineata</i> (Leech, 1898)	DD
106	サカハチトガリバ	<i>Kurama mirabilis</i> (Butler, 1879)	DD
107	キボシミスジトガリバ	<i>Achlya longipennis longipennis</i> Inoue, 1972	DD
108	カバイロフタオ	<i>Oroplema oyamana</i> (Matsumura, 1931)	DD
109	カバシャク	<i>Archiearis parthenias elegans</i> (Inoue, 1955)	DD
110	クロフカバシャク	<i>Archiearis notha okanoi</i> (Inoue, 1958)	DD
111	フタモントガリエダシャク	<i>Nadagara prosigna</i> Prout, 1930	DD
112	トビカギバエダシャク	<i>Luxiaria amasa amasa</i> (Butler, 1878)	DD
113	ソトシロモンエダシャク	<i>Cleora venustaria</i> (Leech, 1891)	DD
114	クロスジハイロエダシャク	<i>Hirasa paupera</i> (Butler, 1881)	DD
115	チャエダシャク	<i>Megabiston plumosaria</i> (Leech, 1891)	DD
116	クロモンキリバエダシャク	<i>Psyra bluethgeni</i> (Püngeler, 1903)	DD
117	モンキクロエダシャク	<i>Proteostrenia pica</i> Wileman, 1911	DD
118	トガリエダシャク	<i>Xyloscia subpersata</i> (Felder & Rogenhofer, 1875)	DD
119	ツツジツマキリエダシャク	<i>Endropiodes circumflexa</i> Inoue, 1976	DD
120	ウコンエダシャク	<i>Corymica pryeri</i> (Butler, 1878)	DD
121	コガタヒメアオシャク	<i>Jodis orientalis</i> Wehrli, 1923	DD
122	オオナミガタアオシャク	<i>Jodis dentifascia</i> Warren, 1897	DD
123	ヨツメヒメシャク	<i>Cylophora albipunctata griseolata</i> (Staudinger, 1897)	DD
124	ウスクロテンヒメシャク	<i>Idaea salutaris</i> (Christoph, 1881)	DD
125	ウスキヒカリヒメシャク	<i>Idaea nitidata</i> (Herrich-Schäffer, 1861)	DD
126	ウスオビコバネナミシャク	<i>Trichopteryx incerta</i> Yazaki, 1978	DD
127	シラナミナミシャク	<i>Glaucothoe unduliferaria unduliferaria</i> (Motschulsky, 1861)	DD
128	ネアカナカジロナミシャク	<i>Paradysstroma corussria</i> (Oberthür, 1880)	DD
129	アカモンコナミシャク	<i>Palpoctenidia phoenicosoma semilata</i> Prout, 1939	DD



No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2020
130	カラスナミシャク	<i>Eupithecia caliginea</i> Butler, 1878	DD
131	カメダカバナミシャク	<i>Eupithecia detritata</i> Staudinger, 1897	DD
132	クロモンカバナミシャク	<i>Eupithecia consortaria</i> Leech, 1897	DD
133	クロテンカバナミシャク	<i>Eupithecia emanata</i> Dietze, 1908	DD
134	グンマカバナミシャク	<i>Eupithecia ebriosa</i> Vojnits, 1979	DD
135	リンゴアオナミシャク	<i>Pasiphila rectangularata</i> (Linnaeus, 1758)	DD
136	スカシサン	<i>Prismosticta hyalinata</i> (Butler, 1885)	DD
137	スキバホウジャク	<i>Hemaris radians</i> (Walker, 1856)	DD
138	オオヤママイマイ	<i>Lymantria lucescens</i> (Butler, 1881)	DD
139	カギモンハナオイアツバ	<i>Cidaripura signata</i> (Butler, 1879)	DD
140	カシワアツバ	<i>Pechipogo strigilata</i> (Linnaeus, 1851)	DD
141	ウスベニキリガ	<i>Orthosia cedermarki</i> (Bryk, 1949)	DD
142	オオルリハムシ	<i>Chrysolina virgata</i> (Motschulsky, 1860)	N

## 2 2002年版から削除した種

### <哺乳類>

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2002
1	ホンシュウジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i> (Temminck, 1843)	VU
2	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> temminck, 1828	NT
3	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck, 1845	N
4	アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus, 1758)	N

### <昆虫類>

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2002
1	コシボソヤンマ	<i>Boyeria maclachlani</i> (Selys, 1883)	CR
2	ヤブヤンマ	<i>Polycanthagyna melanictera</i> (Selys, 1883)	CR
3	オツネトンボ	<i>Sympecma paedisca</i> (Eversmann, 1836)	EN
4	キアシネクイハムシ	<i>Donacia bicoloricornis</i> Chen, 1941	EN
5	ヒメシタコバナナミシャク	<i>Jodis placida</i> Inoue, 1986	EN
6	ヤマサナエ	<i>Asiagomphus melaenops</i> (Selys, 1854)	NT
7	エゾトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler, 1858)	NT
8	クドウツトガ	<i>Pseudobisetia terrestrella kudoii</i> Inoue, 1990	NT
9	ガマヨトウ	<i>Archanaera aerata</i> (Butler, 1878)	NT
10	ウスキトガリキリガ	<i>Telorta acuminata</i> (Butler, 1878)	NT
11	フトクチヒゲヒラタゴミムシ	<i>Parabroscus crassipalpis</i> (Ishikawa, 1966)	NT
12	クロツヤシモフリコメツキ	<i>Actenicerus athoides</i> (Kishii, 1955)	NT
13	コボトケヒゲナガカミキリ	<i>Glaphyra kobotokensis</i> (Ohbayashi, 1963)	NT
14	アオカタビロオサムシ	<i>Calosoma inquisitor cyanescens</i> Motschulsky, 1858	DD
15	トウホクミヤマヒサゴコメツキ	<i>Hypolithus motschulskyi izumi</i> Kishii, 1985	DD
16	クロキカワムシ	<i>Pytho ezoensis</i> Kôno, 1936	DD
17	ツマグロトビケラ	<i>Phryganea japonica</i> McLachlan, 1866	DD
18	イブキスズメ	<i>Hyles gallii</i> (Rottemburg, 1775)	DD
19	カバマダラヨトウ	<i>Anapamea cuneatoides</i> Poole, 1989	DD

No.	種 和 名	種 学 名	秋田県 2002
20	サザミアアツバ	<i>Hypena abducalis</i> Walker, 1859	DD
21	ヒメクルマコヤガ	<i>Oruza divisa</i> (Walker, 1862)	DD
22	クロチャマダラキリガ	<i>Rhynchaglaea fuscipennis</i> Sugi, 1958	DD
23	クレナイハダカシャチホコ	<i>Hagapteryx satomiae</i> Kobayashi, 2011	DD
24	ヤマトアザミテントウ玉川個体群	<i>Epilachna niponica</i> Lewis, 1896	LP

### 3 哺乳類 目別カテゴリー順

#### ■トガリネズミ形目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
1	モグラ科	ヒメヒミズ	EN	VU	P27
2	トガリネズミ科	シントウトガリネズミ	VU	VU	P32
3	トガリネズミ科	カワネズミ	NT	VU	P34
4	モグラ科	ミズラモグラ	DD	DD	P37

#### ■翼手目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
1	ヒナコウモリ科	ヤマコウモリ	EN	EN	P27
2	ヒナコウモリ科	ニホンウサギコウモリ	EN	EN	P28
3	ヒナコウモリ科	ヒナコウモリ	EN	EN	P28
4	ヒナコウモリ科	カグヤコウモリ	EN	EN	P29
5	ヒナコウモリ科	ノレンコウモリ	EN	—	P29
6	ヒナコウモリ科	クロホオヒゲコウモリ	EN	EN	P30
7	ヒナコウモリ科	テングコウモリ	EN	VU	P30
8	キクガシラコウモリ科	コキクガシラコウモリ	VU	VU	P32
9	ヒナコウモリ科	ヒメホオヒゲコウモリ	VU	EN	P33
10	ヒナコウモリ科	コテングコウモリ	VU	VU	P33
11	ヒナコウモリ科	ユビナガコウモリ	VU	VU	P34
12	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ	NT	N	P35
13	ヒナコウモリ科	モモジロコウモリ	NT	NT	P35
14	ヒナコウモリ科	コヤマコウモリ	DD	DD	P37

#### ■霊長目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
1	オナガザル科	ニホンザル	CM	EN	P39

#### ■齧歯目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
1	ネズミ科	ヤチネズミ	NT	VU	P36
2	リス科	ニホンモモンガ	NT	VU	P36
3	ヤマネ科	ヤマネ	N	VU	P38

## ■食肉目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	イタチ科	イイズナ	E N	E N	P31
2	イタチ科	オコジョ	E N	V U	P31
3	クマ科	ツキノワグマ	C M	N	P40

## ■偶蹄目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	ウシ科	ニホンカモシカ	N	N	P38
2	シカ科	ニホンジカ	C M	E X	P41
3	イノシシ科	イノシシ	C M	-	P42

## 4 昆虫類 目別カテゴリー順

### ■トンボ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	ヤンマ科	カトリヤンマ	E X	C R	P53
2	トンボ科	オオキトンボ	E X	V U	P53
3	イトトンボ科	モートンイトトンボ	C R	N T	P54
4	エゾトンボ科	ハネヒロエゾトンボ	C R	-	P54
5	トンボ科	コノシメトンボ	C R	N T	P54
6	トンボ科	ヒメアカネ	C R	N T	P55
7	イトトンボ科	カラカネイトトンボ	E N	-	P63
8	イトトンボ科	オオセスジイトトンボ	E N	N T	P63
9	イトトンボ科	ルライトトンボ	E N	-	P63
10	サナエトンボ科	オジロサナエ	E N	C R	P63
11	サナエトンボ科	ホンサナエ	E N	C R	P64
12	トンボ科	マダラナニワトンボ	E N	E N	P64
13	サナエトンボ科	アオサナエ	V U	C R	P74
14	カワトンボ科	アオハダトンボ	N T	N T	P84
15	ムカシトンボ科	ムカシトンボ	N T	N T	P85
16	トンボ科	ハッチョウトンボ	N T	N T	P85
17	アオイトトンボ科	ホソミオツネイトンボ	D D	N T	P102
18	ヤンマ科	マダラヤンマ	D D	N T	P103
19	サナエトンボ科	ヒメサナエ	D D	C R	P103
20	サナエトンボ科	ミヤマサナエ	D D	N T	P103
21	エゾトンボ科	オオトラフトンボ	D D	N T	P103

### ■カワゲラ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	アミメカワゲラ科	シノビアミメカワゲラ	N T	D D	P85
2	アミメカワゲラ科	フライソニアミメカワゲラ	N T	-	P85
3	ヒロムネカワゲラ科	ミヤマノギカワゲラ	D D	-	P104

## ■カマキリ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	カマキリ科	ウスバカマキリ	N T	—	P86

## ■バツタ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	バツタ科	ヤマトマダラバツタ	N T	—	P86
2	バツタ科	カワラバツタ	N T	—	P86
3	コオロギ科	クマコオロギ	DD	—	P104
4	マツムシ科	カヤコオロギ	DD	—	P104
5	ヒバリモドキ科	カワラスズ	DD	—	P104
6	コロギス科	コロギス	DD	—	P105
7	キリギリス科	ヒガシキリギリス	DD	—	P105
8	キリギリス科	クビキリギリス	DD	—	P105
9	バツタ科	シヨウリョウバツタモドキ	DD	—	P105

## ■カメムシ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	コオイムシ科	タガメ	V U	V U	P74

## ■コウチュウ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	ハンミョウ科	カワラハンミョウ	C R	V U	P55
2	オサムシ科	マークオサムシ	C R	C R	P55
3	オサムシ科	クマガイクロアオゴミムシ	C R	C R	P55
4	ゲンゴロウ科	テラニシセスジゲンゴロウ	C R	C R	P56
5	コガネムシ科	ダイコクコガネ	C R	DD	P56
6	コガネムシ科	ヤマトエンマコガネ	C R	—	P56
7	カミキリムシ科	ミチノクケマダラカミキリ	C R	C R	P56
8	カワラゴミムシ科	カワラゴミムシ	E N	E N	P64
9	ハンミョウ科	ホソハンミョウ	E N	E N	P64
10	カミキリムシ科	ヨツボシカミキリ	E N	—	P64
11	ハンミョウ科	アイヌハンミョウ	V U	V U	P74
12	ホソクビゴミムシ科	アオバネホソクビゴミムシ	V U	C R	P74
13	オサムシ科	クロナガオサムシ	V U	E N	P75
14	オサムシ科	ハヤチネヌレチゴミムシ	V U	V U	P75
15	ゲンゴロウ科	チンメルマンセスジゲンゴロウ	V U	V U	P75
16	ゲンゴロウ科	ニセルイスツブゲンゴロウ	V U	N T	P75
17	ゲンゴロウ科	シマゲンゴロウ	V U	—	P76
18	クワガタムシ科	オオクワガタ	V U	V U	P76
19	コガネムシ科	オオチャイロハナムグリ	V U	N T	P76
20	オサムシ科	アカガネオサムシ	N T	V U	P86
21	オサムシ科	ホソヒメクロオサムシ東北地方西南部亜種	N T	N T	P87
22	オサムシ科	ホソヒメクロオサムシ奥羽山脈亜種	N T	N T	P87



No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
23	オサムシ科	シラカミナガチビゴミムシ	N T	DD	P87
24	オサムシ科	オオトックリゴミムシ	N T	-	P87
25	オサムシ科	エチゴトックリゴミムシ	N T	-	P88
26	ゲンゴロウ科	トウホクナガケシゲンゴロウ	N T	N T	P88
27	ゲンゴロウ科	カノシマチビゲンゴロウ	N T	N T	P88
28	ゲンゴロウ科	ルイスツブゲンゴロウ	N T	-	P88
29	ゲンゴロウ科	チョウカイクロマメゲンゴロウ	N T	-	P89
30	ゲンゴロウ科	オオイチモンジシマゲンゴロウ	N T	N T	P89
31	ゲンゴロウ科	クロゲンゴロウ	N T	-	P89
32	ゲンゴロウ科	マルコガタノゲンゴロウ	N T	N T	P89
33	ゲンゴロウ科	ゲンゴロウ	N T	-	P90
34	ゲンゴロウ科	エゾゲンゴロウモドキ	N T	N	P90
35	ガムシ科	エンマハバヒロガムシ	N T	N T	P90
36	シテムシ科	ヤマトモンシテムシ	N T	-	P90
37	コガネムシ科	オオトラフハナムグリ	N T	-	P91
38	コメツキムシ科	チョウカイアラコガネコメツキ	N T	-	P91
39	カミキリムシ科	ヘリウスハナカミキリ	N T	-	P91
40	カミキリムシ科	イガブチヒゲハナカミキリ	N T	N T	P91
41	カミキリムシ科	コトラカミキリ	N T	-	P92
42	カミキリムシ科	ムモンベニカミキリ	N T	DD	P92
43	カミキリムシ科	ヨコヤマヒゲナガカミキリ	N T	N T	P92
44	カミキリムシ科	ヒメビロウドカミキリ	N T	-	P92
45	ハムシ科	キンイロネクイハムシ	N T	-	P93
46	ハムシ科	オオサルハムシ	N T	-	P93
47	ハムシ科	オオヨモギハムシ	N T	N T	P93
48	ハムシ科	ルリドロノキハムシ	N T	-	P93
49	ハムシ科	ベニカメノコハムシ	N T	N T	P94
50	ハムシ科	イカリアオカメノコハムシ	N T	-	P94
51	ゾウムシ科	チョウカイトガリヤマゾウムシ	N T	-	P94
52	ゾウムシ科	オナガカツオゾウムシ	N T	-	P94
53	オサムシ科	セアカオサムシ	DD	-	P106
54	ミズスマシ科	コオナガミズスマシ	DD	-	P106
55	コガネムシ科	アカマダラハナムグリ	DD	-	P106
56	マルトゲムシ科	カラフトマルトゲムシ	DD	DD	P106
57	カミキリムシ科	コウヤホソハナカミキリ	DD	DD	P107
58	オトシブミ科	サメハダハマキチョッキリ玉川下流域藍色個体群	L P	DD	P129
59	ハムシ科	オオルリハムシ	N	-	P129

## ■ハチ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
1	コマユバチ科	ウマノオバチ	DD	-	P107
2	アリ科	エゾアカヤマアリ	DD	-	P107
3	アリ科	トゲアリ	DD	-	P107
4	ギングチバチ科	ニッポンハナダカバチ	DD	-	P108
5	スズメバチ科	ヤマトアシナガバチ	DD	-	P108
6	セイボウ科	オオセイボウ	DD	-	P108

## ■ハエ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	カ科	トワダオオカ	DD	—	P108
2	ハナアブ科	ケブカハラナガハナアブ	DD	—	P109

## ■トビケラ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	シンテイトビケラ科	シンテイトビケラ	VU	—	P76
2	エグリトビケラ科	ババホタルトビケラ	VU	VU	P77
3	エグリトビケラ科	クロモンエグリトビケラ	VU	CR	P77
4	トビケラ科	ヤチトビケラ	NT	—	P95
5	カクツツトビケラ科	ハンエンカクツツトビケラ	NT	VU	P95
6	ニンギョウトビケラ科	フトオヒメニンギョウトビケラ	NT	—	P95
7	アシエダトビケラ科	ウスイロコバントビケラ	NT	—	P95
8	シマトビケラ科	ガロアシマトビケラ	DD	—	P109
9	ニンギョウトビケラ科	イズミンニンギョウトビケラ	DD	—	P109
10	ヒゲナガトビケラ科	ミサキツノトビケラ	DD	—	P109
11	ヒゲナガトビケラ科	ツダヒゲナガトビケラ	DD	—	P110
12	ヒゲナガトビケラ科	カモヒゲナガトビケラ	DD	—	P110
13	ヒゲナガトビケラ科	ヌマコヒゲナガトビケラ	DD	—	P110
14	ホソバトビケラ科	クロホソバトビケラ	DD	—	P110

## ■チョウ目

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載ページ
			2020	2002	
1	セセリチョウ科	チャマダラセセリ	EX	EX	P53
2	タテハチョウ科	オオウラギンヒョウモン	EX	EX	P53
3	シャクガ科	カバシタムクゲエダシャク	EX	EX	P54
4	メイガ科	ギンスジマダラメイガ	CR	CR	P57
5	ツトガ科	ムナカタミズメイガ	CR	—	P57
6	シジミチョウ科	クロシジミ	CR	CR	P57
7	タテハチョウ科	フタスジチョウ	CR	CR	P57
8	タテハチョウ科	ホシミスジ北上山地亜種	CR	VU	P58
9	タテハチョウ科	キマダラモドキ	CR	CR	P58
10	シャクガ科	フタオレウスグロエダシャク	CR	EN	P58
11	シャクガ科	ハガタアオシャク	CR	—	P58
12	シャクガ科	コヒメシャク	CR	—	P59
13	シャクガ科	マルバヒメシャク	CR	—	P59
14	シャクガ科	オビベニヒメシャク	CR	—	P59
15	シャクガ科	イチゴナミシャク	CR	DD	P59
16	シャクガ科	シロヤエナミシャク	CR	—	P60
17	シャクガ科	シロマダラカバナミシャク	CR	EN	P60
18	シャチホコガ科	クワヤマエグリシャチホコ	CR	CR	P60
19	コブガ科	チョウカイシロコブガ	CR	CR	P60
20	ヤガ科	ホクトギンウワバ	CR	CR	P61

No	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
21	ヤガ科	ナナメヒメヨトウ	C R	C R	P61
22	ヤガ科	アオモンギンセダカモクメ	C R	C R	P61
23	ヤガ科	シロミチチビヨトウ	C R	C R	P61
24	ヤガ科	クシロモクメヨトウ	C R	C R	P62
25	ヤガ科	キタヨトウ	C R	C R	P62
26	ヤガ科	テンモントガリヨトウ	C R	C R	P62
27	ヤガ科	ギンモンアカヨトウ	C R	E N	P62
28	メイガ科	フタクロテンマダラメイガ	E N	E N	P65
29	ツトガ科	ナイトウツトガ	E N	—	P65
30	ツトガ科	ソトシロスジミズメイガ	E N	E N	P65
31	ツトガ科	ウスキシダメイガ	E N	E N	P66
32	セセリチョウ科	ギンイチモンジセセリ	E N	N	P66
33	セセリチョウ科	ヘリグロチャバネセセリ	E N	N T	P66
34	アゲハチョウ科	ギフチョウ	E N	V U	P66
35	シロチョウ科	ヒメシロチョウ	E N	V U	P67
36	シジミチョウ科	ウラゴマダラシジミ	E N	—	P67
37	シジミチョウ科	カシワアカシジミ(キタアカシジミ)	E N	V U	P67
38	シジミチョウ科	ヒメシジミ	E N	N	P67
39	シャクガ科	キタルリモンエダシャク	E N	C R	P68
40	シャクガ科	トギレフユエダシャク	E N	—	P68
41	シャクガ科	スモモエダシャク	E N	D D	P68
42	シャクガ科	ヒメシタコバナナミシャク	E N	E N	P68
43	シャクガ科	テンスジアオナミシャク	E N	—	P69
44	シャチホコガ科	ギンボシシャチホコ	E N	V U	P69
45	ドクガ科	ウスジロドクガ	E N	E N	P69
46	ドクガ科	スゲドクガ	E N	N T	P69
47	ヒトリガ科	クシナシホシオビコケガ	E N	—	P70
48	ヒトリガ科	マエアカヒトリ	E N	C R	P70
49	ヤガ科	ヨスジカバイロアツバ	E N	E N	P70
50	ヤガ科	シラユキコヤガ	E N	E N	P70
51	ヤガ科	スミレクビグロクチバ	E N	V U	P71
52	ヤガ科	ウンモンキシタバ	E N	E N	P71
53	ヤガ科	シロスジキンウワバ	E N	E N	P71
54	ヤガ科	ダイセンセダカモクメ	E N	E N	P71
55	ヤガ科	ニセタバコガ	E N	E N	P72
56	ヤガ科	セプトモクメヨトウ	E N	C R	P72
57	ヤガ科	アズサキリガ	E N	—	P72
58	ヤガ科	ムラサキヨトウ	E N	V U	P72
59	ヤガ科	コハイイロヨトウ	E N	E N	P73
60	ヤガ科	シロオビヨトウ	E N	E N	P73
61	ヤガ科	キタクロヤガ	E N	E N	P73
62	ヤガ科	ハマヤガ	E N	E N	P73
63	ツトガ科	ヒメキテンシロツトガ	V U	—	P77
64	ツトガ科	モリオカツトガ	V U	V U	P77
65	ツトガ科	チビウスキオオメイガ	V U	C R	P78
66	ツトガ科	ウスマダラミズメイガ	V U	V U	P78

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
67	アゲハチョウ科	ヒメギフチョウ	V U	N	P78
68	シジミチョウ科	ハヤシミドリシジミ	V U	N T	P78
69	タテハチョウ科	ヒョウモンチョウ (ナミヒョウモン)	V U	N T	P79
70	タテハチョウ科	ヒカゲチョウ (ナミヒカゲ)	V U	D D	P79
71	シャクガ科	クロスジアオシャク	V U	-	P79
72	シャクガ科	ヒメナミガタアオシャク	V U	E N	P79
73	シャクガ科	ウラテンシロヒメシャク	V U	-	P80
74	シャクガ科	ミチノクヒメシャク	V U	N T	P80
75	シャクガ科	クロシタコハネナミシャク	V U	-	P80
76	シャクガ科	ムツテンナミシャク	V U	-	P80
77	シャクガ科	サザナミフユナミシャク	V U	-	P81
78	シャクガ科	トビスジトガリナミシャク	V U	-	P81
79	シャクガ科	フタシロスジカバナミシャク	V U	-	P81
80	シャクガ科	イジマカバナミシャク	V U	-	P81
81	シャクガ科	フジカバナミシャク	V U	-	P82
82	コブガ科	ミカボコブガ	V U	V U	P82
83	ヤガ科	マガリスジコヤガ	V U	E N	P82
84	ヤガ科	ウスチャマエモンコヤガ	V U	V U	P82
85	ヤガ科	ヌマベウスキヨトウ	V U	N T	P83
86	ヤガ科	ミヤマショウブヨトウ	V U	E N	P83
87	ヤガ科	ミスジキリガ	V U	V U	P83
88	ヤガ科	ムラサキハガタヨトウ	V U	-	P83
89	ヤガ科	アトジロキリガ	V U	V U	P84
90	ヤガ科	マエキヤガ	V U	-	P84
91	ヤガ科	オオシラホシヤガ	V U	-	P84
92	トリバガ科	ハマナストリバ	N T	-	P96
93	メイガ科	マダラホソメイガ	N T	-	P96
94	メイガ科	ウスキシロオオメイガ	N T	-	P96
95	シジミチョウ科	オオゴマシジミ	N T	N	P96
96	シャクガ科	キブサヒメエダシャク	N T	E N	P97
97	シャクガ科	クロオオモンエダシャク	N T	-	P97
98	シャクガ科	コアヤシャク	N T	-	P97
99	シャクガ科	シタバニヒメシャク	N T	E N	P97
100	シャクガ科	キボシヤエナミシャク	N T	-	P98
101	シャクガ科	エゾヤエナミシャク	N T	-	P98
102	シャクガ科	フタモンコナミシャク	N T	D D	P98
103	シャクガ科	ムネシロテンカバナミシャク	N T	-	P98
104	シャチホコガ科	トビギンボシシャチホコ	N T	N T	P99
105	ヒトリガ科	シロホソバ	N T	-	P99
106	ヒトリガ科	キバラヒトリ	N T	-	P99
107	コブガ科	クロスジシロコブガ	N T	V U	P99
108	ヤガ科	ネグロアツバ	N T	V U	P100
109	ヤガ科	ハイマダラコヤガ	N T	-	P100
110	ヤガ科	キシタアツバ	N T	-	P100
111	ヤガ科	ウスジロケンモン	N T	N T	P100
112	ヤガ科	ギンモンセダカモクメ	N T	-	P101



No	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
113	ヤガ科	クロビロードヨトウ	NT	NT	P101
114	ヤガ科	ヨコスジヨトウ	NT	NT	P101
115	ヤガ科	オオチャバネヨトウ	NT	NT	P101
116	ヤガ科	クスジウスキヨトウ	NT	NT	P102
117	ヤガ科	シロテンキヨトウ	NT	NT	P102
118	ヤガ科	クモウスグロヤガ	NT	NT	P102
119	ヒゲナガガ科	ギンヒゲナガ	DD	-	P111
120	マダラガ科	ヤホシホソマダラ	DD	DD	P111
121	マダラガ科	ルリハダホソクロバ	DD	DD	P111
122	メイガ科	ヒメカバイロホソメイガ	DD	-	P111
123	メイガ科	クロミヤクホソメイガ	DD	-	P112
124	ツトガ科	イネコミズメイガ	DD	-	P112
125	シジミチョウ科	ムモンアカシジミ	DD	-	P112
126	シジミチョウ科	オナガシジミ	DD	-	P112
127	タテハチョウ科	オオムラサキ	DD	N	P113
128	タテハチョウ科	サトキマダラヒカゲ	DD	-	P113
129	カギバガ科	マンレイカギバ	DD	DD	P113
130	カギバガ科	ウコンカギバ	DD	-	P113
131	カギバガ科	ヨスジシロカギバ	DD	-	P114
132	カギバガ科	サカハチトガリバ	DD	-	P114
133	カギバガ科	キボシミスジトガリバ	DD	-	P114
134	カギバガ科	クラマトガリバ	DD	DD	P114
135	ツバメガ科	ハガタフタオ	DD	DD	P115
136	ツバメガ科	カバイロフタオ	DD	-	P115
137	ツバメガ科	ギンツバメ	DD	VU	P115
138	シャクガ科	カバシャク	DD	-	P115
139	シャクガ科	クロフカバシャク	DD	-	P116
140	シャクガ科	フタモントガリエダシャク	DD	-	P116
141	シャクガ科	トビカギバエダシャク	DD	-	P116
142	シャクガ科	ソトシロモンエダシャク	DD	-	P116
143	シャクガ科	キバネトビスジエダシャク	DD	DD	P117
144	シャクガ科	クロスジハイイロエダシャク	DD	-	P117
145	シャクガ科	チャエダシャク	DD	-	P117
146	シャクガ科	クロモンキリバエダシャク	DD	-	P117
147	シャクガ科	モンキクロエダシャク	DD	-	P118
148	シャクガ科	ヨスジキエダシャク	DD	DD	P118
149	シャクガ科	トガリエダシャク	DD	-	P118
150	シャクガ科	ツツジツマキリエダシャク	DD	-	P118
151	シャクガ科	フタテンエダシャク	DD	VU	P119
152	シャクガ科	ウコンエダシャク	DD	-	P119
153	シャクガ科	コガタヒメアオシャク	DD	-	P119
154	シャクガ科	オオナミガタアオシャク	DD	-	P119
155	シャクガ科	ヨツメヒメシャク	DD	-	P120
156	シャクガ科	ウスクロテンヒメシャク	DD	-	P120
157	シャクガ科	ウスキヒカリヒメシャク	DD	-	P120
158	シャクガ科	ウスオビコバネナミシャク	DD	-	P120

No.	科 和 名	種 和 名	秋田県カテゴリー		掲載 ページ
			2020	2002	
159	シャクガ科	シラナミナミシャク	DD	—	P121
160	シャクガ科	ネアカナカジロナミシャク	DD	—	P121
161	シャクガ科	アカモンコナミシャク	DD	—	P121
162	シャクガ科	ヤハズナミシャク	DD	DD	P121
163	シャクガ科	カラスナミシャク	DD	—	P122
164	シャクガ科	カメダカバナミシャク	DD	—	P122
165	シャクガ科	クロモンカバナミシャク	DD	—	P122
166	シャクガ科	クロテンカバナミシャク	DD	—	P122
167	シャクガ科	グンマカバナミシャク	DD	—	P123
168	シャクガ科	リンゴアオナミシャク	DD	—	P123
169	カイコガ科	スカシサン	DD	—	P123
170	スズメガ科	スキバホウジャク	DD	—	P123
171	ドクガ科	オオヤママイマイ	DD	—	P124
172	コブガ科	ナンキンキノカワガ	DD	DD	P124
173	ヤガ科	ナミグルマアツバ	DD	DD	P124
174	ヤガ科	ベニエグリコヤガ	DD	DD	P124
175	ヤガ科	マガリウスツマアツバ	DD	DD	P125
176	ヤガ科	カギモンハナオアイアツバ	DD	—	P125
177	ヤガ科	アカマエアツバ	DD	DD	P125
178	ヤガ科	カシワアツバ	DD	—	P125
179	ヤガ科	プライヤキリバ	DD	DD	P126
180	ヤガ科	コシロシタバ	DD	DD	P126
181	ヤガ科	ジョウザンケンモン	DD	DD	P126
182	ヤガ科	ヒメシロテンアオヨトウ	DD	DD	P126
183	ヤガ科	チャイロカドモンヨトウ	DD	DD	P127
184	ヤガ科	クマソオオヨトウ	DD	DD	P127
185	ヤガ科	モトグロヨトウ	DD	DD	P127
186	ヤガ科	ウスベニキリガ	DD	—	P127
187	ヤガ科	タイリクウスイロヨトウ	DD	DD	P128
188	ヤガ科	オオカブラヤガ	DD	DD	P128
189	ヤガ科	マエグロヤガ	DD	DD	P128
190	ヤガ科	ナカグロヤガ	DD	DD	P128
191	タテハチヨウ科	ベニヒカゲ	N	NT	P129

# 秋田県の自然公園・自然環境保全地域等一覧

## 1 自然公園

すぐれた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図ることにより国民の保健、休養及び教化に資するため自然公園を指定している。公園区域内では一定の行為が規制され、特別地域内では指定された動植物の捕獲や採取などが禁止されるとともに、特別保護地区では動植物の捕獲や採取などが禁止される。

### 秋田県内の自然公園指定状況

区分	公園名	指定年月日	関係市町村	面積 (ha)							
				特別保護地区	特別地域			普通地域	海域	合計	
					第1種	第2種	第3種				
公園立	十和田八幡平	昭和11. 2. 1 (昭和31.7.10 八幡平地区追加)	鹿角市、小坂町、 仙北市	1,501	6,019	8,309	10,593	367		26,789	
					計						24,921
国定公園	鳥海	昭和38. 7.24	にかほ市、 由利本荘市		240	4,820	10,342		538	15,940	
					計						15,402
	栗駒	昭和43. 7.22	湯沢市、東成瀬村	3,158	3,062	2,607	14,380			23,207	
					計						20,049
	男鹿	昭和48. 5.15	男鹿市	160	1,237	2,606	4,080	73	3,378	11,534	
計			7,923								
計	3か所		3,318	4,539	10,033	28,802	73	3,916	50,681		
				計			43,374				
県立自然公園	田沢湖抱返り	昭和35. 4. 1	仙北市		83	4,275	1,828	1,291		7,477	
					計						6,186
	きみまち阪	昭和39. 7.16	能代市			239	304	56		599	
						計					543
	八森岩館	昭和39. 7.16	八峰町			101	86	748	68	1,176	2,179
						計					
	森吉山	昭和43.10. 1	北秋田市			412	2,804	11,370	628		15,214
						計					
	太平山	昭和47. 7.15	秋田市、五城目町、 上小阿仁村			614	3,328	7,955			11,897
						計					
田代岳	昭和50. 1.11	大館市			106	677	1,072			1,855	
					計						1,855
真木真昼	昭和50. 1.11	大仙市、美郷町			1,553	3,000	1,320	30		5,903	
					計						5,873
秋田白神	平成16. 8.24	八峰町、藤里町			331	684	3,091	2,169		6,275	
					計						4,106
計	8か所			3,200	15,093	27,688	4,242	1,176	51,399		
				計			45,981				
合計				4,819	13,758	33,435	67,083	4,682	5,092	128,869	
				計			114,276				

(令和2年3月末現在)

## 2 自然環境保全地域

すぐれた自然環境を保全することが特に必要な区域の生物多様性の確保、自然環境の保全を推進することにより国民が自然環境の恵沢を享受するなどのため自然環境保全地域等を指定している。自然環境保全地域等では一定の行為が規制され、野生動植物保護地区内では指定された動植物の捕獲や採取などが禁止される。

### 秋田県内自然環境保全地域等指定状況

国指定自然環境保全地域						
地域名	関係市町村	総面積 (ha)	特別地区 (ha)	保護地区*1 (ha)	指定年月日	主な保全対象
白神山地	藤里町	4,336	2,466	2,466	平成4. 7.10	大規模ブナ林及びビヌワシ、クマゲラ等

県指定自然環境保全地域						
地域名	関係市町村	総面積 (ha)	特別地区 (ha)	保護地区*1 (ha)	指定年月日	主な保全対象
南由利原	由利本荘市	191.8	74.6		昭和49.11. 2	湿原植物群落、草原植物群落
湯の台・小方角沢	大仙市	53.4	12.7	12.7	昭和49.11. 2	湿原植物群落、ハッチョウトンボ多産地
冬師	にかほ市	32.4			昭和49.11. 2	湿地林、湿原植物群落
露熊山峡	北秋田市	71.1	22.2		昭和50. 2.22	岩壁植生
保呂羽山	横手市	10.5	10.5		昭和50. 2.22	ブナ、ミズナラを主体とする天然林
刈女木	羽後町	33.8			昭和51. 3.30	湿原植物群落
羽黒山	八峰町	5.1			昭和51. 3.30	暖地性植物
外山	横手市	17.2			昭和52. 8.11	ブナ-ユキツバキ群落
丁岳	由利本荘市	88.16	88.16		昭和53. 1.24	ブナを主体とする天然林、亜高山性植物
番鳥森	秋田市	126.83	126.83		昭和53. 1.24	ブナ及びミズナラを主体とする天然林
鞍山風穴	北秋田市	6.93	0.65	0.65	昭和56. 3.14	風穴植物群落
金峰山	横手市	21.93	3.97		昭和56. 3.14	ブナ-ユキツバキ群落
小又風穴	北秋田市	21.283	3.60	3.60	昭和57. 5. 1	風穴植物群落
親川	由利本荘市	16.67	12.91	12.91	昭和60.10. 8 拡張:平成15.11. 4	タブノキ群落、ヤブツバキ群落
出戸湿原	潟上市	2.74	2.74	2.74	平成15.11. 4	湿原植物群落
加田喜沼	由利本荘市	4.0811	4.0811	4.0811	平成16.12. 3	湿原植物群落
笹森山	由利本荘市	114.67	42.67	42.67	平成21.12.15	シナノキ群落内の貴重植物
安本	横手市	5			平成28. 4.22	
計	18地域	818.5941	405.6111	79.3511		

\*1：野生動植物保護地区  
特別地区の面積は総面積の、野生動植物保護地区の面積は特別地区のそれぞれ内数。

県指定緑地環境保全地域						
地域名	関係市町村	総面積 (ha)		指定年月日	主な保全対象	
長木溪谷	大館市	238.0		昭和49.11. 2	溪谷、スギ-ブナ群落	
今泉	北秋田市	37.5		昭和52. 8.11	池沼、広葉樹林、スギ林	
千屋並木	美郷町	7.1		昭和51. 3.30	アカマツ並木、スギ並木	
石沢峡	由利本荘市	152.2		昭和59. 5.26	溪谷、ケヤキ群落	
計	4地域	434.8				

(令和2年3月末現在)



# 執筆者・写真提供者

## 執筆者

---

青 谷 晃 吉  
梅 津 一 史  
佐々木 誠  
佐 藤 福 男  
島 田 卓 哉  
田 中 政 行  
星 崎 和 彦

(五十音順、敬称略)

## 写真提供者

---

青 谷 晃 吉  
秋田県立博物館  
飯 島 勇 人  
梅 津 一 史  
京 谷 和 弘  
佐々木 明 夫  
佐々木 誠  
佐 藤 福 男  
島 田 卓 哉  
田 中 政 行  
中 川 佳 雅  
沼 田 仁  
星 崎 和 彦  
堀 野 眞 一  
亘 悠 哉

(五十音順、敬称略)

※写真の著作権は写真提供者に属するため無断使用を禁ずる。

# 和名索引

和名	カテゴリー	ページ
<b>[ア]</b>		
アイヌハンミョウ	VU	P74
アオサナエ	VU	P74
アオハダトンボ	NT	P84
アオバネホソクビゴミムシ	VU	P74
アオモンギンセダカモクメ	CR	P61
アカガネオサムシ	NT	P86
アカマエアツバ	DD	P125
アカマダラハナムグリ	DD	P106
アカモンコナミシャク	DD	P121
アズサキリガ	EN	P72
アトジロキリガ	VU	P84

<b>[イ]</b>		
イイジマカバナミシャク	VU	P81
イイズナ	EN	P31
イガブチヒゲハナカミキリ	NT	P91
イカリアオカメノコハムシ	NT	P94
イズミニンギョウトビケラ	DD	P109
イチゴナミシャク	CR	P59
イネコミスメイガ	DD	P112
イノシシ	CM	P42

<b>[ウ]</b>		
ウコンエダシャク	DD	P119
ウコンカギバ	DD	P113
ウスイロコバントビケラ	NT	P95
ウスオビコバネナミシャク	DD	P120
ウスキシダメイガ	EN	P66
ウスキシロオオメイガ	NT	P96
ウスキヒカリヒメシャク	DD	P120
ウスクロテンヒメシャク	DD	P120
ウスジロケンモン	NT	P100
ウスジロドクガ	EN	P69
ウスチャマエモンコヤガ	VU	P82
ウスバカマキリ	NT	P86
ウスベニキリガ	DD	P127
ウスマダラミズメイガ	VU	P78
ウミノオバチ	DD	P107
ウラゴマダラシジミ	EN	P67
ウラテンシロヒメシャク	VU	P80
ウンモンキンタバ	EN	P71

<b>[エ]</b>		
エゾアカヤマアリ	DD	P107
エゾゲンゴロウモドキ	NT	P90
エゾヤエナミシャク	NT	P98
エチゴトツクリゴミムシ	NT	P88
エンマハバビロガムシ	NT	P90

<b>[オ]</b>		
オオイチモンジシマゲンゴロウ	NT	P89
オオウラギンヒョウモン	EX	P53
オオカブラヤガ	DD	P128
オオキトンボ	EX	P53
オオクワガタ	VU	P76
オオゴマシジミ	NT	P96

<b>和名</b>			<b>カテゴリー</b>			<b>ページ</b>		
オオサルハムシ	NT	P93	オオシラホシヤガ	VU	P84	オオセイボウ	DD	P108
オオセシイトンボ	EN	P63	オオチャイロハナムグリ	VU	P76	オオチャバネヨトウ	NT	P101
オオトツクリゴミムシ	NT	P87	オオトラフトンボ	DD	P103	オオトラフハナムグリ	NT	P91
オオナミガタアオシャク	DD	P119	オオムラサキ	DD	P113	オオヤママイマイ	DD	P124
オオヨモギハムシ	NT	P93	オオルリハムシ	N	P129	オコジョ	EN	P31
オコジヨ	EN	P31	オジロサナエ	EN	P63	オナガカツオゾウムシ	NT	P94
オナガシジミ	DD	P112	オビベニヒメシャク	CR	P59			

<b>[カ]</b>								
カギモンハナオイアツバ	DD	P125	カグヤコウモリ	EN	P29	カシワアカシジミ(キタアカシジミ)	EN	P67
カシワアツバ	DD	P125	カトリヤンマ	EX	P53	カノシマチビゲンゴロウ	NT	P88
カバイロフタオ	DD	P115	カバシタムクゲエダシャク	EX	P54	カバシャク	DD	P115
カメダカバナミシャク	DD	P122	カモヒゲナガトビケラ	DD	P110	カヤコオロギ	DD	P104
カラカネイトンボ	EN	P63	カラスナミシャク	DD	P122	カラフトマルトゲムシ	DD	P106
ガロアシマトビケラ	DD	P109	カワネズミ	NT	P34	カワロギムシ	EN	P64
カワラスズ	DD	P104	カワラバタ	NT	P86	カワラハンミョウ	CR	P55

<b>[キ]</b>								
キクガシラコウモリ	NT	P35	キシタアツバ	NT	P100	キスジウスキヨトウ	NT	P102
キタクロヤガ	EN	P73	キタヨトウ	CR	P62	キタルリモンエダシャク	EN	P68
キバナトビスジエダシャク	DD	P117	キバラヒトリ	NT	P99	キブサヒメエダシャク	NT	P97
ギフチョウ	EN	P66	キボシミスジガリバ	DD	P114	キボシヤエナミシャク	NT	P98
キマダラモドキ	CR	P58						

和名	カテゴリー	ページ
ギンイチモンジセセリ	EN	P66
キンイロネクイハムシ	NT	P93
ギンシジマダラメイガ	CR	P57
ギンツバメ	DD	P115
ギンヒゲナガ	DD	P111
ギンボシシャチホコ	EN	P69
ギンモンアカヨトウ	CR	P62
ギンモンセダカモクメ	NT	P101

### [ク]

クシナシホシオビコケガ	EN	P70
クシロモクメヨトウ	CR	P62
クビキリギス	DD	P105
クマガイクロアオゴミムシ	CR	P55
クマコオロギ	DD	P104
クマソオヨトウ	DD	P127
クモウスグロヤガ	NT	P102
クラマトガリバ	DD	P114
クロオオモンエダシヤク	NT	P97
クロゲンゴロウ	NT	P89
クロシジミ	CR	P57
クロシタコバネナミシヤク	VU	P80
クロスジアオシヤク	VU	P79
クロスジシロコブガ	NT	P99
クロスジハイロエダシヤク	DD	P117
クロテンカバナミシヤク	DD	P122
クロナガオサムシ	VU	P75
クロピロードヨトウ	NT	P101
クロフカバシヤク	DD	P116
クロホオヒゲコウモリ	EN	P30
クロホソバトビケラ	DD	P110
クロミヤクホソメイガ	DD	P112
クロモンエグリトビケラ	VU	P77
クロモンカバナミシヤク	DD	P122
クロモンキリバエダシヤク	DD	P117
クワヤマエグリシャチホコ	CR	P60
グンマカバナミシヤク	DD	P123

### [ケ]

ケブカハラナガハナアブ	DD	P109
ゲンゴロウ	NT	P90

### [コ]

コアヤシヤク	NT	P97
コウヤホソハナカミキリ	DD	P107
コオナガミズスマシ	DD	P106
コガタヒメアオシヤク	DD	P119
コキクガシラコウモリ	VU	P32
コシロシタバ	DD	P126
コテングコウモリ	VU	P33
コトラカミキリ	NT	P92
コノシメトンボ	CR	P54
コハイロヨトウ	EN	P73
コヒメシヤク	CR	P59
コヤマコウモリ	DD	P37
コロギス	DD	P105

和名	カテゴリー	ページ
<b>[サ]</b>		
サカハチトガリバ	DD	P114
サザナミフユナミシヤク	VU	P81
サトキマダラヒカゲ	DD	P113
サメハダハマキチョッキリ玉川下流域藍色個体群	LP	P129

### [シ]

シタバヒメシヤク	NT	P97
シノビアミメカワゲラ	NT	P85
シマゲンゴロウ	VU	P76
ジョウザンケンモン	DD	P126
ショウリョウバッタモドキ	DD	P105
シラカミナガチヒゴミムシ	NT	P87
シラナミナミシヤク	DD	P121
シラユキコヤガ	EN	P70
シロオビヨトウ	EN	P73
シロスジキンウワバ	EN	P71
シロテンキヨトウ	NT	P102
シロホソバ	NT	P99
シロマダラカバナミシヤク	CR	P60
シロミチビヨトウ	CR	P61
シロヤエナミシヤク	CR	P60
シントイトビケラ	VU	P76
シントウトガリネズミ	VU	P32

### [ス]

スカシサン	DD	P123
スキバホウジャク	DD	P123
スゲドクガ	EN	P69
スマレクビグロクチバ	EN	P71
スモエダシヤク	EN	P68

### [セ]

セアカオサムシ	DD	P106
セプトモクメヨトウ	EN	P72

### [ソ]

ソトシロスジズメイガ	EN	P65
ソトシロモンエダシヤク	DD	P116

### [タ]

ダイコクコガネ	CR	P56
ダイセンセダカモクメ	EN	P71
タイリクウスイロヨトウ	DD	P128
タガメ	VU	P74

### [チ]

チビウスキオオメイガ	VU	P78
チャイロカドモンヨトウ	DD	P127
チャエダシヤク	DD	P117
チャマダラセセリ	EX	P53
チョウカイアラコガネコメツキ	NT	P91
チョウカイクロマメゲンゴロウ	NT	P89
チョウカイシロコブガ	CR	P60
チョウカイトガリヤマソウムシ	NT	P94
チンメルマンセスジゲンゴロウ	VU	P75

和名	カテゴリー	ページ
<b>[ツ]</b>		
ツキノワグマ	CM	P40
ツダヒゲナガトビケラ	DD	P110
ツツジツマキリエダシヤク	DD	P118

<b>[テ]</b>		
テラニシセスジゲンゴロウ	CR	P56
テングコウモリ	EN	P30
テンスジアオナミシヤク	EN	P69
テンモントガリヨトウ	CR	P62

<b>[ト]</b>		
トウホクナガケシゲンゴロウ	NT	P88
トガリエダシヤク	DD	P118
トギレフユエダシヤク	EN	P68
トゲアリ	DD	P107
トビカギバエダシヤク	DD	P116
トビギンボシヤチホコ	NT	P99
トビスジトガリナミシヤク	VU	P81
トワダオオカ	DD	P108

<b>[ナ]</b>		
ナイトウツトガ	EN	P65
ナカグロヤガ	DD	P128
ナナメヒメヨトウ	CR	P61
ナミグルマアツバ	DD	P124
ナンキンキノカワガ	DD	P124

<b>[ニ]</b>		
ニセタバコガ	EN	P72
ニセルイスツブゲンゴロウ	VU	P75
ニッポンハナダカバチ	DD	P108
ニホンウサギコウモリ	EN	P28
ニホンカモシカ	N	P38
ニホンザル	CM	P39
ニホンジカ	CM	P41
ニホンモモンガ	NT	P36

<b>[ヌ]</b>		
ヌマコヒゲナガトビケラ	DD	P110
ヌマヘウスキヨトウ	VU	P83

<b>[ネ]</b>		
ネアカナカジロナミシヤク	DD	P121
ネグロアツバ	NT	P100

<b>[ノ]</b>		
ノレンコウモリ	EN	P29

<b>[ハ]</b>		
ハイマダラコヤガ	NT	P100
ハガタアオシヤク	CR	P58
ハガタフタオ	DD	P115
ハツチョウトンボ	NT	P85
ハネビロエゾトンボ	CR	P54
ハバホタルトビケラ	VU	P77
ハマナストリバ	NT	P96

和名	カテゴリー	ページ
ハマヤガ	EN	P73
ハヤシミドリシジミ	VU	P78
ハヤチネヌレチゴミムシ	VU	P75
ハンエンカクツツトビケラ	NT	P95

<b>[ヒ]</b>		
ヒカゲチョウ(ナミヒカゲ)	VU	P79
ヒガシキリギリス	DD	P105
ヒナコウモリ	EN	P28
ヒメアカネ	CR	P55
ヒメカバイロホソメイガ	DD	P111
ヒメキテンシロツトガ	VU	P77
ヒメギフチョウ	VU	P78
ヒメサナエ	DD	P103
ヒメシジミ	EN	P67
ヒメシタコバネナミシヤク	EN	P68
ヒメシロチョウ	EN	P67
ヒメシロテンアオヨトウ	DD	P126
ヒメナミガタアオシヤク	VU	P79
ヒメヒミス	EN	P27
ヒメヒロウドカミキリ	NT	P92
ヒメホオヒゲコウモリ	VU	P33
ヒョウモンチョウ(ナミヒョウモン)	VU	P79

<b>[フ]</b>		
フジカバナミシヤク	VU	P82
フタオレウスグロエダシヤク	CR	P58
フタクロテンマダラメイガ	EN	P65
フタシロスジカバナミシヤク	VU	P81
フタスジチョウ	CR	P57
フタテンエダシヤク	DD	P119
フタモンコナミシヤク	NT	P98
フタモントガリエダシヤク	DD	P116
フトオヒメニンギョウトビケラ	NT	P95
フライソンアミメカワゲラ	NT	P85
プライヤキリバ	DD	P126

<b>[ヘ]</b>		
ヘニエグリコヤガ	DD	P124
ヘニカメノコハムシ	NT	P94
ヘニヒカゲ	N	P129
ヘリウスハナカミキリ	NT	P91
ヘリグロチャバネセセリ	EN	P66

<b>[ホ]</b>		
ホクトギンウワバ	CR	P61
ホシミスジ北上山地亜種	CR	P58
ホソハンミョウ	EN	P64
ホソヒメクロオサムシ奥羽山脈亜種	NT	P87
ホソヒメクロオサムシ東北地方西南部亜種	NT	P87
ホソミオツネトンボ	DD	P102
ホソサナエ	EN	P64



和名	カテゴリー	ページ
<b>[マ]</b>		
マークオサムシ	CR	P55
マエアカヒトリ	EN	P70
マエキヤガ	VU	P84
マエグロヤガ	DD	P128
マガリウスツマアツバ	DD	P125
マガリスジコヤガ	VU	P82
マダラナニワトンボ	EN	P64
マダラホソメイガ	NT	P96
マダラヤンマ	DD	P103
マルコガタノゲンゴロウ	NT	P89
マルバヒメシャク	CR	P59
マンレイカギバ	DD	P113

<b>[ミ]</b>		
ミカボコブガ	VU	P82
ミサキツノトビケラ	DD	P109
ミスジキリガ	VU	P83
ミズラモグラ	DD	P37
ミチノクケマダラカミキリ	CR	P56
ミチノクヒメシャク	VU	P80
ミヤマサナエ	DD	P103
ミヤマショウブヨトウ	VU	P83
ミヤマノギカワゲラ	DD	P104

<b>[ム]</b>		
ムカシトンボ	NT	P85
ムツテンナミシャク	VU	P80
ムナカタミズメイガ	CR	P57
ムネシロテンカバナミシャク	NT	P98
ムモンアカシジミ	DD	P112
ムモンベニカミキリ	NT	P92
ムラサキハガタヨトウ	VU	P83
ムラサキヨトウ	EN	P72

<b>[モ]</b>		
モートンイトトンボ	CR	P54
モトグロヨトウ	DD	P127
モモジロコウモリ	NT	P35
モリオカツトガ	VU	P77
モンキクロエダシャク	DD	P118

<b>[ヤ]</b>		
ヤチトビケラ	NT	P95
ヤチネズミ	NT	P36
ヤハズナミシャク	DD	P121
ヤホシホソマダラ	DD	P111
ヤマコウモリ	EN	P27
ヤマトアシナガバチ	DD	P108
ヤマトエンマコガネ	CR	P56
ヤマトマダラバツタ	NT	P86
ヤマトモンシテムシ	NT	P90
ヤマネ	N	P38

和名	カテゴリー	ページ
<b>[ユ]</b>		
ユビナガコウモリ	VU	P34

<b>[ヨ]</b>		
ヨコスジヨトウ	NT	P101
ヨコヤマヒゲナガカミキリ	NT	P92
ヨスジカパイロアツバ	EN	P70
ヨスジキエダシャク	DD	P118
ヨスジシロカギバ	DD	P114
ヨツボシカミキリ	EN	P65
ヨツメヒメシャク	DD	P120

<b>[リ]</b>		
リンゴアオナミシャク	DD	P123

<b>[ル]</b>		
ルイスツブゲンゴロウ	NT	P88
ルライトトンボ	EN	P63
ルリドロノキハムシ	NT	P93
ルリハダホソクロバ	DD	P111





# 秋田県の 絶滅のおそれのある 野生生物

— 秋田県版レッドデータブック2020 — 動物 II

【哺乳類・昆虫類】

---

2020 (令和2) 年3月 発行

---

【編集・発行】 秋田県生活環境部自然保護課  
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号  
TEL 018-860-1614  
FAX 018-860-3835

【印刷】 秋田活版印刷株式会社



Threatened Wildlife of Akita Prefecture

秋田県の絶滅の  
おそれのある  
野生生物



秋田県版レッドデータブック2020 動物II  
〔哺乳類・昆虫類〕

Red Data Book of  
Akita Prefecture 2020  
Animals II